

向原遺跡

—茨城県土浦市向原遺跡
発掘調査報告書—

1987年

向原遺跡調査会
土浦市教育委員会

向原遺跡正然表

頁・行	誤	正
例書18行目	鹿木大学	茨城大学
7頁31行目	仲野	中野
15頁15行目	すぼまるか	かを削除
25頁22行目	仲野	中野
102頁10行目 * 15行目	隅丸方形	隅丸方形
104頁9行目	楚高	楚渕
106頁20行目	隅丸方形	隅丸方形
109頁30行目	東に持つ	東に持ち
112頁8行目 * 17行目	白玉	白玉
115頁13行目 * 14行目	楚高	楚渕
122頁2行目	白玉	白玉
126頁13行目	隅丸方形	隅丸方形
138頁19行目	*	*
150頁1行目	高さ29.5cm	高さ29.5mm
160頁5行目	略構丸方形	概ね隅丸方形
170頁10行目	口縁下半外半	口縁下半外面
171頁9行目	混じた	混じえた
172頁13行目	仲野	中野
176頁12行目	停止	呈し
182頁6行目	流出が縄文中期	流出が見られ、一回目の流出が 縄文中期
	板焼状	版焼状
	砂川遺跡でいうバターンに相当する。	むしろ、ナップ類等から見て、

向原遺跡

—茨城県土浦市向原遺跡
発掘調査報告書—

1987年

向原遺跡調査会
土浦市教育委員会

序

私たちの郷土土浦市は、水と緑に恵まれた豊かな都市です。近年では常磐自動車道の開通や、筑波研究学園都市の発展とあいまって、東京近郊地区として茨城県南部は各地で開発の気運が高まってきており、本市でもその数は増加する傾向をみせています。

このたび、市内大字中地区にありますブリマハム株式会社新東京工場で施設の増築を行なうことになり、工事に先立って発掘調査を実施したところ、古墳時代の大集落跡をはじめ先土器時代、縄文時代の人々の生活のあとが数多く発見され、土器や石器も多量に出土しました。これらの貴重な文化財を記録として末永く後世に残し、みなさまの活用を図るために、ブリマハム株式会社と日本考古学研究所のご協力のもとに、このほど調査報告書を刊行することになりました。

今回の調査によって、霞ヶ浦沿岸の古墳時代前・中期の大規模集落の代表例として、この遺跡が私たちに教えてくれることは少なくありませんが、それでも当地域の長い歴史から見ればほんのわずかにすぎないものです。そのため、これからも私たちの歴史を築いてきた貴重な財産である文化財の保護や活用に市民の皆様の深いご理解が不可欠であり、なお一層のご協力を切に御願いする次第です。

最後になりますが、調査および報告書発刊に際してご協力をいただきましたブリマハム株式会社、日本考古学研究所、地元有志の方々をはじめ多くの皆様に心から感謝申し上げごあいさつといたします。

昭和63年3月吉日

土浦市教育委員会教育長 日下部 晃

古代人の大集落が眼下に ——向原遺跡発掘調査によせて——

昭和61年2月、私共ブリマハム株式会社新東京工場では、工場に直結した物流センターの建設に着手すべく最後の準備を進めていました。

折りしも土浦市教育委員会より、建設予定地が全域にわたり遺跡が存在する可能性があるとの指摘を受け、確認のための試掘がおこなわれました。その結果、かなり大規模な遺跡があるという報告がなされたのです。

私共事業所としては、戸惑いを隠せませんでした。遺跡が発見された以上、当然その発掘には全面的に協力していかなくてはなりません。しかし一方、発掘調査に係わる費用負担の問題、物流センターの工期の遅れの問題などが一撃にクローズアップされてきました。このまま建設計画を続行すべきかどうか、社内でも大きな議論をよんだのです。

ともあれ、土浦市に事業所を開設して20数年、地元と密接なおつきあいをさせていただいている私共としては、社をあげて遺跡発掘調査に協力する体制を整えたのです。埋蔵文化財保護という立場からも、この発掘調査が必ずや成功するように支援をおこなっていくことを確認しました。

発掘調査は同年4月より、日本考古学研究所の手によって開始されました。対象面積は6,000m²強という広さであり、現地での調査だけでも4ヶ月近くを要しました。

発掘が進むにつれ、この遺跡は古く縄文時代（9,000年前）の人間の生活の跡があることが発見されました。その後、古墳時代（1,600～1,400年前）を中心に100軒にも達する住居跡が発見され、おびただしい石器・土器の類が出土しています。また、古墳2基も発見され、古代人の大集落が形成されていたことが明らかになりました。

この遺跡は、土浦市内有数の古代遺跡として「向原遺跡」と名付けられ、郷土史にしっかりと刻み込まれることになったのです。

発掘期間中、私自身も何度も現場におもむかせていただき、専門の担当官から古代人の日常生活の一端について説明をいただきました。それにしても、今から1,500年前の人々の生活が、突然目のあたりに現れると思うと、歴史そのもののロマンに感嘆を禁じ得ませんでした。土浦市教育委員会のご理解もあって、遺跡発掘調査は予定のスケジュール通り進みました。そして私共が建設を計画していた物流センターも、ほぼ予定通りの完工をみるに至りました。

私共としましては、本プロジェクトにささやかながらとも貢献できたことを喜びとしますと共に、この報告書を含む「向原遺跡」発掘調査の成果が、土浦市の郷土史、文化事業の一環として広く市民の心の財産として生き続けることを願ってやみません。

ブリマハム株式会社新東京工場

工場長 森田保男

例　　言

1. 本書は、茨城県土浦市大字中字向原934-1番地に所在する向原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、ブリマハム（株）の工場増設に伴う事前の発掘調査で、向原遺跡調査団（団長　登石健三）を組織し、土浦市教育委員会の指導のもとに越川敏夫・中野修秀が調査を担当した。
3. 発掘調査は、昭和61年3月1日から3月20日まで確認調査を行ない、同年4月1日から6月15日まで本調査を実施した。整理作業は、調査終了後から同年11月20日までの5ヶ月間行なった。
4. 遺物の復元・実測・トレース・写真撮影等の整理作業は、越川・中野・處の3名を主に大瀬・野口で行なった。
5. 本書の執筆は、越川・中野・處があたり、各文末に記し、文責があるものとする。なお、序文を土浦市教育委員会教育長日下部晃氏、ブリマハム（株）工場長森田保男氏、発掘調査に至る経緯を土浦市教育委員会社会教育課文化係長岩沢　茂氏より頂いた。
6. 本書の編集は、越川・中野が行なった。
7. 発掘調査は下記の組織のもとに実施した。

調査団長　登石健三（日本考古学研究所所長）

調査指導　茂木雅博（茨木大学人文学部助教授）

　　　　　小川和博（日本考古学研究所　日本考古学协会会员）

調査担当　越川敏夫（日本考古学研究所　日本考古学协会会员）

　　　　　中野修秀（日本考古学研究所　日本考古学协会会员）

調査員　藤原　均（日本考古学研究所　日本考古学协会会员）

　　　　　大瀬淳志（日本考古学研究所）

　　　　　處　毅（日本考古学研究所）

　　　　　野口秀子（日本考古学研究所）

　　　　　石川　　（国学院大学学生）

　　　　　斎田　　（国学院大学学生）

事務局　岩沢　茂（土浦市教育委員会社会教育課文化係長）

　　　　　塩谷　修（土浦市教育委員会社会教育課主事）

事務員　日下部ひろ子

作業員　地元の方約70名

凡　例

1. 本書に掲載した実測図における縮尺は次ぎの通り統一した。

A 遺構

住居址 1/80	カマド貯藏穴 1/40	土塙 1/40
古 墓 1/200	古墳主体部 1/40	古墳周溝断面図 1/40

B 遺物

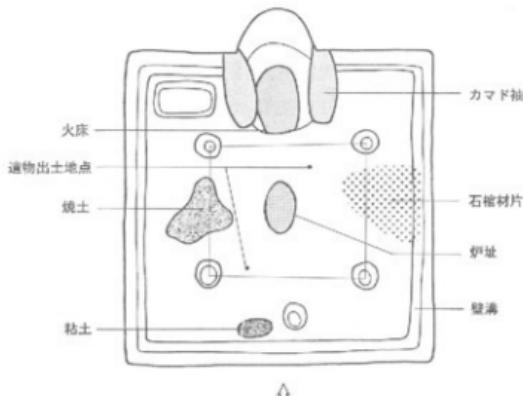
土 器 1/4	石製品 1/4 (50号住鉢石・弓住鉢石は1/2)
石製模造品・鐵製品・土器品 1/2	

縄文土器断面図 1/3 (1号住のみ1/2) 石 器 2/3 (ユニット1コアのみ1/2)

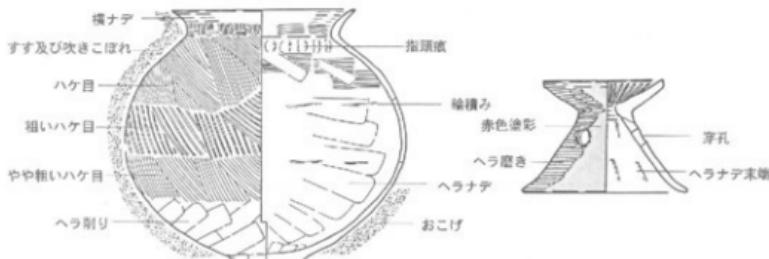
2. 土器実測図における断面黒塗りは須恵器・灰釉陶器。ドットのスクリーントーンは、鐵錐上器を示す。

3. 住居址の実測図中に使用したスクリーントーンは下の模式図の如く表わした。

4. 古墳の実測図中に使用したスクリーントーンは旧表土を表わす。



5. 土器実測図における梯形技法は模式図の如く表現し、また、使用したスクリーントーンは次のものを示す。
(ドットの組いものは黒色処理を示す)



目 次

序	VII. 古墳群の調査 173
序	1. 第1号古墳 173
例 言	2. 第2号古墳 177
凡 例	VIII. 発掘調査の成果と課題 182
目 次	1. 先土器時代の遺構と遺物 182
挿図目次	2. 縄文時代の遺構 182
写真図版目次	3. 縄文時代の遺物 183
I. はじめに 1	4. 古墳時代の集落 184
II. 発掘調査の経緯 2	5. 古墳時代の土器 187
1. 発掘調査に至る経緯 2	6. 古墳群 191
2. 発掘調査の経過 2	
III. 遺跡の位置と周辺の遺跡 3	
IV. 集落跡の調査 7	
1. 先土器時代 7	
a. 基本土層 7	
b. ユニット1 7	
2. 縄文時代 10	
a. 住居址 11	
b. 土 坑 12	
c. 調査区出土の遺物 23	
3. 古墳時代前期 26	
a. 住居址 27	
b. 土 坑 95	
4. 古墳時代中期 100	
a. 住居址 101	
b. 土 坑 136	
5. 古墳時代後期 142	
a. 住居址 143	
b. 土 坑 161	
V. 遺構外出土の石製模造品 171	
VII. 東側埋没谷 172	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4	第38図 第29号住居址実測図	39
第2図 遺跡周辺地形図	5	第39図 第30号住居址実測図 (1)	41
第3図 遺構配置図	6	第40図 第30号住居址実測図 (2)	42
第4図 基本層序	7	第41図 第30号住居址実測図 (3)	43
第5図 ユニット1遺物分布図	8	第42図 第31号住居址実測図 (1)	45
第6図 ユニット出土遺物	9	第43図 第31号住居址実測図 (2)	46
第7図 繩文時代遺構配置図	10	第44図 第32号住居址実測図 (1)	47
第8図 第1号住居址実測図	11	第45図 第32号住居址実測図 (2)	48
第9図 各土塁実測図 (1)	13	第46図 第35号住居址実測図	48
第10図 各土塁実測図 (2)	14	第47図 第37号住居址実測図	49
第11図 各土塁実測図 (3)	16	第48図 第38号住居址実測図	50
第12図 各土塁実測図 (4)	17	第49図 第42号住居址実測図	50
第13図 各土塁実測図 (5)	19	第50図 第44号住居址実測図	51
第14図 各土塁実測図 (6)	20	第51図 第46号住居址実測図	52
第15図 各土塁実測図 (7)	21	第52図 第48号住居址実測図	53
第16図 各土塁出土遺物	22	第53図 第50号・51号住居址実測図	54
第17図 9号土塁実測図	23	第54図 第50号住居址実測図	55
第18図 調査区出土の遺物 (1)	24	第55図 第51号住居址実測図	56
第19図 調査区出土の遺物 (2)	25	第56図 第53号住居址実測図	57
第20図 古墳時代前期遺構配置図	26	第57図 第54号住居址実測図	57
第21図 第2号住居址実測図	27	第58図 第55号住居址実測図 (1)	58
第22図 第3号住居址実測図	28	第59図 第55号住居址実測図 (2)	59
第23図 第4号・6号住居址実測図	29	第60図 第55号住居址実測図 (3)	60
第24図 第5号住居址実測図	30	第61図 第56号・57号住居址実測図	62
第25図 第7号住居址実測図	31	第62図 第56号住居址実測図 (1)	63
第26図 第9号・10号住居址実測図	31	第63図 第56号住居址実測図 (2)	64
第27図 第12号・13号・15号住居址実測図	32	第64図 第57号住居址実測図	66
第28図 第17号住居址実測図	32	第65図 第58号住居址実測図	67
第29図 第18号住居址実測図	33	第66図 第59号住居址実測図	68
第30図 第19号住居址実測図	33	第67図 第61号住居址実測図	69
第31図 第22号住居址実測図	33	第68図 第65号住居址実測図	70
第32図 第23号・25号住居址実測図 (1)	34	第69図 第67号住居址実測図 (1)	71
第33図 第23号・25号住居址実測図 (2)	35	第70図 第67号住居址実測図 (2)	72
第34図 第24号住居址実測図	36	第71図 第68号住居址実測図	73
第35図 第27号住居址実測図	37	第72図 第70号住居址実測図	75
第36図 第28号住居址実測図 (1)	38	第73図 第71号住居址実測図 (1)	76
第37図 第28号住居址実測図 (2)	39	第74図 第72号住居址実測図 (2)	77

第75図	第72号住居址実測図	78	第115図	第66号住居址実測図（2）	124
第76図	第73号住居址実測図（1）	80	第116図	第66号住居址実測図（3）	125
第77図	第73号住居址実測図（2）	81	第117図	第74号住居址実測図（1）	127
第78図	第75号住居址実測図	82	第118図	第74号住居址実測図（2）	128
第79図	第76号住居址実測図	83	第119図	第80号住居址実測図（1）	130
第80図	第77号住居址実測図	83	第120図	第80号住居址実測図（2）	131
第81図	第78号住居址実測図（1）	85	第121図	第80号住居址実測図（3）	132
第82図	第78号住居址実測図（2）	86	第122図	第81号住居址実測図（1）	133
第83図	第79号住居址実測図	87	第123図	第81号住居址実測図（2）	134
第84図	第82号住居址実測図	88	第124図	第86号住居址実測図	135
第85図	第84号住居址実測図（1）	89	第125図	各土塙実測図（1）	137
第86図	第84号住居址実測図（2）	90	第126図	各土塙実測図（2）	139
第87図	第85号住居址実測図	91	第127図	各土塙実測図（3）	140
第88図	第87号・88号住居址実測図	93	第128図	土塙出土遺物	141
第89図	第87号住居址実測図	94	第129図	古墳時代後期遺構配置図	142
第90図	各土塙実測図（1）	96	第130図	第36号・52号住居址実測図	143
第91図	各土塙実測図（2）	98	第131図	第39号住居址実測図（1）	144
第92図	各土塙実測図（3）	99	第132図	第39号住居址実測図（2）	145
第93図	古墳時代中期遺構配置図	100	第133図	第40号・41号住居址実測図	146
第94図	第8号住居址実測図	101	第134図	第40号・41号住居址実測図	147
第95図	第11号住居址実測図	102	第135図	第47号住居址実測図（1）	149
第96図	第14号住居址実測図（1）	103	第136図	第47号住居址実測図（2）	150
第97図	第14号住居址実測図（2）	104	第137図	第47号住居址実測図（3）	151
第98図	第16号住居址実測図（1）	105	第138図	第62号住居址実測図（1）	153
第99図	第16号住居址実測図（2）	106	第139図	第62号住居址実測図（2）	154
第100図	第20号住居址実測図	107	第140図	第62号住居址実測図（3）	155
第101図	第21号住居址実測図	108	第141図	第69号住居址実測図	155
第102図	第26号住居址実測図（1）	110	第142図	第83号住居址実測図（1）	157
第103図	第26号住居址実測図（2）	111	第143図	第83号住居址実測図（2）	158
第104図	第33号住居址実測図	113	第144図	第89号住居址実測図（1）	159
第105図	第34号住居址実測図（1）	114	第145図	第89号住居址実測図（2）	160
第106図	第34号住居址実測図（2）	115	第146図	各土塙実測図（1）	162
第107図	第43号住居址実測図	116	第147図	各土塙実測図（2）	164
第108図	第49号住居址実測図（1）	117	第148図	各土塙実測図（3）	165
第109図	第49号住居址実測図（2）	118	第149図	各土塙実測図（4）	167
第110図	第60号住居址実測図	119	第150図	各土塙実測図（5）	168
第111図	第63号住居址実測図	120	第151図	各土塙実測図（6）	169
第112図	第64号住居址実測図（1）	121	第152図	各土塙出土遺物	170
第113図	第64号住居址実測図（2）	122	第153図	遺構外出土の石製模造品	171
第114図	第66号住居址実測図（1）	123	第154図	東側埋没谷実測図	172

第155図	第1号古墳墳丘測量図	173	第163図	縄文時代陥穴群配置図	183
第156図	第1号古墳実測図	173	第164図	古墳時代集落変遷図1	185
第157図	第1号古墳墳丘断面図	174	第165図	古墳時代集落変遷図2	185
第158図	第2号古墳墳丘測量図	177	第166図	古墳時代集落変遷図3	186
第159図	第2号古墳実測図	177	第167図	古墳時代土器編年図1	189
第160図	第2号古墳墳丘断面図	178	第168図	古墳時代土器編年図2	190
第161図	第2号古墳主体部実測図	180			
第162図	第2号古墳出土遺物実測図	181			

写 真 図 版 目 次

写真図版1	遺跡写真(1)		写真図版21	古墳時代前期(12)	遺物
写真図版2	遺跡写真(2)		写真図版22	古墳時代前期(13)	遺物
写真図版3	先土器時代	遺構・遺物	写真図版23	古墳時代中期(1)	遺構
写真図版4	縄文時代(1)	遺構	写真図版24	古墳時代中期(2)	遺構
写真図版5	縄文時代(2)	遺構	写真図版25	古墳時代中期(3)	遺構
写真図版6	縄文時代(3)	遺構	写真図版26	古墳時代中期(4)	遺物
写真図版7	縄文時代(4)	遺物	写真図版27	古墳時代中期(5)	遺物
写真図版8	縄文時代(5)	遺物	写真図版28	古墳時代中期(6)	遺物
写真図版9	縄文時代(6)	遺物	写真図版29	古墳時代中期(7)	遺物
写真図版10	古墳時代前期(1)	遺構	写真図版30	古墳時代後期(1)	遺構
写真図版11	古墳時代前期(2)	遺構	写真図版31	古墳時代後期(2)	遺構
写真図版12	古墳時代前期(3)	遺構	写真図版32	古墳時代後期(3)	遺構
写真図版13	古墳時代前期(4)	遺構	写真図版33	古墳時代後期(4)	遺物
写真図版14	古墳時代前期(5)	遺構	写真図版34	古墳時代後期(5)	遺物
写真図版15	古墳時代前期(6)	遺構	写真図版35	第1号古墳(1)	
写真図版16	古墳時代前期(7)	遺構	写真図版36	第1号古墳(2)	
写真図版17	古墳時代前期(8)	遺構	写真図版37	第2号古墳(1)	
写真図版18	古墳時代前期(9)	遺物	写真図版38	第2号古墳(2)	
写真図版19	古墳時代前期(10)	遺物	写真図版39	第2号古墳(3)	
写真図版20	古墳時代前期(11)	遺物	写真図版40	第2号古墳(4)	

I. はじめに

向原遺跡の所在する周辺は、標高20数メートルのさほど高くもない大地が樹枝状に展開している。遺跡の北側には、花室川が東西に流れており、一見して居住域としては最適な環境にある地形状態を呈していることを推察しえる。現に、周辺部には多くの遺跡が知られ、縄文土器や土師器、須恵器が多量に散布している。

本遺跡も昭和61年3月に確認調査を行なった所、予期した通り大集落跡であることが判明し、古墳2基も確認された。協議の結果、記録保存することになったが、建物部分に関しては5月中旬までに調査を終了してほしいとの工場側の要望があった。建物部分は、調査区の東側強を占め、大半の住居址と古墳が存在しており、とても不可能と思われたが、調査体制を十分検討した結果、地元作業員約70名の参加を得るとともに、調査員5名が当たり、それぞれ分担して調査を遂行することにした。各調査員とも、毎日が戦いの思いで必死で調査に取り組んだ。重複する住居址や、縄文・古墳時代の土塙も多数検出され、遺物の出土量も多く、調査の進行に甚々困難を要し、時には調査に不備を欠くことも生じたが、全員の協力によって大禍なく、予定通りに建物部分の調査を終了させた。時折吹く北風、所謂筑波わろしは、4月末になっても冷たく防寒服を着込むほどであったが、風に洗われた筑波山はその勇姿が美しく、必死で調査を行なっているわれわれにとって心が和む一服の清涼剤であった。

5月中旬以降は、調査にゆとりができ、われわれが望むところの調査ができるようになった。結局、古墳2基（円墳1、方墳1）住居址90軒、土塙64基、先土器時代ユニット1ヶ所を調査でき、6月中旬にすべての調査が終了した。先土器時代のユニットとともに、縄文時代の陥穴が列状に並んで17基が検出されたことは、当該地方においては初発見ともいえ、貴重な資料を調査した。

向原遺跡の調査は、先土器時代の末には先人の生活の痕跡を窺うことができ、縄文時代早期には狩猟城となり、前期には集落も形成され、その後しばらくはとだえるが、古墳時代前期中葉には再び集落域となって発展して6世紀中葉まで続き、古墳群が形成されるようになって墓域化して行った事が判明し、当該地域の歴史研究にあたって多大な成果をあげることができたものと確信している。ただ、惜むらくは、現在の工場部分にも遺跡は延びているものと思われ、すでに破壊されて遺跡全体の集落構成や性格を完全に把握できないことである。

最後に、本発掘調査・報告書作成に当り、茨城大学人文学部助教授茂木雅博氏、土浦市教育委員会社会教育課文化係長岩沢 茂氏、同社会教育係長日下部和宏氏、同主事塙谷 修氏には格別な御指導・御助言を頂いた。また、ブリマハム株式会社工場長森田保男氏、同生産技術課主任高島昭寛氏をはじめとするブリマハムの方々には、多大な御協力を頂いた。記して心よりお礼を申し上げる次第である。

（越川）

II. 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至る経緯

この向原遺跡は、昭和61年1月にブリマハム（株）から倉庫及び製品仕分場の新設を進めるため、開発行為が提出された。

この建設地における埋蔵文化財の有無を確認するため、同年2月に遺跡確認のための試掘調査を実施した。その結果、古墳時代前期の住居跡（数棟）が確認され、ブリマハム（株）の協力を受けて同年4月1日から記録保存のための発掘調査を開始した。 （岩沢）

2. 発掘調査の経過

本遺跡の調査はまず遺構確認調査として、昭和61年3月1日より古墳群の墳丘測量と、セクションベルトの設定を行なった。この時点では古墳群は3基として測量し、作業自体は2日間を要した。墳丘測量図を作成後、重機と作業員を投入し、古墳群の部分を除いて表土剥ぎを開始する。表土から地山であるソフトロームまでの層厚は、最も厚い箇所で40cm程度であるが、調査前の遺跡地が山林であったため、抜根作業等で予想以上に手間だった。加えて菜種梅雨の影響もあり、遺構確認調査が終了したのは3月20日であった。市教委による確認トレンドの知見により、相当数の遺構の埋没が予想されていたが、結果的にそれを覆うことなく、住居址を中心とする100ヶ所余の落ち込みが検出された。

本調査は4月1日より開始し、まず地鎮祭を取り行ない、終了後に古墳群と住居址群の両方を同時に着手する。限られた調査期間ゆえ、かなりのペースで調査は進められ、冷凍庫建設部分は5月15日までに終了した。この部分だけですでに総遺構数の%を調査していたが、各遺構とも重複が著しく、新旧関係を確認することに最大の注意を払った。

古墳群の調査は、可能な限り精緻な記録保存を行なった。当初第3号墳として測量したもののは、調査初日で後世の盛土と判明し、古墳でないと判断を下した。第2号墳は主体部が盗掘を受けていたもので、覆土の全てをふるいにかけ、微細な副葬品の検出をも試みている。このため、第2号墳の調査が終了したのは5月13日であり、古墳と重複した遺構の調査も着手が遅れ、全てが終了したのは5月15日になってからであった。

5月16日以降は、比較的ゆとりを持って調査が行なえるようになり、先土器時代の文化層確認も、 4×4 mのテストピットを4ヶ所設定して行なった。このうち、東側埋没谷付近に位置するT・P1より、黒曜石の碎片を主とするユニット1ヶ所が検出された。そして、6月6日からはユニットの精査が専らとなり、6月12日にこれを終了する。これと並行し、台地中央部に近いT・P4は-2mまで掘り下げ、下末吉ロームを検出し、文化層の有無を確認した。調査 자체は6月14日までに全体測量図の作成や遺跡写真の撮影を終了し、6月15日に発掘器材類を撤収・搬出し、3ヶ月半に及ぶ野外調査の全てを終了するに至る。 （中野）

III. 遺跡の位置と周辺の遺跡

土浦市は、霞ヶ浦の北西岸に位置する。北側は、筑波研究学園都市に接し、市内を縦断する国道6号線やJR常磐線、あるいは近年常磐高速道も開通し、都心からの交通の便にも恵まれ茨城県南部における最大の商業・文化の中心地となっている。そのような条件のもとにベッドタウン化が進み、市内の至るところで宅地造成が行なわれている。

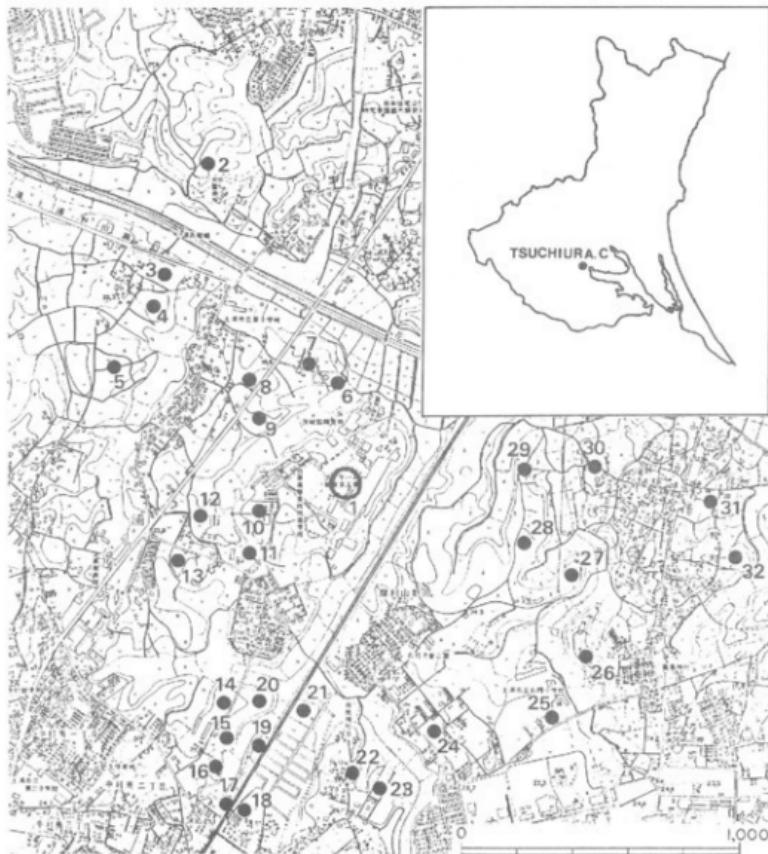
向原遺跡は、土浦市の南端近くに所在し、遺跡の北側には霞ヶ浦に注ぐ花室川がほぼ東西に流路を取っており、周辺部は花室川の侵蝕作用で形成された支谷が樹枝状に発達し、標高20数メートルの洪積台地が大小複雑な舌状地形を呈している。向原遺跡の所在する台地は、北東から南西に延びるやや広い舌状台地を形成しており、南東側と北西側にそれぞれ花室川からの支谷が入り込んで広大ともいえる沖積地が展開している。遺跡の北方には、筑波山が地肌も見えるほどに望観でき、沖積地を利用した水田耕作や花室川から霞ヶ浦に至る漁労にも恵まれ、遺跡の立地としては最高の環境にある。

向原遺跡周辺の遺跡をみると、北西方向の谷を挟んだ台地には、古墳や土師時代の包含地である南邊中遺跡A地点(9)、同B地点(8)、南西方向の、支谷に狭められながらも本台地より続く巾村地区には、縄文及び土師時代の包含地である谷原門遺跡A地点(11)、同B地点(12)、同C地点(10)、天神遺跡(13)等、更に南側には縄文中期の木の宮北遺跡(14)、木の宮南遺跡C地点(20)、峰崎遺跡B西地点(17)、常磐線を挟んだ東側の台地には土師時代から中世の牧の内遺跡(29)、縄文前期の内路地台遺跡(28)、土師時代の念代遺跡(30)等が所在し、濃密に遺跡が分布している。これ等の遺跡には、かなりの埋蔵文化財が包蔵されているものと思われる。

土浦市内の遺跡を時代別に見ると、先土器時代の遺跡としては宮臨遺跡、神立遺跡等が知られポイントやスケーラーが表採されている。縄文時代の遺跡は、国指定遺跡の上高沢貝塚を代表に鳥山貝塚、小松貝塚等地点貝塚6ヶ所と縄文土器の散布地は146ヶ所に及ぶ。弥生時代の遺跡は、井ノ内遺跡で長岡式土器、姫塚遺跡で十王台式土器が表採されており、破壊された鳥山田地内には大集落があったものと思われ、その他にも数ヶ所所在する。古墳時代から歴史時代の遺跡は、大集落跡が調査された鳥山遺跡をはじめ市内188ヶ所で確認されている。古墳は、市指定の全長83mの王塚古墳、全長54mの后塚古墳の古式の大型前方後円墳も見られ、現存する古墳は前方後円墳19基、前方後方墳1基、円墳66基、方墳4基の計90基が確認されているがこの他に破壊・削減した古墳は多数所在したものと思われる。

(越川)

参考文献 「土浦の遺跡—埋蔵文化財包蔵地」土浦市教育委員会 1984年



- | | | | |
|--------------|--------------|---------------|---------------|
| 1. 向原遺跡 | 2. 寺家ノ後遺跡 | 3. 平遺跡 | 4. 踏訪遺跡 |
| 5. 平代地遺跡 | 6. 馬道古墳群 | 7. 馬道遺跡 | 8. 南連中遺跡B地点 |
| 9. 南連中遺跡A地点 | 10. 谷原門遺跡C地点 | 11. 谷原門遺跡A地点 | 12. 谷原門遺跡B地点 |
| 13. 天神遺跡 | 14. 木の宮北遺跡 | 15. 木の宮南遺跡B地点 | 16. 木の宮南遺跡A地点 |
| 17. 峰崎遺跡B西地点 | 18. 峰崎遺跡B東地点 | 19. 峰崎遺跡C地点 | 20. 木の宮南遺跡C地点 |
| 21. 峰崎遺跡A地点 | 22. 権現前遺跡 | 23. 宮前遺跡 | 24. 右羽貝塚東遺跡 |
| 25. 宮塚遺跡 | 26. 小谷遺跡 | 27. 右羽三区庚申塚 | 28. 内踏地台遺跡 |
| 29. 牧の内遺跡 | 30. 念代遺跡 | 31. 堂地塚遺跡 | 32. 松原遺跡 |

第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 遺構配置図

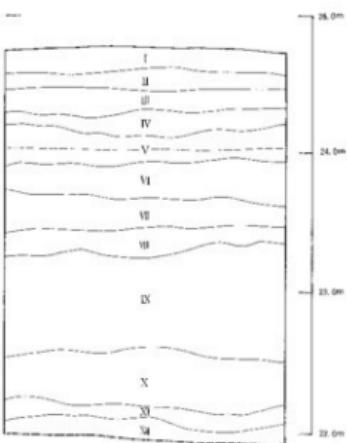
IV 集落跡の調査

1. 先土器時代

a 基本土層（第4図）

本遺跡の基本土層は第4図の柱状図に示したとおりである。以下に概述する。

I層は表土層で、腐食土である。II層は黒褐色土層で、古墳時代の生活面は本層にある。III層は褐色土で縄文時代の生活面をなす。IV層は立川ローム軟質部に相当し、先土器ユニットは本層中に認められる。V層は立川ローム硬質部に相当し、ATが介在する。VI層は第二黒色帶に相当する。VII層は黄褐色、VIII層は灰褐色ロームで、本層までが立川ロームである。IX層とX層が武藏野ロームに相当し、XI層とXII層は粘性を帯び、下末青ロームに相当するものである。



第4図 基本層序

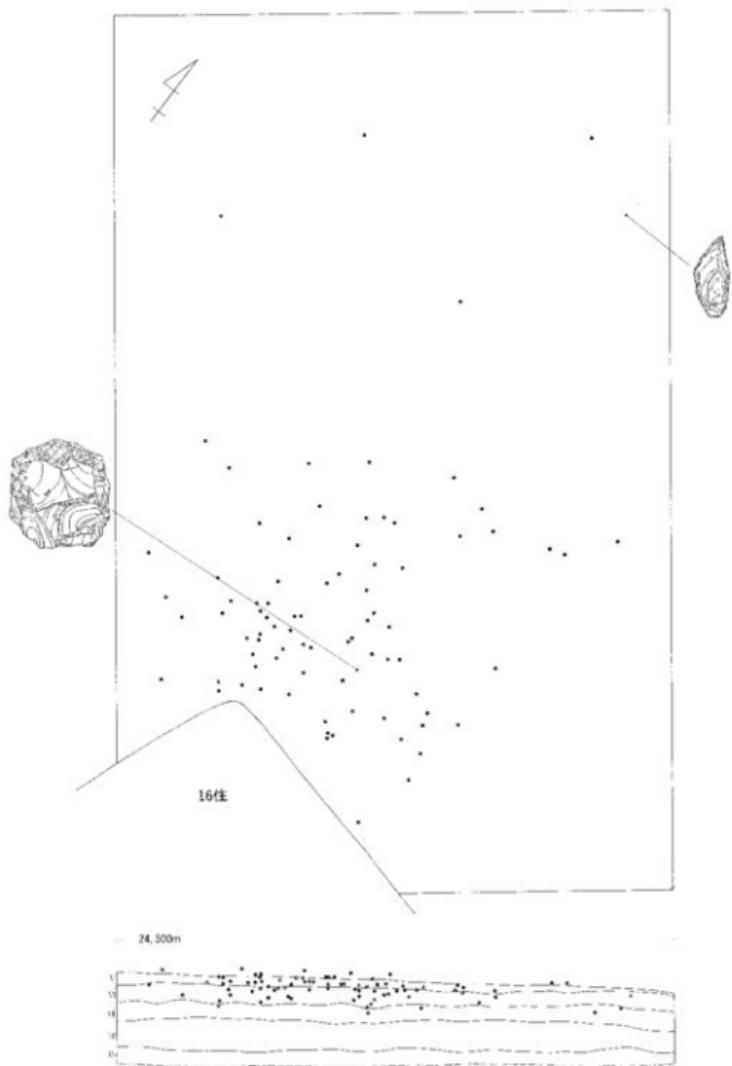
b ユニット1（第5図・6図）

本ユニットは調査区東端に位置し、付近には埋没谷が存在する。分布範囲はやや散漫ながら径4mの略円形を呈し、中心部の密度が高い。垂直分布はIV層中位を中心にV層にも落ち込んでおり、厚さは0.4mを測る。出土レベルの平均をとり、IV層中と認定した。

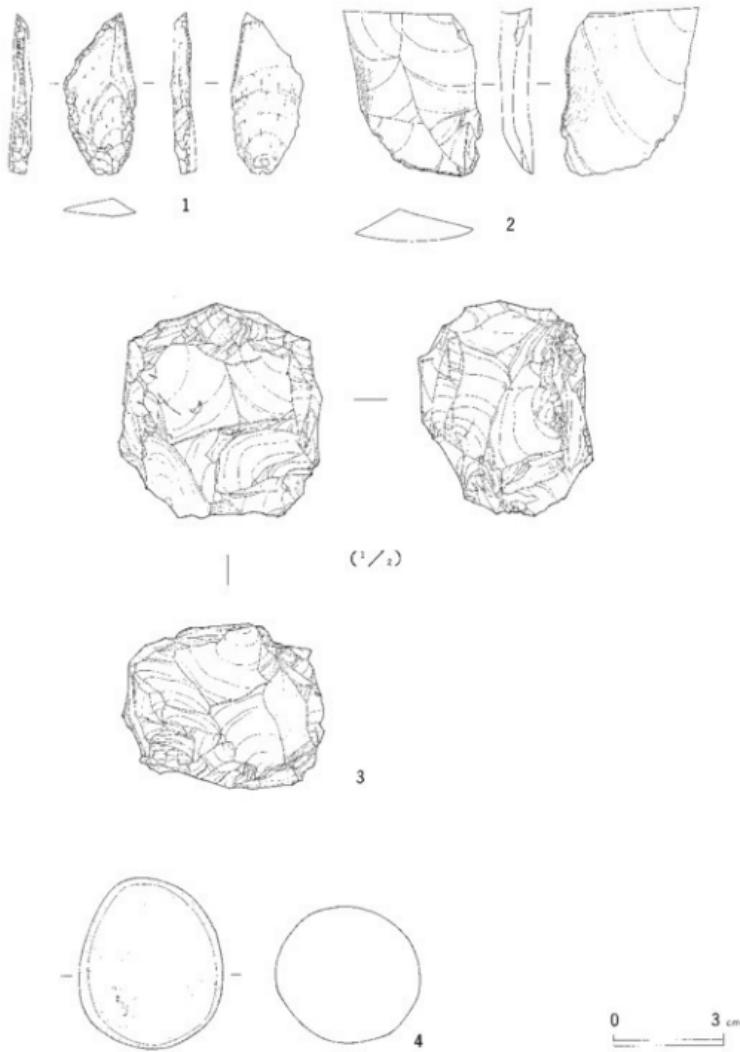
遺物の総数は84点を数え、その内訳はナイフ形石器1点、石核1点、磨石1点、剥片1点、碎片80点で、9割以上が鉋片から成る。石器としては唯一であるナイフ形石器は、ユニットの中心より5m以上離れて出土した。石核と磨石はほぼ中心部で各々近接した位置にある。石材は黒曜石が81点、安山岩1点、メノウ1点、硬質砂岩1点であり、剥片と碎片は全て黒曜石であった。これらは接合しないものの、同一母岩から取られたものである。

第6図1はナイフ形石器である。縦長削片を素材とし、二側縁の調整を加える。調整は全て裏面側から表面へ向けて行っており、片面調整である。計測値は長さ4.4cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、先端角54°となっている。安山岩製・2は27号住居より出土した使用痕剥片である。縦長削片に折断を加えたものを素材とし、先端と側縁に使用痕が認められる。頂岩を用いる。3は石核で、両設打面をつくり、打面を調整しながら大形の縦長削片を削取っている。石材はメノウを用いている。4は磨石である。卵形を呈し、全体に良く使い込まれており、部分的に亦変化が認められる。石材は硬質砂岩製である。

(仲野)

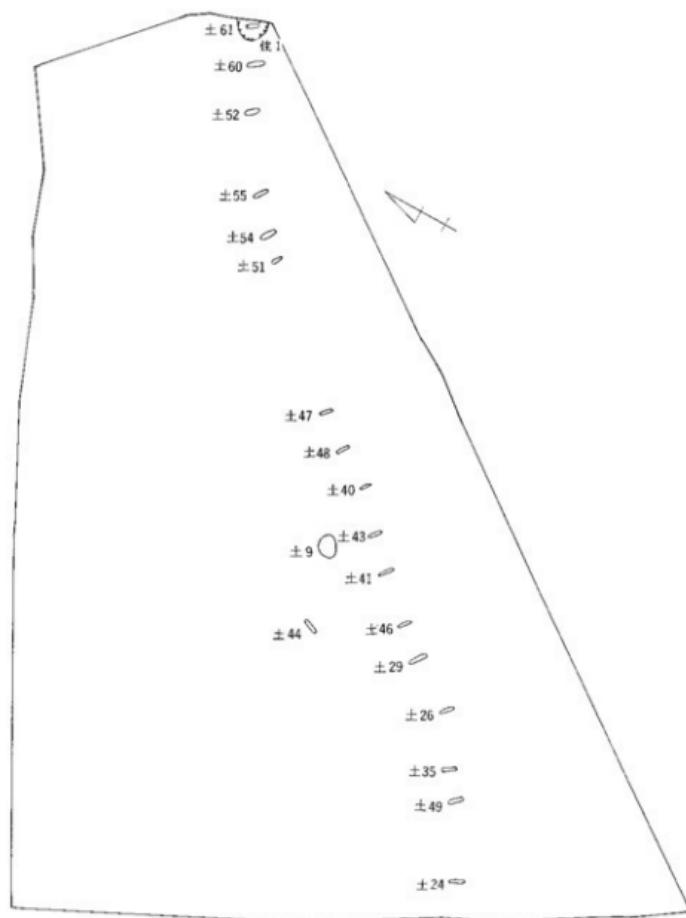


第5図 ユニット1遺物分布図



第6図 ユニット出土遺物図

2. 繩文時代



第7図 繩文時代遺構配置図

縄文時代の概要

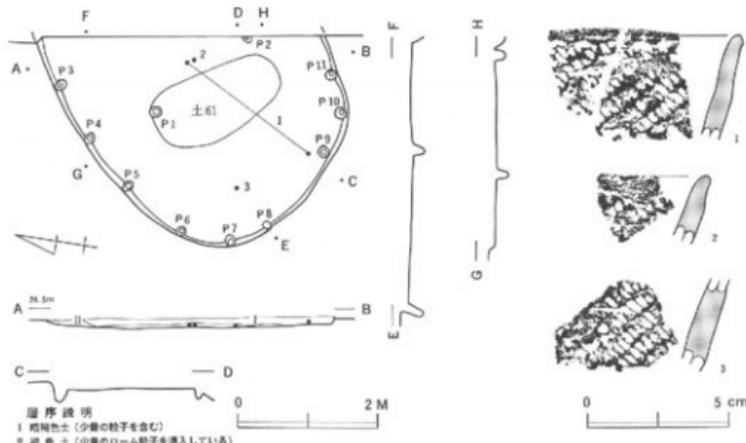
縄文時代の遺構としては、住居址1軒（1号住）、土塙19基（9号、24号、26号、29号、35号、40号、41号、43号、44号、46号、47号、48号、49号、51号、52号、54号、55号、60号、61号）を数える。これらのうち、長楕円形を呈する土塙は、18基中17基までが間隔を取りながらほぼ直線に並んでいる。出土土器は早期～後期にわたって認められる。

a 住居址

第1号住居址（第8図）

本住居址は調査区東南端に位置し、工場建設のため既に半分以上が破壊されている。他遺構との重複関係としては、第61号土塙の埋没後に掘り込まれたもので、その部分は貼床状に踏み固まっている。平面形は小判形を呈し、規模は残存部で200×188cmを測り、壁はゆるやかに立ち上がり、壁高10cmを測る。柱穴はP₁～P₁₁の11本が検出され、位置的に見てP₁・P₂が主柱穴である。各々の深さはP₁が19cm、P₂が33cm、P₃が20cmを測る以外、いずれも床面より15～16cmの深さとなっている。炉址は残存部分からは検出されなかった。

遺物は極めて少なく、第8図1～3が床面上から検出された以外は、石片は1点検出されたのみである。1は口縁部破片で、ナデ上げによる口唇部整形をなし、口縁直下に原体の末端がくるように単節縄文LR（0段多条）を横回転施文する。2も口縁部破片で、口縁部無文帯を形成し、その下は単節縄文LRを転す。3は胴下半近くの破片であり、1と同一個体である。単節縄文LR（0段多条）を横回転施文する。1～3とも胎土に纖維の含有が目立ち、縄文時代前期黒浜式期に比定される。これをもって本住居址を黒浜式期の所産と考えたい。



第8図 第1号住居址実測図

b 土 塚

第24号土塚（第9図）

本土塚は調査区西端に位置し、第1号墳周溝に切られる。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $174 \times 14\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 110cm を測る。掘り方はハングがなく、底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積で壁の崩落がある。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第26号土塚（第9図）

本土塚は調査区西寄りに位置し、第85号住居址に切られる。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $215 \times 14\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 71cm を測る。長軸沿いに、底面に向ってハングし、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第29号土塚（第9図）

本土塚は調査区中央西寄りに位置する。他遺構との重複はない。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $237 \times 11\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 125cm を測る。掘り方は、ハングがなく、底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積で南西側では壁の崩落目立つ。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第35号土塚（第10図）

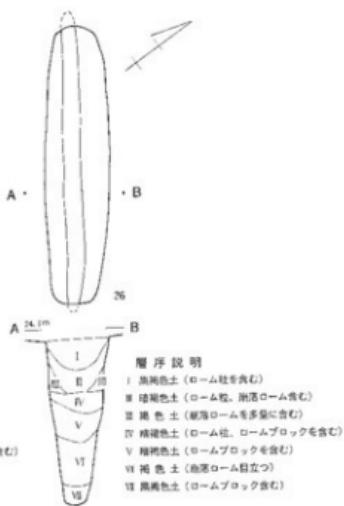
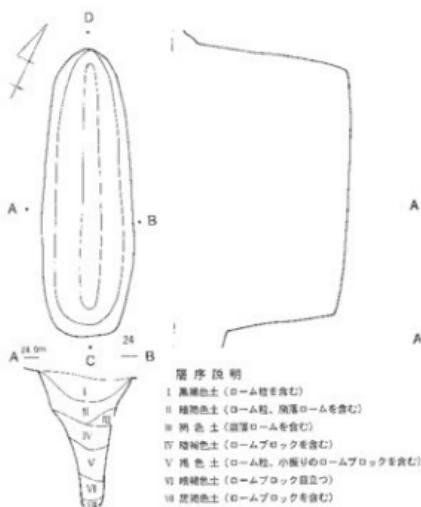
本土塚は調査区西寄りに位置し、第87、88号住居址に切られる。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $204 \times 17\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 179cm を測る。長軸沿いに、底面に向ってハングし、底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第40号土塚（第10図）

本土塚は調査区中央に位置し、第59号住居址が貼床する。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $180 \times 12\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 107cm を測る。長軸沿いに底面に向ってハングし、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

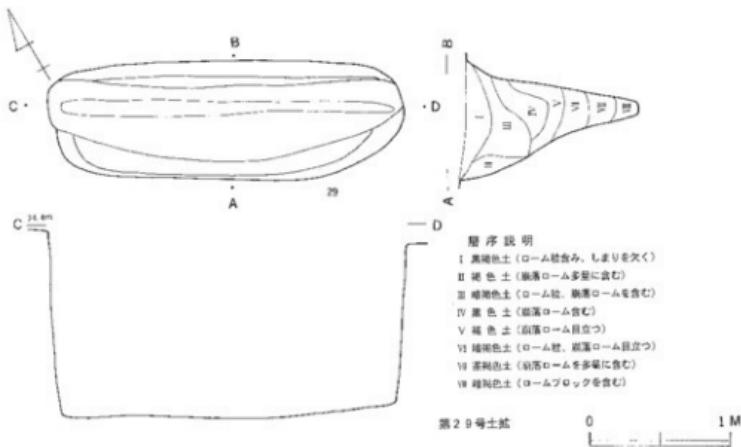
第41号土塚（第10図）

本土塚は調査区中央西寄りに位置する。他遺構との重複はない。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $180 \times 12\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 154cm を測る。掘り方はハングがなく、中段を有しゆるやかに底面に向ってすぼまる。底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積で、下部にやや壁崩落土が目立つものの、上部では混入が少なくなっている。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

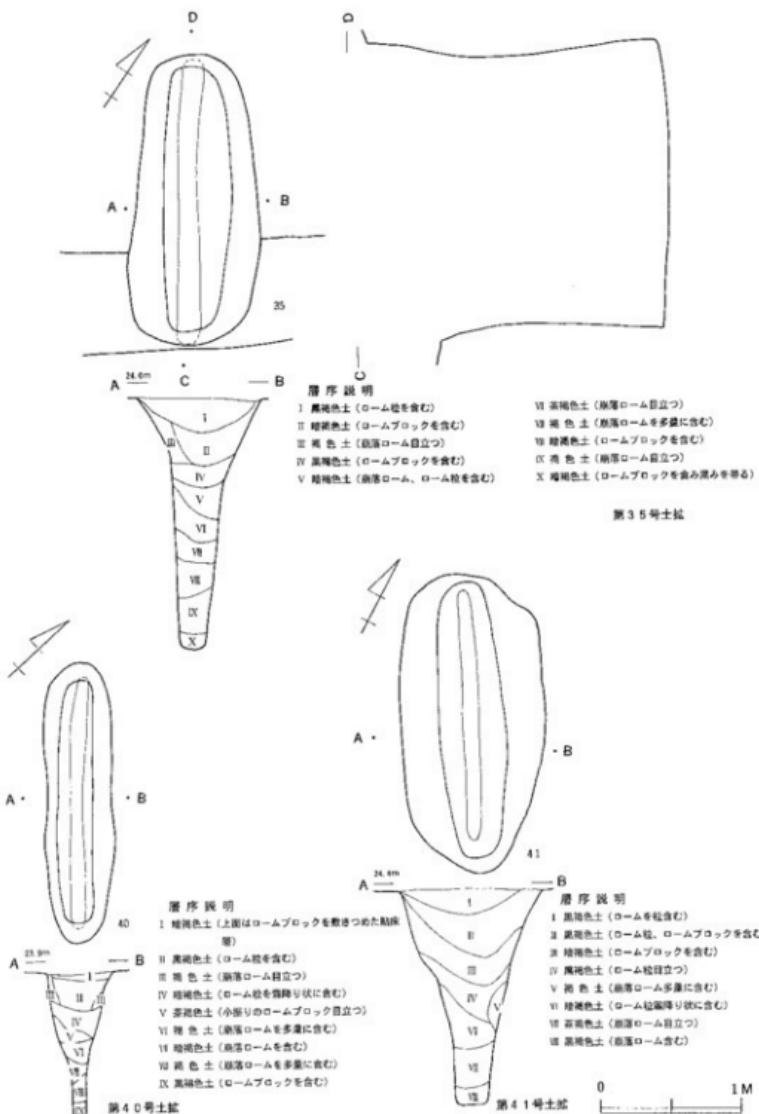


第24号土壠

第24号土壠



第9図 各土壠実測図(1)



第10図 各土壌実測図 (2)

第43号土塗（第11図）

本土塗は調査区中央西寄りに位置する。第60号住居址により北端が切られる。形態は上部・底部平面形とも長梢円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $186 \times 14\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 132cm を測る。長軸沿いに向ってハンギングし、平面图形はやや弯曲する。底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積で崩落土目立つ。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第44号土塗（第11図）

本土塗は調査区中央西寄りに位置し、第63号住居址が貼床する。形態は上部・底部平面形とも長梢円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $236 \times 14\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 48cm を測る。掘り方はハンギングがなく、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第46号土塗（第11図）

本土塗は調査区中央西寄りに位置し、第55号住居址に切られる。形態は上部・底部平面形とも長梢円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $165 \times 11\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 160cm を測る。掘り方はハンギングがなく、底部に向ってゆるやかにすぼまるかが、平面图形はかなり弯曲する。底面はやや凹凸が目立ち、U字形を呈する。覆土は自然堆積で壁の崩落土がやや目立つが、上部では捨て焼土が混入する。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第47号土塗（第12図）

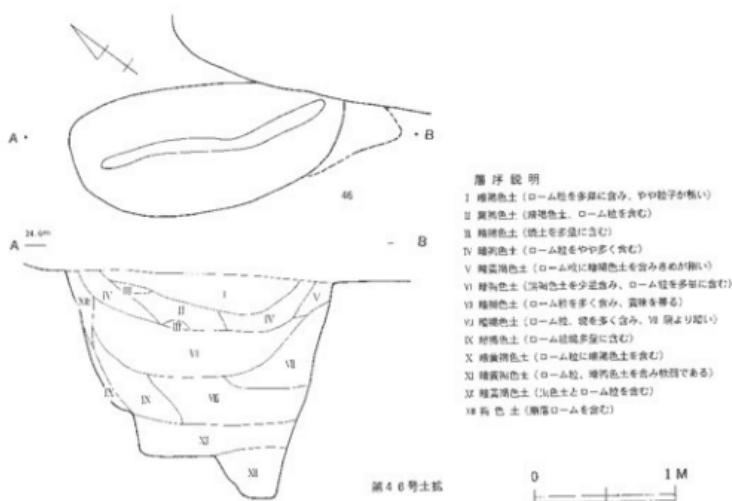
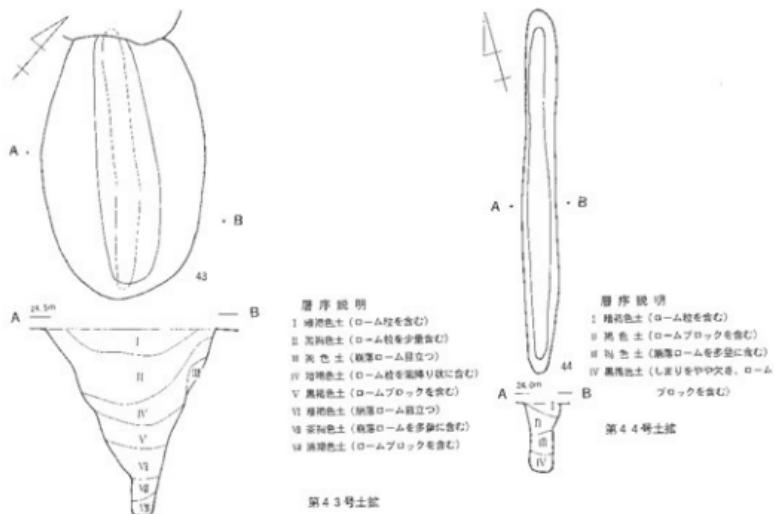
本土塗は調査区中央東寄りに位置し、第47号住居址に切られる。形態は上部・底部平面形とも長梢円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $209 \times 14\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 108cm を測る。掘り方はハンギングがなく、底面はやや凹凸に富みU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第48号土塗（第12図）

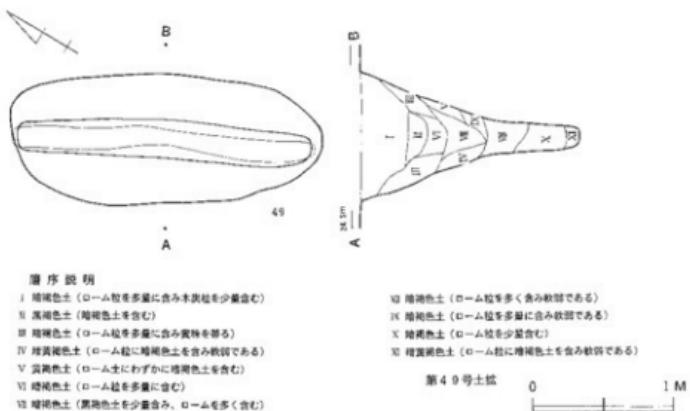
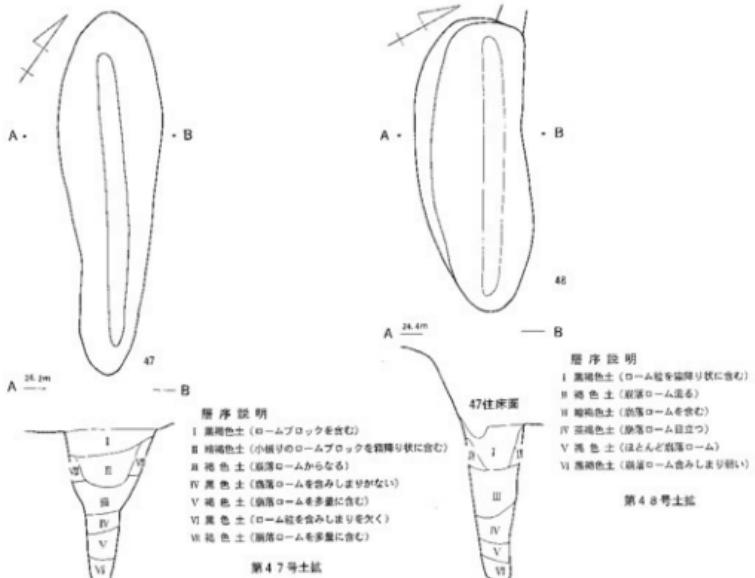
本土塗は調査区中央東寄りに位置し、第47号住居址に切られる。形態は上部・底部平面形とも長梢円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $185 \times 15\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 166cm を測る。掘り方はハンギングがなく、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積で壁の崩落土が目立つ。底部施設は掘られていない。覆土中からの出土遺物はなかった。

第49号土塗（第12図）

本土塗は調査区西側に位置する。他遺構との重複はない。形態は上部・底部平面形とも長梢円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $216 \times 15\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 156cm を測る。長軸沿いに底面に向ってハンギングし、平面图形はやや弯曲する。底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積で、壁の崩落土が目立つ。底部施設は掘られておらず、遺物は出土しなかった。



第11図 各土壠実測図(3)



第12図 各土壠実測図 (4)

第51号土塗（第13図）

本土塗は調査区東側に位置し、第26号、27号住か貼床する。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $170 \times 15\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より136cmを測る。長軸沿いに底面に向かってハンゲし、平面图形はやや弯曲する。底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られておらず、遺物は出土しなかった。

第52号土塗（第13図）

本土塗は調査区東側に位置し、第14号住に一部破壊される。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $190 \times 19\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より198cmを測る。長軸沿いに底面に向かってハンゲし、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積で、掘り返しによる複数使用が認められ、底面が二面存在する。底部施設は掘られていない。遺構確認面より第16図に示した土器片が出土している。

第54号土塗（第14図）

本土塗は調査区東側に位置し、他遺構との重複はない。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $220 \times 23\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より193cmを測る。長軸沿いに底面に向かってハンゲし、底面はやや凹凸を有しU字形を呈する。覆土は自然堆積であるが複数使用が認められる。底部施設は掘られておらず、遺物は出土しなかった。

第55号土塗（第14図）

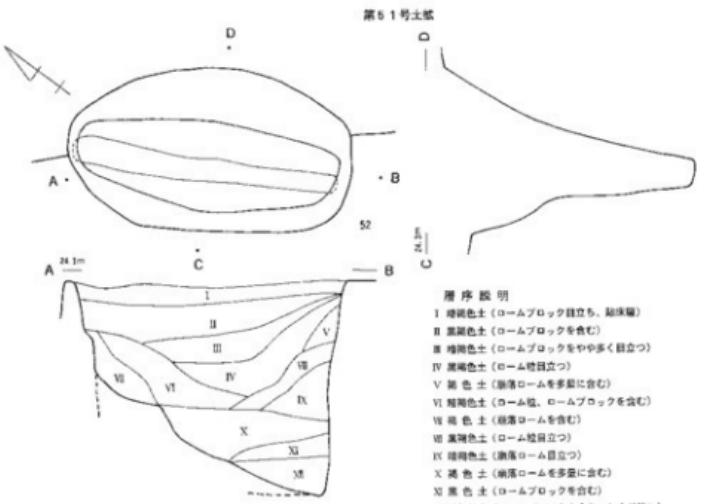
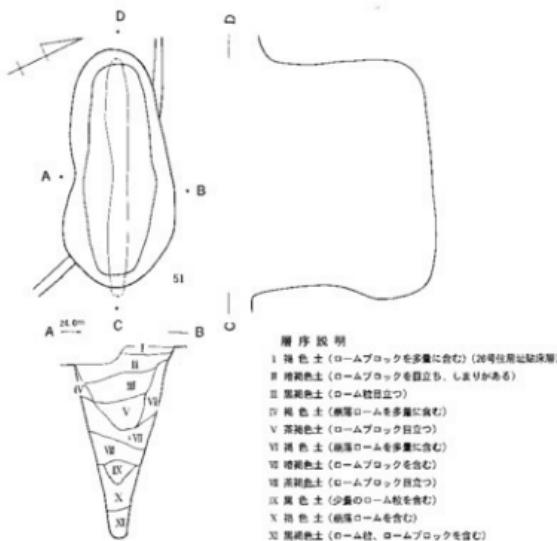
本土塗は調査区東側に位置し、第14号住に一部破壊される。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $172 \times 17\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より195cmを測る。長軸の南辺が底面に向かってハンゲし、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積で壁の崩落土が目立つ。底部施設は掘られておらず、遺物は出土しなかった。

第60号土塗（第15図）

本土塗は調査区東端に位置し、他遺構との重複はない。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $198 \times 9\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より178cmを測る。長軸沿いに底面に向かってハンゲし、平面图形はやや弯曲する。底面は凹凸に富みU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られておらず、遺物は出土しなかった。

第61号土塗（第15図）

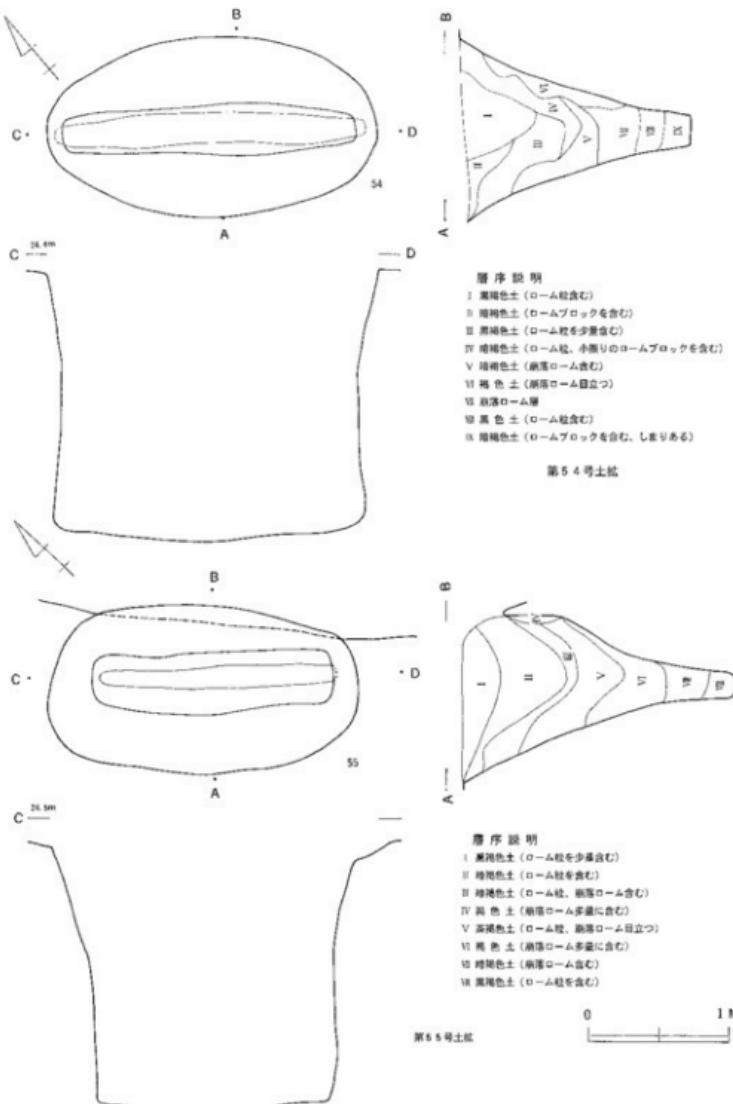
本土塗は調査区東端に位置し、第1号住居址に切られる。形態は上部・底部平面形とも長楕円形を呈し、横断面形は漏斗形を呈する。底部規模は $216 \times 16\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より184cmを測る。長軸沿いに底面に向かってハンゲしており、特に北辺に顕著である。平面图形はやや弯曲し、底面は概ね平坦でU字形を呈する。覆土は自然堆積である。底部施設は掘られていない。覆土最上層より第16図に示した土器片が出土したが、第1号住居址の出土遺物と同一個体が含まれており、本土塗に伴わないとと思われる。他に覆土中より石鐵2点が出土した。



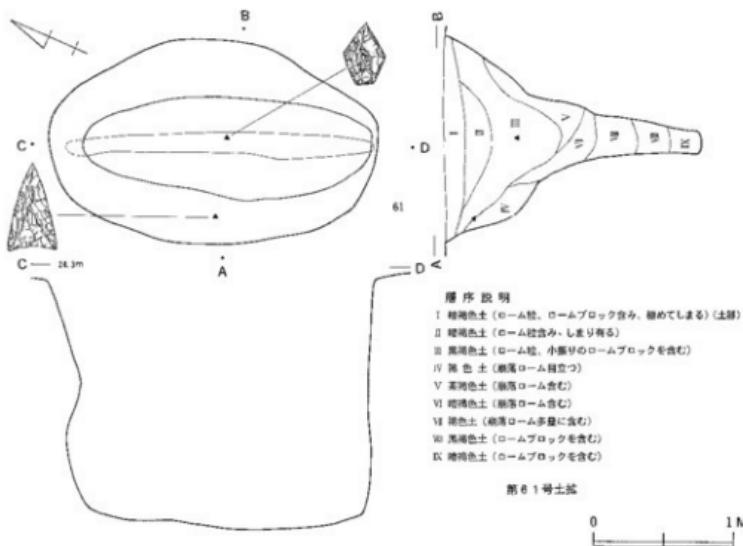
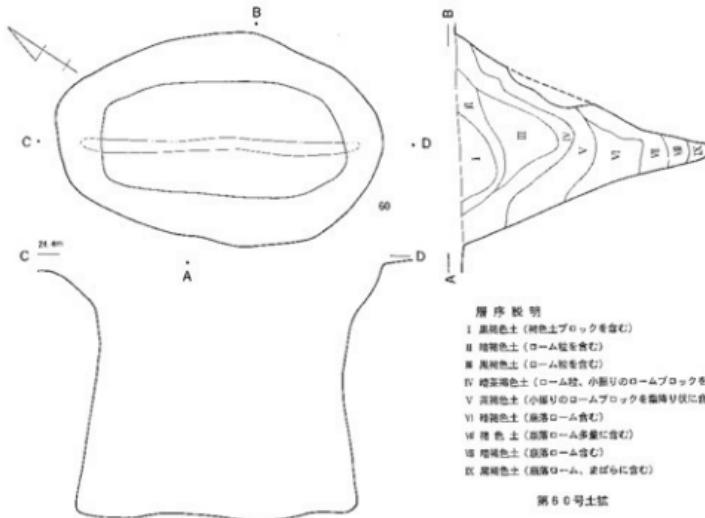
第5号土壌

0 1M

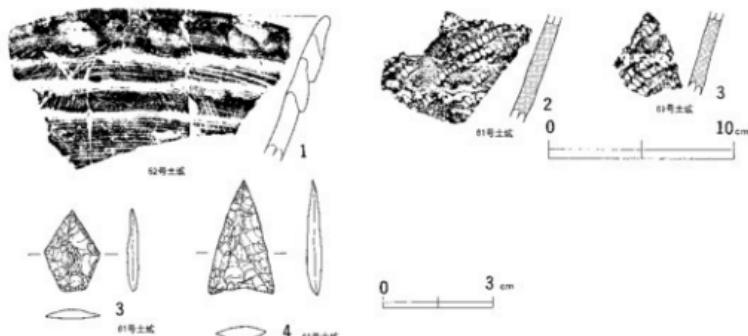
第13図 各土壌実測図(5)



第14図 各土壌実測図 (6)



第15図 各土壌実測図(7)



第16図 各土塗出土遺物

各土塗出土遺物（第16図）

第16図1は第52号土塗確認面より出土した。口縁部破片で、口唇部は丸頭状を呈し、輪積痕をそのままに残し、条線を横→縦の順序で施す。興津式に比定される。2、3は第61号土塗上層より出土した。2、3とも單節繩文LR（0段多条）を横回転施文する。原体の末端の回転痕が認められる。これらは黒浜式期に比定されるものである。

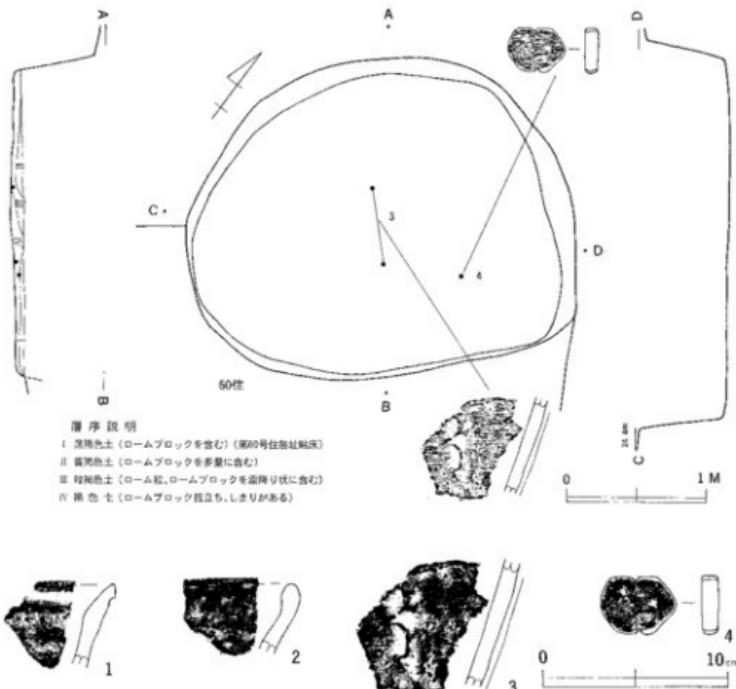
3、4は第61号土塗Ⅲ層中より出土した石鏃で、3は五角形を呈するものであり、細かな周縁調整の後に部分的に研磨を施す。チャート製。4はわずかなノッチを有する三角鏃で、調整はていねいで平面形・断面形ともシンメトリーに仕上げている。これらは流れ込みの状態で出土し、2、3の土器はくい込んだように最上層で出土したものである。

第9号土塗（第17図）

本土塗は調査区中央に位置し、第60号住居址によって破壊され、貼床されている。平面形は卵形に近い円形を呈し、規模は278×230cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは遺構確認面より60cmを測る。底面は平坦で内部施設は掘られていない。覆土はロームブロックの目立つ土壤で埋め戻されたもので、貼床部分以外でも良くしまっていた。

遺物は13点検出された。その内訳は土器11点、土器片錐1点、石片1点となっており大半は土器片によって占められている。その出土状態は多くが覆土中に混入しているものであるが、図化した3点（2点は接合）に関しては底面密着の状態で出土した。第17図3に示した土器は57cm離れたもの同士が接合したものである。ともに表側を上にして、底面に密着していた。

第17図1は平縁深鉢形土器の口縁部破片である。やや外反気味に立ち上がり、口縁内側に稜を有し、口唇部は尖頭状を呈する。口縁下に一条沈線を廻らす。2も平縁深鉢形土器の口縁部破片である。頸部より外反気味に立ち上がり、口縁は内傾する。口唇部は丸頭状を呈する。器



第17図 第9土壤実測図

内外面ともよく研磨されている。3は深鉢形土器の胴部破片である。断面三角形を呈する粘土紐を貼付し、キザミを施しながら蛇行縦線を垂下させている。4は土器片鍤である。深鉢形土器の胴部破片を素材とし、打欠き整形後周縁を入念に研磨する。索溝は短軸中央部に割片様のもので、断面V字形に刻まれるものである。1～4とも胎土に雲母の含有が目立つ。これらはいずれも阿玉台Ib式に比定されるもので、これをもって本土甌を阿玉台Ib式期の所産と考えたい。なお、本土甌からは他に2点のみであるが、黒浜式土器も検出されている。

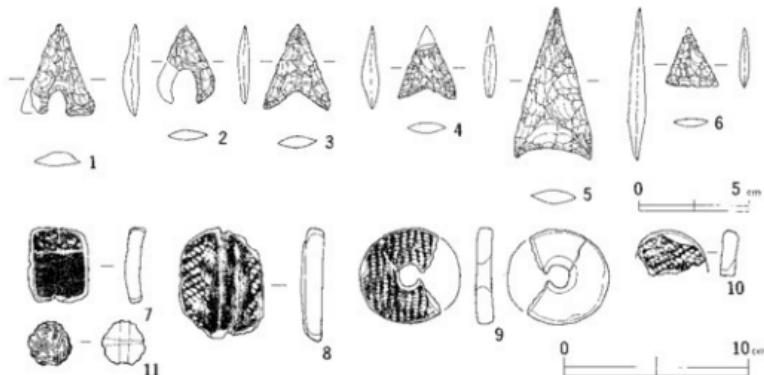
C. 調査区出土の遺物（第18・19図）

今回の調査区からは量的には少量であるが、縄文早期～後期にかけての遺物が出土している。以下時期を追って述べてみたい。

まず図示できなかったが、稻荷台式土器が2点検出されている。第18図1、2は田戸下層式



第18図 調査区出土遺物図 (1)



第19図 調査区出土の遺物(2)

土器で、3点のみの出土である。いずれも胴下半から底部付近の破片で、ケズリによる器面調整の後に太沈線を引く。3、4は条痕文系土器で、計4点出土した。図示した2点は口唇上にキザミを施し、表裏に貝殻条痕を施すもので野島式土器である。

5、6は黒浜式土器で計4点出土した。5は櫛齒状工具により波状文を描く。7～11は浮島系土器で計13点出土した。7は無節繩文Lを地文に爪形文を施すもので浮島Ib式。8、9は竹管による刺突文を施した口縁部破片で浮島III式。10、11はアナグラ属の貝殻を用いた貝殻腹縫文を施すもので興津式である。12～15は下小野系土器で計16点出土した。12、13は口縁部破片で口唇部にキザミを施し、結節繩文を施すもので前期末である。15は縦縞に綾縞文が施されるもので下小野式土器に比定されるものである。

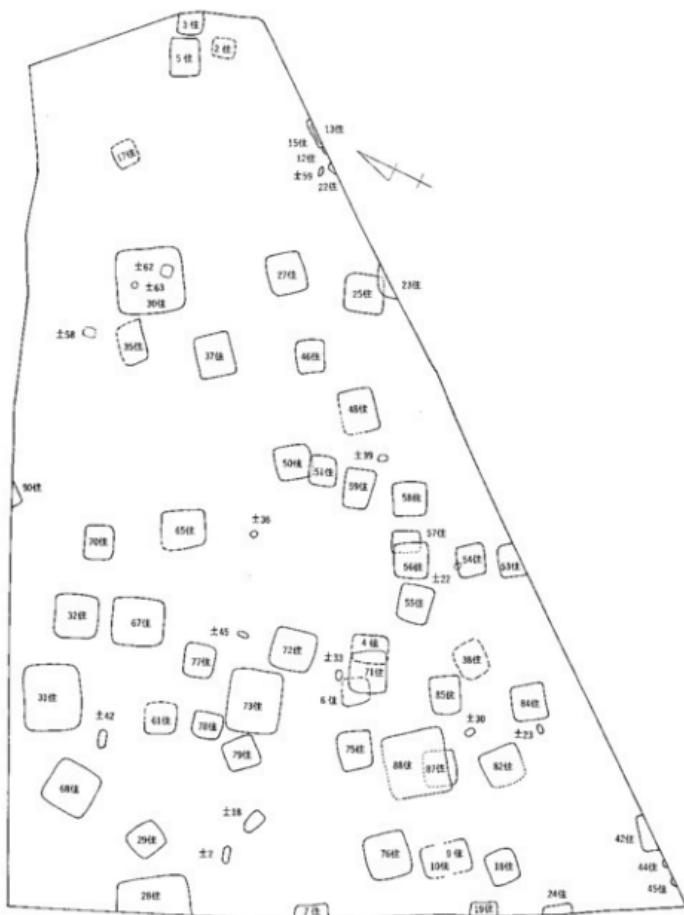
16～20は竹ノ下式土器で計36点出土した。16、17は頸部破片で、口縁部文様帯を区画する沈線が認められる。21～26は阿玉台式土器で計29点出土した。23は隆帶に沿って一列の角押文を施すもので、25も同様の施文を施した胸部破片である。阿玉台Ia～Ib式に比定される。27～30は加曾利E式土器で計65点出土した。27～29は椭円形L西文や胸部磨消繩文帯が残るもので、加曾利E III式。30は微隆起による文様構成をとるもので加曾利E IV式である。

31～33は後期初頭に属し8点出土した。31は脣消繩文を有し、称名寺式。32、33は壺之内1式に比定されるもので、無文地に沈線で文様を描き、口縁部に刺突列を廻らす。

第19図1～6は石鎚で、1は錐形鎚、2は長脚鎚、3～5はノッチを有するもので、6は三角鎚である。石材は1が珪質頁岩、2が粘板岩、4が黒曜石で、3・5～6はチャートである。

第19図7、8は土器片鍤で、打ち欠き整形後長軸中央に索溝を有する。9、10は有孔土器片円盤で、穿孔は裏面側より行い、表面側は孔辺の修整研磨のみ。11是有孔球状土器製品で、整形後直交するように二孔穿ち、表面の装飾は単節繩文RLを施す。焼成はやや脆い。 (仲野)

3. 古墳時代前期



古墳時代前期の概要

本時期に属する住居址は61軒を数え、数量的に見て他時期を凌駕する。分布としては、中央部や東半部にやや疎な区域があるものの、ほぼ調査区内に万遍なく検出されている。規模的に大・中・小型が存在し、大型は30号住と88号住の2軒で、中型のものは調査区北辺や西辺に集中し、小型住居では切り合いが目立つ。掘り込みは小型→大型というように、規模に比例して深くなる傾向が指摘される。土塙は14基が検出され、散漫ながらも調査区西側に多く分布する。

a. 住居址

第2号住居址（第21図）

本住居址は調査区東側に位置し、第60号土塙を貼床する。付近に第1号・第5号住居址が所在する。掘り込みが浅かったために表土剥ぎの段階で壁が消失し、貼床のみの残存である。残存部規模は $400 \times 340\text{cm}$ を測り、炉址を中心によく盛り上がり、あまり踏み固まっていない。柱穴は検出されなかった。炉址の規模は $87 \times 45\text{cm}$ を測り、楕円形を呈する地床炉で、炉底はあまり焼けていない。炉址中より五領式期の土器片を検出する。

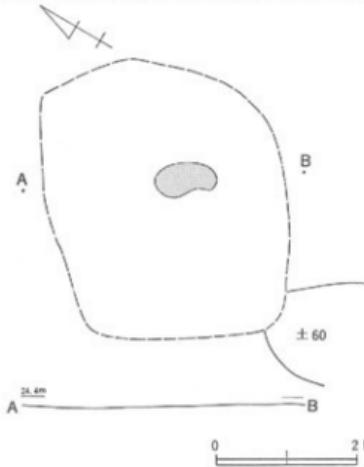
第3号住居址（第22図）

本住居址は調査区東端に位置し、他遺構との重複はない。第5号住居址と隣接する。規模は $320 \times 292\text{cm}$ を測り、長軸方向を北西—南東に持つ方形に近い隅丸長方形を呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、壁高は 48cm を測る。床面は貼床で、壁際を除いて堅緻である。柱穴は3本検出され、中央のP₁が主柱穴と思われる。P₂は北辺に位置し、規模は $53 \times 42\text{cm}$ 、深さ 15cm を測り、廃屋時以前に埋められていた古期の貯蔵穴である。P₃は南辺に位置し、規模は 73×53

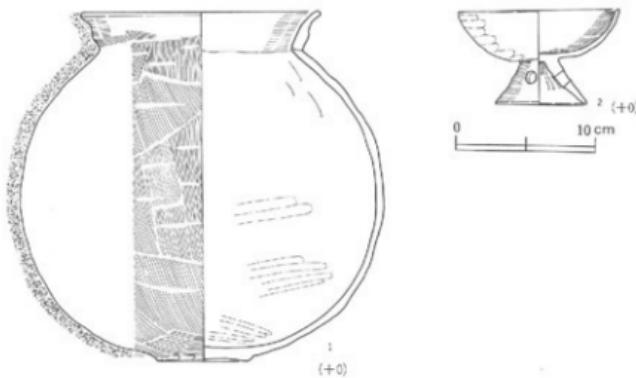
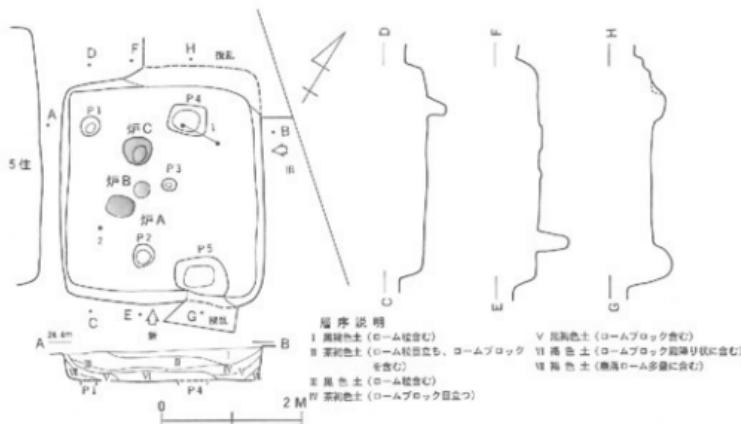
cm深さ 30cm を測る新期の貯蔵穴。炉址は3基検出され、A→B→Cの順で新しくなる。Cには竪穴炉、他は地床炉でいずれも炉底は良く焼けている。なお、本址は埋め戻されていた。

出土遺物（第22図）

1は壺形土器で、口縁 $\frac{1}{2}$ 周、胴部 $\frac{1}{2}$ 残存。口径 17.0cm 、最大径 25.9cm 、底径 6.4cm 、器高 24.8cm を測る。最大径を胴中位に有し、口縁は外稜を有して立ち上がる。胴部外面はハケナデ調整。2は小形高環形土器で、环部 $\frac{1}{2}$ 脚部残存。口径 11.4cm 、底径 6.4cm 、器高は 6.8cm を測る。环部に外稜を有さず、底部は短く開き、透し穴を3孔穿つ。底部外面はヘラケズリ→ヘラナデ、内面は密なヘラミガキ。



第21図 第2号住居址実測図



第22図 第3号住居址実測図

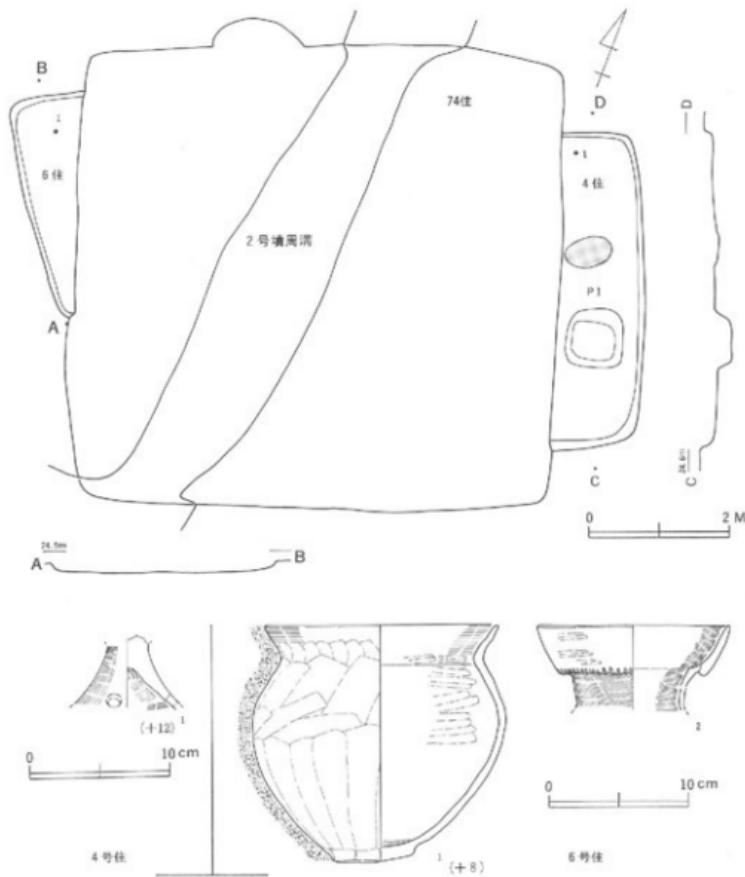
脚部外面はヘラケズリ後継方向の密なヘラミガキ、内面はヘラナデを施す。

第4号住居址（第23図）

本住居址は調査区中央西寄りに位置し、第71号・74号住居址に切られる。規模は一辺453cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は21cmを測る。床面は貼床で堅緻である。ピットは1本検出され、規模は一辺80cm、深さ24cmを測る貯蔵穴。炉址は東辺寄りで規模は67×44cmを測り、地床炉に近い竪穴炉で楕円形を呈し、炉底はよく焼けている。

出土遺物（第23図）

1は器台形土器で、器受部と据部を欠く。現存高5.0cmを測る。据部透孔は3孔と思われる。



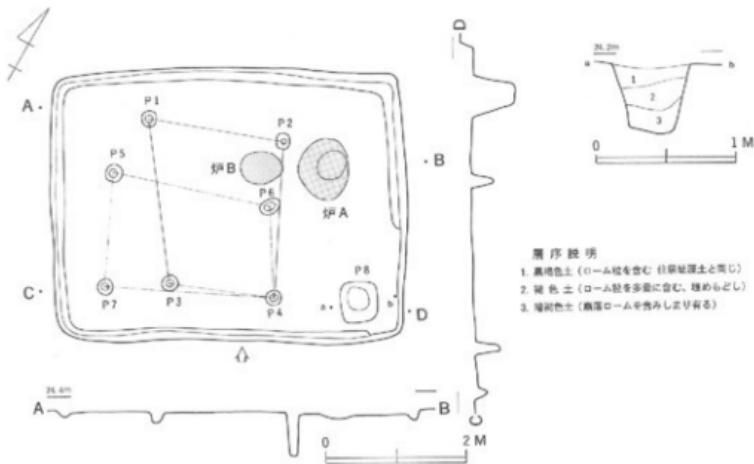
第23図 第4号・6号住居址実測図

第6号住居址（第23図）

本住居址は調査区中央西寄りに位置し、第71号・74号住居址に切られる。規模は一辺320cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は13cmを測る。床面は貼床で軟弱である。残存部からは柱穴・貯蔵穴・炉址といった内部施設は検出されなかった。

出土遺物（第23図）

1は壺形土器で口縁を $\frac{1}{4}$ 周欠くのみ。口径16.4cm、最大径17.7cm、底径5.7cm、器高16.7cmを測る。最大径を胴中位に有し、口縁は外反する。口縁外面はヨコナデ、胴外面はヘラケズリ→



第24図 第5号住居址実測図

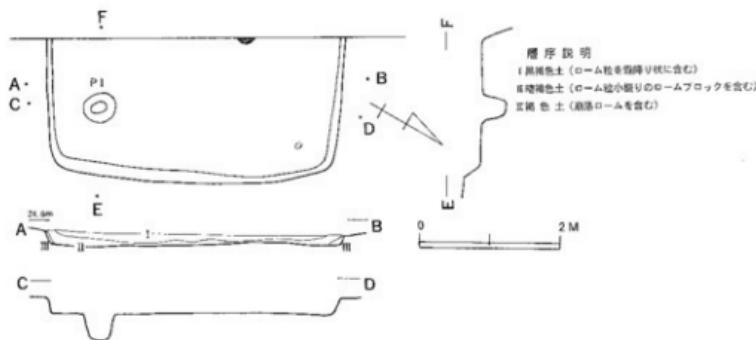
ヘラナデ、口縁内面はハケナデ、胴上半内面はヘラナデ、下半は皮によるナデつけを施す。2は壺形土器で、頸部より上の $\frac{1}{2}$ が残存。口径13.6cm、現存高5.8cmを測る。口縁は貼り付による複合口縁を呈し、下端に木端によるキザミを施す。口縁外表面はヘラナデ、頸部はハケナデ、口縁内面は密なヘラミガキ、頸部内面はハケナデ→ヘラミガキを施す。全体に風化が目立つ。

第5号住居址（第24図）

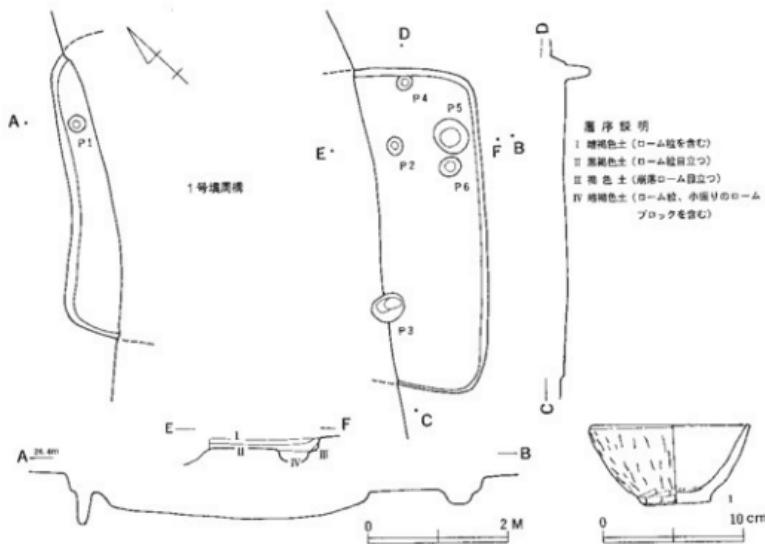
本住居址は調査区東端に位置し、他遺構との重複はない。第3号住居址と隣接する。規模は505×390cmを測り、長軸方向を東北東—西南西に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁は残存部では垂直に立ち上がり、壁高20cmを測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。柱穴は7本検出され、いずれもが主柱穴で、建て替えによるもので、P₁を共有し、P₂～P₇は貼床下より検出された古期の主柱穴である。P₁は南東コーナーに位置し、規模は58×53cm、深さ47cmを測り、貯蔵穴であり、廐屋前に埋められていた。壁溝は南東コーナーを除いて全周する。炉址は2基検出され、炉A88×72cm、炉B60×46cmを測り、炉Aが新期で竪穴炉、炉Bは地床炉であり、炉Bの炉底は良く焼けている。炉Aはあまり焼けていない。

第7号住居址（第25図）

本住居址は調査区西端に位置し、半分が研究棟建設により削平されている。他遺構との重複はない。規模は一辺425cmを測る方形もしくは長方形プランと思われる。壁は垂直に立ち上がり、壁高は24cmを測る。床面は貼床で、中央部が堅緻である。柱穴は1本検出された。壁溝は廻らせていない。炉址は地床炉で炉底はあまり焼けていなかった。



第25図 第7号住居址実測図



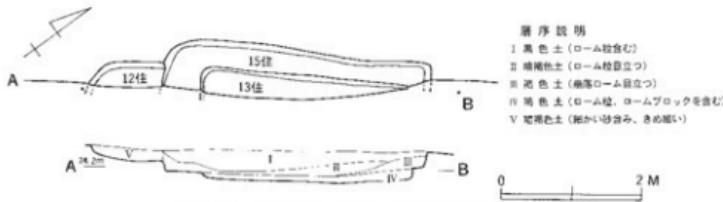
第26図 第9号・第10号住居址実測図

第9号・10号住居址（第26図）

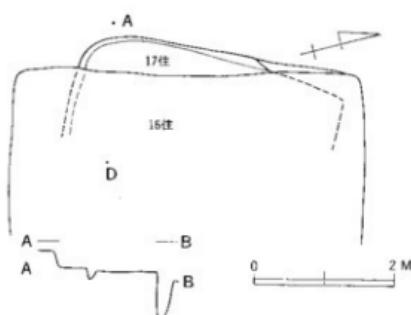
両住居址とも調査区西側に位置し、第1号填周溝に切られる。9号の壁は垂直に立ち上がり、床面は貼床で中央は堅壁。10号住は壁の立ち上がりはゆるやかで、床面は貼床で軟弱。

出土遺物（第26図）

1は鉢形土器で、口縁を $\frac{1}{4}$ 欠く。口径11.5cm、底径4.9cm、器高5.8cmを測る。器外面は亀裂



第27図 第12号・13号・15号住居址実測図



第28図 第17号住居址実測図

目立ち、体部はヘラナデを施し、底部付近はヘラを用いたオサエ。内面はヘラナデが見られ、体部下半は縦位のミガキに近いヘラナデを施す。

第12・13・15号住居址（第27図）

住居址群は調査区南側に位置し、大半を工場建設により削平されている。各々の新旧関係は12号→13号→15号の順で新しくなり、15号は12号を貼床する。ともに壁は垂直に立ち上がり、壁高は12号16cm、13号42cm、15号36cmを測る。床面は

15号を除いて直床で軟弱であり、15号は重複部分のみ貼床で平粗かつ良く踏みしまっている。3軒とも柱穴・貯蔵穴・炉址といった内部施設は検出されなかった。覆土は自然堆積である。

第17号住居址（第28図）

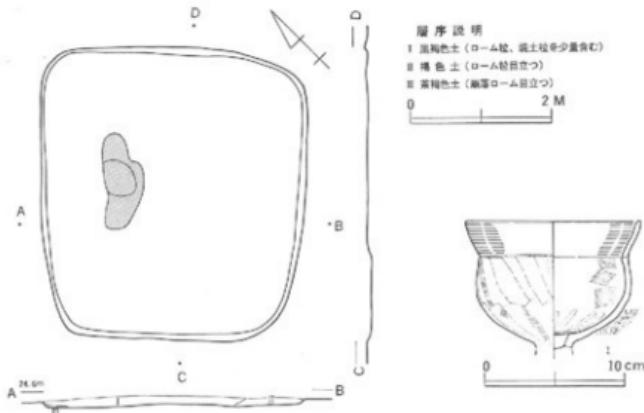
本住居址は調査区東側に位置し、大半を第16号住居址に切られている。壁は垂直に立ち上がり、壁高は21cmを測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。残存部からは柱穴・貯蔵穴・炉址といった内部施設は検出されなかった。覆土は自然堆積である。

第18号住居址（第29図）

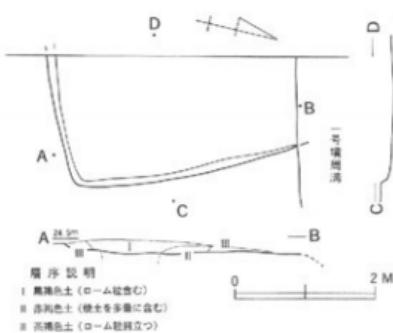
本住居址は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。規模は417×380cmを測り、長軸方向を北東-南西に持つ橢円長方形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は5cmを測る。床面は貼床で、炉址の周囲2m程が堅緻であり、その他では軟弱である。柱穴・壁溝は検出されなかった。炉址は中央北辺寄りに位置し、58×47cmを測る地床炉で、炉底は良く焼けている。炉址周囲では擾乱著しく、プランはつまびらかではない。

出土遺物（第29図）

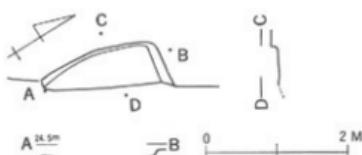
1は小形台付蝶形土器で、全体の1/2残存。口径12.5cm、脚径2.6cm、現存高6.2cmを測る。頸部のくびれは弱く、口縁は外反し、底部内面に臍状突起が見られる。胴部外面はハケナデ→



第29図 第18号住居址実測図



第30図 第19号住居址実測図



第31図 第22号住居址実測図

ヘラナデ、内面上半はハケナデ、下半はヘラナデを施す。内面に「おこげ」付着。

第19号住居址（第30図）

本住居址は調査区西端に位置し、北側を第1号墳周溝、西側を研究棟によって削平されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は12cmを測る。床面は貼床で、凹凸が目立ち軟弱である。本址は焼失家屋であった可能性があり、II層には多量の焼土を含み、一部床面上に及ぶ。

第22号住居址（第31図）

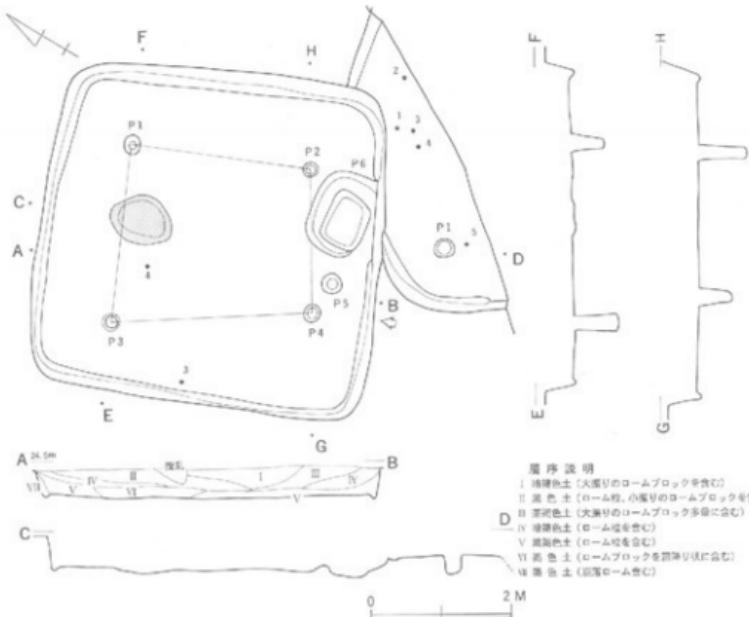
本住居址は調査区南側に位置し、大半を工場建設により削平されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cmを測る。床面は直床で、全体に軟弱である。残存部からは柱穴・貯蔵穴・壁溝・炉址といった内部施設は検出されなかった。覆土はローム粒を含む暗褐色土のみで、自然埋没と考えられる。

第23号住居址（第32図）

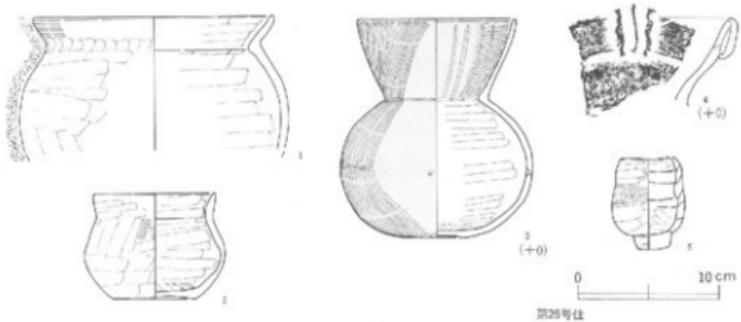
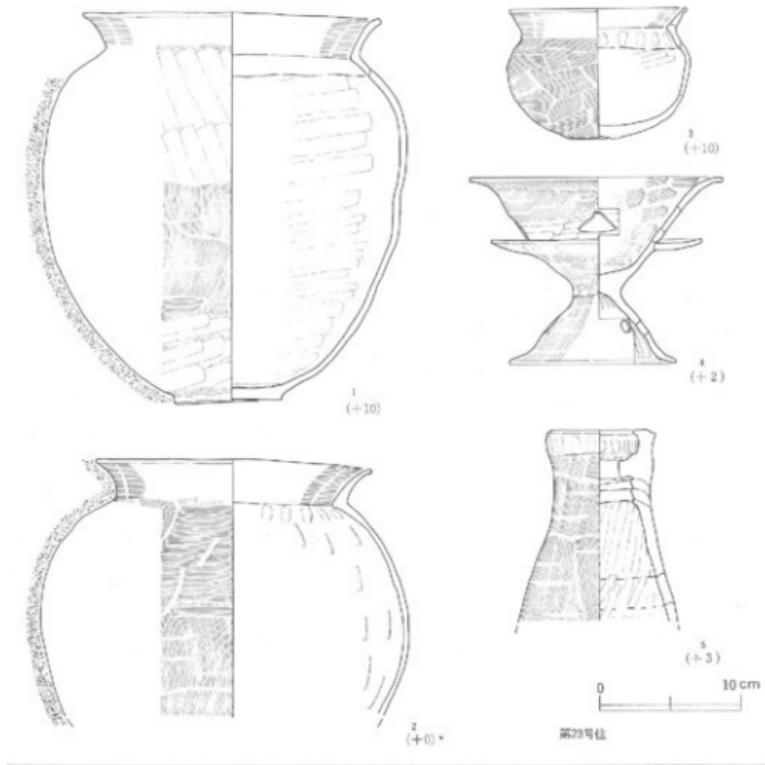
本住居址は調査区南側に位置し、大半を工場建設により削平されている。第25号住居址を貼床する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は26cmを測る。床面は貼床で軟弱である。柱穴は1本検出でき、主柱穴である。壁溝は西辺の一部に廻らす。残存部からは炉址等の検出はない。

出土遺物（第33図）

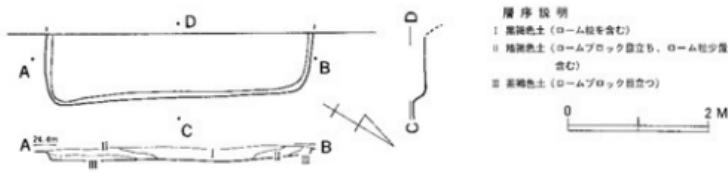
1～3は壺形土器で、1は胸部の一部を欠く。口径21.2cm、最大径26.1cm、底径7.5cm、器高27.6cmを測り、長胴気味である。2は口縁 $\frac{1}{5}$ と胴下半を欠く。口径19.3cm、最大径21.8cm。3は小形壺で口縁 $\frac{1}{2}$ と胴部 $\frac{1}{4}$ を欠く。口径12.6cm、最大径13.1cm、底径3.6cm、器高9.2cmを測る。4は装飾器台形土器で、裾部を $\frac{3}{4}$ と胴部を $\frac{1}{3}$ 欠く。口径18.0cm、裾径11.6cm、器高13.3cmを測る。器受部に衿を廻らし、三角形の透穴を4口穿ち、脚部に透穴を3口穿つ。外面の口縁上端はヘラナデ、器受部上半はていねいなヘラミガキ、大半と透穴周囲はヘラナデ、衿部はていねいなヘラナデ、脚部から裾部はヘラミガキ。器受部内面はていねいなヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ、裾部内面はミガキに近いヘラナデを施す。5は異形器台形土器で、脚部の $\frac{1}{3}$ と裾部を欠く。口径7.7cmを測る。器受部は内窪し、外面は指頭によるナデ、脚部はハケナデ、器受部内面は指頭によるナデとヘラナデ、脚部内面は輪積痕があり、ヘラナデを施す。



第32図 第23号・第25号住居址実測図(1)



第33図 第23号・第25号住居址実測図(2)



第34図 第24号住居址実測図

第25号住居址（第32図）

本住居址は調査区南側に位置し、上部を第23号住居址が貼床する。規模は488×485cmを測り、長軸方向を北々西～南々東に持つ隅丸方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高52cmを測る。床面は貼床で、中央部は堅緻である。南辺の中央下の床面上に、周堤を廻らせている。柱穴は5本検出され、P₁～P₄が主柱穴で、P₅は深さ18cmを測る梯子穴、P₆は周堤内側に位置し、規模は78×60cm、深さ12cmを測る貯藏穴。壁溝は周堤部分を除いて全周する。炉址はP₁とP₂の中間に位置し、規模は92×72cmを測る地床炉に近い竪穴炉で、炉底は焼けている。

出土遺物（第33図）

1は壺形土器で、口縁と胴部の1/2残存。口径16.8cm、最大径18.7cm。2は小形壺で口縁の大半と胴部の1/2欠損。口径8.8cm、最大径10.1cm、底径6.0cm、器高7.6cm。3は壺形土器で口縁の1/2欠損。口径11.0cm、最大径13.3cm、底径3.1cm、器高15.5cm。胴中位に焼成後穿孔があり、器外面と口縁内面は赤彩。4は口縁に棒状浮文を3条貼付する壺形土器。5は鉢形を呈するミニチュア土器で、口縁の1/2欠損。口径4.0cm、最大径5.3cm、器高6.6cmを測る。

第24号住居址（第34図）

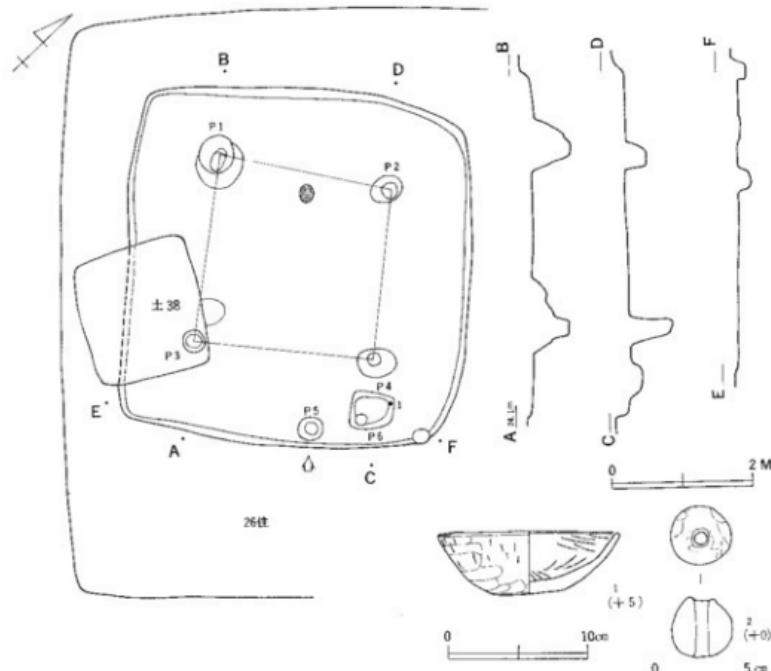
本住居址は調査区西端に位置し、大半が研究棟建設により削平されている。規模は一辺380cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、壁高14cmを測る。床面は直床で、やや凹凸を有し、軟弱である。残存部からは柱穴・貯藏穴・炉址といった内部施設は検出されなかった。覆土は3層に分層でき、II・III層はロームブロックの混入が目立つもので、自然堆積でない可能性がある。

第27号住居址（第35図）

本住居址は調査区東側に位置し、第26号住居址が完全に上部を貼床し、第38号土塙に切られる。規模は490×507cmを測り、長軸方向を北々東～南々西に持つ隅丸方形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高16cmを測る。床面は直床で入口付近が堅緻である。柱穴は5本検出され、P₁～P₄は主柱穴、P₅は梯子穴。炉址は地床炉で、炉底はあまり焼けていない。

出土遺物（第35図）

1は鉢形土器で、口縁の1/2欠損。口径13.0cm、底径5.3cm、器高4.5cmを測る。体部内外面ともヘラケズリ→ヘラナデを施す。2は土玉で、径32mm、高さ32mm、孔径9mmを測る。精製品。



第35図 第27号住居址実測図

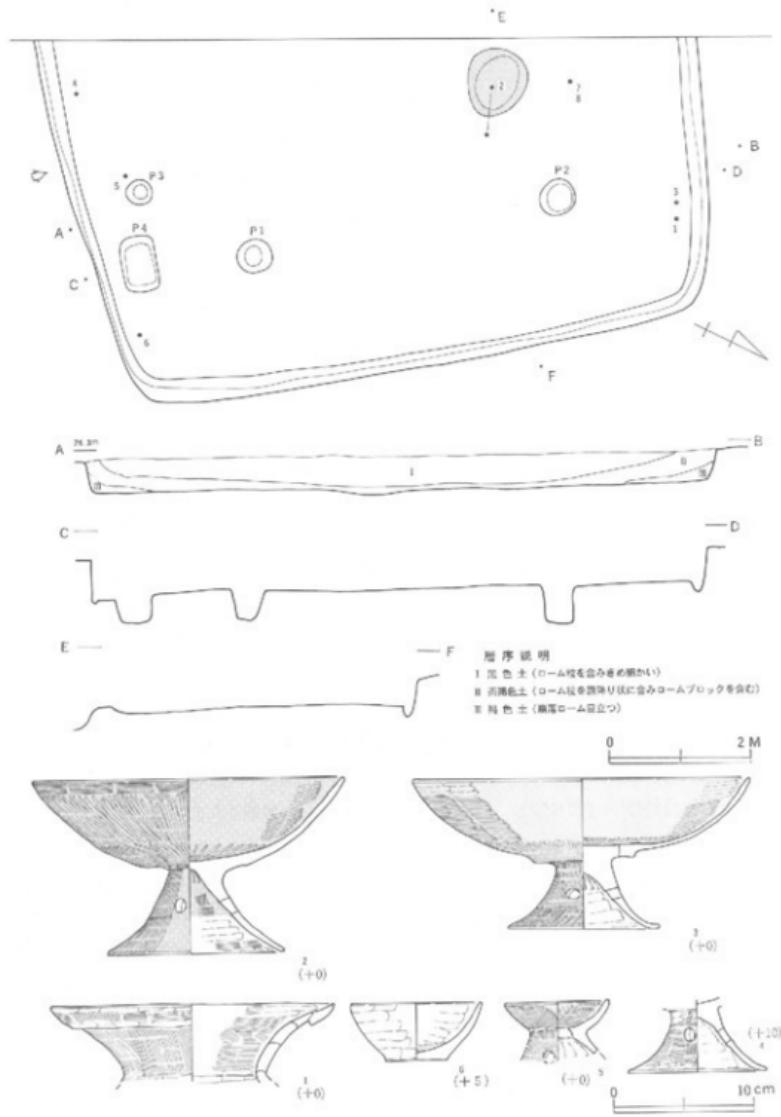
第28号住居址（第36図）

本住居址は調査区西側に位置し、駐車場建設により約半分が破壊されている。規模は830cmを長辺とし、長軸方向を北東—南西に持つ隅丸長方形を呈すると考えられる。壁は垂直に立ち上がり、壁高53cmを測る。床面は貼床で、炉の周囲は堅緻であり、全体に凹凸が目立つ。柱穴は3本検出され、位置的に見てP₁～P₃が柱穴で、P₄は梯子穴と思われる。P₁の規模は

80×53cm、深さ32cmを測り、貯蔵穴である。壁溝は残存部では全周する。炉址は北辺に位置し、規模は97×85cm、深さ4cmを測り、地床炉に近い竪穴炉であり焼けていない。

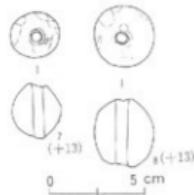
出土遺物（第36図）

1は壺形土器で、頸部以上の多く残存。口径20.2cm、現存高5.5cmを測る。口縁は貼付による複合口縁を呈する。2～3は高環形土器である。2は裾部を欠くのみ。口径21.9cm、裾径は



第36図 第28号住居址実測図(1)

环部外面はハケナデ→ヘラミガキを施し、环部内面はヘラミガキ。据部に透孔を3口穿ち、据部内面を除いて赤彩。3は全体の $\frac{1}{2}$ 残存。口径23.7cm、据径10.9cm、器高10.7cmを測る。环部は外縁を有し、内傾気味に立ちあがる。环部外面上半は横、下半は縦のヘラミガキ。外面及び环部内面は赤彩。4～5は器台形土器で、4は脚部のみ。裾径9.9cm、現在高4.1cmを測る。外面はハケナデ→ヘラナデで、透孔を3孔穿つ。5は器受部完存。口径8.5cm、現存高4.3cmを測り、透孔を3口穿ち外面と器受部内面は赤彩。6は鉢形土器で、口縁を $\frac{1}{4}$ 欠く。口縁9.2cm、底径4.2cm、器高4.2cmを測る。口縁は直立氣味。7～8は土玉である。7は径26mm、高さ29mm、孔径 8×7 mmを測る。8は径31mm、高さ36mm、孔径8mmを測る精製品である。

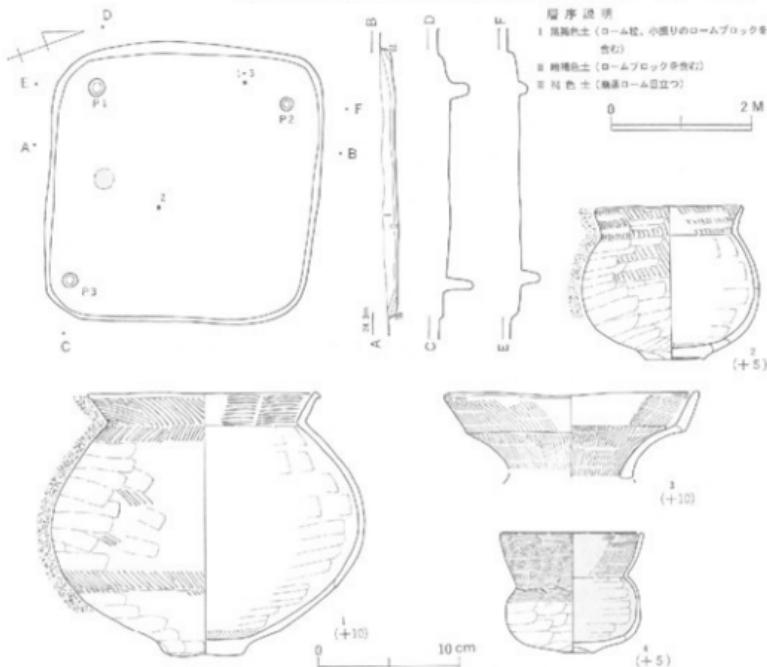


第37図

第28号住居址実測図(2)

第29号住居址(第38図)

本住居址は調査区西側に位置し、他構造との重複はない。付近には第28号住居址が所在する。規模は389×400cmを測り、長軸方向を北西～南東に持つ隅丸方形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高は10cmを測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。



第38図 第29号住居址実測図

柱穴は3本検出され、いずれも主柱穴である。壁溝は残されていない。炉址はP₁とP₂の中間に位置し、径30cmを測る。地床炉で炉底は良く焼けている。

出土遺物（第38図）

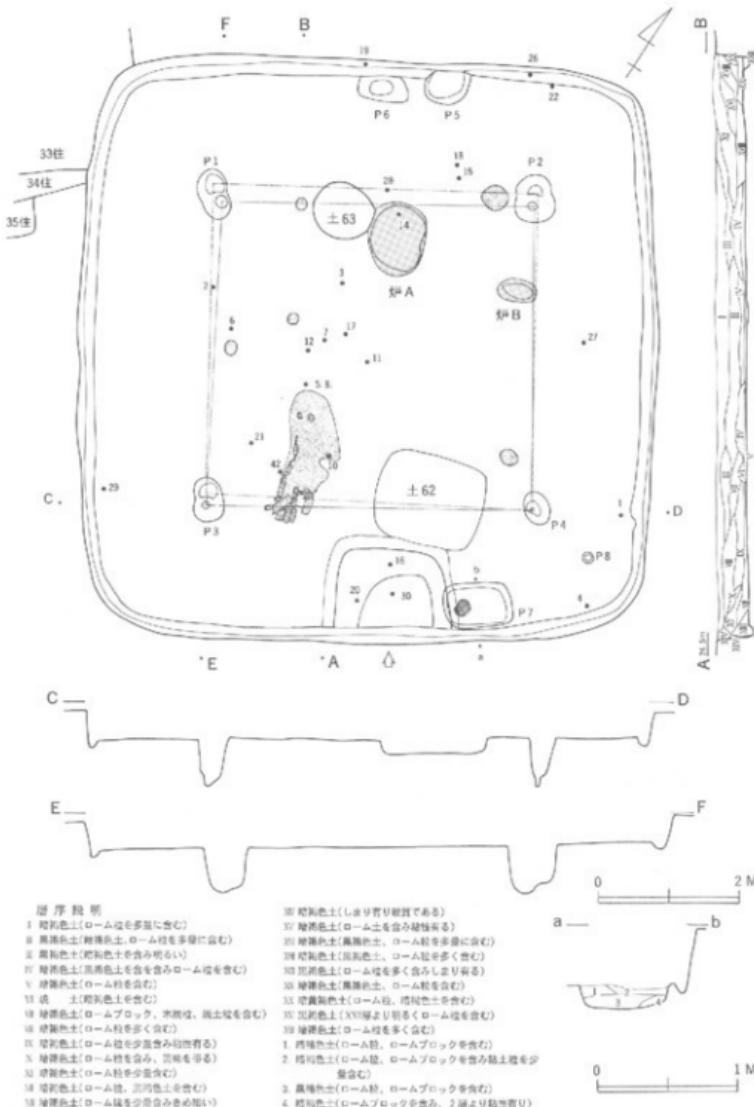
1～2は壺形土器である。1は口縁 $\frac{1}{2}$ 、胴部 $\frac{1}{4}$ 残存。口径16.3cm、最大径22.0cm、底径5.3cm、器高は18.7cmを測る。最大径を胴中位に有し、口縁は外反する。ササラ状工具によるナデ→ヘラナデ。2は口縁 $\frac{1}{2}$ 、胴部 $\frac{1}{4}$ 残存。口径10.5cm、最大径12.5cm、底径4.0cm、器高10.9cmを測る。最大径を胴中位に有し口縁は外傾する。胴部外面の調整は1と同様。3は壺形土器で、口縁 $\frac{1}{2}$ のみ。口径18.3cm、現存高6.1cmを測る。外縁を有し、口縁は外傾する。4は坩形土器。口唇を欠くのみ。口径11.1cm、最大径9.5cm、底径2.0cm、器高8.5cmを測る。底部は上位で最大径を胴中位に有し、口縁は外傾する。器外面の上半 $\frac{1}{2}$ 及び器内面に赤彩（焼成後）を施す。

第30号住居址（第39図）

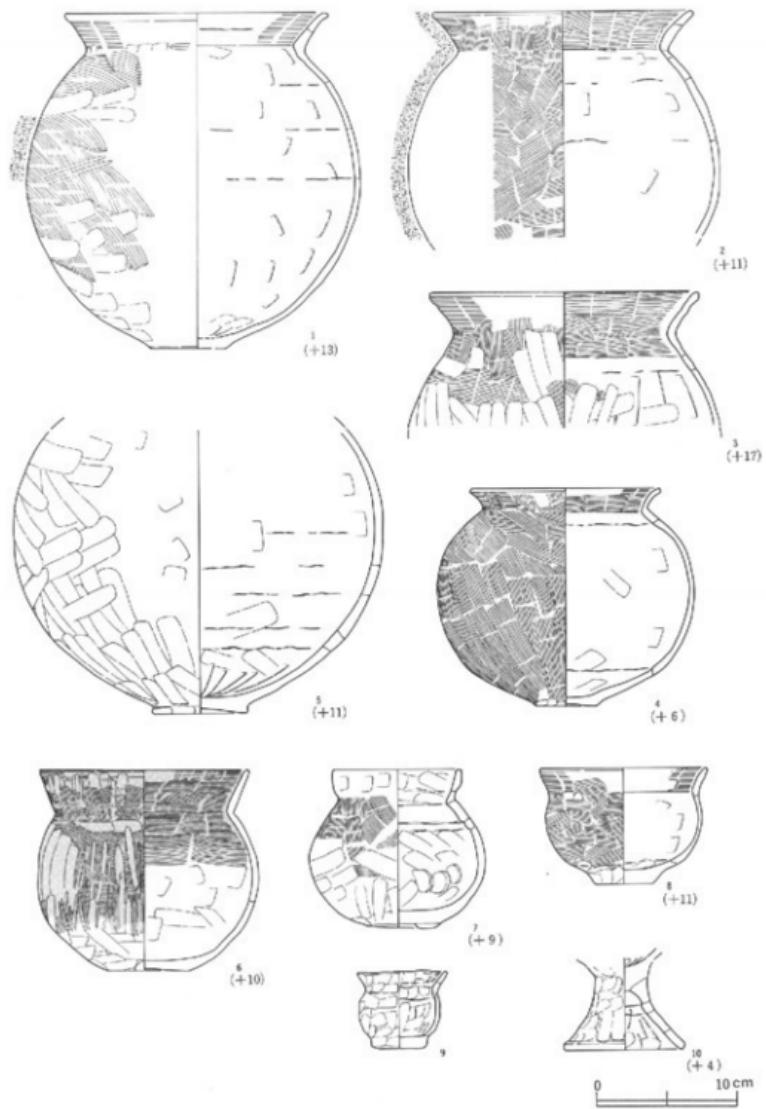
本住居址は調査区東側に位置し、第33・34号住居址と、第62・63号土塙に切られる。規模は820×828cmを測り、長軸方向を北々西—南々東に持つ隅丸形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高44cmを測る。床面は貼床で、壁際は厚く貼られ全体に堅緻で、新旧の2枚が認められる。柱穴は5本検出され、P₁を除くP₁～P₄が主柱穴であり、建て替えに伴う掘り直しが見られ、P₁を除いて新期の主柱ラインは南側へずれる。P₁、P₄は不明ながらも、貯蔵穴的な機能を考えられ、いずれも新期に伴ない、P₁は新期の貼床下での検出で、規模は97×63cm、深さ17cmを測る貯蔵穴で、底面に白粘土が遺棄されていた。壁溝は全周し、掘り方も整っている。炉址は2ヶ所検出され、もう1つは古期に伴う。炉AはP₁とP₂の中間に位置し、規模は108×85cmを測り、地床炉に近い竪穴炉で、炉底は良く焼けている。炉BはP₃とP₄の間に位置する地床炉で、炉底は良く焼けている。古期ではこの他に床面が赤化した部分が5ヶ所認められる。

出土遺物（第40・41図）

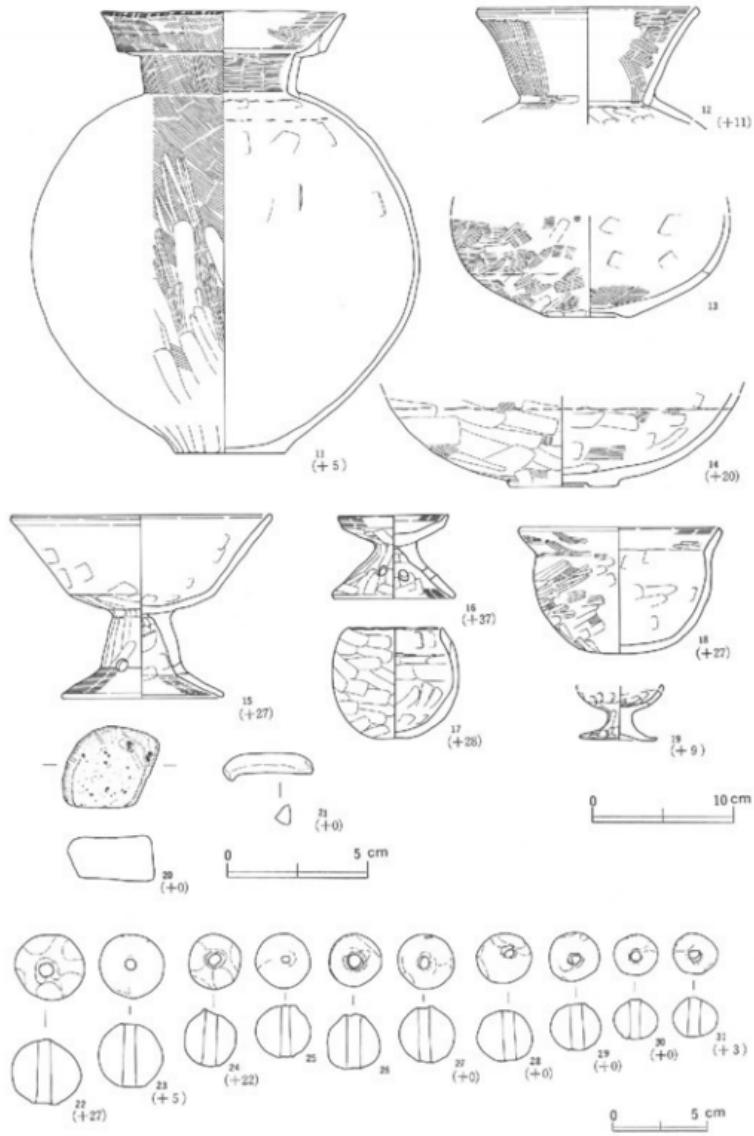
1～8は壺形土器である。1は胴部 $\frac{1}{3}$ と底部の大半を欠く。口径18.6cm、最大径23.7cm、底径5.0cm、器高23.8cmを測る。胴部外面はヘラナデ→ヘラミガキを施す。2は上半部の $\frac{1}{2}$ 残存。口径18.2cm、最大径21.9cm、現存高16.1cmを測る。最大径を胴中位に有し、口縁は外反する。3は上半部の $\frac{1}{3}$ を欠く。口径19.2cm、現存高9.7cmを測る。口縁外面はヨコナデ、胴上半はハケナデ→ヘラナデ、口縁内面はハケナデ。4は口縁の $\frac{1}{4}$ を欠く。口径13.6cm、最大径18.1cm、底径4.2cm、器高15.5cmを測る。底部は上底で胴部は球状に膨み、口縁は外反する。胴上半はヘラナデ→ハケナデ、胴下半はハケナデ。5は口縁部と胴部 $\frac{1}{4}$ 周を欠く。最大径26.4cm、底径6.6cm、現存高20.2cmを測る。底部外縁はせり出し上底で、胴部は球状に膨む。器内外面ともていねいなヘラナデ。6は完品。口径14.6cm、最大径15.6cm、底径6.0cm、器高14.2cmを測る。調整はていねいで、外面胴上半はハケナデ→ヘラナデ、大半はヘラケズリ→ヘラナデ、外面上半と内面口部に赤彩（スリップ）を施す。7は口縁 $\frac{1}{4}$ を欠く。口径9.1cm、最大径12.4



第39図 第30号住居址実測図(1)



第40図 第30号住居址実測図(2)



第41図 第30号住居址実測図(3)

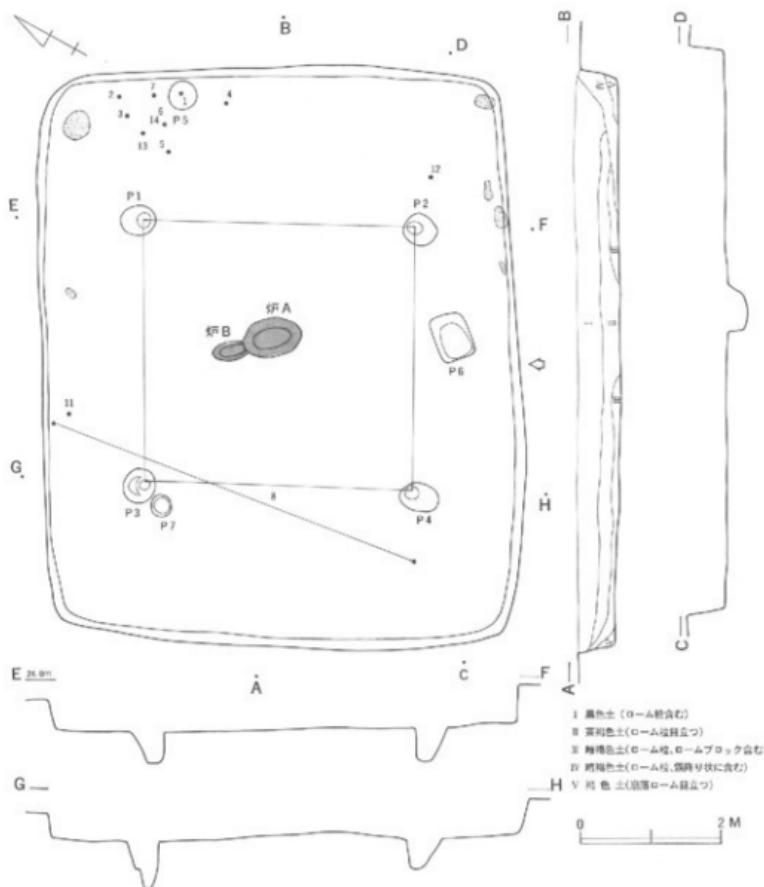
cm、底径5.0cm、器高11.3cmを測る。底部外周に粘土紐を貼付して上底とし、口縁は段を有して直立気味。8は全体の $\frac{1}{3}$ 周を欠く。口径11.8cm、底径4.0cm、器高8.3cmを測る。頸部の屈曲弱く口縁は外反する。胴外面はヘラナデ→ハケナデ。9は手捏ね土器で、口唇をわずかに欠く。口径6.3cm、最大径5.8cm、底径4.0cmを測る。10は高環形土器の脚部で、裾径8.6cm、現存高6.6cmを測る。11～14は壺形土器である。11は胴部を一部欠く。口径17.2cm、最大径27.4cm、底径7.5cm、器高31.5cmを測る。胴部は球状に膨み、頸部は直立し、口縁は段を有する。口唇部に櫛齒状工具によるキザミを施す。淡褐色に焼かれ、胎土は緻密。12は口縁のみ。口径15.8cm、現存高8.3cmを測る。13は胴下半のみ。底径5.6cm、現存高7.3cmを測る。外面はハケナデ→ヘラミガキ。14も胴下半のみ。底径7.7cm。現存高6.5cmを測る。貼付上底。15は高環形土器で、坏部 $\frac{1}{4}$ 、裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損。口径18.6cm、裾径11.4cm、器高13.0cmを測る。坏部は外稜を有する。16は器台形土器で、器受部 $\frac{1}{2}$ 欠損。口径7.9cm、裾径8.7cm、器高6.0cmを測る。17は楕形土器で、口縁の大半と胴部の $\frac{1}{2}$ を欠く。口径6.8cm、最大径9.1cm、底径2.6cmを測る。球形に近い形状。18は鉢形土器で、ほぼ完存。口径11.4cm、器高9.0cmを測る。頸部のくびれは弱く、口縁は外反する。19はミニチュア土器（高环）で、口唇部を欠く。裾径5.4cm、現存高3.6cmを測る。20は軽石製品である。21は土製品で、32×7mm、高さ5.5mmを測る。22～31は土玉である。22は径37mm、孔径7mm、高さ34mm。23は径34mm、孔径7mm、高さ34mm。24は径30mm、孔径7mm、高さ32mm。25は径29mm、高さ28mm。26は径28mm、孔径9mm、高さ29mm。27は径30mm、孔径6mm、高さ30mm。28は径30mm、孔径7mm、高さ27mm。29は径27mm、孔径6mm、高さ25mm。30は径23mm、孔径7mm、高さ22mm。31は径24×22mm、孔径7mm。

第31号住居址（第42図）

本住居址は調査区北西側に位置し、他造構との重複はない。規模は839×690cmを測り、長軸方向を北々西一南々東に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高52cmを測る。床面は貼床で、中央部と入口付近は堅緻である。柱穴は6本検出され、位置的・規模的に見てP₁～P₃が主柱穴で、P₄、P₅は補助柱穴と思われる。P₃の規模は69×50cm、深さは25cmの長方形を呈し、貯蔵穴である。壁溝は廻らせていない。炉址は中央に位置し、2基が重複している。ともに地床炉に近い壺穴炉で椭円形を呈し、炉B→炉Aの順で新しくなる。炉Bは灰を盛り出し、火床面が削り取られている。

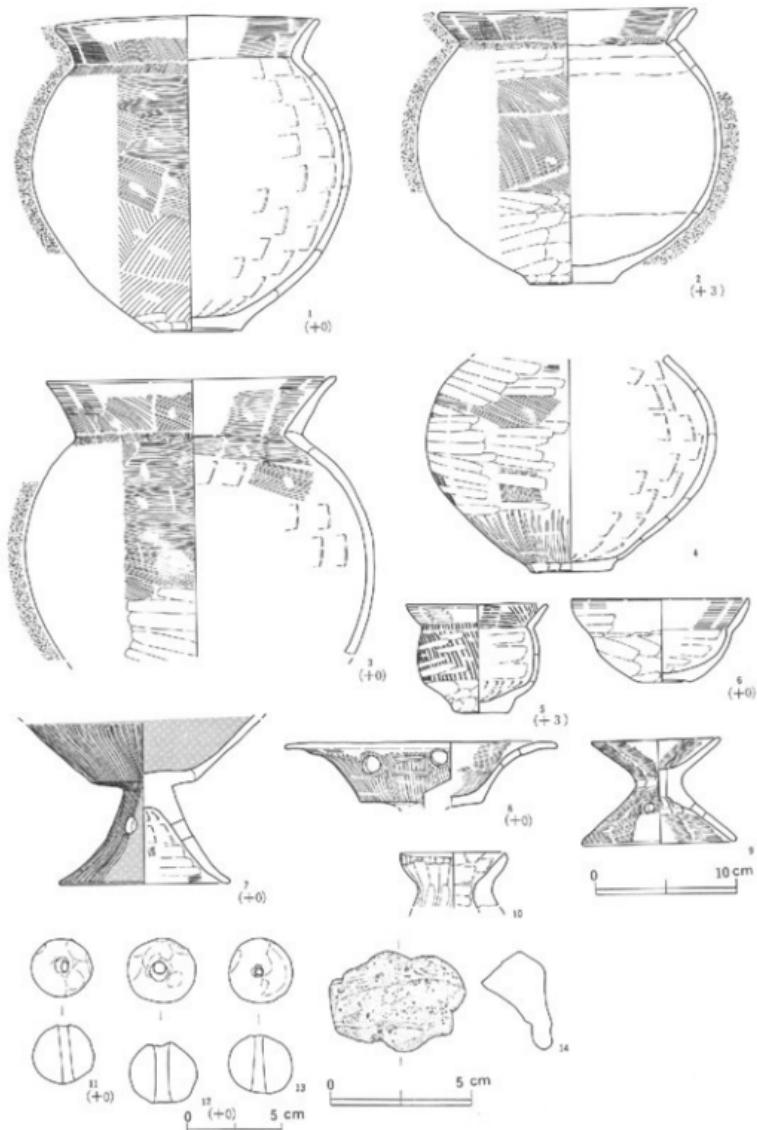
出土遺物（第43図）

1～3は壺形土器である。1は胴部を $\frac{1}{4}$ 欠くのみ。口径18.7cm、最大径22.5cm、底径6.1cm、器高22.5cmを測る。外面の調整はハケナデが主で、上半と下半で原体を変える。2は口縁・胴部の $\frac{1}{2}$ を欠く。口径18.2cm、最大径21.4cm、底径6.0cm、器高19.5cmを測る。3は口縁 $\frac{1}{2}$ ・胴部 $\frac{1}{2}$ 残存。最大径20.6cm、最大径24.8cm、現存高19.8cmを測る。外面全体が二次焼成を受ける。5～6は鉢形土器である。5はほぼ完存で口径10.1cm、底径3.9cm、器高7.8cmを測る。6は



第42図 第31号住居址実測図(1)

完存品で口径12.3cm、底径3.4cm、器高4.4cmを測る。7は高環形土器で、環部 $\frac{1}{2}$ 、裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損。環部は外稜を有し、脚部の透孔は3孔。外面と環部内面は赤彩。8は有透穴器台形土器で、器受部の $\frac{1}{2}$ 残存。口径19.3cm、現存高4.7cmを測る。9は器台形土器で、口縁 $\frac{1}{2}$ 周、裾部 $\frac{1}{2}$ 残存。口径9.0cm、裾径10.8cm、器高7.4cm。透孔は3孔で、精製品。10は異形器台形土器で、器受部 $\frac{1}{2}$ 残存。口径7.6cm、現存高3.9cm。11～13は土玉である。11は径33mm、孔径8mm、高さ31mm。12は径36mm、高さ32mm。13は径34mm、孔径5mm、高さ31mm。14は軽石製品。



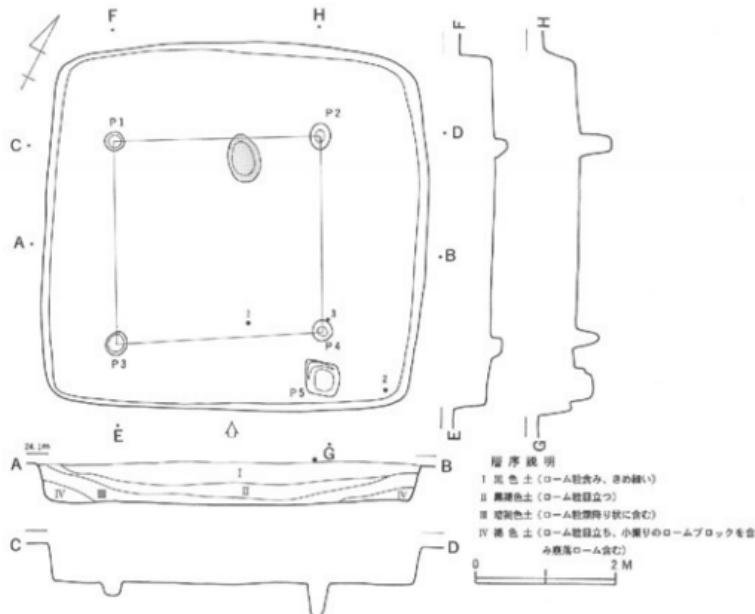
第43図 第31号住居址実測図(2)

第32号住居址（第44図）

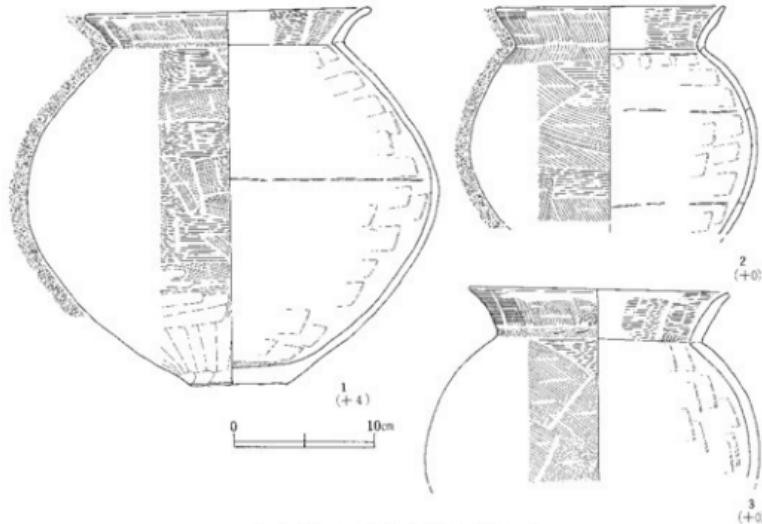
本住居址は調査区中央北寄りに位置し、他遺構との重複はない。南側に第67号住居址が所在する。規模は $546 \times 527\text{cm}$ を測り、長軸方向を西北西—東南東に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高52cmを測る。床は直床で全体に軟弱である。柱穴は4本検出され、P₁～P₄が位置的・規模的に見て主柱穴である。P₅は規模が $50 \times 47\text{cm}$ 、深さ23cmを測る貯蔵穴である。炉址はP₁とP₂の中間南寄りに位置し、規模は $70 \times 47\text{cm}$ を測り、地床炉に近い竪穴炉で、炉底は良く焼けている。床面近くで少量の焼土・炭が検出された。

出土遺物（第45図）

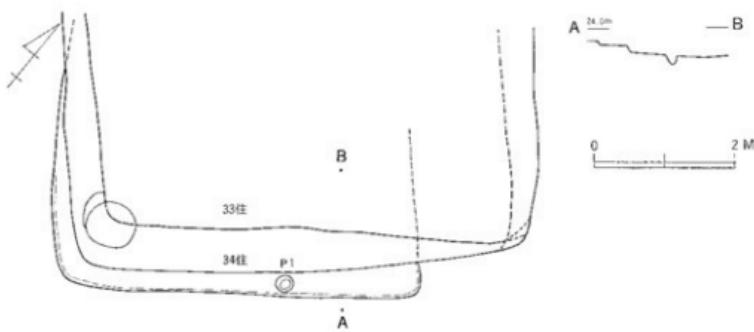
1～3は甕形土器である。1は口縁の $\frac{1}{2}$ 周を欠くのみ。口径20.2cm、最大径29.1cm、底径6.9cm、器高28.3cmを測る。器外面はハケナデ後、口縁はヨコナデ、胴下半はヘラナデ。器内面は口縁がハケナデ、胴以下がヘラナデ。2は胴下半を欠く。口径16.3cm、最大径20.5cmを測る。サララに近い工具を用い、器面調整は1に近似する。器内面に輪積痕や指頭痕等、成形痕が多く残す。3は胴下半と口縁の $\frac{1}{2}$ 周を欠く。推定口径18.5cm、推定最大径23.7cmを測る。器面調整は1、2同様であるが、口縁部のヨコナデが内面にも施される。



第44図 第32号住居址実測図(1)



第45図 第32号住居址実測図(2)



第46図 第35号住居址実測図

第35号住居址（第46図）

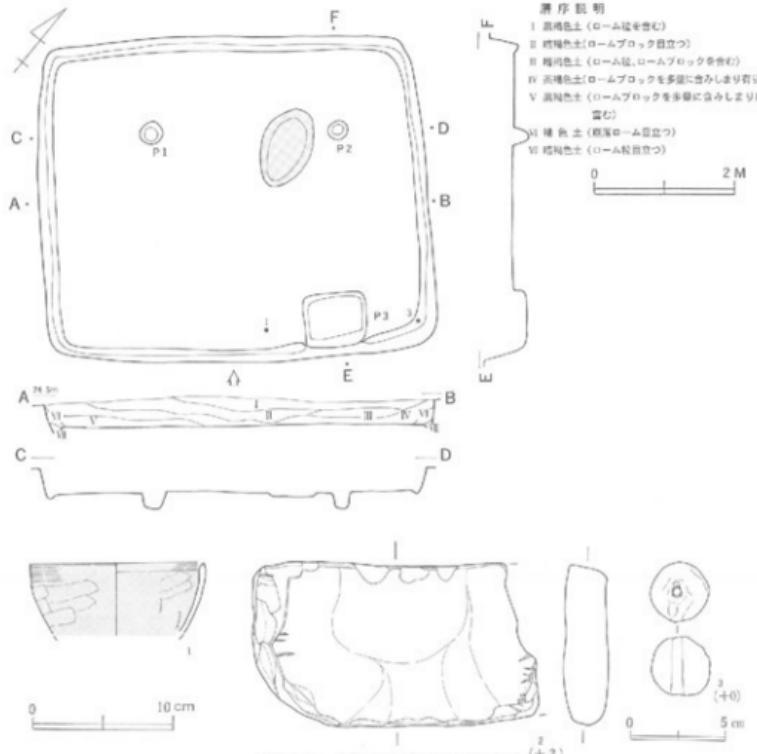
本住居址は調査区北側に位置し、大半を第33・34号住居址に切られる。規模は一辺528cmを測る隅丸長方形プランを呈すると思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高5cmを測る。床面は直床であるが、ほとんど壁際部分の残存のためか、あまり踏みしまってない。柱穴は1本検出され、深さ63cmを測る。残存部からは、壁溝・炉址といった内部施設の類は検出されなかった。遺物は土器小片数点が床面密着で検出されたのみである。

第37号住居址（第47図）

本住居址は調査区中央東寄りに位置し、他遺構との重複はない。北側に第30号住居址が所在する。規模は $560 \times 467\text{cm}$ を測り、長軸方向を北東—南西に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高37cmを測る。床面は貼床で中央部は非常に堅緻である。柱穴は2本検出され、いずれも主柱穴である。これらに対応する位置の床面が特に堅くなっている。柱をのせたと思われる。 P_1 は規模が $90 \times 78\text{cm}$ 、深さ22cmを測る貯蔵穴である。壁溝は貯蔵穴部分を除き、全周する。炉址は P_1 と P_2 を結んだ線上の、中央より P_1 寄りに位置する。規模は $115 \times 73\text{cm}$ を測り、地床炉に近い竪穴炉で、炉底は良く焼けている。なお、本居住址の覆土はVI層と最上層を除いて埋め戻しであり、極めて良くなっていた。

出土遺物（第47図）

1は鉢形土器で、I層中の出土。体部下半と口縁の $\frac{1}{3}$ 周を欠く。口径12.2cmを測る。口縁内

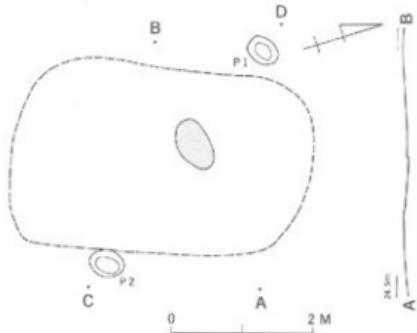


第47図 第37号住居址実測図

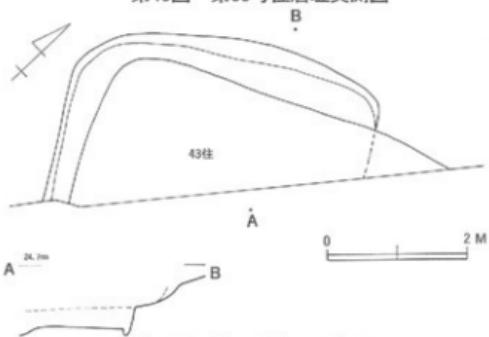
外面ともヨコナデ、体部外面はヘラケズリ→ヘラナデ、内面はヘラナデを施し、内外面とも赤彩される。2は砥石で、全長20.0cm、厚さ3.1cmを測る。使用面は中央が枕状にくぼみ、良く使い込まれている。周縁は打ち欠き痕が目立つ。砂岩を用いる。3は土玉で、径31mm、高さ31mm、孔径7mmを測る。やや穿孔後の孔辺調整が難である。

第38号住居址（第48図）

本住居址は調査区南側に位置し、他遺構との重複はない。北側に第85号住居址が隣接する。掘り込みが浅いため、表土剥ぎの段階で壁を消失しており、規模は不明である。貼床部分の範囲は426×272cmを測り、この部分に関しては非常に堅緻であった。柱穴は2本検出され、いずれも覆土が貼床部をわずかに覆っていたものと近似し、本址に伴うものと考えられる。壁溝は検出されず、本来的に廻らせていないかった可能性が高い。炉址は規模が74×44cmを測り、地床炉で炉底は良く焼けている。出土遺物は少量であるが、炉址中や貼床面の床面密着の状態で出土し、これをもって時期決定の根拠とした。



第48図 第38号住居址実測図



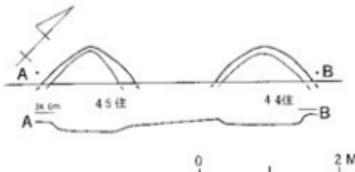
第49図 第42号住居址実測図

第42号住居址（第49図）

本住居址は調査区西側に位置し、大半を工場建設と第43号住居址に破壊される。付近に第44号住居址が位置する。規模は一辺440cmを測り、隅丸方形もしくは隅丸長方形プランを呈するとと思われる。壁は崩落が見られるものの、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高20cmを測る。床面は直床で、残存部分が壁際なためか軟弱である。壁溝は廻らせていない。他に柱穴・貯蔵穴・炉址といった内部施設の類は検出されなかった。出土遺物は覆土中より少量の土器片が検出されたのみである。

第44・45号住居址（第50図）

両住居址とも調査区西南端に位置し、そのほとんどを工場建設により破壊されている。第44号住居址の壁は垂直に立ち上がり、壁高16cmを測る。床面は直床である。第45号住居址の壁は垂直に立ち上がり、壁高22cmを測る。床面は直床である。ともに残存部分からは、柱穴・壁溝



第50図 第44号・45号住居址実測図

貯蔵穴・炉址といった、内部施設は検出されなかった。

第46号住居址（第51図）

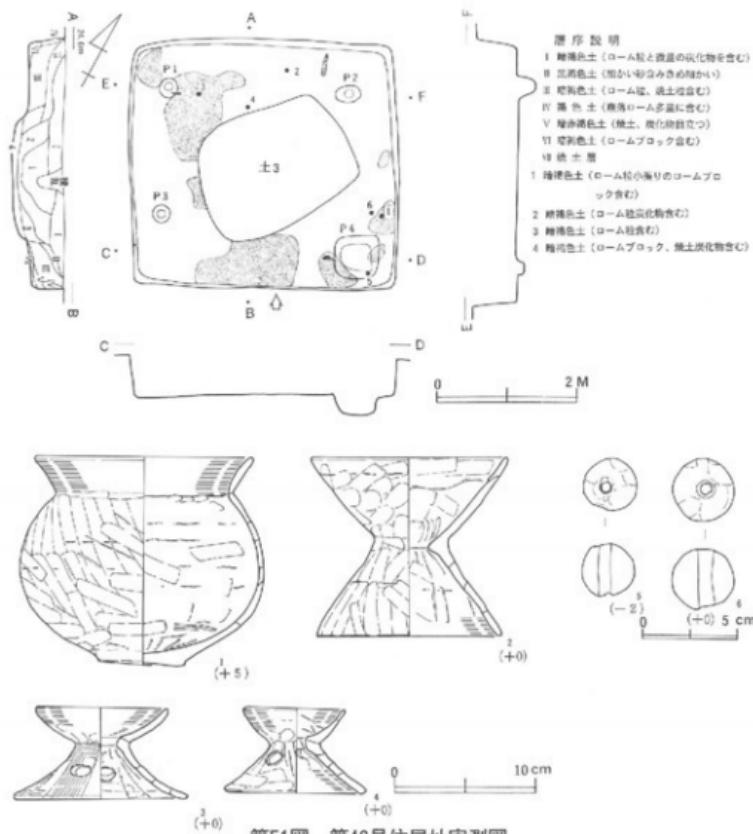
本住居址は調査区中央東寄りに位置し、中央部を第3号土塁が破壊する。付近には第48号住居址が所在する。規模は $390 \times 356\text{cm}$ を測り、長軸方向を東北東—西南西に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高65cmを測る。床面は貼床で、壁際を除いて堅緻である。柱穴は3本検出され、位置的・規模的に見てそのいずれもが主柱穴である。 P_1 は南西コーナーに位置し規模は $62 \times 60\text{cm}$ 、深さ30cmを測る貯蔵穴である。壁溝は廻らせていない。炉址は第3号土塁に破壊されて不明である。本址は焼失家屋で、 P_1 を中心とする北西と南辺を中心に、床面に接して焼土・炭の堆積を見る。焼土は柱穴内にも流れ込み、上屋解体後の火災で、覆土は自然堆積である。遺物は床面放置の遺棄の状態として、3、4の器台形土器が正位の状態で出土し、火災前の床面露出時の廻棄行為として、2の器台形土器を投棄する。1の壺形土器は焼土上に密着していた点から火災直後の廻棄で、6の土玉はそれ以後の廻棄か流入である。

出土遺物（第51図）

1は壺形土器で、胴部をわずかに欠くのみ。口径15.4cm、最大径17.2cm、底径6.2cm、器高14.9cmを測る。最大径を胴中位に有し、口縁は外反する。口縁外側ともヨコナデ、胴外面はヘラケズリ→ヘラナデ、胴内面はヘラナデ。2～4は器台形土器である。2は器受部と脚部の $\frac{1}{2}$ を欠く。口径13.8cm、裾径12.9cm、器高12.8cm。ヘラナデを基調に、器受部外面は指頭によるナデを施す。3は完存品。口径10.4cm、裾径12.4cm、器高6.6cm。脚部の透孔は3孔で、脚部外面はヘラナデ→ヘラミガキ。4も完存品。口径7.2cm、裾径10cm、器高6.1cm。裾部の透孔は3孔。5、6は土玉で、5は径28mm、高さ27mm、孔径7mm。6は径33mm、高さ32mm、孔径9mm。

第48号住居址（第52図）

本住居址は調査区中央南寄りに位置し、その半分を第47号住居址に破壊されている。規模は $488 \times 547\text{cm}$ を測り、長軸方向を北東—南西に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高38cmを測る。床面はロームブロックを敷き詰めた貼床で、全体に軟弱である。柱穴は4本検出され、位置的・規模的に見てそのいずれもが主柱穴である。これらのうち、 P_1 と P_2 は第47号住居址の貼床剥取作業中に検出された。 P_1 の規模は $67 \times 57\text{cm}$ 、深さ53cmを測り、



第51図 第46号住居址実測図

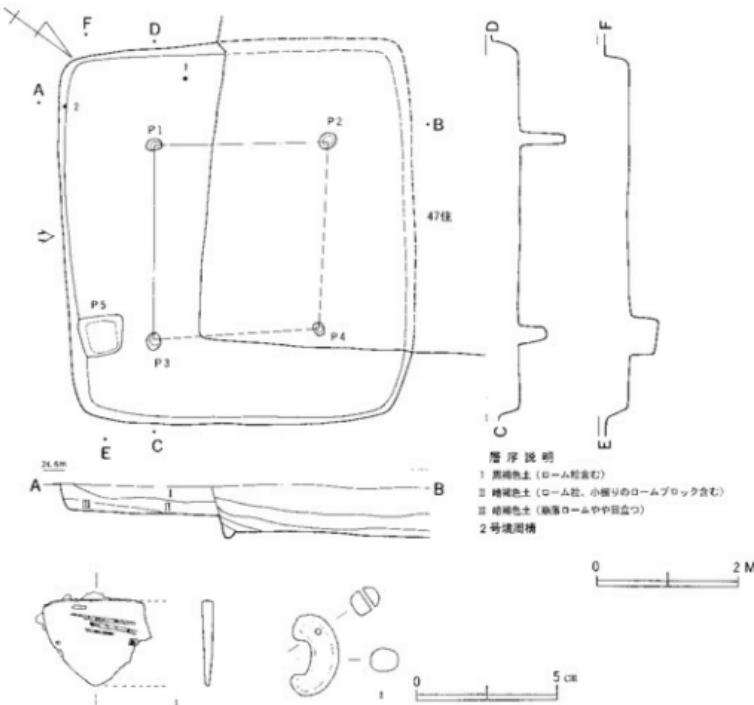
貯藏穴である。壁溝は廻らせていない。炉址は第47号住居址に破壊されて不明である。覆土は自然堆積で3層に分層でき、II層中より第52図2の勾玉が出土した。

出土遺物（第52図）

1は刀子である。切先部分の残存で長さ32mm、幅36mm、厚さ3mmを測る。鍛として浮き上がった個所に木質部の残影が見られる。2は勾玉で完存品。長さ29mm、幅10mm、厚さ8mm、孔2mmを測る。穿孔は管状錐による一方向からで、孔辺の修整研磨はない。全体に美麗に研磨されている。石材は碧玉製である。

第50号住居址（第53図）

本住居址は調査区中央南寄りに位置し、第51号住居址に切られる。付近に第59号住居址が所



在する。規模は $446 \times 414\text{cm}$ を測り、長軸方向を北々西—南々東に持つ隅丸方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高32cmを測る。床面は中央部がロームを掘り残した直床で、周辺は貼床となっており、中央部が堅壁である。柱穴は1本検出され、主柱穴と思われる。P₁は規模が $50 \times 47\text{cm}$ 、深さ23cmを測る貯蔵穴である。壁溝は廻らせていない。炉址は中央北寄りに位置し、規模は $44 \times 37\text{cm}$ 、を測り、地床炉に近い竪穴炉で、炉底は良く焼けている。覆土は自然堆積で、土器類の廃棄は廃屋後の間もない時点でのものと、埋没がかなり進んだ時点のものとに分かれる。本址は火災住居の可能性があり、焼土の分布が認められる。

出土遺物（第54図）

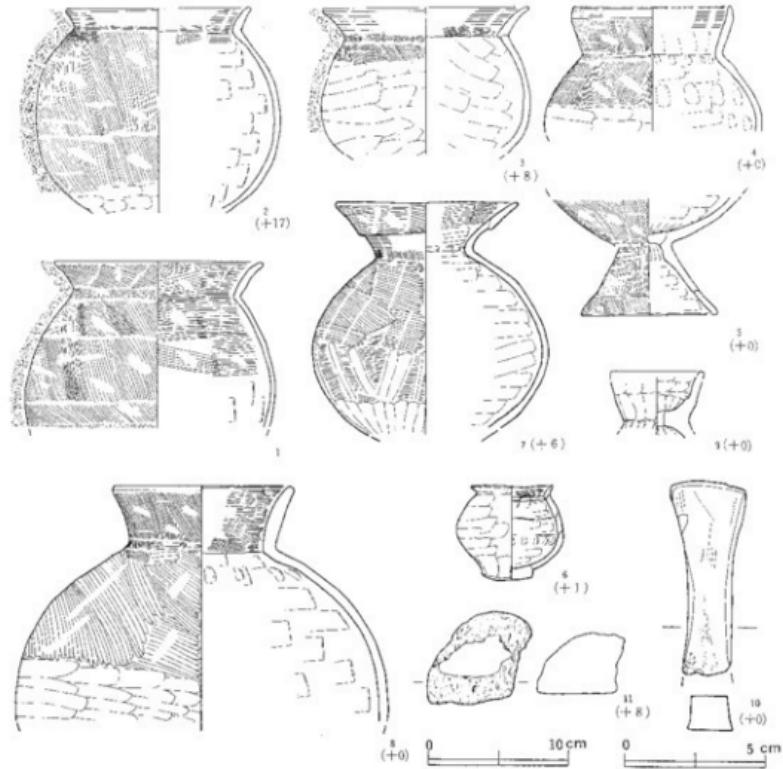
1～5は壺形土器である。1は胴部以上の $\frac{1}{4}$ 残存。口径14.8cm、最大径17.9cm。最大径を胴中位に有し、口縁は外反する。器外面と内面の胴上半はハケナデ、内面胴中位はヘラナデ。2は胴部以上の $\frac{1}{2}$ 残存。口径13.2cm、最大径17.5cm。胴部は球状に膨み、口縁は短く外反する。



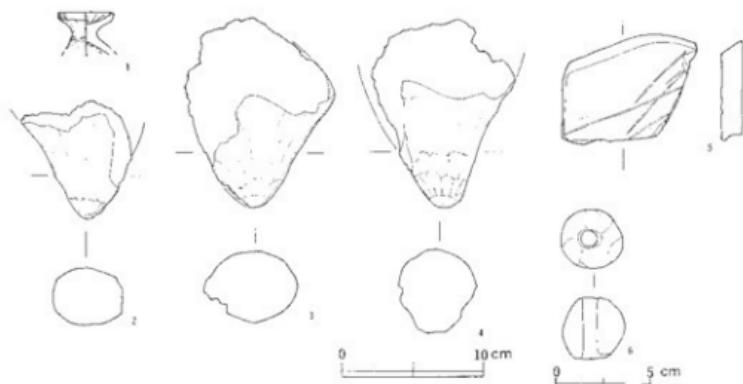
第53図 第50号・51号住居址実測図

口縁は外縁ともヨコナデで、外縁肩部にも及ぶ。胴外面はタテ方向のハケナデ、胴下半はヘラナデ。胴内面はヘラナデ。3は胴下半と口縁の $\frac{1}{3}$ を欠く。口径14.6cm、最大径14.8cm。最大径は胴中位に有し、口縁は大きく外反し広口気味。口縁内外面ともハケナデ→ヨコナデ。胴外面はハケナデ後、肩部以下はヘラナデ。胴内面はやや疎なヘラナデ。4は広口壺の可能性がある。胴部以上の $\frac{1}{2}$ 残存。口径11.2cm、最大径15.4cm。最大径は胴中位に有し、頸部はくびれて口縁は内傾気味に立ち上がる。器外面はハケナデ後、口縁はヨコナデ、胴中位以下はヘラナデ。口縁内面はヨコナデ、以下はヘラナデを施し、成形時の指頭痕を多く残す。5は台付壺形土器で、脚部と胴下半のみ残存。脚径3.8cm、裾径9.6cm。6は小形壺で、口唇端と胴部の一部を欠く。口径5.0cm、最大径7.5cm、底径3.6cm、器高6.7cm。最大径は胴中位に有し、口縁は短く外反する。器外面はヘラナデ、口縁内面はハケナデ、胴内面はヘラナデを施し、指頭痕を残す。7～8は壺形土器である。7は底部と口縁の $\frac{1}{3}$ を欠く。口径12.9cm、最大径16.7cm。胴部は球状に膨み、頸部は短く口縁は外反し、貼付による複合口縁を呈する。器外面はハケナデ後、頸

はヨコナデ、肩部はヘラミガキ、胴中位はタテ方向の疎なヘラナデ、胴下半はヘラナデを施す。内面の頸部以上はハケナデ後、頸部はヘラナデ、胴内面はヘラナデを施す。8は胴上半の $\frac{1}{3}$ と胴下半以下を欠く。口径12.9cm、推定最大径26.6cm。胴部は球状に大きく膨み、最大径を胴中位に有し、口縁は短く外反気味に立ち上がる。器外面はハケナデ後、肩部は密なヘラミガキ、胴中位はヘラナデを施す。口縁内面はハケナデ後、ややていねいなヘラミガキ。胴内面はヘラナデを施し、肩部に成形時の指頭痕を残す。9は異形器台形土器で、器受部の $\frac{1}{3}$ 残存し口唇を欠く。脚径4.6cm。器受部は外傾気味に立ち上がる。器受部内外面とも指頭によるナデを施す。脚部内面はヘラナデ。10は砥石で、全長の $\frac{1}{2}$ 残存。全長7.0cm、厚さ1.2cmを測る。分胴形状に中央部がくびれ、四面にわたって使用痕が認められる。石材は泥岩を用いている。11は軽石で、ごく一部を欠くのみ。全長6.7cm、厚さ4.3cmを測る。不整形の原石を用い、全体に使用痕が認められる。



第54図 第50号住居址実測図



第55図 第51号住居址実測図

第51号住居址（第53図）

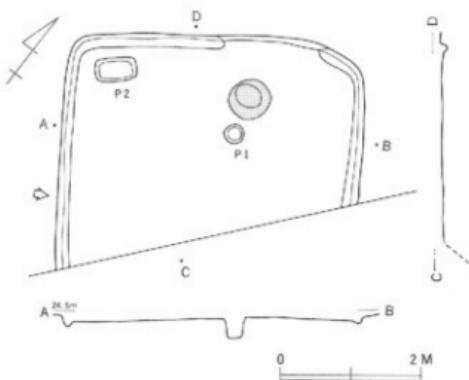
本址は、調査区のほぼ中央に位置し、北西壁側は第50号住居址を切っている。東側に47号住、南側に59号住が接している。規模は、北西—南東が約330cm、北東—南西が355cmを測り、やや不整な隅丸方形プランを呈している。長軸方向を、北東—南西に有する。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は22～25cmを測る。床面は、直床でしっかりしている。特に中央部は堅緻である。柱穴状のピットは、東側コーナー部に1本が検出されたのみである。P₁は、径35×30cm、深さ20cmで良好である。塗溝・貯蔵穴は検出されなかった。炉址は、住居址の中央よりやや北側に寄った位置に検査され、径40×27cmの橢円形を呈する竪穴炉である。火床面は約3cm程度窪み、かなり良く焼けている。

出土遺物（第55図）

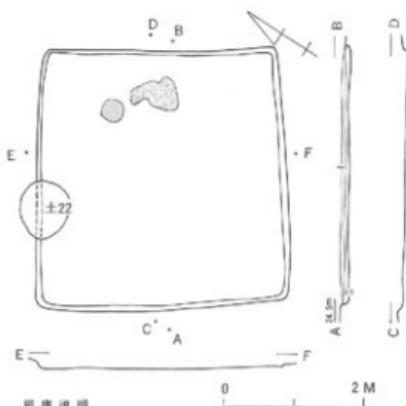
1は、高环形のミニチュア土器で、脚部と口唇部の大半を欠く。口唇部径4.0cm、脚径1.7cm、現存高3.6cmを測る。口唇部外縁横ナデの他は内外面ともヘラナデである。2～4は、上製支脚片で、炉址内より出土している。三足状の支脚と思われ同一固体である。橙褐色を呈し非常に滑らか、外面は指頭によるナデが認められる。5は、泥岩製の砥石の残欠である。厚さ約1.5cmで両面使用され、片面に使用時のキズが認められる。6は、土玉で、径32mm、高さ32mm、孔径8mmを測る。指頭による押え、及びナデによりかなり歪んでいる。

第53号住居址（第56図）

本址は、調査区の南端の中央やや西寄りに位置するため、住居址の南側1/2を工場建設時に破壊されている。北側に第54号住が接している。規模は、北西—南東が不明で、北東—南西が429cmを測り、隅丸方形プランを呈するものと思われる。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は5～10cmである。床面は、貼床でやや凹凸があり、さほど堅緻ではない。ピットは、P₁～P₂



第56図 第53号住居址実測図



第57図 第54号住居址実測図

に位置し、径35mの地床炉で火床面は良く焼けている。炉址の東側に、焼土の堆積が検出された。出土遺物は、少量で、図示し得るものはない。

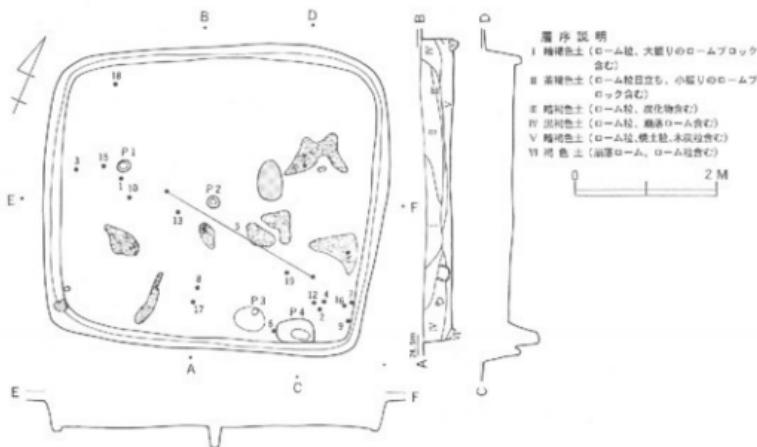
第55号住居址（第58図）

本址は、調査区の南北寄りに位置している。東側に56号住が存在する他、周辺部に多数の住居址が存在する。西壁部の一部が縄文時代の46号土塗と重複している。規模は、北西—南東が428cm、北東—南西が487cmを測る隅丸長方形プランを呈し、長軸方向を東北東—西南西に有

の2本が検出された。P₁は、炉址の南側に位置し、径28cm、深さ31cmを測り、良好で柱穴状を呈す。P₂は、西隅に位置し、径58×35cm、深さ33cmの隅丸長方形を呈している。貯藏穴と考えられる。壁溝は、北西壁の一部を除いて検出された。炉址は、北西壁寄りに位置し、径42×32cmのほぼ地床炉で、火床面はさほど焼けていない。南西壁側の床面が堅緻であり入口部と考えられる。遺物は、小片が少量出土したのみである。

第54号住居址（第57図）

本址は、53号住居址の北側に位置している。北西壁側は第22号土塗を切って重複している。規模は、北東—南西が368cm、北西は—南東が355cmの隅丸長方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直と思われるが、壁高が3~10cmと浅く明確でない。床面は、貼床でさほどしっかりしておらず、やや掘り過ぎてしまった。柱穴、壁溝等は検出されなかった。炉址は、中央北隅寄り

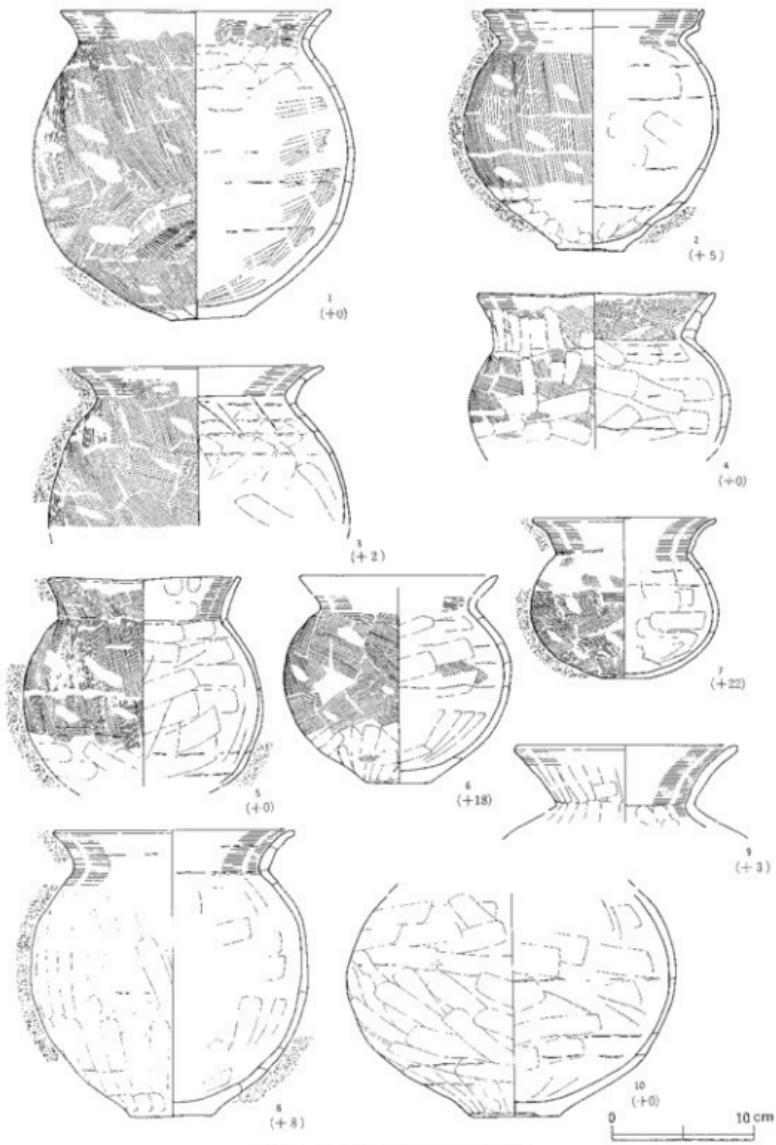


第58図 第55号住居址実測図(1)

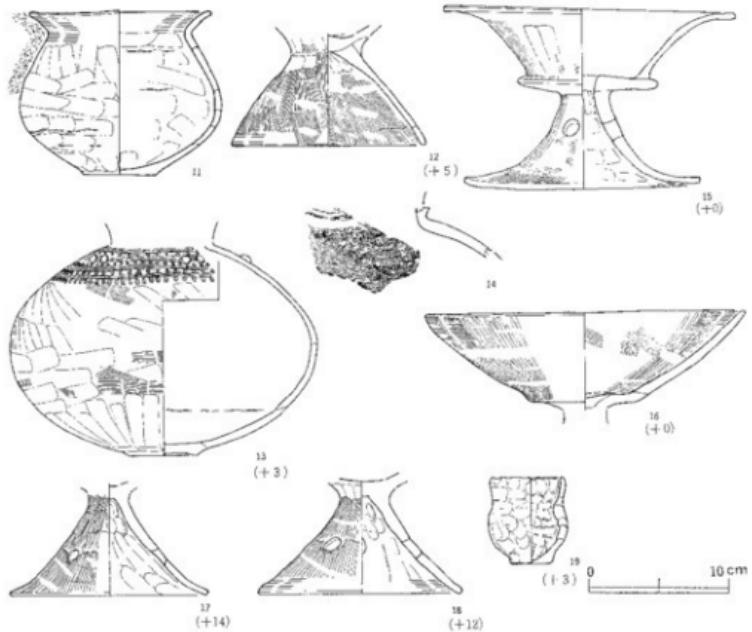
している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30~45cmを測る。床面は、ほぼ全体的に貼床されている。中央部を主体としてしっかりした床である。ピットは、P₁~P₄の4本が検出された。P₁は、深さ32cmを測り良好な柱穴状を呈するが、P₁・P₂は深さ約10cmと浅く、柱穴かどうか不明である。P₃は、南東壁の東隅寄りに位置し、径50×32cm、深さ35cmの隅丸長方形を呈し、貯蔵穴と思われる。壁溝は、幅約12cm、深さ5cm程度で全周する。炉址は、中央北東壁寄りに位置し、径54×32cmの椭円形を呈する地床炉である。火床面は、僅かに窪み良く焼けている。住居址内には、けっこう多く焼土の堆積があり、また炭化材も検出され、焼失家屋と思われる。

出土遺物（第59図、第60図）

本址からの出土遺物は、壺形土器を主体として壺、高环、器台等多量の遺物が出土した。ほとんどが床面近くよりの出土で、良好な資料である。1~11は、壺形土器である。1は、口縁部及び胴部の一部を欠き、口径は9cm、最大径22.6cm、底径5.3cm、器高21.6~21.9cmを測る。球胴形で、淡褐色から橙褐色を呈し、焼成良好。整形は、口縁部がハケナデ→横ナデ、胴外面ハケナデ、底部周辺ヘラナデ、胴内面ヘラナデ→ミガキ風のナデである。胴外面下部にスス付着。2は、口縁部の1/3、胴部の一部を欠き、口径15.4cm、最大径17.8cm、底径4.7cm、器高17.0cmを測る。球胴形で、S字状口縁の壺である。外面の大半および内面底部にススが付着。整形は、口縁部横ナデ、胴外面三段のハケナデ、胴内面ヘラナデ、胴下半の1/3は外面とも指頭によるナデ。器面の整形は難で、外面は凹凸が多い。3は、胴下半を欠き、口径17.6cm、最大径21.2cmを測る。丸胴形で口縁部はくの字状に外反する。整形は、口縁部横ナデ、胴外面やや粗いハケナデ、胴内面ヘラナデで、内面には輪積み痕明瞭に残す。外面にはスス付着。4は、下



第59図 第55号住居址実測図(2)



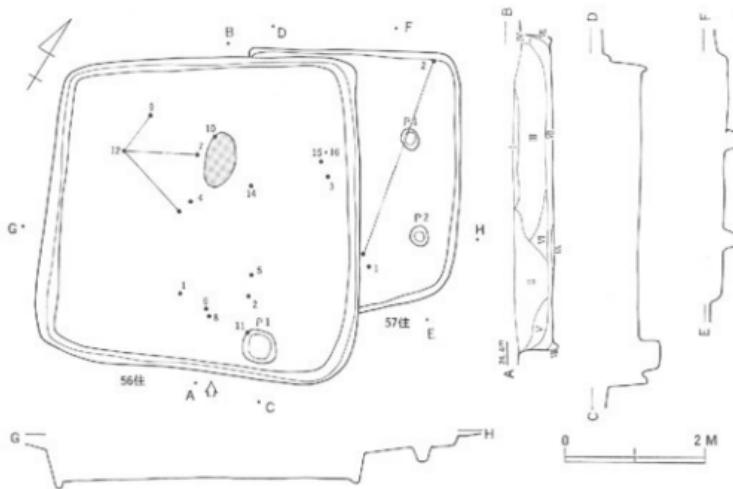
第60図 第55号住居址実測図(3)

半を欠き、口径17.0cm、最大径18.7cm、口縁部は垂む。丸胴形で、口縁部はくの字状に外反する。整形は、口唇部が横ナデ、外面ハケナデ→ヘラナデ、内面の口縁部ハケナデ、胴部ヘラナデである。胴部外面は、二次焼成により赤変する。5は、底部を欠き、口径13.65cm、最大径17.0cmを測る。丸胴形で、口縁部は垂直ぎみに外反する。整形は、口縁部横ナデ、口縁中央から胴上半の外面ハケナデ→指頭によるナデ、下半及び胴内面へラナデである。口縁部には指紋も認められる。外面及び内面の下部には、ススが付着している。6は、口縁部を欠き、最大径15.8cm、底径4.2cmを測る。整形は、口縁部横ナデ、口縁内面はハケナデ、胴外面の上半はハケナデ、下半から胴内面はハケナデ→ヘラナデ。内面は、器面の剥落多い。7は、ほぼ完存し、口径13.0cm、最大径13.25cm、底径3.2cm、器高11.3cm、球胴形で口縁部が大きく開く小型甕である。整形は、口縁部横ナデ、胴外面ハケナデ、内面ヘラナデである。外面の口縁部及び下半にはススが付着。8は、口縁の1/6、胴部の1/5を欠き、口径17.0cm、最大径19.6cm、底径5.95cm。器高20.2cmを測る。丸胴形で、口縁部はくの字状に外反する。整形は、口縁部横ナデ、胴部内外面ともヘラナデ、外面下端指頭によるナデである。外面上半部にスス、内面底部におこげ付着する。9は、口縁部のみ残存し、口径15.4cmを測る。外面口唇部から口縁内面は横ナデ、口縁

下半から胴部丁寧なヘラナデで、内面頸部は指頭による押えである。10は、頸部以上を欠き、最大径23.2cm、底径6.2cmを測る。丸胴形で、整形は内外面ともヘラナデである。内面の上部は剥落が目立つ。11は、全体の½を残存し、口径13.1cm、最大径14.4cm、底径5.0cm、器高11.65cmを測る。胴中央やや下位に最大径を有し、口縁部は大きく外反して開く。口唇部は、けっこう歪む。器高が低く、ややすびまりの感がある。整形は、口縁部横ナデ、胴部ヘラナデである。外面の上半には、ススが付着する。12は、台付甕で脚部のみ残存し、底径13.95cmを測る。整形は、裾部外面横ナデ、他はハケナデで、脚接合部の内外面ともハケナデ→指頭によるナデ、胴部内面ヘラナデ→指頭によるナデである。13は、球胴形の壺形土器で、口縁部を欠き、最大径21.8cm、底径4.6cmを測る。胴上部には、櫛状工具によるハケ目風の浅い沈線と、列点状の刺突文を交互に4段施文する。整形は、胴外面がハケナデ→ヘラナデで、部分的にハケ目を残し内面は器面の剥落がひどく不明である。底部の外面は、粘土がヒビ割れ状になる。外面下半は油脂状のススがうすく付着している。14は、壺形土器の頸部片で、櫛状工具による波状文が施されている。15は、装飾器台で、器受部の大半を欠き、口径20.5cm、底径15.9~16.5cm、器高13.2cmを測る。器受け底部は、板状に突出し、径1.35cmの孔が貫通する。口唇部、裾部は大きく外反する。脚部には、径約1.3cmの孔が3孔穿たれている。整形は、口唇部及び裾部内面が横ナデ、外面ハケナデ→ヘラナデ→ヘラミガキで一部はハケ目が残る。器受け部内面は、磨滅しているため明確ではないが、脚部内面はヘラナデである。16は、高环で脚部を欠き、口径22.55cmを測る。整形は、口縁部横ナデ、外面ヘラナデ→ヘラミガキ、内面ハケナデ→ヘラミガキで一部ハケ目を残す。17、18は、高环の脚部である。17は、裾径14.4cm、18は裾径13.9cmを測る。孔は3孔で、孔径が17は約1.0cm、18は約1.4cmである。整形は、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、裾部横ナデである。19は、壺形土器のミニチュアで、口縁部の¾を欠き、口径4.6~5.1cm、最大径5.6cm、底径2.9cm、器高6.2cmを測る。黒褐色を呈し、整形は指頭による押え→ヘラナデ→指頭によるナデである。内面には輪積み痕を明確に残す。

第56号住居址（第61図）

本址は、調査区の南西寄りに位置し、西側に第55号住、南側に第54号住、北側に第60号住居址が近接する。東側は第57号住居址を切って重複する。規模は、北西-南東及び、北東-南西も420~470cmを割り、やや不整な隅丸方形プランを呈している。主軸方向を北西-南東に有する。覆土は、ローム塊を多く混入する暗褐色土・黒褐色土・茶褐色土で、人為堆積と思われる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は45~55cmを測る。床面は、ほぼ全面に貼り床されているが、中央部を主体としてしっかりしている。柱穴は、検出されなかった。南東壁側の東隅寄りの位置に径47cm、深さ26cmの隅丸方形のピットが検出され、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、幅5~15cm、深さ約10cm程で全周する。炉址は、中央やや北西壁寄りに位置し、径81×43cmの梢円形を呈する地床炉で、火床面は僅かに窓で良く焼けている。南東壁下の中央部の床面は、



層序説明

- I 細粒粘土（ローム粘、砂含む）
- II 粗粒粘土（ローム粘質含む、熟土粒を少量含み、全体に均質）
- III 黑褐色土（ローム粘、ロームブロックを縦跡付に含む）
- IV 特殊粘土（黒褐色ロームを含む）

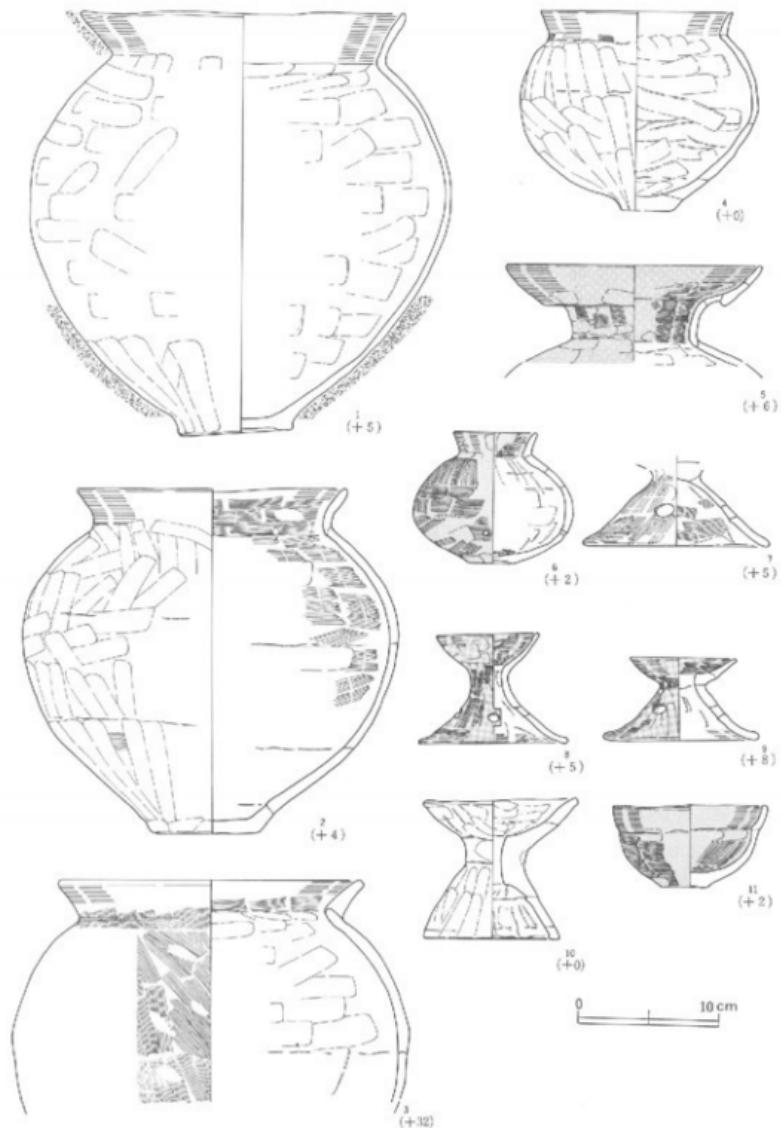
- V 黄褐色土（小振りのロームブロック付立つ）
- VI 線状粘土（ローム粘、小振りのロームブロック含む）
- VI 塗瓦色土（ローム粘、炭化物質を含む）
- VII 黑色土（ロームブロックや目立つ）
- VIII 黑褐色土（熟土多量に含み、芦の根土）

第61図 第56号・57号住居址実測図

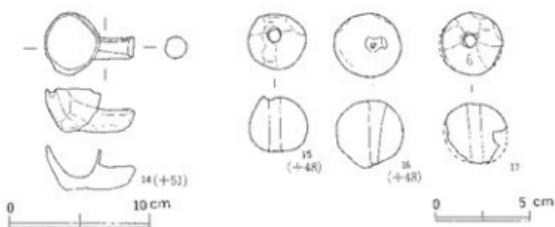
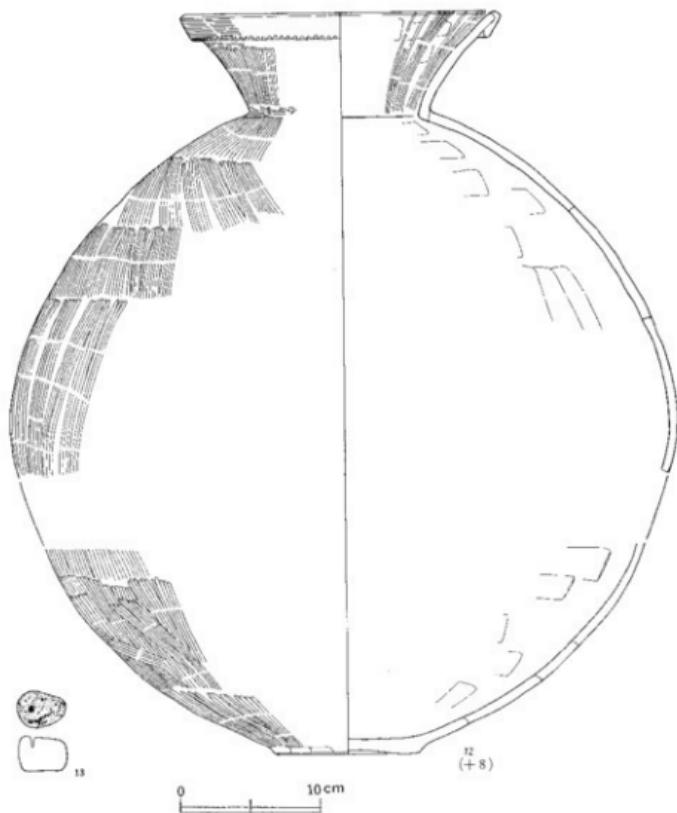
僅かに盛り上がって堅緻であり、入口部と考えられる。

出土遺物（第62図、第63図）

本址からは、床面近くより多量の土器、土製品が出土しており良好な資料である。1～4は、彫形土器である。1は、口縁部から胴部を部分的に欠き、口径23.0cm、最大径29.95cm、底径8.1cm、器高30.15cmを測る。丸胴で、口縁部は垂み、底部はやや突出して僅かに上げ底となる。整形は、口縁部横ナデ、胴部は内外面ともヘラナデ、外面上半は指頭によるナデによりヘラナデは不明瞭になる。口縁外面及び、底部の内外面にスス付着。2は、口縁を部分的に欠き、口径19.1cm、最大径26.6cm、底径7.4cm、器高24.5cmを測る。胴部中央やや上位に最大径を有する丸胴甕で、整形は口縁外面から口唇内面が横ナデ、口縁内面ハケナデ、胴外面ヘラナデ、内面ヘラナデから上部へラミガキ、下部指頭によるナデである。3は、覆土上位で出土し、胴下半を欠く。口径21.5cm、最大径28.0cmを測る。整形は、口縁上部が横ナデ、口縁下部の内外面及び胴外面ヘラナデ→ハケナデ、胴内面ヘラナデである。4は、小形甕で底部の1/4を欠き、口径13.6cm、最大径16.95cm、底径約3.7cm、器高14.15cmを測る。整形は、口縁部横ナデ、胴部は内外面ともヘラケズリ→ヘラナデで雑である。外面には黒斑が付き、底部は二次焼成により赤変する。5は、



第62図 第56号住居址実測図(1)



第63図 第56号住居址実測図(2)

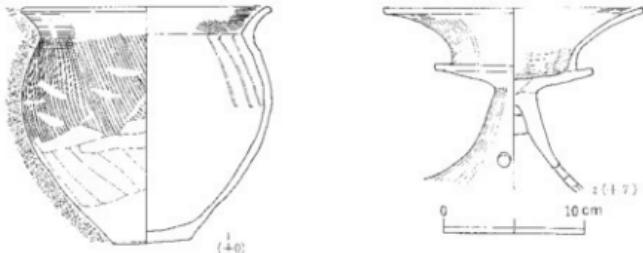
壺形土器で口縁は $\frac{1}{4}$ を残存し、口径18.2cmを測る。有段口縁で、口縁部横ナデ、頸部外面ハケナデ→ヘラナデ、内面ヘラミガキ、胴部はヘラナデである。口縁部内面から外面に赤彩を施す。6は、小形壺で、口唇部の大半及び胴部の $\frac{1}{3}$ を欠く。口径約6.0cm、最大径11.4cm、底径3.15cm、器高9.25cmを測る。胴中央の下部に径0.4cmの小孔を穿っている。整形は、口縁部横ナデ、内面は部分的にヘラミガキ、胴外面上半はヘラミガキ、下半ヘラナデ→ハケナデ→ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部ハケナデである。7は、高壺の脚部で、据部の $\frac{1}{3}$ を欠く。据径13.2cmを測る。径1.2cmの孔を3孔穿つ。据部は横ナデ、外面ハケナデ→ヘラミガキ、内面ハケナデ→ヘラナデである。8~10は器台である。8は、完存で口径7.2cm、据径10.65cm、器高7.85cmを測る。脚部の孔は3孔で、孔径約0.9cmを測る。ヘラナデ後、口縁及び裾部は横ナデ、脚部及び器受内面はヘラミガキを施し、脚部内面にはハケ目を一部に残す。9は、部分的に一部を欠き、口径7.4cm、据径10.95cm、器高6.0cmを測る。脚部の孔は3孔で、孔径約0.9cmを測る。口縁部及び裾部横ナデ、脚部はヘラナデで外面にはハケ目を残す。8・9とも器受け内面から外面に赤彩を施す。8は焼成後、9は焼付けの赤彩である。10は、粗製の器台で、部分的に欠損し、口径11.0cm、据径9.6cm、器高10.0cmを測る。整形は、雑なヘラナデで、頸部には指頭によるナデを施す。11は、鉢形土器で、口縁部の一部を欠き、口径11.0cm、底径3.1cmを測る。口縁部横ナデ、体部ヘラナデ→ヘラミガキである。外面は、焼付け赤彩をする。12は、大型の壺形土器で約 $\frac{1}{2}$ を残存する。口径22.8cm、底径9.8cm、最大径47.6cm、器高約52.7cmを測る。有段口縁で、下端部に刻目を施す。口縁部横ナデ、外面及び口縁部内面ヘラナデ→ヘラミガキで胴部内面はかなり器面が剥落している。底部には木炭痕を残す。13は、輕石である。14はヒャク状の土製品で長さ3.2cm、径2.3cm、高さ1.5cmを測る。15~17は、土玉である。

第57号住居址（第61図）

本住居址は、調査区中央の南端寄りに位置し、西側約1mを第56号住居址に切られている。東側に第58号住、北西側に第60号住居址、41号・43号土塙が存在する。規模は、北西-南東が約375cm、北東-南西が約310cmで隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は10~17を測る。床面は、全体的に貼床を施しやや軟弱である。壁溝は、全く検出されず、炉址は第56号住居址に切られて検出されなかった。柱穴は、北東壁寄りに2本検出された。P₁は、径30cm、深さ18cm、P₂は径29cm、深さ20cmを測る。

出土遺物（第64図）

1は、壺形土器で部分的に欠き、口径17.7cm、底径5.6cm、最大径17.5cm、器高16.7cmを測る。整形は、外面の口縁部横ナデ、胴上半斜方向の粗いハケナデ、胴下半ヘラケズリ、内面の口縁部ハケナデ、胴部ヘラケズリで下半は器面が剥落している。外面にスス付着。2は、装飾器台形土器で口縁の $\frac{1}{4}$ と据部を欠く。口径18.4cm、残存高13.1cmを測る。脚部に径1.0cmの孔を3孔穿つ。器受部と脚部の接合部に孔はない。整形は、口縁部横ナデの他丁寧なヘラミガキである。



第64図 第57号住居址実測図

第58号住居址（第65図）

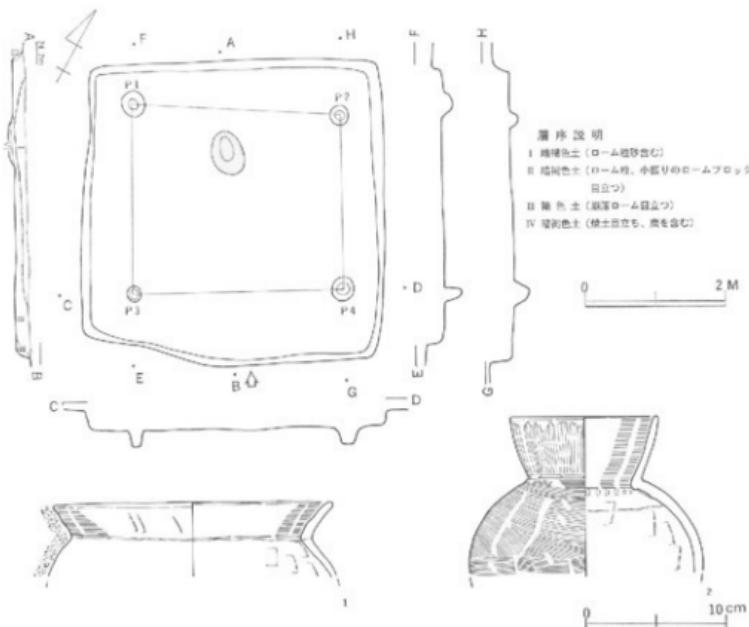
本址は、調査区の中央南端寄りに位置している。西側に56号・57号住居址、北側に第59号住居址が接して存在する。規模は、北西-南東が436cm、北東-南西が432cmを測り、ややいびつではあるが正方形に近い隅丸方形プランを呈し、主軸を北西-南東に持つ。覆土は、ローム粒・塊を含む暗褐色土で自然堆積である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は16~29cmを測る。床面は、貼床であるが比較的堅緻である。壁溝は、全く検出されなかった。住居址のコーナー寄りの位置にP₁~P₄の4本のピットが検出され、位置的に柱穴と思われる。P₁は径33cm、深さ15cm、P₂は径30cm、深さ12cm、P₃は径20cm、深さ25cmを測る。炉址は、中央北西壁寄りに位置し、径61×48cmの楕円形を呈する竪穴炉で、5cm程掘り進められ、火床面は良く焼けている。南東壁中央部側の床面は、特に堅緻であり、入口部と思われる。

出土遺物（第65図）

1は、壺形土器の口縁部片で、口径18.8cmを測る。整形は、口縁部横ナデ、肩部はヘラナデ後指頭によるナデである。外面にはススが付着している。2は、壺形土器で上半の約1/3を残存する。口径10.4cm、最大径16.6cmを測る。球洞で口縁部は内弯きみに立ち上がる。整形は、外面の口縁部縱方向ヘラミガキ、肩部斜・横方向のハケナデ、内面の口縁横ナデ、肩部ヘラナデ。

第59号住居址（第66図）

本址は、調査区中央の南寄りに位置し、周辺部に第47号・51号・58号・60号住居址、39号・41号土塙等が接して存在する。また、住居址中央のやや東寄りの位置に縄文時代の40号土塙が重複する。規模は、北北西-南南東が396cm、東北東-西南西が484cmを測り、ほぼ東西に長軸を有する隅丸長方形プランを呈している。覆土は、7層認められ、上部は草原土壤化した黒色土が多く、自然堆積である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は55~68cmを測り、しっかりしている。床面は、直床で壁周辺を除いて非常に堅緻である。特に南壁側の中央部は良く踏み固められており、入口部と思われる。壁溝は、全周し、幅8~13cm、深さ5~10cmを測る。南西コーナー寄りに径25cm、深さ37cmのピットが1本検出された。1本のみであるが柱穴と考



第65図 第58号住居址実測図

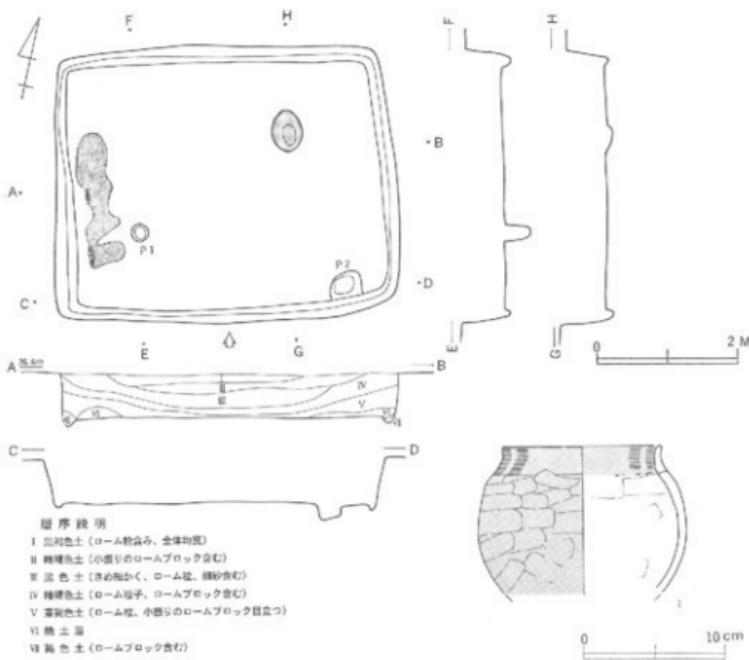
えられる。南壁の東隅近くに径46×35cm、深さ約20cmの隅丸方形を呈するピットが検出され、貯蔵穴と考えられる。炉址は、住居址中央の北東寄りに位置し、径57×44cmの椭円形を呈している。炉底は、僅かに掘り窪められたのみで、火床面は良く焼けている。西壁寄りの床面上には焼土の堆積が検出され、炭化材も出土していることから本址は焼失住居址と考えられる。

出土遺物（第66図）

本址からは、土師器小片が出土したのみである。1は、椀形を呈する鉢形土器で、口縁部の $\frac{1}{8}$ 、胴部の $\frac{1}{6}$ を残存する。推定で口径11.0cm、最大径14.7cmを測る。覆土中より出土したもので、口縁部横ナデ、胴部はヘラナデである。外面から口縁部内面に赤彩を施している。

第61号住居址（第67図）

本址は、調査区の北西に位置し、北東側の約光を第62号住居址に切られている。南側に第78号住居址、西側に15号土塙、北西側に42号土塙が隣接して存在する。規模は、北東—南西は重複によって判明しないが約380cm、北西—南東が405cmを測り、隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は12~20cmを測る。床面は、貼床であるが比較的しっかりしている。壁溝・穴穴は、全く検出されなかった。南隅寄りの位置に径60×43cm、深さ20cmの

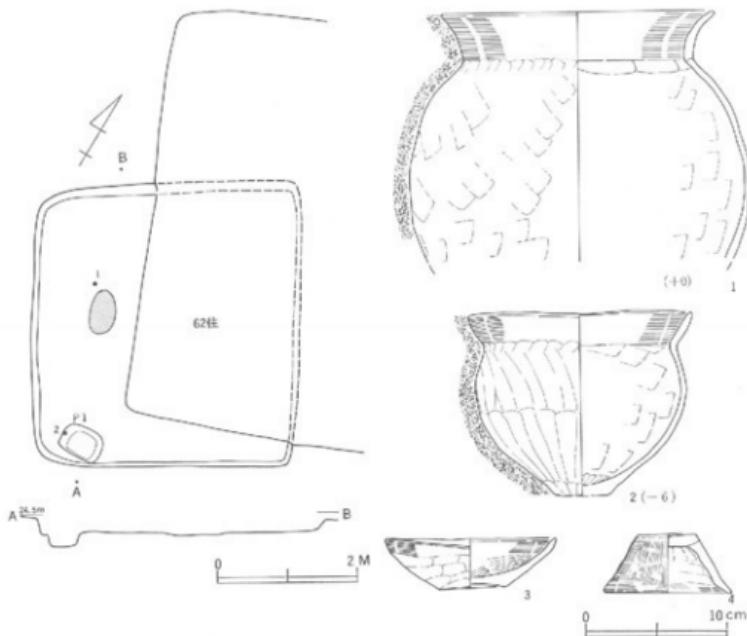


第66図 第59号住居址実測図

隅丸方形を呈するピットが検出され、貯蔵穴と考えられる。炉址は、住居址中央南東壁寄りに位置し、径65×38cmの梢円形を呈している。炉底は僅かに窪む竪穴炉で、良く焼いている。

出土遺物（第67図）

1・2は壺形土器である。1は、底部から胴部の $\frac{3}{5}$ を欠き、口径19.4cm、最大径24.0cm、残存高17.7cmを測る。口縁部横ナデ、胴部はヘラナデ整形している。外面の上半にはススが付着し、下半部は赤変化している。2は、口縁部の $\frac{1}{2}$ 、胴部の $\frac{1}{3}$ を残存し、口径15.6cm、底径15.8cm、最大径15.8cm、器高13.1cmを測る。口縁部横ナデ、胴部ヘラナデで、外面の全体にススが付着している。3は、壺形土器で、口唇部を僅かに欠き、口径12.0cm、底径4.7cm、器高4.6cmを測り、上げ底である。口縁部横ナデ、体部外面ヘラナデ、内面ヘラミガキ調整である。口縁部はかなり歪んでいる。4は、小型の台形土器で、据部の $\frac{2}{3}$ を欠く。台部径4.1cm、据径9.0cm、器高4.2cmを測る。脚部はハの字状に開き、据部で僅かに外反する。整形は、据部がハケナデ後横ナデ、外面ハケナデ、内面ハケナデ→ヘラナデである。



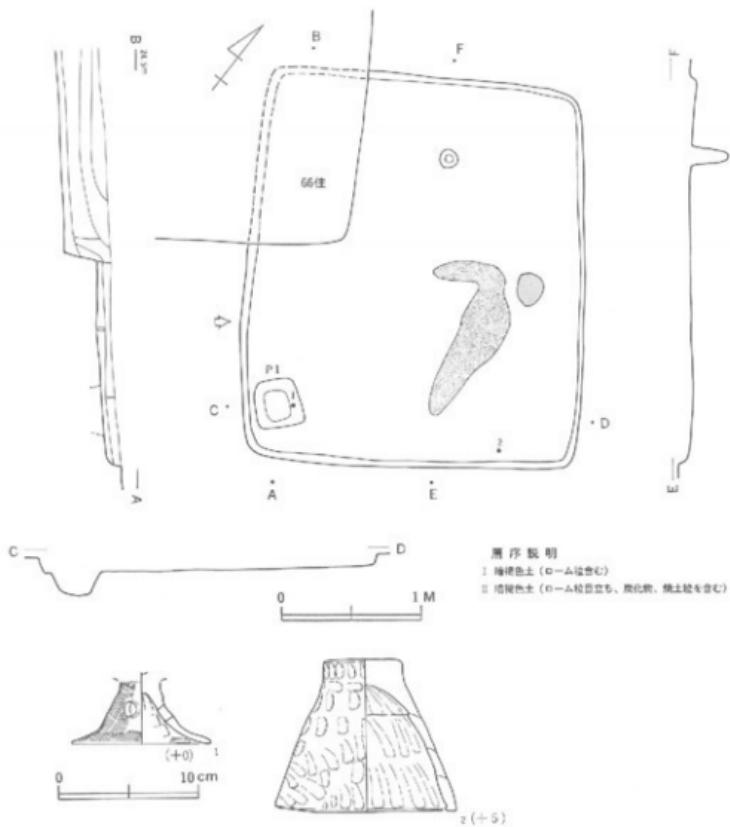
第67図 第61号住居址実測図

第65号住居址（第68図）

本址は、調査区の中央やや北西寄りに位置している。第64号住居址と重複し、北西隅の約 $\frac{1}{4}$ を切られている。南側に第64号住居址が隣接して存在するが、北東側は住居址の空白地区になっている。規模は、 $559 \times 486\text{cm}$ を測り、北西—南東に長軸を有する隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は $16\sim20\text{cm}$ を測る。床面は、ほぼ全面に貼床されているが、中央部は堅敏である。南西壁中央やや南寄りの床面は、良く踏みしめられた痕跡があり入口部と思われる。柱穴は、中央部の北西壁寄りの位置に1本検出された。径 26cm 、深さ 51cm を測る。南隅に $69 \times 66\text{cm}$ 、深さ約 30cm の方形のピットが検出され貯蔵穴と考えられる。炉址は、中央北東壁寄りの焼土部分が炉址と思われ、炉底はあまり焼けていない。焼失家屋。

出土遺物（第68図）

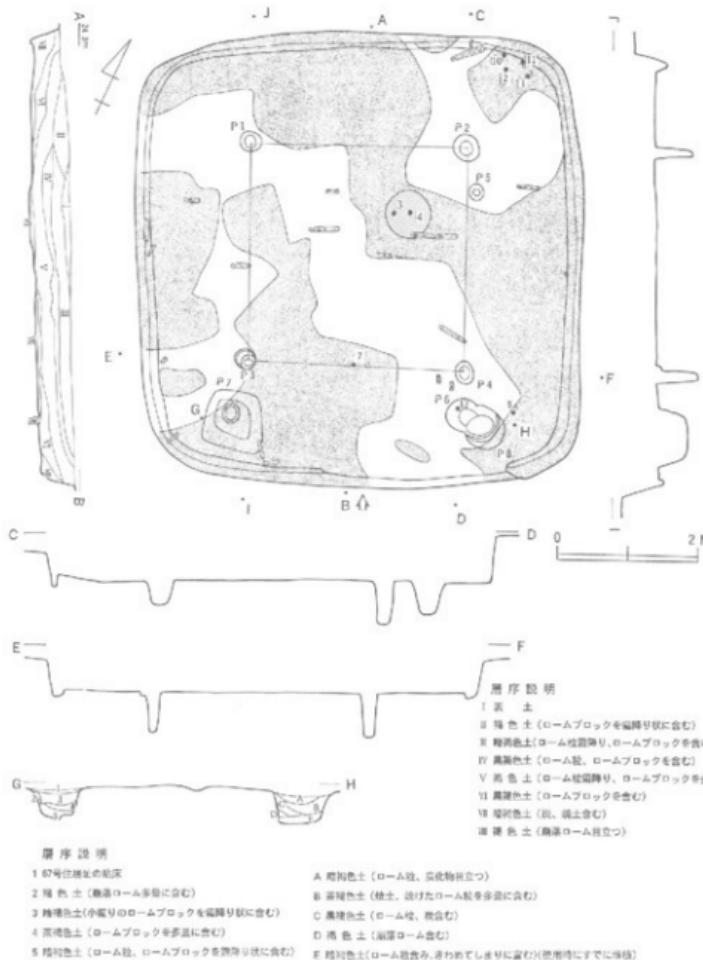
1は、高環の脚部で、据部 $\frac{1}{4}$ を欠き、据径 10.0cm を測る。脚部に径 1.1cm の透孔を3孔穿つ。整形は、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、据部ヘラミガキである。2は、台形土器で完存品である。台部径 5.8cm 、据径 13.0cm 、器高 10.7cm を測る。台部はやや突出ぎみで、外面が指頭による押え、ナデ、内面は指頭によるナデで調整している。



第68図 第65号住居址実測図

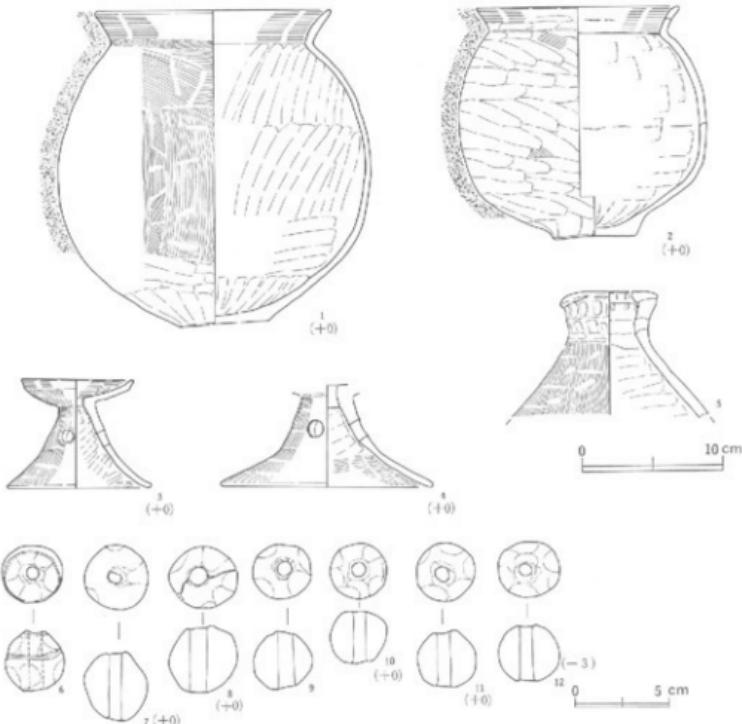
第67号住居址（第69図）

本住居址は、調査区中央の北西寄りに位置し、重複はない。周辺部には第32号・65号・66号住居址等が隣接して存在する。規模は、北西—南東が325cm、北東—南西が315cmを測り、整った隅丸方形プランを呈している。覆土は、かなり多量の焼土が壁から床面にかけて堆積しており上部はローム塊の混入が多いことから人為的な埋め元土と思われる。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は45～66cmを測る。床面は、貼床であるが全体的に堅緻である。柱穴は、7本検出された。位置的にP₁～P₄は主柱穴、P₅は支柱、P₆は古期のピットで埋め元されていた。P₇は南隅寄りに位置し、径約40cm、深さ40cmの方形で、上面に貼床された古期の貯蔵穴である。



第69図 第67号住居址実測図(1)

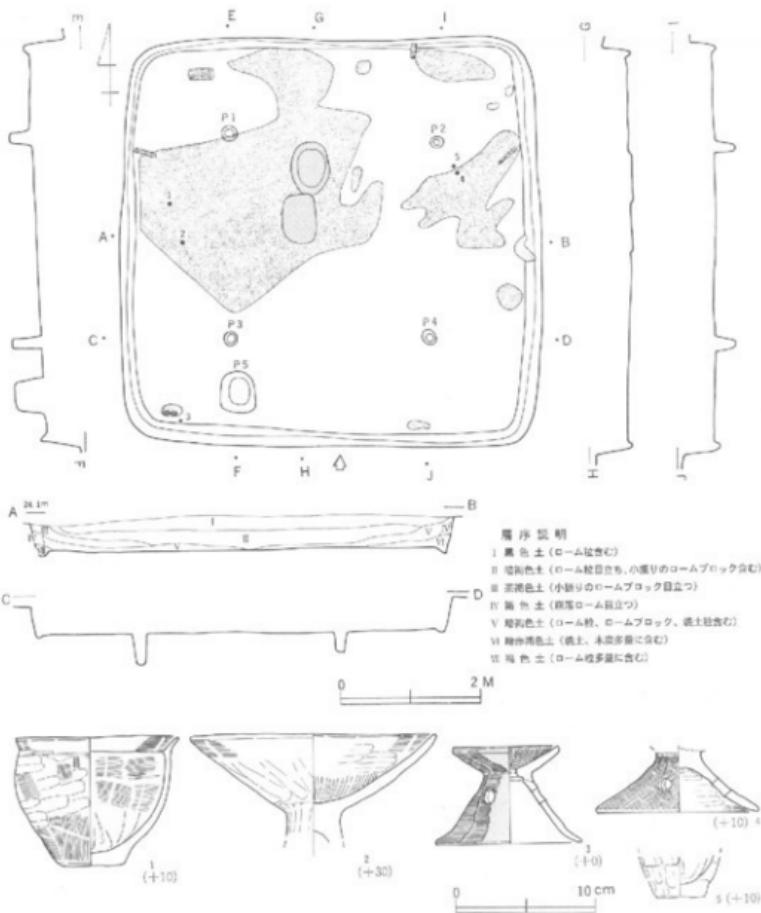
P₅は、P₆を切った新期の貯蔵穴で、径約40cm、深さ45cmの隅丸方形を呈す。壁溝は、南東壁中央の入口部を除いて廻らしている。が址は、中央やや北寄りに位置し、径約50cmの円形で良く焼けている。本址は、相当強い火災を受け、焼上、炭化材が多量で壁・床がかなり焼けている。



第70図 第67号住居址実測図(2)

出土遺物（第70図）

1・2は壺形土器である。1は、胴部と底部の一部を欠き、口径16.6cm、底径5.3cm、最大径22.1cm、器高22.5cm、口縁部横ナデ、胴外面ハケナデ、底部、胴内面ヘラナデ。外面上半にスス付着。2は、一部を除き、口径14.3cm、底径5.9cm、最大径17.3cm、器高11.5cm。口縁部横ナデ、胴外面ハケナデ→ヘラナデ、内面ヘラナデ。底部は突出ぎみで、底部を除いて外面にスス付着。3・4は器台形土器である。3はほぼ完存で、口径8.0cm、据径10.2cm、器高7.8cmを測る。脚部に透孔を穿つ。口縁外面横ナデ、脚部内面ヘラナデの他はヘラミガキ。4は、装飾器台の可能性もあるが、脚部のみ残存し、据径15.0cmを測る。外面及び据内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデ。透孔は3孔を穿つ。5は、異形器台形土器で据部を欠く。粘土紐の輪積により器受部を作り出す。器受部は指頭による調整、脚外面ハケナデ、内面ヘラナデ調整。6～12は土玉である。径30～35mm、高さ27～36mm、孔径6～9mm程で、ほぼ同一大である。



第71図 第68号住居址実測図

第68号住居址（第71図）

本住居址は、調査区の北西端近くに位置し、重複関係はない。東側に第31号住居址、42号土塙が隣接する。規模は、南北が580cm、東西が602cmの整った隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高35~40cmを測る。床面は貼床で、壁周辺を除いて堅緻である。

柱穴は、住居址の各コーナー寄りの位置にP₁～P₄の4本が検出された。径約20cm、深さはP₁が42cmを測る他は27～29cm程度で、柱穴間距離も282～297cmとほぼ等距離にある。P₁は、南東コーナー寄り、P₂の南側に位置し、径56×49cm、深さ42cmの隅丸方形のピットで、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、断面U字形で、幅8～16cm、深さ5cmを測り、四壁下を全周する。炉址は、中央やや北寄りに位置し、2ヶ所検出された。炉址Aが新期で、径76×53cmの楕円形を呈する竪穴炉である。炉底は、約5cm掘り廻められ、火床面は良く焼けている。古期の炉址Bは、炉址Aの南側に位置し、径70×47cmを測り、火床面のみ残存するが良く焼けている。住居址内には、多量の焼土の堆積と炭化材が出土し、焼失家屋である。

出土遺物（第71図）

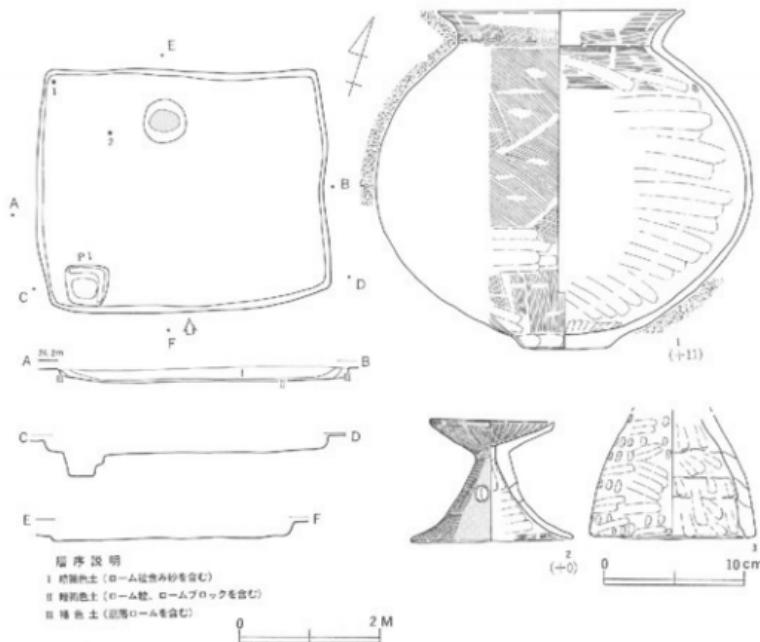
本址からは、壺形土器、高環形土器、器台形土器が出土しているが、概して遺物は少ない。1は、小型壺形土器で、口縁の1/3を欠き、口径11.5cm、底径4.8cm、器高9.3cmを測る。口縁は歪み、整形は口縁部横ナデ、胴外面上半ハケナデ→ヘラナデ、下半ハケナデ、内面上半ハケナデ、下半ヘラナデである。2は、高環で脚部を欠き、口径17.4cmを測る。整形は、口縁部横ナデ、体部はヘラナデで内面底部はヘラミガキを加える。3は、器台形土器で完存する。口径7.6cm、据径10.0cm、器高7.0cmを測る。透孔は3孔で、径1.1cm。精製品で、口唇横ナデ、外面及び器受内面はヘラミガキ、脚内面ヘラナデである。外面から器受内面に赤彩（焼成後）施す。4は、高環の脚部で脚部の1/3を欠き、据径11.4cmを測る。透孔は3孔で、径1.1cm。外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。外面は、赤彩（焼成後）を施す。5は、ミニチュア土器で、下半のみ残存し、底径3.5cmを測る。外面指頭によるナデ、内面ヘラナデで、輪積み痕を残す。

第70号住居址（第72図）

本址は、調査区中央北寄りに位置し、北東側に第69号住居址、南側に第66号住居址、6号土塗が隣接して存在する。規模は、410×342cm測り、東北東～西南西に長軸を有する隅丸長方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は8～19cmを測る。床面は、やや凹凸があり、貼床で壁周辺は軟弱といえる。柱穴、壁溝は、検出されなかった。南西隅近くに貯蔵穴と考えられるP₁が検出された。北から東側に段を持つ二段構造で、上面径60×57cmのいびつな隅丸方形を呈し、底面は径35×28cm、深さは27～35cmを測る。炉址は、中央北西壁寄りに位置し、径約60cmの円形を呈す。地床炉に近く、火床面は良く焼けている。

出土遺物（第72図）

1は、壺形土器で、口唇部、脚部の1/3を欠く。口径17.4cm、底径6.3cm、最大径26.7cm、器高24.0cm、球胴形で底部やや突出ぎみである。口縁部横ナデ、胴外表面及び脚部の内外面はハケナデ、胴内面ヘラナデで、外面下半、脚部内面はハケナデ後ヘラナデを加える。外面上半にはスヌが付着し、内面底部には煮沸によるコゲが付着する。2は、器台形土器で、口縁と脚部の一部を欠き、口径8.9cm、据径11.6cm、器高8.8cmを測る。透孔は3孔で径約1.3cmを測る。口唇外表面と脚

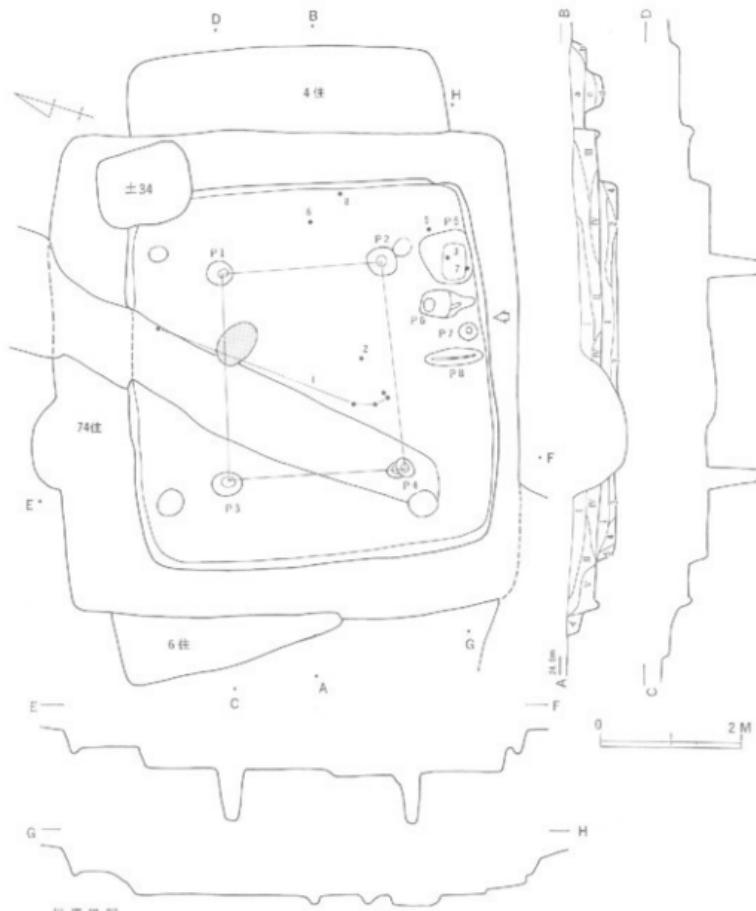


第72図 第70号住居址実測図

部内面横ナデ、脚部内面ヘラナデの他はヘラミガキである。脚部内面を除いて赤彩（焼付）を施す。3は、台形土器で台部分を欠き、裾径11.7cm、現存高8.8cmを測る。外面指頭による整形後まばらにヘラナデ、内面指頭によるナデ調整である。内面には輪積み痕を明瞭に残す。

第71号住居址（第73図）

本住居址は、調査区の南西部に位置する。周辺部には住居址・土塙が集中し、2号古墳も存在する。2号古墳の周溝及び北東隅を34号土塙に切られ、上部には第74号住居址が構築されている。第4号・6号住居址とも重複するが、新旧関係は判明しない。規模は、545×520cmで、北北西—南南東に主軸を有する隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は第74号住居址床面より約30cm、ローム面からは約60cmを計る。床面は直床で、壁周辺を除いて堅緻である。壁溝は、廻らされていない。柱穴は、住居址の対角に4本の主柱穴が検出された。径28~42cm、深さ約75cmと4本ともしっかりしている。P₁は、南東隅寄りに位置し、径76×70cm、深さ約15cmの隅丸方形のピットで、貯蔵穴と思われる。貯蔵穴の左側、南東壁の中央壁下にP₂・P₃の溝状のピットとその間にP₄が検出され、入口部の施設と考えられる。炉址

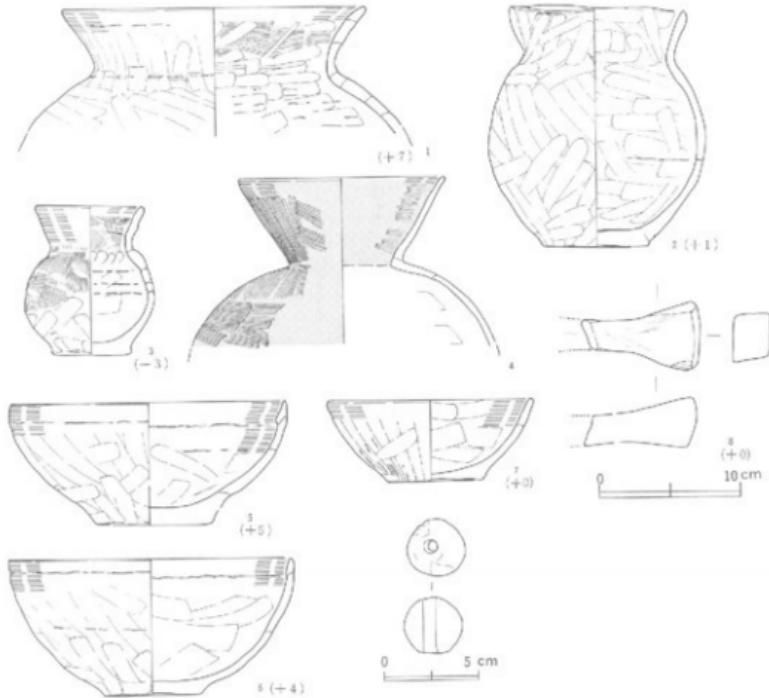


層序図

- I 加利色土 (粘土質土多く含みローム粒多く含む)
- II 滞泥色土 (黒褐色土を含みローム粒多量に含む)
- III 滞泥色土 (ローム粒多量に含みやや堅硬である)
- IV 滞泥色土 (ローム土半含みやや堅硬を含む堅性ある)
- V 滞泥色土 (ローム粒をやへ多く含み、末炭粒を少含む)
- VI 滞泥色土 (ローム粒、ローム塊を含む)
- 7 滞泥色土 (ローム土を多く含み、やや堅硬を含む)
- 8 滞泥色土 (やや堅い黒褐色土を含みローム粒を少含む)
- 4 加利色土 (ローム粒多量に含む)
- 5 滞泥色土 (黒褐色土を多く含みローム粒を少含む)
- 6 滞泥色土 (ローム粒多量に含み4層より高い)

- a 滞泥色土 (ローム粒多く含み、液化板を数箇に含む)
- b 滞泥色土 (やや大粒のローム粒を含み、e層よりやや堅い)
- c 滞泥色土 (滯泥色土にローム粒を含む)
- d 滞泥色土 (ローム土を多量に含み、やや堅硬を含む)
- e 滞泥色土 (深褐色土を少含む)

第73図 第71号住居址実測図(1)

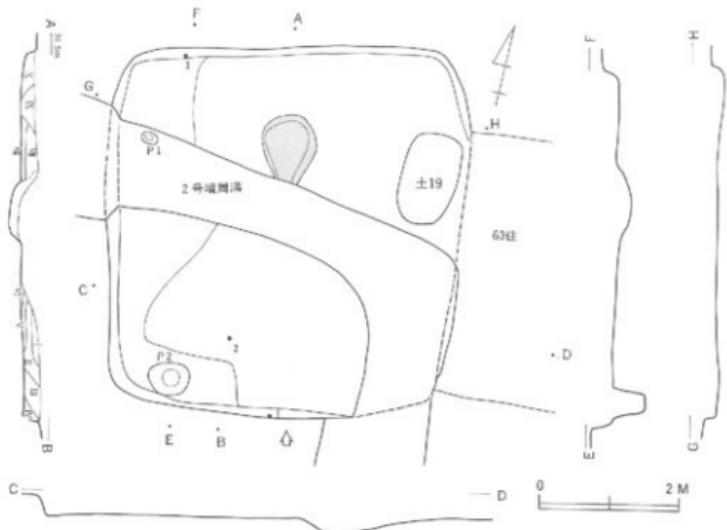


第74図 第71号住居址実測図(2)

は、中央北寄りに位置し、西側は2号古墳の周溝に切られ、径69×47の楕円形を呈している。地床炉に近く、火床面は良く焼けており、五徳に利用したと思われる土器片が立てられていた。

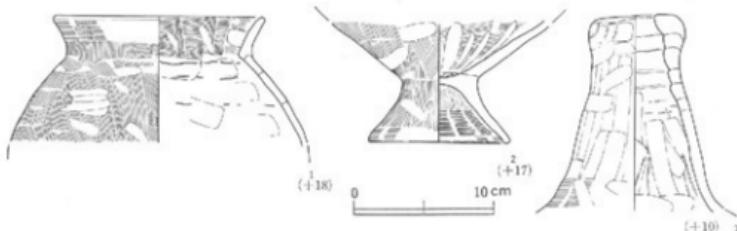
出土遺物（第74図）

1は、壺形土器で、口縁部1%、頸部6%を残存し、口径21.5cmを測る。口唇部横ナデの他はヘラナデが最終調整で、頸部外面に一部と内面の口縁下半にハケ目を残す。2は、小型壺形土器で一部を欠き、口径12.4cm、最大径15.3cm、底径7.4cm、器高約17.0cmで口縁はかなり垂む。整形は非常に難で、外面ヘラケズリ→ヘラナデ→指頭によるナデ、内面ヘラナデで、口縁外面に、指紋。3は、小型壺形土器で完存する。口径7.7cm、底径5.7cm、器高10.7cmを測る。整形は外面の口縁横ナデ、胴上半ハケナデ、下半ヘラナデで一部にハケ目残し、内面の口唇横ナデ、口縁ハケナデ、胴部ヘラナデ。4は、壺形土器で上半を残存し、口径14.6cmを測る。口唇横ナデ、胴内面ヘラナデの他はヘラミガキ。外面から口縁部の内面に赤彩（焼付）施す。5～7は、鉢形土器である。5は口径19.2cm、底径8.1cm、器高8.7cm。6は口径20.1cm、底径6.8cm、器高9.8cm。



層序説明

- I 暗褐色土（ローム粒を少含み、致密である）
- II 黒褐色土（暗褐色土を含み、ローム粒を多く含む）
- III 緑褐色土（ローム粒を多量に含む）
- IV 緑褐色土（ローム粒、灰褐色土を多く含む）
- V 緑褐色土（ローム粒を少含む）
- VI 灰褐色土（ローム粒を少含みしおい）
- VII 灰褐色土（切るといローム粒を多く含む）
- VIII 灰褐色土（黒褐色土を含み、やや暗くローム粒を少含む）
- IX 緑褐色土（ローム粒を多量に含む）
- X 灰褐色土（底面ロームを含む）



第75図 第72号住居址実測図

7は口径14.7cm、底径6.55cm、器高5.8cmを測る。整形は、3点とも口縁部横ナデ、体部はヘラケズリ→ヘラナデである。5・6は、口縁部を粘土紐の貼付により描出している。8は砥石で $\frac{1}{2}$ を欠。良く使用され、5面とも察痕が認められる。9は土玉で径31mm、高さ30mm、孔径8mm。

第72号住居址（第75図）

本住居址は、調査区南西部の住居址集中部分に位置する。2号古墳の北東隅部分の周溝により中央部を切られ、東側は第63号住居址と19号土塙に切られている。規模は、北北西-南南東

が531cm、東北東－西南西が約510cmを測り、隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高15～30cmを測る。床面は、貼床であるが西壁側を除いて堅緻である。柱穴溝は、全く検出されなかった。北西隅寄りの2号古墳周溝下よりP₁が検出されたが、本址に伴うピットではない。P₁は、南西隅寄りに位置し、径55×44cm、深さ46cmの隅丸方形を呈するピットで、貯蔵穴と考えられる。炉址は、中央北寄りに位置し、南側を2号古墳の周溝に切られている。地床炉に近い竪穴炉で、炉底は約4cm掘り進められ良く焼けている。

出土遺物（第75図）

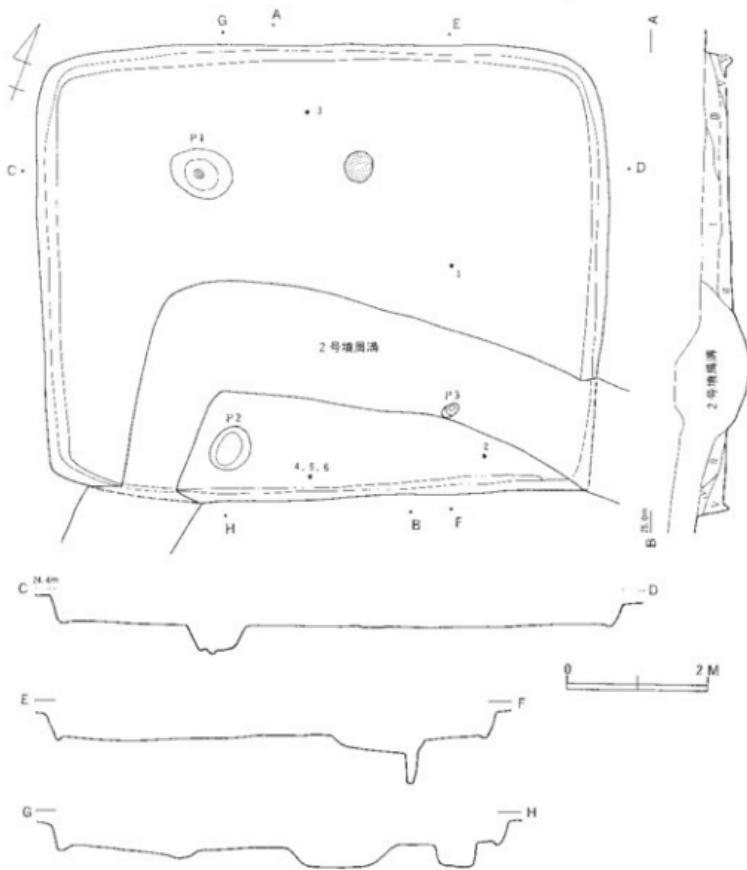
1は、菱形土器で上半の約½を残存し、口径15.0cmを測る。整形は、外面の口縁部ハケナデ→横ナデ、頸部から副部及び口縁部内面ハケナデ後一部指頭によるナデ、胴部内面丁寧なヘラナデである。口縁の外面に一部スス付着。台付壺の台部で、色調及びハケ状T工具の違いはあるが1と同一個体と思われる。底径約10.0cmを測る。整形は、裾部が横ナデの他は、外面が継、内面が横方向のハケナデで、胴部は指ナデを加える。ハケ状工具は、1よりはやや粗い。3は、異形器台形土器で裾部を欠き、口径約6.0cmを測る。粘土紐の巻き上げで器受部を形成する粗略化したもので、器受部での孔径は約3.0cmである。裾部外面に横ナデが認められるが、他は雑なヘラナデで、指頭によるナデを加えている。

第73号住居址（第76図）

本住居址は、調査区の南西部に位置し、2号古墳の北西隅周溝によって切られている。住居址との重複はないが、西側に第78号・79号住居址、東側に第72号住居址が近接して存在する。規模は、807×650cmを測り、東北東－西南西に長軸を有する隅丸長方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は30～37cmを測る。床面は、貼床であるが全体的にやや軟弱といえ、あまり踏みしめられていない。壁溝は、幅8～18cm、深さ約4cm程度ではほぼ全周する。ピットは、P₁～P₃の3本が検出されたが、P₁・P₂は本址に伴うか否か不明である。P₃は、南東壁側の中央西寄りに位置し、径65×51cm、深さ約30cmを測り、貯蔵穴と思われる。炉址は、中央北西壁寄りに検出された。径38×44cmのほぼ円形の地床炉で、炉底はあまり焼けていない。

出土遺物（第77図）

1は、菱形土器で胴下半を欠き、口径20.0cm、最大径29.85cmを測る。球胴形で口縁部はくの字状に外反する。口唇部横ナデ、外面及び口縁部内面ハケナデ、胴部内面丁寧なヘラナデである。ハケ目は、外面の頸部が継で他は横である。胴部外面に一部スス付着。2は、壺形土器で口縁部を欠く。底径5.6cm、最大径16.7cm。整形は、外面ヘラミガキ、一部ハケ目残し、内面はヘラナデである。胴部内面を除いて赤彩を施す。3は、高壺形土器で口縁と裾部の一部を欠く。口径19.6cm、裾径11.0cm、器高10.05cmを測る。整形は、口縁及び裾部横ナデ、外面ハケナデ、一部指頭によるナデ、内面ヘラナデで、壺部内面はミガキ風になる。4・5は塊形土器である。4は一部を欠き、口径12.8cm、底径2.5cm、器高7.0cmを測る。底部やや上げ底。口縁部横ナデ、

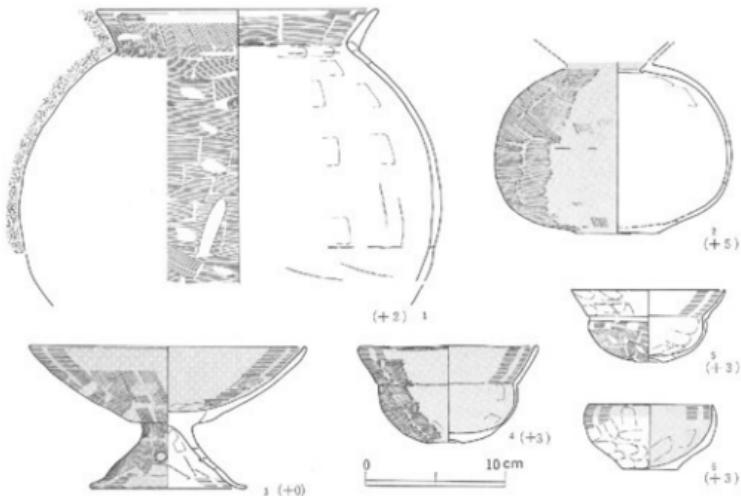


層序説明

- I. 淡褐色土（ローム粒や多く含み、しまり無い）
- II. 黄褐色土（粘土質、ローム土、多量に混入）
- III. 粘土質土（黒褐色土混入、ローム粒多量に含む）
- IV. 黑褐色土（粘土質土混入、口縁より稍り深い）
- V. 粘土質土（ローム土多く混入、やや黄褐色を帯びる）
- VI. 黑黃褐色土（黒褐色土にローム土混入）

第76図 第73号住居址実測図(1)

外面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ。内外面に赤彩（焼成後）を施すが内面は器面の剥落によりハゲている。5は一部を欠き、口径10.8cm、底径1.85cm、器高5.1cmを測る。口縁外面と体部内面ヘラナデ、体部外表面ハケナデ、口縁内面横ナデ。外面頸部は、竹管で沈線施す。6は鉢形土器で $\frac{1}{2}$ 残存。口径8.7cm、底径3.8cm、器高4.7cm。口縁横ナデの他ヘラナデ。口縁部に赤彩施す。



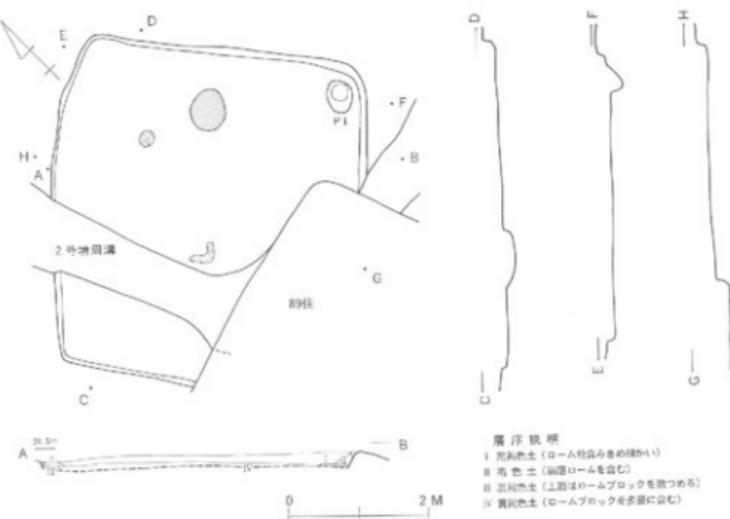
第77図 第73号住居址実測図(2)

第75号住居址（第78図）

本址は、調査区の西側に位置し、南側を第89号住居址によって切られ、更に2号墳の南西コーナー部周溝が重複している。規模は、 $482 \times 445\text{cm}$ を測り、主軸方向を、北東—南西に有する隅丸長方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10~18cmを測る。床面は、ほぼ全面に亘ってロームブロックで貼り床を形成している。したがって、やや軟弱であり、部分的に掘りすぎてしまっている。柱穴、壁溝は、まったく検出されなかった。東側コーナー部に、 $45 \times 35\text{cm}$ 、深さ20cmの隅丸方形を呈するピットが検出され、位置、形状より貯蔵穴と思われる。炉址は、北東壁寄りの中央に位置し、径 $60 \times 50\text{cm}$ の楕円形を呈する地床炉で、火床面は良く焼けている。出土遺物は、小片のみで、実測しえるものはなかった。

第76号住居址（第79図）

本址は、1号墳の墳丘下に検出され、重複関係はない。南側には第10号住居址が隣接している。規模は、 $575 \times 520\text{cm}$ を測り、北東—南西にやや長い隅丸長方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は19~26cmを測る。覆土は、上部に黒褐色土、下部に暗褐色土が堆積しており、上部には焼土を多く混入する。床面は、ほぼ全体的に貼床されているが堅緻である。ピットは、住居址のほぼ中央にP₁と南東壁の東寄りにP₂の2本が検出された。深さもあり、しっかりしているため柱穴と考えられる。壁溝・貯蔵穴は、検出されなかった。炉址は、住居址の中央から北寄りにかけて、5ヶ所の痕跡が検出され、度々造り替えられている。



第78図 第75号住居址実測図

地床炉に近い竪穴炉で僅かに窪んでおり、火床面は良く焼けている。炉址は、E→C→D→B→Aの順で造り替えられたものと判断する。南東壁側の床面が特に堅緻で、入口部と思われる。
出土遺物（第79図）

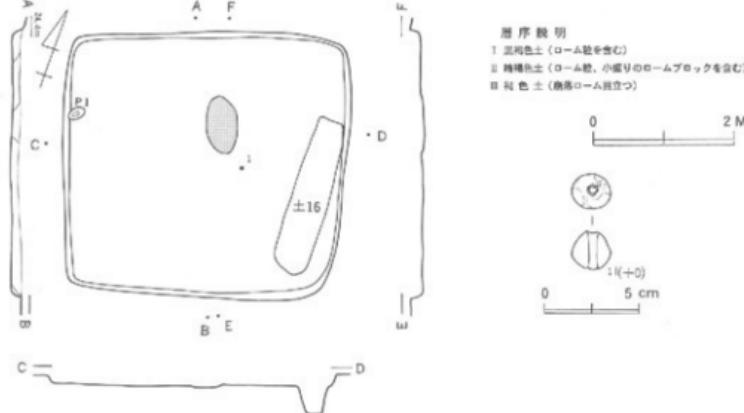
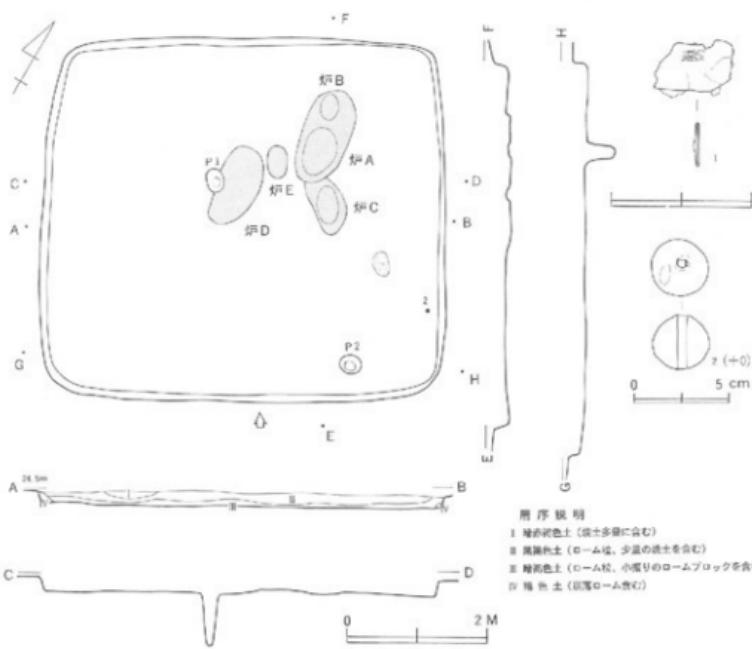
本址からは、刀子片と土玉の他は、土師器小片が數点出土したのみである。1は、刀子の残欠で刃幅3.1cm、峰幅0.2cmを測る。一部に布痕が付着している。2は、土玉で、径30mm、孔5mmを測る。焼成良好である。

第77号住居址（第80図）

本址は、2号墳の北側に位置し、他住居址との重複はない。周辺部には、第62号・73号住居址が隣接して存在する。住居址の東壁側には、縄文時代の第16号土塗が存在しており、土塗上部に貼り床している。規模は、北東—南西が405cm、北西—南東が380cmを測る隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約15cm程度である。覆土は、ローム粒を含む黒褐色土である。床面は、貼り床でやや軟弱といえ、凹凸がある。柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。炉址は、中央やや北西壁寄りに位置し、径83×44cmの梢円形を呈する地床炉で、火床面は僅かに窪んで良く焼けている。

出土遺物（第80図）

本址からの出土遺物は、土玉の他は小片である。1は、土玉で径20.5mm、孔径6mmを測る。



第78号住居址（第81図）

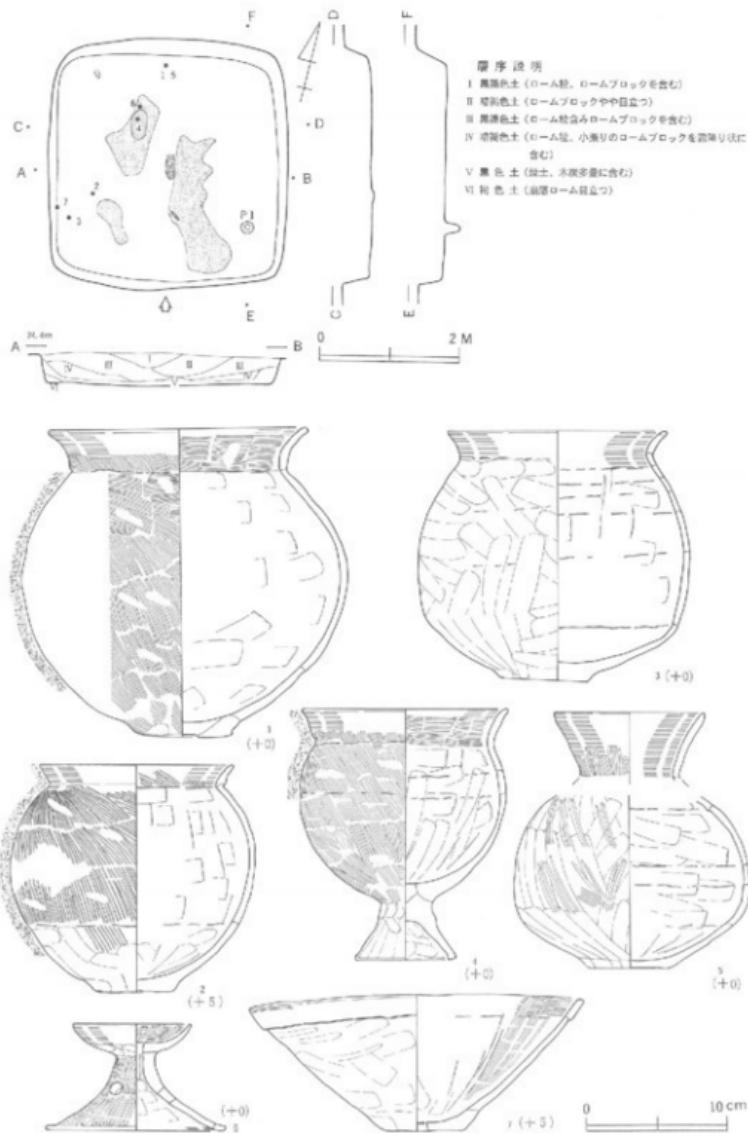
本住居址は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。付近に第78号住居址が所在する。規模は $363 \times 343\text{cm}$ を測り、長軸方向を北々西～南々東に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高40cmを測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。柱穴は1本検出され、主柱穴と思われる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は廻らせていない。炉址は床面中央北寄りに位置し、規模は $48 \times 22\text{cm}$ を測り、地床炉で炉底は良く焼けている。本址は火災住居であり、床面より少し浮いて焼土と炭が分布する。これは炉址の周囲と床面中央付近に顯著である。廻り後に建築廃材を集積して火を付けたものと思われ、その後は埋め戻しを行なっている。

出土遺物（第82図）

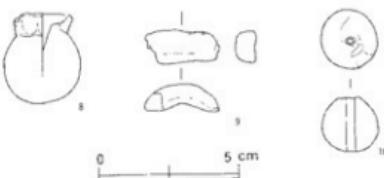
1～4は壺形上器である。1はほぼ完存品で口径18.3cm、最大径23.2cm、底径6.7cm、器高22.1cmを測る。底部は貼付の上底で、胴部は球状に膨む。器外面はハケナデ後、口縁上半はヨコナデ。口縁はハケナデ後ヨコナデ、胴内面はていねいなヘラナデ。2は胴部の一部を欠く。口径13.7cm、最大径17.3cm、底径5.7cm、器高11.3cm。器外面はサラサ状工具によるナデ後、口縁はヨコナデ、胴下半はヘラナデ。口縁内面はハケナデ後ヨコナデ、胴内面はヘラナデ。3は完存品。口径15.6cm、最大径19.2cm、底径6.2cm、器高17.9cm。最大径は胴下半に有する。口縁外面ともヨコナデ、胴外面はヘラケズリ後ヘラナデ。胴内面はヘラナデ。4は台付甌。胴部の一部を欠く。口径14.7cm、台径7.2cm、器高18.1cm。器外面はハケナデ後、口縁部はヨコナデ。台部外面はヘラナデ。口縁内面はハケナデ後、上半はヨコナデ。胴内面は单位の大きなヘラナデ、台部内面は指頭によるナデ。5は壺形土器で、頸部を欠き、口縁 $\frac{1}{2}$ 、胴部 $\frac{1}{4}$ 残存。口縁はヨコナデ後、外面頸部付近はヘラミガキ。胴外面はハケナデ後、ヘラナデを施し部分的に継ぎのヘラミガキ。胴内面はヘラナデ。6は器台形土器で、器受部の $\frac{1}{4}$ と握部の $\frac{1}{2}$ を欠く。口径8.4cm、握径10.8cm、器高7.5cm。器受部は外縁を有さず立ち上がる。器受部外面はヘラナデ後ヨコナデ。内面はヨコナデ後ヘラミガキ。脚部はヘラナデ後ヘラミガキ。脚部内面はヘラナデ。透孔は3孔穿つ。7は瓶形土器で、完存品。一孔式で鉢形を呈し、口縁は貼付による複合口縁。口縁外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後、ヘラナデ。胴部は外面ともヘラナデ。8はミニチュアの壺形土器で、ほぼ完存品。口径19mm、最大径27mm、孔径6mm、器高33mm。粘土球による体部に粘土紐貼付による口縁部を有し、断面逆円錐形の未貫通孔を穿つ。9は匙形土製品の柄部である。長さ26mm、厚さ7mm。10は土玉で径30mm、高さ29mm、孔径5mm。

第79号住居址（第83図）

本住居址は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。付近に第73号住居址が所在する。規模は $430 \times 388\text{cm}$ を測り、長軸方向を北西～南東に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高10cmを測る。床面は貼床で中央部は堅緻である。柱穴は1本検出され、主柱穴と思われる。P₁は南西コーナーに位置し、規模は $50 \times 45\text{cm}$ 、深さ29cmを測る貯蔵穴である。



第81図 第78号住居址実測図(1)



第82図 第78号住居址実測図(2)

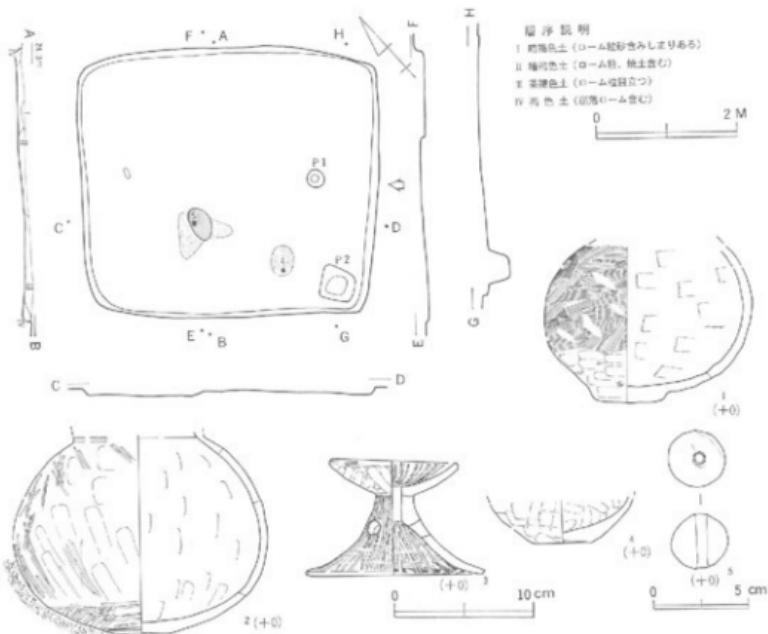
壁溝は残させていない。炉址は床面中央西寄りに位置し、地床が炉底は良く焼けている。本址は火災住居であり、床面よりやや浮いて焼土が分布し、特に炉址の周間に顯著である。覆土は自然堆積であった。

出土遺物（第83図）

1は壺形土器で、口縁部を欠き、胴部の $\frac{1}{2}$ が残存する。最大径14.7cm、底径5.2cmの器形はかなりいびつで、最大径を胴中位に有し、胴部は球状に膨む。器外面はハケナデ後、胴下半はややていねいなヘラナデ。胴内面はヘラナデを施す。2は壺形土器で、頸部以上を欠き、胴部の $\frac{1}{2}$ 残存。最大径18.0cm、底径3.7cm。底部は上底で、胴部は球状に大きく膨む。器外面はヘラナデ後、胴上半はややまばらなヘラミガキ、胴下半はていねいなヘラミガキ。器内面はヘラナデを施す。3は器台形土器で、器受部の $\frac{1}{2}$ を欠くのみ。器受部は外縁を有し、口縁は内傾気味に立ち上がる。脚部に透孔を3孔穿つ。器受部外面はヘラナデ、脚部外面はヘラケズリ後、ややていねいなヘラミガキ。器受部内面はヘラナデ後ヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ→ハケナデ→ヘラミガキを施す。4は鉢形土器であろうか。全体の $\frac{1}{2}$ 残存。底径4.0cm。底部は上底で外反気味に立ち上がる。器外面はヘラケズリ後ややていねいなヘラナデ。器内面はヘラナデを施す。5は土玉で、径30mm、高さ29mm、孔径6mmを測る。

第82号住居址（第84図）

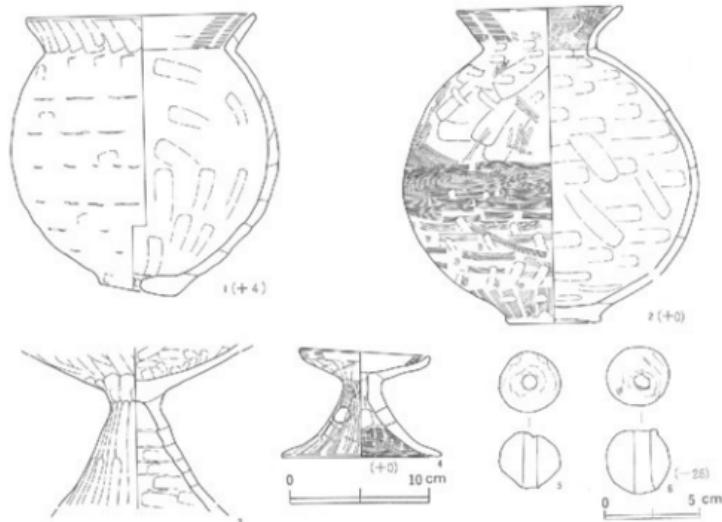
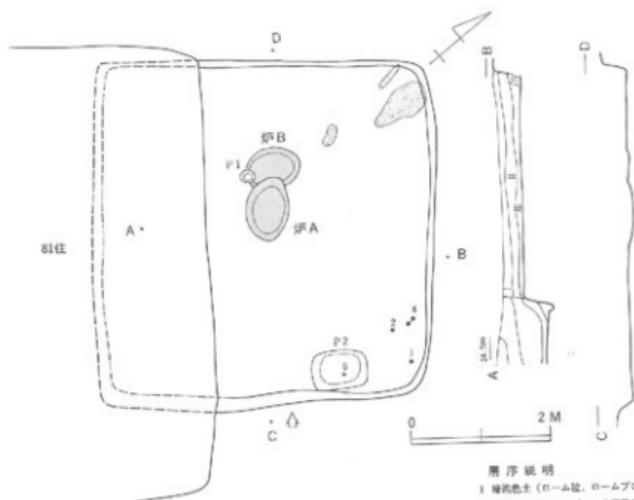
本住居址は調査区西側南寄りに位置し、第81号住居址に $\frac{1}{2}$ を切られる。規模は一辺500cmを測り、長軸方向を北西—南東に持つ隅丸方形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高21cmを測る。床面は貼床で全体に堅緻である。柱穴は1本検出され、これは炉Bを切って掘り込まれているため、新期の柱穴と考えられる。P₁は規模80×57cm、深さ41cmを測る貯蔵穴で、隅丸長方形を呈する。炉址は床面の中央北寄りに位置し、新旧2基が存在し、いずれも地床炉に近い竪穴炉で、炉底は良く焼けている。炉B→炉Aの順で新しくなる。炉Bは長軸を北東—南西に持つ梢円形プランを呈する。炉Aは長軸を北西—南東に持つ梢円形プランを呈し、炉Bを破壊して掘り込まれている。本址は火災住居であり、床面よりやや浮いて焼土・炭化材が分布し、特に北コーナーに顯著である。覆土のⅢ層以下は自然堆積であるが、I、II層は埋め戻しの土壤であり、ロームブロックの混入が目立つ。



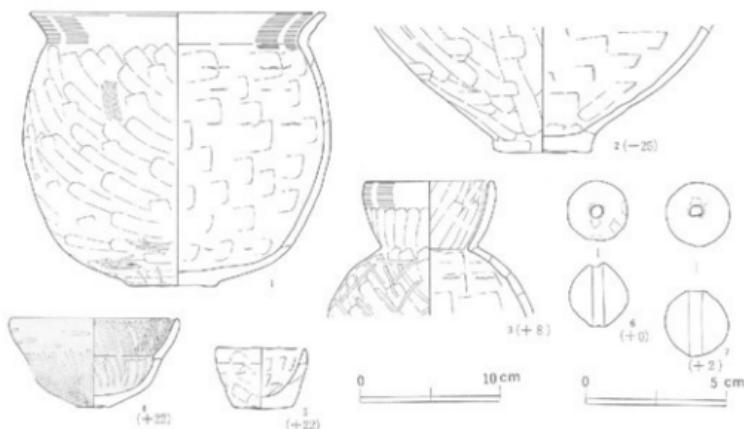
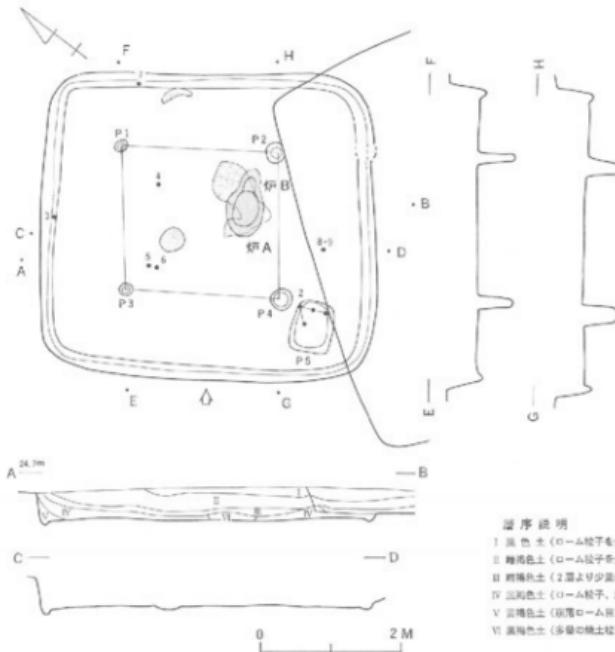
第83図 第79号住居址実測図

出土遺物（第84図）

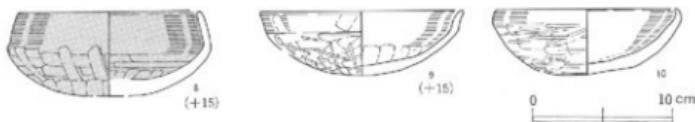
1は瓶形土器で、ほぼ完存品。口径16.0cm、最大径18.9cm、底径5.5cm、孔径0.5cm、器高20.0cm。最大径を胴中位に有し、口縁は外反する。全体にいびつな作りで、底部穿孔は焼成後である。口縁外面はヘラケズリ、胴外面はヘラナデ。口縁内面はヨコナデ、胴内面はヘラナデを施し、全体に風化が著しい。2は壺形土器で、口縁・底部の一部を欠く。口径11.4cm、最大径21.0cm、底径6.8cm、器高22.6cm。底部は上位で、胴部は球状に膨み、口縁は外反する。器外面はハケナデ後、口縁はヨコナデ。胴上半はヘラケズリ→ヘラナデ→ヘラミガキ。胴下半は疊なヘラナデ。口縁内面はハケナデ後ヘラミガキ。胴内面はヘラナデ。3は高環形土器で、环部下半と脚部の%残存。現存高11.6cm。环部外面と胸部内面はヘラケズリ、环部内面と脚部内面はヘラナデ。4は器台形土器で、ほぼ完存品。口径9.1cm、器高11.3cm、器高7.8cm。器受部は浅く外縁を有して立ち上がり、脚部に透孔を3孔有する。器受部外面上半はヨコナデ、下半はヘラナデ後ヘラミガキ。脚部外面はヘラナデ後ヘラミガキ。器受部内面はヘラミガキ。5・6は土玉で、5は径32mm、高さ31mm、孔径8mm。6は径33mm、高さ34mm、孔径9mm。



第84図 第82号住居址実測図



第85図 第84号住居址実測図(1)



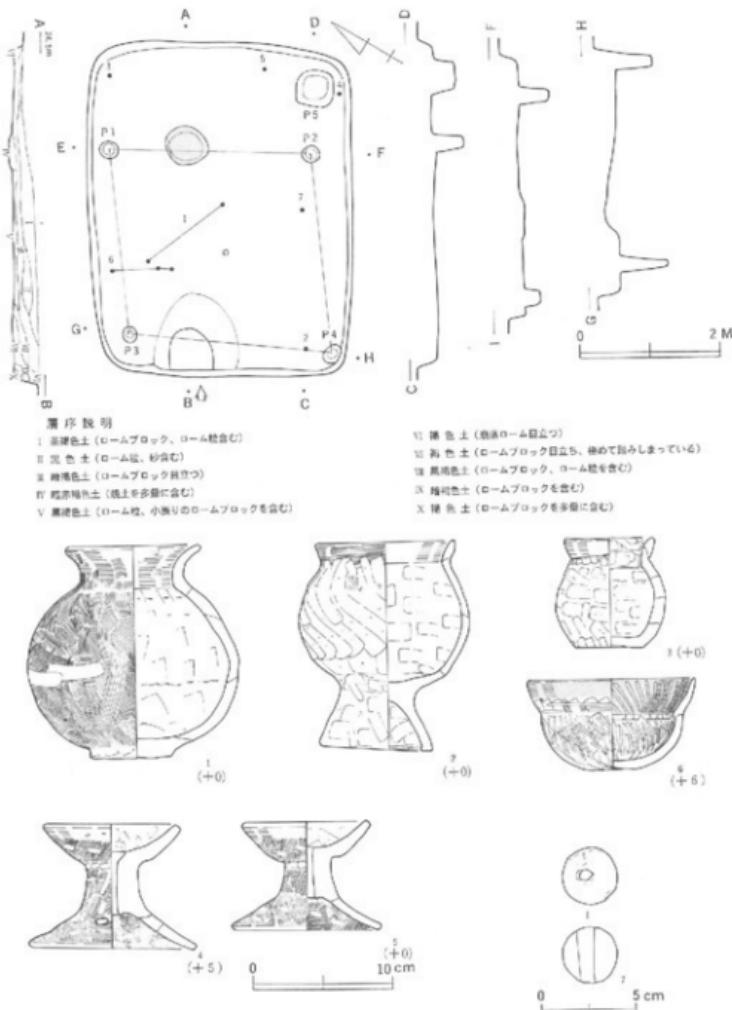
第86図 第84号住居址実測図(2)

第84号住居址（第85図）

本住居址は調査区南側に位置し、第83号住居址が貼床する。規模は483×440cmを測り、長軸方向を北々西—南々東に持つ隅丸方形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、壁高48cmを測る。床面は貼床で中央部は堅壁である。柱穴は4本検出され、位置的・規模的に見てそのいずれもが主柱穴である。P₄は南西コーナーに位置し、規模は75×59cm、深さ23cmを測る貯蔵穴である。壁溝は断面U字形を呈し、全周する。炉址は3基検出され、いずれも地床炉に近い堅穴炉で、炉底は良く焼けている。炉A、Bは切り合っており、炉Aが炉Bを切る。本址も火災住居の可能性があり、炉A・B周辺に焼土が見られる。覆土は自然堆積である。遺物は土玉と第85図2（貯蔵穴内）を除いて、他は埋没途上の廃棄である。第86図8～10は時期的に見て鬼高式期に比定でき、かつ第83号住居址のプラン内に納まるため、本来的には同住居址に伴なうものと考えたい。貼床部分でしかも壁周辺のために下部に食い込んだものと思われる。

出土遺物（第85・86図）

1～2は壺形土器である。1は全体の $\frac{1}{2}$ 残存。口径20.6cm、最大径21.6cm、底径6.3cm、器高19.5cm。口縁内外面ともヨコナデ。胴外面はヘラケズリ→ヘラナデ→一部ヘラミガキ。胴内面はヘラナデを施す。2は胴下半の $\frac{1}{2}$ 残存。底径7.0cm。胴外面はヘラケズリ後ヘラナデ、底部付近はヘラケズリ。胴内面はヘラナデ。3は壺形土器で、肩部以上の $\frac{1}{2}$ 残存。口径9.0cm、最大径14.4cm。最大径を肩部に有し、口縁は内傾気味に立ち上がる。口縁内面はヨコナデ、頸部はヘラナデ、肩部はヘラナデ後ヘラミガキ。器内面はヘラナデを施す。4は鉢形土器で、全体の $\frac{1}{2}$ 残存。口径11.7cm、最大径12.0cm、底径2.2cm、器高6.3cm。器外面の最終調整はヘラミガキ。口縁内面はヨコナデ後ヘラミガキ、体部内面はヘラミガキを施し、器内外面とも赤彩を施す。5は手捏ね土器で、ほぼ完存。口径6.3cm、最大径6.5cm、器高4.3cm。鉢形を呈し、器外面は疎なヘラナデ。内面はややていねいなヘラナデ。6、7は土玉である。6は径32mm、高さ34mm、孔径7mm、7は径33mm、高さ35mm、孔径7mm。第86図8～10は环形土器である。8は全体の $\frac{1}{2}$ 残存。口径12.8cm、最大径14.4cm、器高6.1mm。外縁を有し、口縁は内傾して立ち上がる。口縁内外面ともヨコナデ。体部外面はヘラナデ。体部内面はヘラナデ。器内外面とも焼成後の赤彩を施す。9は全体の $\frac{1}{2}$ 残存。口径14.2cm、最大径14.4cm、器高4.5cm。口縁外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ。10は全体の $\frac{1}{2}$ 残存。口径12.7cm、最大径13.4cm、器高4.7cm。口縁外面はヨコナデ。体部外面はヘラナデ後ヘラミガキ。体部内面はナデ。



第87図 第85号住居址実測図

第85号住居址（第87図）

本住居址は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。付近に第38号住居址が所在する。規模は481×377cmを測り、長軸方向を東北東－西南西に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁は

垂直に立ち上がり、壁高25cmを測る。床面はほぼ全面的に貼床で、堅綴である。柱穴は4本検出され、位置的・規模的に見ていずれも主柱穴である。P₁は南西コーナーに位置し、規模は50×52cm、深さ33cmを測る貯蔵穴。壁溝は廻らせていない。炉址はP₁とP₂の中間に位置し、地床炉に近い壺穴炉で、炉底は良く焼けている。他に内部施設としては、西辺に設けられた出入口がある。これは、貼床様に土を盛り上げてマウンドを形成したもので、上面は極めて踏みしまっている。本址は廃屋直後に土器類の投棄を行ない、しかる後に埋め戻しを行なっているが、その過程でも土器類の投棄が見られる。第87図1の壺形土器は、肩部で二つに打ち欠いた後、別々に廃棄したものであり、接合距離は132cmを測る。同図5は床面上への遺棄と思われる。

出土遺物（第87図）

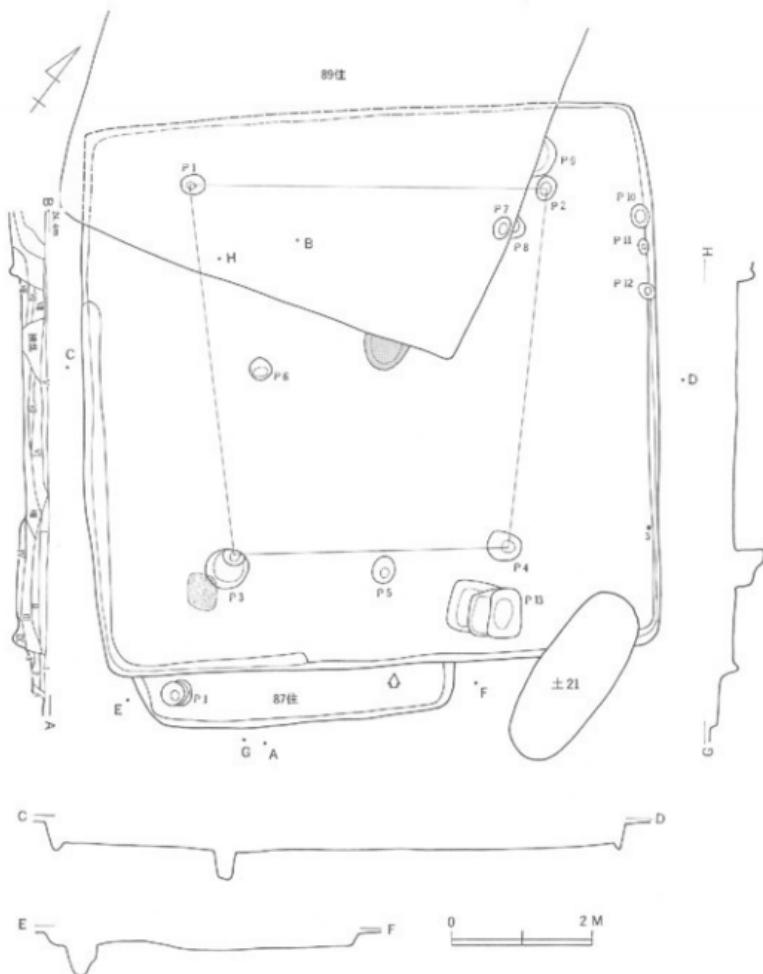
1は壺形土器で完成品。口径9.1cm、最大径14.9cm、底径5.8cm、器高15.1cm。胴部は球状に膨み、口縁は外反する。口縁外面はヨコナデ後ハケナデ、胴外面はハケナデ後、疎なヘラケズリ。口縁内面はヨコナデ、胴内面はヘラナデ。2は台付壺形土器で、胴部の1/3欠損。口径は9.7cm、最大径11.7cm、脚径7.0cm、器高15.1cm。全体にいびつな作りで、口縁外面はハケによるヨコナデ、胴外面はハケナデ後、ヘラケズリ、脚部外面はヘラナデ。口縁内面はヨコナデ、胴・脚部内面はヘラナデ。3は小型壺形土器で完成品。口径6.1cm、最大径7.8cm、底径4.9cm、器高7.8cm。口縁外面はヨコナデ、胴外面はヘラナデ。口縁内面はヘラケズリ、胴内面は指ナデ。4～5は器台形土器である。4は口径9.1cm、裾径11.8cm、器高9.1cm。脚部に透孔を2孔穿つ。器受部外面はハケナデ後、口縁はヨコナデ、以下は疎なヘラケズリ、脚部外面はヘラケズリ後、ハケナデ、裾部外面はハケナデ。器受部内面はヘラケズリ、裾部内面はハケナデ。5も完成品。口径8.6cm、裾径10.6cm、器高7.7cm。器受部外面はハケナデ後、口縁はヨコナデ、脚部外面はヘラケズリ後ハケナデ、裾部外面はハケナデ。器受部内面はヘラケズリ、裾部内面はハケナデ。6は鉢形土器で、全体の1/3残存。口径11.7cm、底径3.5cm、器径6.5cm。口縁外面はヨコナデ、頸部はハケナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、体部内外面ともヘラミガキ、口縁内面はヨコナデ後ヘラミガキ。7は土玉で、径29mm、高さ30mm、孔径9mm。穿孔はいびつ。

第87号住居址（第88図）

本住居址は調査区西側に位置し、第88号住居址に大半が破壊される。規模は一辺462cmを測る。平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形と思われる。床面は貼床で、全面的に堅綴である。柱穴は1本検出された。形状から見て掘り返しの可能性がある。壁溝は廻らせていない。残存部分からは炉址等の他の内部施設は検出されなかった。覆土は自然堆積で、遺物は土器片が出土地したが、図化できるものはなかった。

第88号住居址（第88図）

本住居址は調査区西側に位置し、第87号住居址を切り、第89号住居址・第21号土塙に切られる。規模は820×792cmを測り、長軸方向を北東-南西に持つ隅丸方形プランを呈する。壁は垂

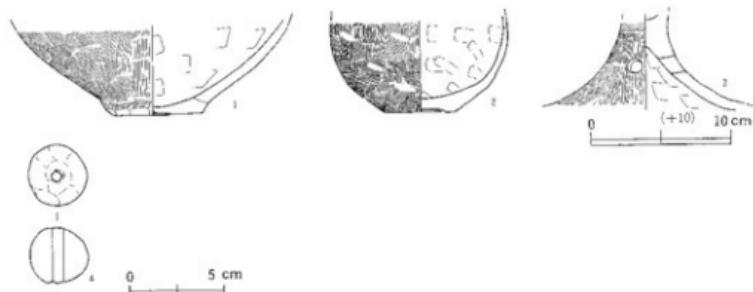


層序説明

- I 黒色土（ローム粒子を含み苔の緑かい）
- II 黒褐色土（ローム粒や苔立つ）
- III 滞留土（ロームブロック焼けり状に食む）
- IV 黒褐色土（ロームブロックを多面に含む）
- V 灰土
- VI 滞留土（ローム粒、小颗粒のロームブロックを含む）

- VI 滞留土（ロームブロック食む）
- VII 三段土（ローム底、ロームブロック食む）
- IX 灰色土（苔落ローム食む）
- 1 滞留土（ローム粒食む）
- 2 滞留土（ロームブロック食む）
- 3 滞留土（ロームブロック食む）
- 4 黑色土（苔落ローム食む）

第88図 第87号・88号住居址実測図



第89図 第87号住居址実測図

直に立ち上がり、壁高30cmを測る。床面は貼床で、全面的に堅緻であるが、特に炉址の周辺に顯著である。柱穴は12本検出され、P₁～P₄が位置的に見て主柱穴。P₅はP₁とP₂を結ぶ中間やや南寄りに位置し、梯子穴と思われる。他のピットは配置も不規則で、かつ規模的にばらつきがあり、補助柱穴と考えている。P₁₃は有段構造を呈し、貯蔵穴である。壁溝は断面U字形を呈し、西辺から南辺中央と東辺に廻らせていている。炉址は床面中央北寄りに位置し、地床炉に近い竪穴炉で、炉底は良く焼けている。覆土は9層に分層でき、土壤的に見て埋め戻してある。遺物は少なく、多くが小片の状態で覆土中より出土している。

出土遺物（第89図）

1は壺形土器である。底部完存、胴下半の $\frac{1}{2}$ 残存。底径5.8cm、現存高6.2cmを測る。底部は上底気味で器外面はハケナデ、底部下端のみヘラケズリ。胴内面はハケナデ後、疎なヘラナデを施す。2は壺形土器と思われる。胴下半の $\frac{1}{2}$ 残存。底径5.1cm、現存高6.5cm。底部は貼付による上底をなし、胴部は大きく球状に膨らむ。器外面の胴中位は縦方向、下半は横方向、底部附近は斜方向のハケナデ。器内面はヘラナデを施す。3は高環形土器で、脚部の $\frac{1}{2}$ 残存。脚径3.3cm、現存高6.8cmを測る。脚部に透孔を3孔穿つ。脚外面の脚部上端は縦方向のヘラミガキ、脚中位はハケナデ、下部から裾部にかけてはハケナデ後、極めて密なヘラミガキを施し、脚部内面はヘラナデを施す。4は土玉である。径31mm、高さ29mm、孔径6mm。粗製品である。

第90号住居址

本住居址は調査区中央北端に位置し、大半を駐車場建設により破壊されている。これは確認調査時に検出されていたものであるが、調査区端ということもあり、降雨による崩壊流出により完全に消滅してしまったものである。検出時に茶褐色土の覆土から五領式期に属する土器片を検出しているため、本報告では本期（古墳時代前期）に含めた。なお、実測図・写真等は間に合わせず、造構配置図のみ載せた。

（中野、越川）

b 土 坑

第2号土塙（第90図）

本土塙は調査区西側に位置し、付近に1号墳が所在する。他遺構との重複はない。規模は210×97cm、深さ36cmを測り、長軸方向を北東—南西に持つ楕円形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸が目立ち、底面中央に径20cm、深さ17cmのピットを1本穿つ。覆土は自然堆積で5層に分層でき、Ⅲ層中より土器片が出土した。

第18号土塙（第90図）

本土塙は調査区西側に位置し、第1号墳周溝に上部が破壊されている。規模は323×178cm、深さ90cmを測り、長軸方向を東—西に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁の下部はほぼ垂直に立ち上がり、上部はゆるやかで、底面は概ね平坦である。覆土の中位までは埋め戻しの土壤で、上部は黒色土系の草原土壤が堆積している。

第22号土塙（第90図）

本土塙は調査区中央南寄りに位置し、第54号住居址を切る。これは第54号住居址の埋没途中におけるものである。規模は76×73cm、深さ22cmを測り、不整円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は皿状に掘り込まれる。覆土は自然堆積である。

第23号土塙（第91図）

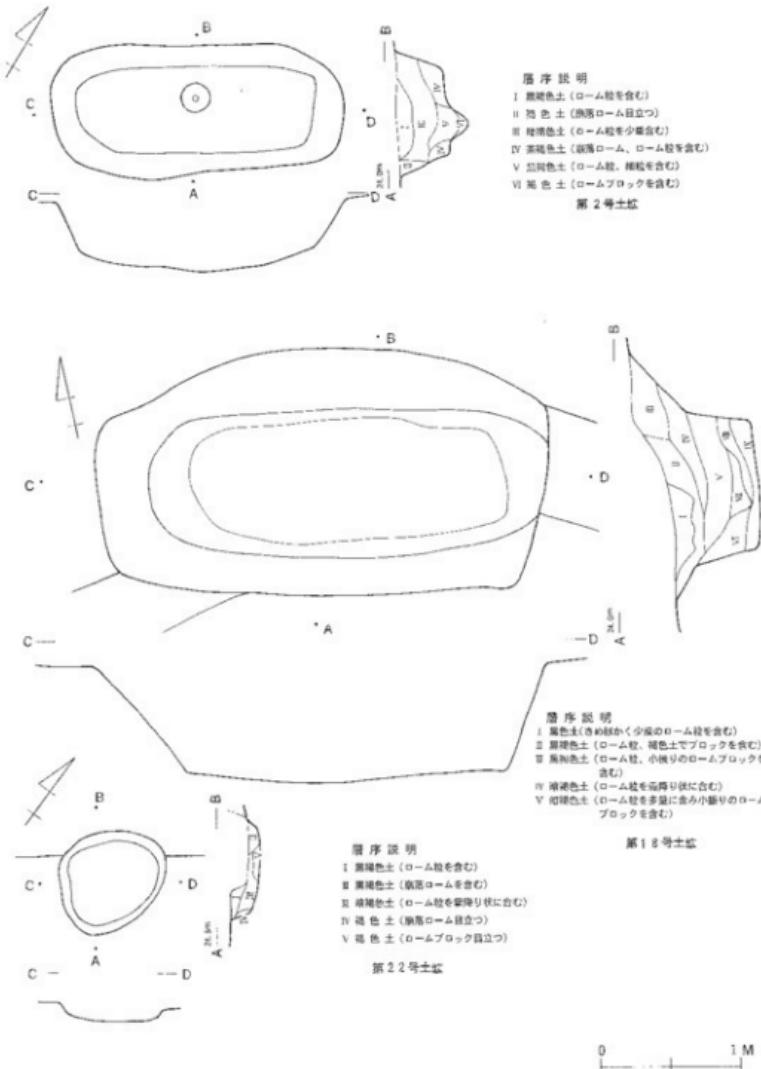
本土塙は調査区西側工場寄りに位置し、他遺構との重複はない。規模は105×85cm、深さ37cmを測り、長軸方向を北西—南東に持つ楕円形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は概ね平坦であるが、一段テラスを有する。覆土は自然堆積である。

第30号土塙（第91図）

本土塙は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。規模は129×85cm、深さ17cmを測り、長軸方向を西北西—東南東に持つ楕円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積で、第92図に示した土器が出土した。

第33号土塙（第91図）

本土塙は調査区中央西寄りに位置し、第74号住居址に切られる。規模は121×75cm、深さ70cmを測り、長軸方向を東北東—西南西に持つ楕円形プランを呈する。壁は北辺ではゆるやかに立ち上がり、南辺ではほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。覆土は茶褐色土の单一土層で、埋め戻しによる土壤と思われる。



第90図 各土壌実測図(1)

第36号土塗（第91図）

本土塗は調査区中央部に位置し、他遺構との重複はない。規模は $105 \times 88\text{cm}$ 、深さ16cmを測り、主軸方向を東一西に持つ橢円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は茶褐色の单一土層である。

第39号土塗（第91図）

本土塗は調査区中央南寄りに位置し、他遺構との重複はない。規模は $125 \times 121\text{cm}$ 、深さ20cmを測り、不整な円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸を有しながら、概ね平坦である。覆土は自然堆積で3層に分層でき、上層のI、II層は比較的堆積速度が遅かったことを示している。

第42号土塗（第91図）

本土塗は調査区北側西寄りに位置し、他遺構との重複はない。規模は $185 \times 78\text{cm}$ 、深さ36cmを測り、長軸方向を東北東一西南西に持つ橢円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積で4層に分層できた。

第45号土塗（第92図）

本土塗は調査区中央西寄りに位置し、他遺構との重複はない。規模は $198 \times 64\text{cm}$ 、深さ23cmを測り、長軸方向を北々西一南々東に持つ橢円形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸に富む。覆土は自然堆積で3層に分層できた。

第58号土塗（第92図）

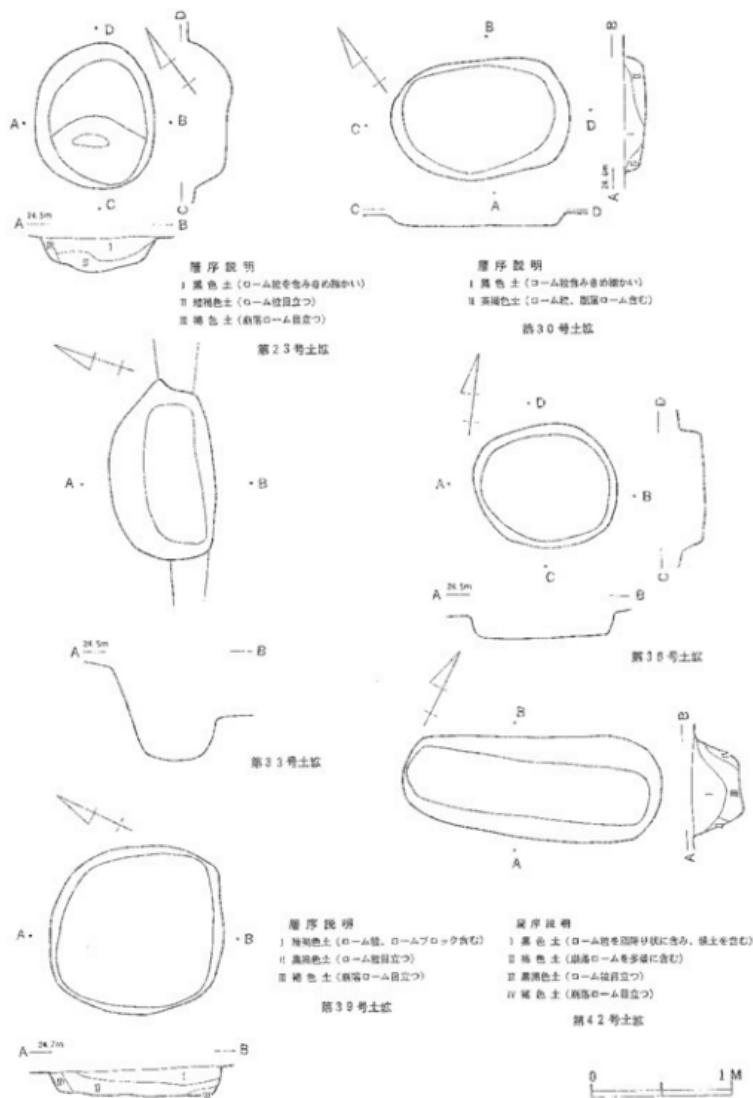
本土塗は調査区北側に位置し、大半が第33・34号住居址によって切られている。深さ13cmを測り、推定プランは隅丸長方形と思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸を有する。

第59号土塗（第92図）

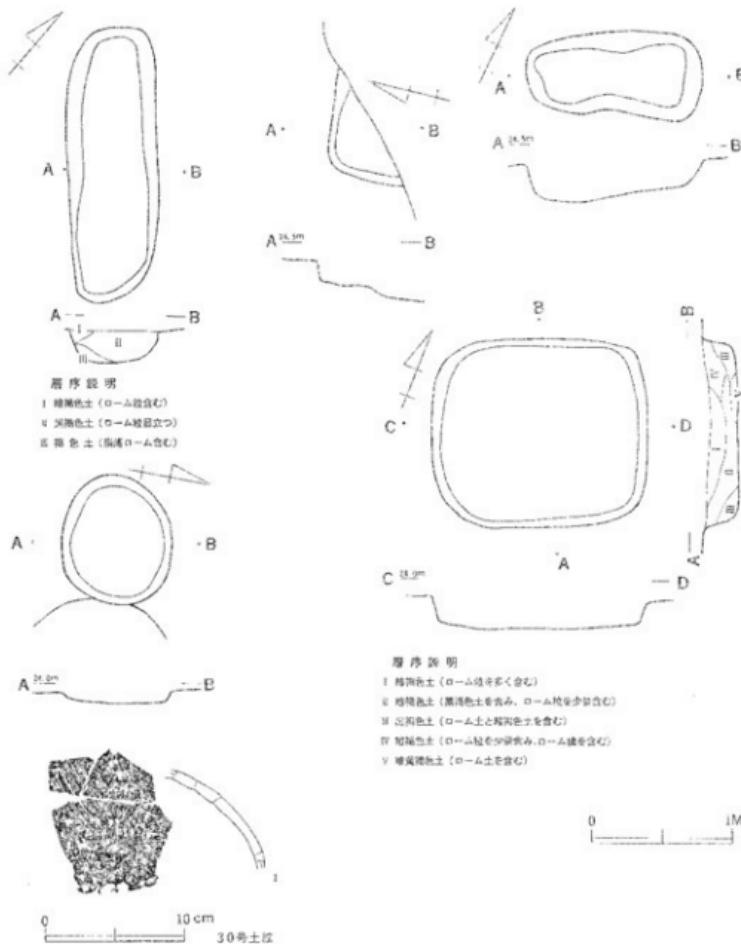
本土塗は調査区南側に位置し、他遺構との重複はない。規模は $128 \times 64\text{cm}$ 、深さ26cmを測り、長軸方向を東一西に持つ不整橢円形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸を有する。覆土は暗褐色土の单一土層で、しまりを有する。

第62号土塗（第92図）

本土塗は調査区北側に位置し、第30号住居址を切る。規模は $155 \times 136\text{cm}$ 、深さ23cmを測り、隅丸長方形プランを呈する。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は埋め戻し。



第91図 各土壌実測図(2)



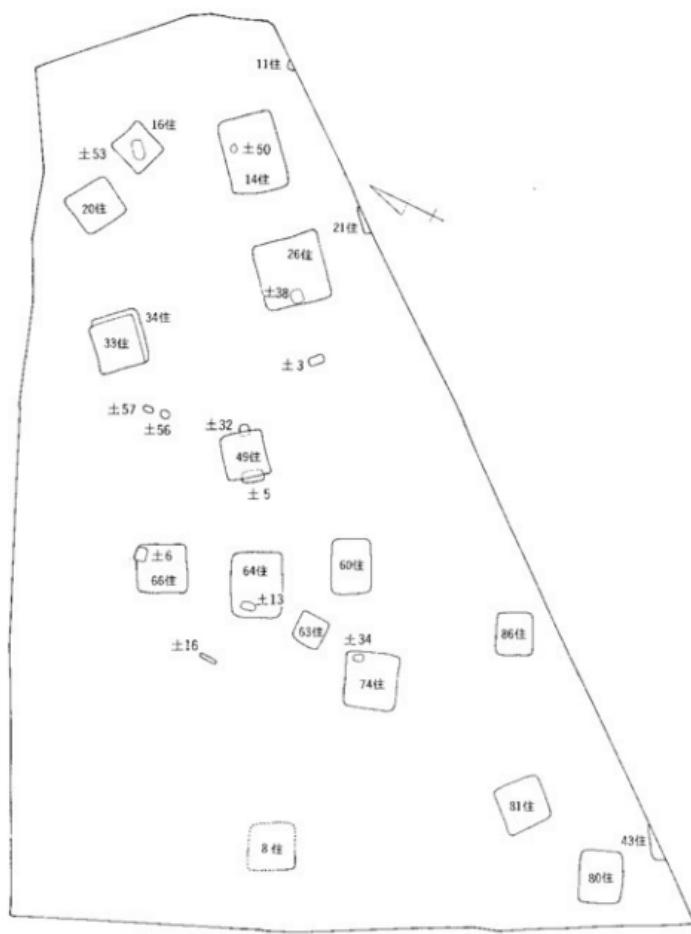
第92図 各土塁実測図(3)

第63号土塁 (92図)

本土塁は調査区北側に位置し、第30号住居址を切る。規模は92×78cm、深さ18cmを測り、円形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。
（中野）

各土塁出土遺物 (第92図)

1は第30号土塁出土。壺形土器の肩部で、4本1組の縦描波状文が施されるものである。



第93図 古墳時代中期遺構配置図

古墳時代中期の概要

古墳時代中期に比定される遺構は、住居址18軒（第8号・11号・14号・16号・21号・26号・32号・34号・43号・49号・60号・63号・64号・66号・74号・80号・81号・86号住居址）、土塙12基（3号・5号・6号・13号・16号・33号・34号・38号・50号・53号・56号・57号土塙）が検出された。住居址は、遺跡のほぼ全体に分布が見られ、土塙は西側部分には検出されなかった。

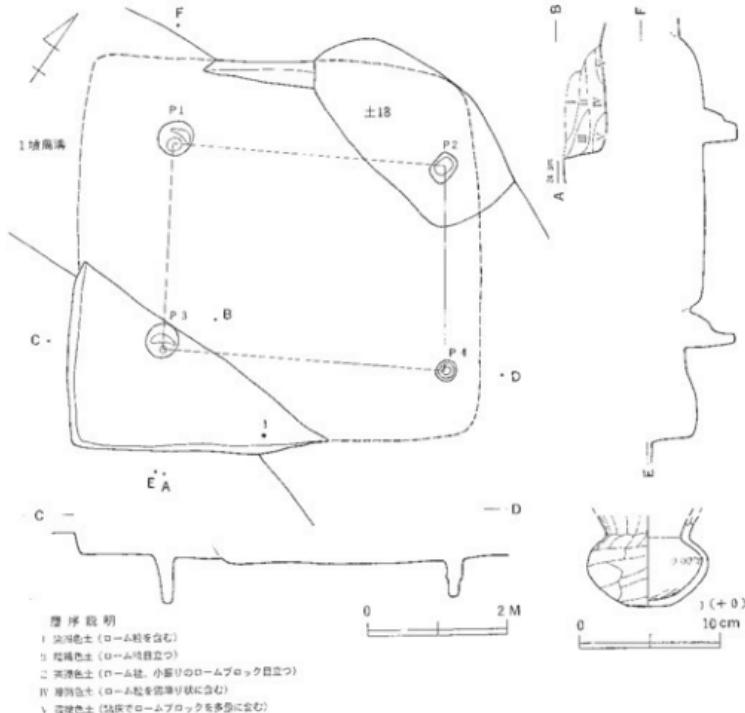
a 住居址

第8号住居址（第94図）

本住居址は、調査区の西側に位置し、1号墳周溝及び18号土塙に切られる。規模は、北西一南東が560cm、北東-南西は不明である。長軸方向は北東-南西と思われる。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、57cmを測る。床面は、貼床ではほぼ全面的に堅歯である。

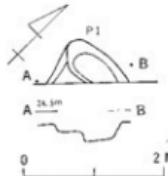
出土遺物（第94図）

1は、壺形土器である。口唇端及び肩部の4分の1を欠き、最大径8.6cm、底径3cm、現存高6.5cmを測る。胎土には長石細粒を含み、焼成は良好である。整形は、外面及び底部にヘラ



第94図 第8号住居址実測図

削り、内面は、ナデ、下端部は、ヘラ削り後ナデである。



第11号住居址（第95図）

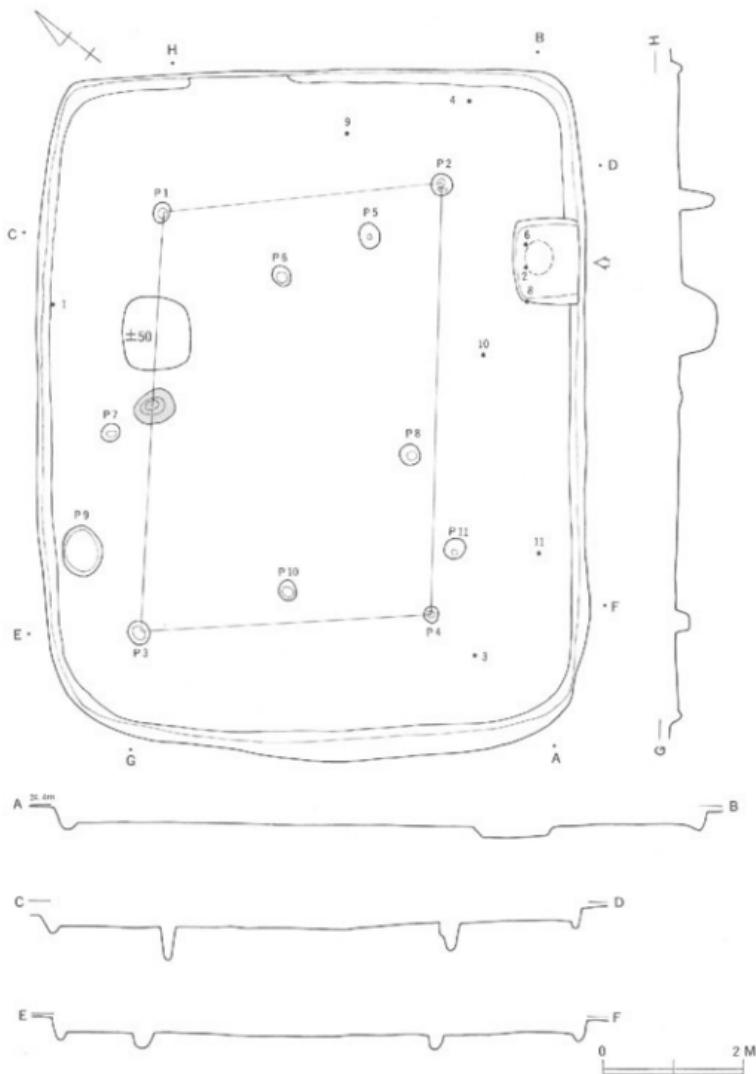
本住居址は、調査区の北東端に位置し、工場建設時に大半が削平され、貯蔵穴及び床面の一部のみを検出したにとどまる。壁面は垂直に立ち上がり、壁高6cmを測る。床面は、直床で軟弱である。P₁は、北西コーナーに位置し、形状から判断して、貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴の規模は不明である。

第14号住居址（第96図）

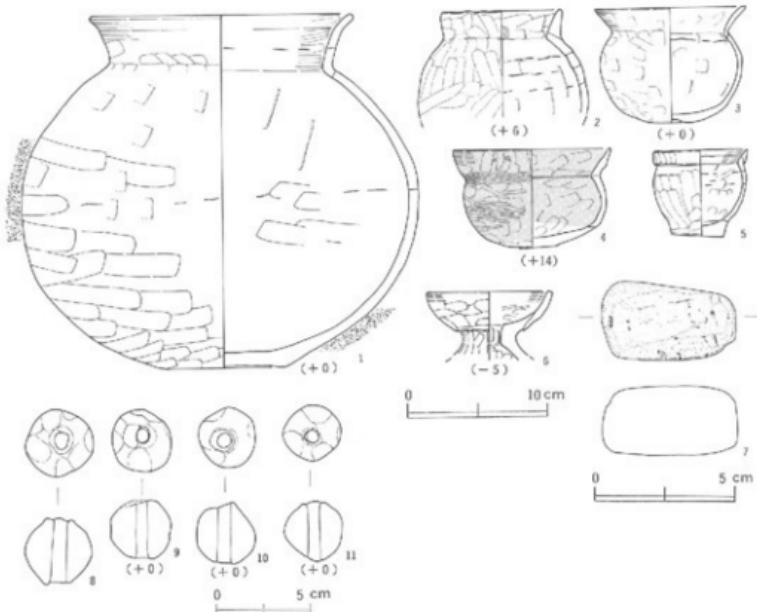
本住居址は、調査区の東北部に位置し、住居址中央部やや北寄りを第53号土塁に切られる。規模は、北東-南西が990cm、北西-南東が786cmで、長軸方向を北東-南西に持つ隔丸方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高平均20cmを測る、床面は、貼床で全体に軟弱である。南壁の中央やや東寄り直下の床面に、123×93cm、深さ16cmの方形の掘り込みが検出され、一部堅緻な為、入口部と考えられる。柱穴は、P₁～P₄が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₅～P₆は、支柱穴若しくは、何らかの施設を設ける時に掘り込まれた柱穴ではないかと思われる。何れにしても、本住居址に共なるものと思われる。壁高は、東壁の一部が途切れている他は、全周している。炉址は、P₁とP₂の中間に位置し、径60×48cmの椭円形を呈し、地床炉に近い竪穴炉である。

出土遺物（第97図）

1・2は、壺形土器である。1は、口縁部及び胴部の一部を欠く他、ほぼ完形に近い残存であり、口唇部径18.5cm、最大胴径23.2cm、底径9.0cm、器高25.1cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴部の外面には、横に帯状のススが付着し、また、胴下端部にも煮沸によるススが付着している。2は、2分の1の残存であり、推定口唇部径8.6cm、推定最大胴径12.6cmを測る。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成はほぼ良好である。3、4は、壺形土器である。3は、口縁部の約6分の1及び胴部の2分の1の残存であり、推定口唇部径17.0cm、底径2.2cm、器高8.1cmを測る。胎土は密で、砂粒を多く含み、焼成は良好である。4は、胴部の一部を欠く他ほぼ完形に近い残存であり、口唇部径11.2cm、底径2.9×2.5cm、器高7.1cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。また、内外面に赤色塗彩を施している。5は、ミニチュア土器で、口唇部径6.7cm、底径3.7cm、器高6.2cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。6は、器台形土器である。脚部を欠き、口唇部径9.0cm、器受孔径1.5cmを測る。胎土は密で微細な砂粒を含み、焼成は良好である。7は、軽石である。現存長4.8cm、幅2.8cm、高さ2.5cmを測る。色調は淡褐色を呈する。8～10は、土玉である。8は、径36mm、高さ37mm、孔径7×9mmを測る。胎土は砂を微量含み、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。9は、径31×33mm、高さ31mm、孔径6×9mmを



第96図 第14号住居址実測図（1）

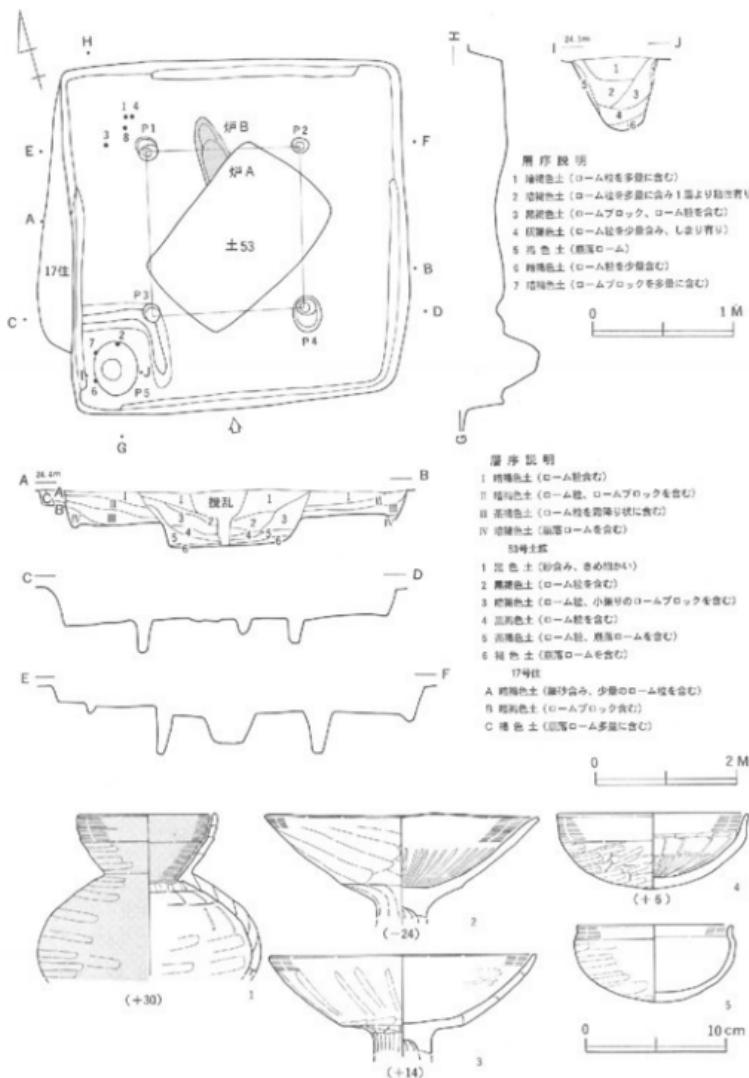


第97図 第14号住居実測図(2)

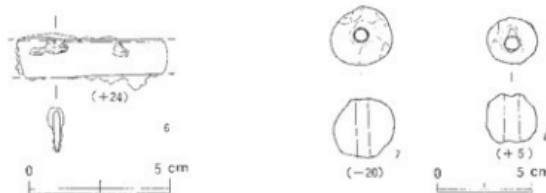
測る。胎土は砂を微量含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。10は、径 30×32 mm、高さ 33 mm、孔径 7×8 mmを測る。胎土は砂を微量含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。11は、径 31×30 mm、高さ 33 mm、孔径 8×6 mmを測る。胎土は砂を微量含み、焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

第16号住居址（第98図）

本住居址は、調査区の北側に位置し、住居址の中央を第53号土塁に切られ、第17号住居址を切る。規模は、北一南が 500 cm、西一東が 480 cmで、長軸を北一南に持つ隅丸方形プランを呈している。壁面は、垂直に掘り込まれ、壁高は 45 cmを測る。床面は、中央部はしっかりした貼床で壁溝付近は直床である。柱穴は、P₁～P₆が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₅は、南西コーナー部に位置し、規模 80×60 cm、深さ 50 cmを測る。北側及び東側に周堤を巡らし、貯蔵穴と思われる。壁溝は、北西コーナー部、南西コーナー部及び、北東コーナー部が途切れている他は全周する。炉址は、住居址の中央やや北寄りの位置に2ヶ所検出された。炉址Aは、炉址Bよりも新しく、火床面は良く焼けている。炉址Bは、炉址Aより古く、火床



第98図 第16号住居址実測図（1）



第99図 第16号住居実測図(2)

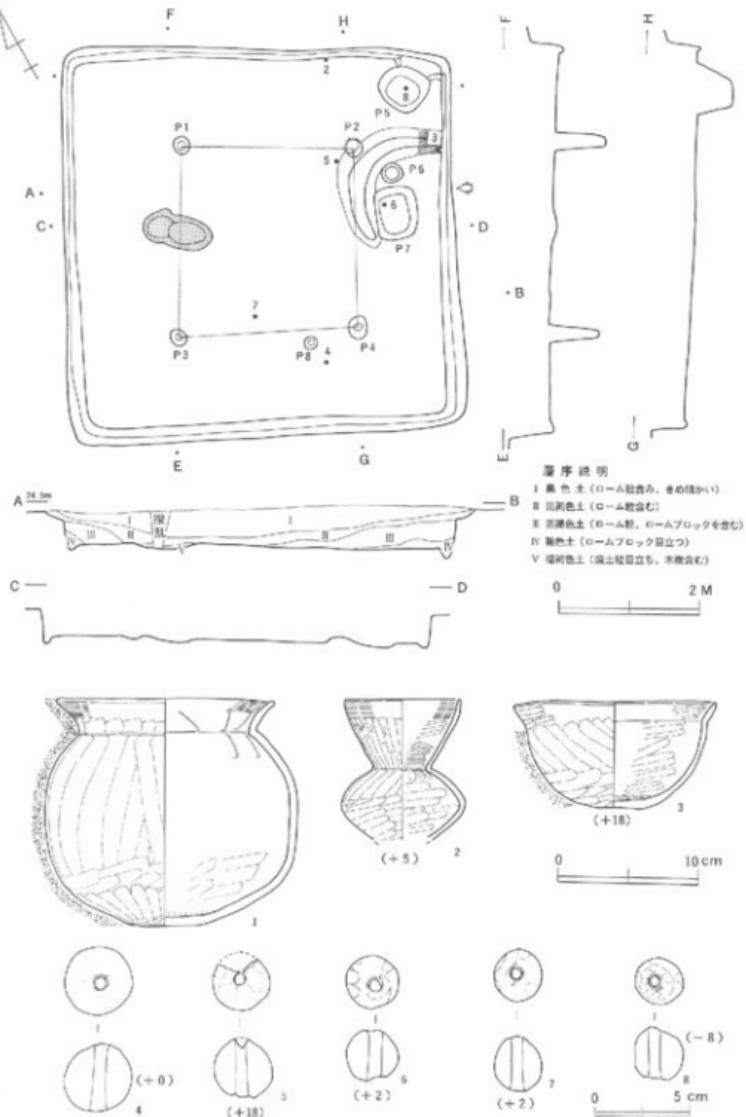
面はあまり良く焼けていない。かA、炉B共に、地床炉に近い竪穴炉である。

出土遺物（第98・99図）

1は、壺形土器である。胴下端部及び口縁部3分の2を欠き、推定口唇部径10cm、最大胴径16cm、現存高11.5cmを測る。胎土は長石、石英細粒を含み緻密であり、焼成は堅固である。外面及び口縁部内面には赤色塗彩を焼成後にハケを用いて施している。2・3は、高環形土器である。2は、壺部のみの完存で、口唇部径19.4cm、脚径3.8cm、現存高7.5cmを測る。胎土は長石粒が目立ち、また3mm大の小礫が目立ち粗く、焼成は堅固である。3は、壺部の5分の1の残存で、口唇部径18.9cm、脚径3.9cm、現存高7.0cmを測る。胎土は長石粒、小礫が目立ち粗く、焼成は良好である。4・5は、環形土器である。4は、口縁部及び体部の2分の1強の残存であり、口唇部径13.5cm、器高5.4cmを測る。胎土は長石、石英細粒を含み緻密であり、焼成は堅固である。5は、口縁部4分の1、体部の3分の1の残存であり、推定口唇部径11.1cm、推定最大径11.5cm、器高5.5cmを測る。胎土は長石細粒、石英を含み緻密であり、焼成は堅固である。6は刀子で、現存長5.4cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測り、表裏共に木質部を残す。7・8は、土玉である。7は、径32mm、高さ32mm、孔径7mmを測る。胎土は砂を多く含み、焼成は良好である。8は、径26mm、高さ26mm、孔径12×8mmを測る。胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

第20号住居址（第100図）

本住居址は、調査区北側に位置する。住居址の規模は、西-東が560cm、南-北が560cmで、主軸方向を西-東に持つ方形のプランを呈している。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高平均45cmを測る。床面は、中央部がしっかりした貼床で、壁付近が軟弱な直床である。東壁の中央部下の床面上に周堤状の施設が検出されたことから入口部と考えられる。柱穴は、P₁～P₄が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₄、P₅は、支柱穴若しくは何らかの施設に共なる柱穴かと考えられる。P₆は、住居址の東側コーナー部に位置し、隅丸方形プランを呈している。位置、形状より判断して貯蔵穴と考えられる。壁溝は、東側コーナー部が途切れている他全周する。炉址は、P₁とP₂の中間に位置し、新旧2基検出された。炉址Aは、炉址Bよりも新



第100図 第20号住居址実測図

しく、火床面は良く焼けている。炉址Bの火床面はあまり良く焼けていない。

出土遺物（第100図）

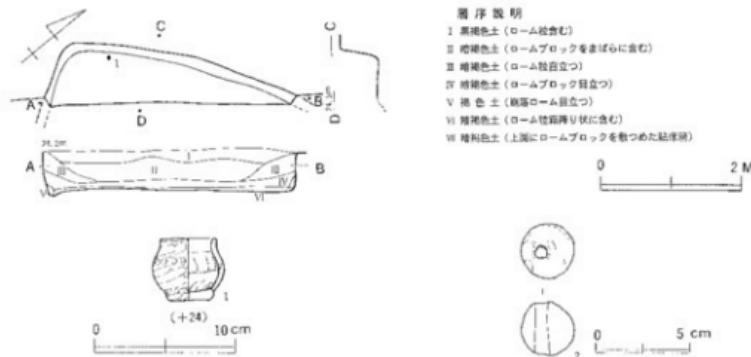
1は、壺形土器である。口縁部3分の2周、胴部4分の1周を欠き、口唇部径15.6cm、最大胴径18.0cm、底径5.8cm、器高16.2cmを測る。胎土は、石英・長石細粒を含み、焼成は良好である。外面にはススが付着し、内面には黒いシミが付着している。2は、壺形土器である。約2分の1の残存で、口唇部径8.2cm、最大胴径8.8cm、現存高10.0cmを測る。胎土は緻密で長石細粒を含み、焼成は良好である。3は、鉢形土器である。完形の残存で、口唇部径14.6cm、底径4.5cm、器高7.8cmを測る。胎土は、長石・石英細粒を含み焼成は良好である。外面にはススが付着している。4～8は、土玉である。4は、径36mm、高さ36mm、孔径10mmを測る。胎土は砂・雲母を含む。5は、5分の1を欠き、径31mm、高さ32mm、孔径6mmを測る。胎土は砂・小石を含む。6は、径28mm、高さ27mm、孔径8mmを測る。胎土は砂粒を含む。7は、径25mm、高さ29mm、孔径8mmを測る。胎土は砂・雲母を含む。8は、径26mm、高さ29mm、孔径7mmを測る。胎土は砂粒を含む。焼成はすべて良好である。

21号住居址（第101図）

本住居址は、調査区の南端に位置し、住居址の大半を削平されている為、規模等は不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高54cmを測る。床面は、貼床で堅緻である。

出土遺物（第101図）

1は、ミニチュア土器である。約3分の2の残存で、推定口唇部径3.9cm、底径2.6cm、器高4.4cmを測る。胎土は緻密で長石細粒を含み、焼成は良好である。2は、土玉である。径28mm、高さ28mm、孔径7mmを測る。



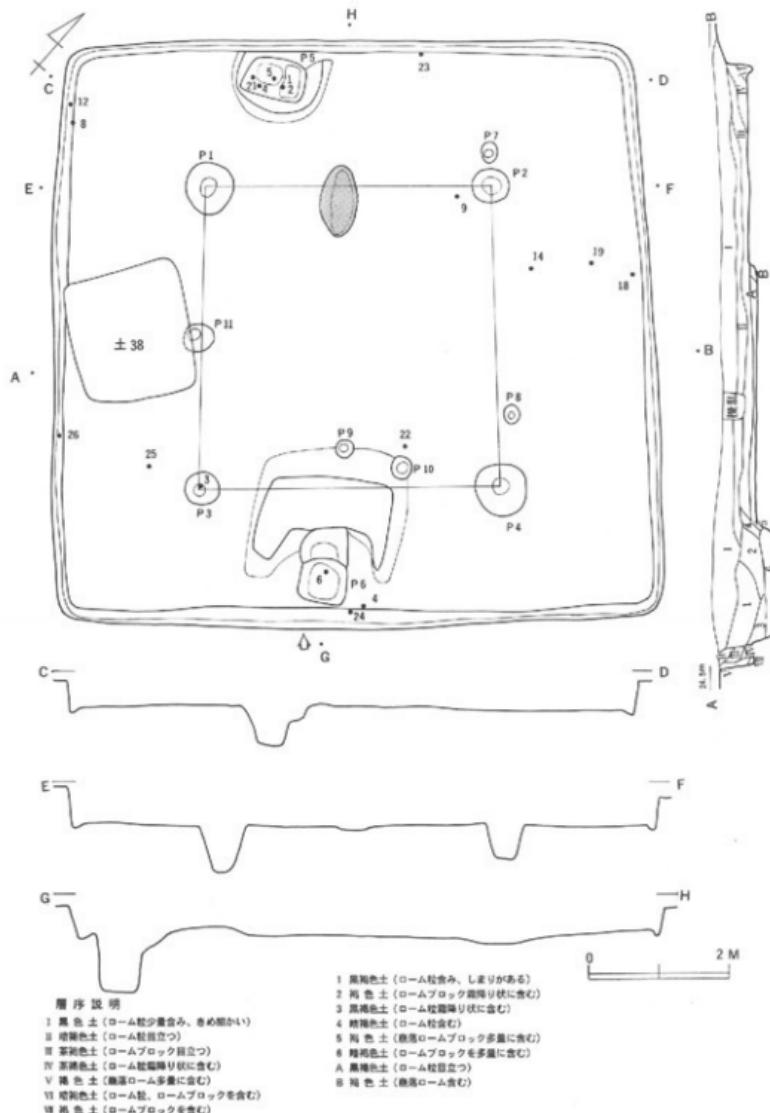
第101図 第21号住居址実測図

第26号住居址（第102図）

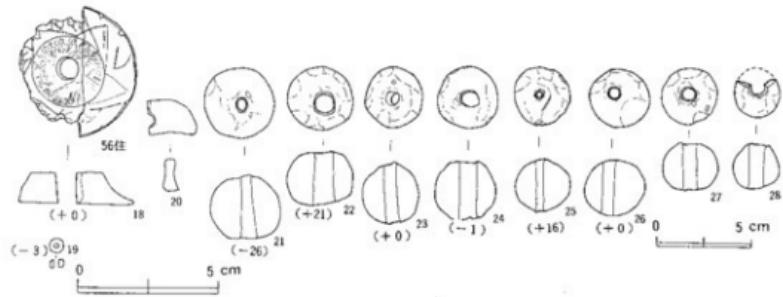
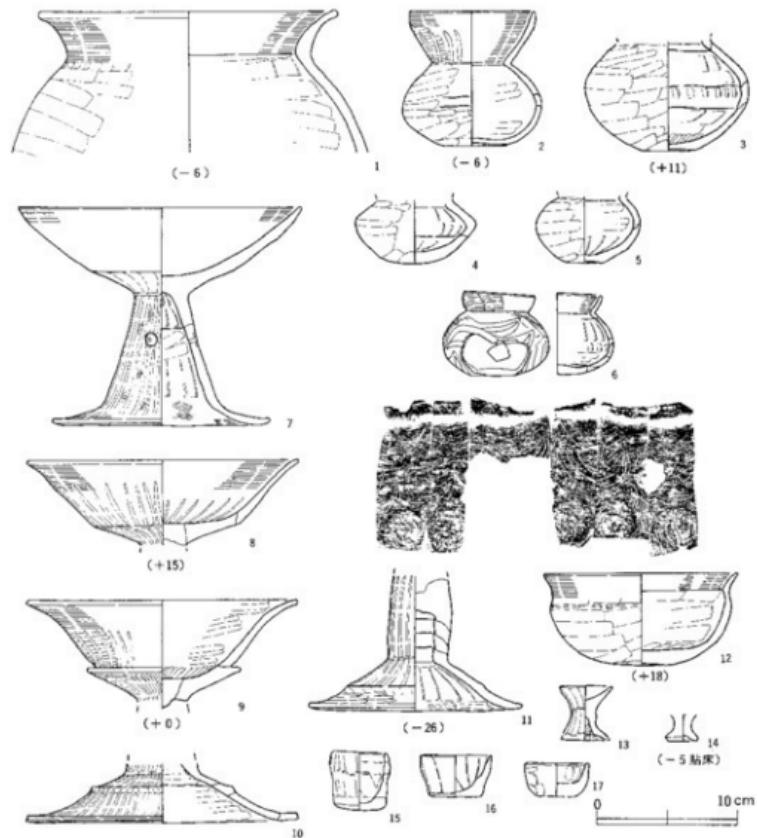
本住居址は、調査区の中央部やや東寄りに位置し、第38号土塙に切られる。住居址の規模は、北西—南東が 846cm、南西—東北が 856cmで、長軸方向を南西—東北に持ち、方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は平均45cmを測る。床面は、四隅と中央西寄りの大半が貼り床で、中央部のみが堅固である。南東壁の中央部下の床面上には、周堤が巡らされ、入口部と考えられる。柱穴は、P₁～P₄が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₁・P₄は、貯蔵穴と考えられる。P₂・P₃は、古い主柱穴と考えられる。P₅・P₆は、支柱穴と考えられる。P₇は、補助柱と考えられる。壁溝は、全周する。炉址は、P₁とP₂の中間に位置し、楕円形プランを呈する。地床炉に近い竪穴炉で炉底は良く焼けている。

出土遺物（第103図）

1は、菱形土器である。口縁部及び肩部の4分の1を残存し、口唇部径21.2cm、現存高10.0cmを測る。2～6は、坦形土器である。2は、ほぼ完形で、口唇部径 8.9cm、最大胴径 9.9cm、底径 4.6cm、器高 9.5cmを測る。3は、口縁部を欠き、最大胴径11.7cm、底径 3.8cm、現存高 7.7cmを測る。4は、口縁部を欠き、最大胴径 8.6cm、底径 2.5cm、現存高 4.5cmを測る。5は、口縁部を欠き、最大胴径 7.5cm、底径 3.6cm、現存高 4.8cmを測る。6は、口縁端を欠き、推定口唇部径 5.0cm、最大胴径 7.5cm、底径 3.0cm、器高 6.0cmを測る。胴部に沈線を施し、穿孔を行っている。7～11は、高環形土器である。7は、口縁部の5分の1及び脚部の4分の1を残存し、推定口唇部径20.0cm、推定裾径15.4cm、器高15.5cmを測る。脚部中位に孔を3ヶ所、2段に穿孔される。8は、环部の4分の3の残存であり、口唇部径19.2cm、脚径 3.2cm、現存高 6.0cmを測る。9は、环部のみの残存で、口唇部径19.1cm、脚径 3.6cm、現存高 7.3cmを測る。10は、裾部の3分の1の残存であり、裾径19.3cm、現存高 4.3cmを測る。11は、环部及び裾部の4分の1を欠き、脚径 3.8cm、裾径15.2cm、現存高 9.7cmを測る。12は、鉢形土器である。ほぼ完形で、口唇部径13.6cm、底径 3.2cm、器高 6.5cmを測る。13～17は、ミニチュア土器である。13は、ほぼ完形で、口唇部径 3.7cm、脚径 1.8cm、器高 3.8cmを測る。14は、环部を欠き、脚径 1.3cm、裾径 2.3cm、現存高 1.9cmを測る。15は、完形で、口唇部径 3.8cm、底径 3.7cm、器高 4.0cmを測る。16は、完形で、口唇部径 5.1cm、底径 3.4cm、器高2.95cmを測る。17は、口縁4分の1、底部の2分の1の残存であり、推定口唇部径 4.9cm、底径 2.8cm、器高 2.3cmを測る。18は、石製紡錘車である。第56号住居址より出土した石製紡錘車と接合する。石質は滑石で、現存長4.65cm、現存幅4.15cm、厚さ1.12cm、孔径 0.7cmを測る。表面に線刻を施し、本住居址より出土した部分については、周辺部を打ち欠いている。19は、白玉である。石質は滑石で、径 5mm、孔径1.8mm、厚さ 3mmを測る。20は、不明土製品である。現存長 17mm、幅11.5mm、厚さ 5.5mmを測る。21～28は、土玉である。径は 37～ 24mm、高さ 34～24mm、孔径 10～ 5mmを測る。



第102図 第26号住居址実測図(1)



第103図 第26号住居址実測図(2)

第33号住居址（第104図）

本住居址は、調査区中央部や北寄りに位置し、第34号住居址、第35号住居址及び第58号土塙を切る。住居址の規模は、北西—南東が 544cm、南西—北東が 638cmで、長軸方向を南西—北東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、僅かに傾斜状に立ち上がり、やや軟弱である。壁高は約20cmを測る。床面は、貼床でしっかりとされている。南東壁中央部直下の床面上に、僅かに高い部分が検出され、入口部と考えられる。柱穴は、検出されなかった。 $P_1 \sim P_3$ は、貯蔵穴と考えられ、 P_4 は貼り床をされていることから古期の貯蔵穴であり、 P_5 は新期の貯蔵穴と考えられる。壁高は、全周する。炉址は、住居址の中央及び、中央より北西寄りに2基検出された。炉址Aは、炉址Bよりも新しく、炉址Bは、炉址Aよりも古い。住居址東側コーナー付近の溝は、貼床下より検出され間仕切りと考えられる。

出土遺物（第104図）

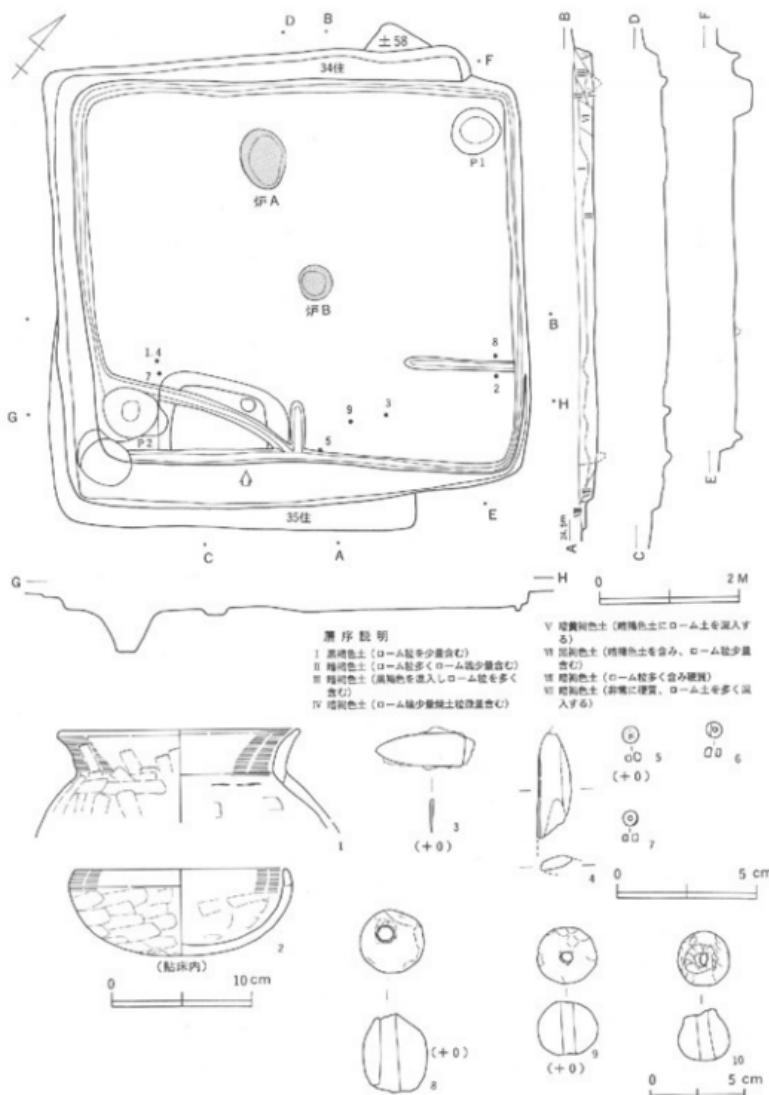
1は、甕形土器である。口縁部のみの残存で、口唇部径17.0cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。2は、壺形土器である。約2分の1の残存で、口唇部径14.8cm、最大径15.6cm、器高 6.2cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。3は、刀子である。現存長 2.7cm、幅1.15cm、厚さ0.12cmを測る。4は、石製模造品である。現存長38mm、現存幅 7mmを測る。石質は滑石である。5は、ガラス製の小玉である。径5.7mm、孔径 1mm、厚さ 3mmを測り、色調は青色を呈する。6・7は、滑石製の白玉である。6は、径5.5mm、高さ3.3mm、孔径1.8mmを測る。7は、径 5mm、高さ2.8mm、孔径1.5mmを測る。8～10は、土玉である。8は、径 34mm、高さ 42mm、孔径 10mmを測る。胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。9は、径 32mm、高さ 28mm、孔径 7mmを測る。胎土は砂・小石を含み、焼成は良好である。10は、径 27mm、高さ 27mm、孔径 8mmを測る。胎土は砂・石英粒を含み、焼成は良好である。

第34号住居址（第105図）

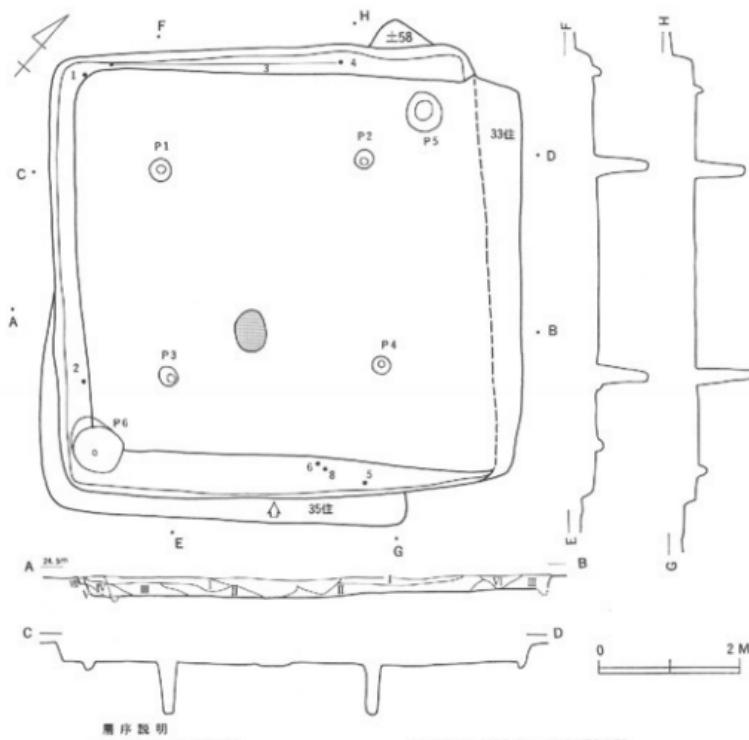
本住居址は、調査区中央部や北寄りに位置し、第33号住居址に切られ、第35号住居址及び第58号土塙を切っている。住居址の規模は、北西—南東が 638cm、南西—北東が 619cmで、長軸方向を北西—南東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、やや軟弱である。壁高は約24cmを測る。床面は、第33号住居址とほぼ共有する。柱穴は、 $P_1 \sim P_4$ が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。 $P_5 \sim P_6$ は、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、検出されなかった。炉址は、住居址の中央やや南寄りに位置し、58×42cmの楕円形を呈している。

出土遺物（第106図）

1は、甕形土器である。口縁部の一部を欠き、口唇部径18.2cm、最大胴径25.6cm、底径 6.9cm、器高 27.45cmを測る。胎土は密で砂を多く含み、小礫粒を含む。胴部外面中位及び、胴下



第104図 第33号住居址実測図

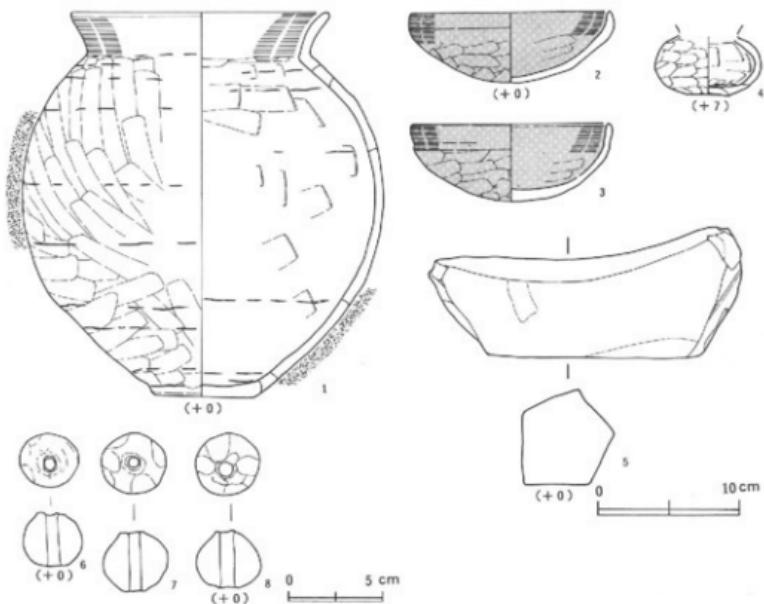


層序説明

- I 塗装赤土（ローム粒少含む）
- II 塗装赤土（ローム粒多く、ローム洗少量含む）
- III 塗装赤土（塗装色土を混入しローム粒多く含む）
- IV 塗装赤土（ローム粒多く含み、2層より若干下限）
- V 塗装汚赤土（赤褐色土にローム土を混入する）
- VI 塗装汚赤土（ローム粒微量に含みやわしまりあり）（発見か）
- VII 塗装汚赤土（暗いローム粒少含みやや軟弱である）

第105図 第34号住居址実測図(1)

端部内面にススが付着している。2・3は、壺形土器である。2は、口縁部の一部を欠き、口唇部径14.4cm、器高5.0cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含む。外面の口縁部及び内面には、ハケ状工具により赤色塗彩を施している。3は、体部から口縁部の6分の1を欠き、口唇部径14.4cm、器高5.55cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含む。4は、壺形土器である。口縁部を欠き、最大胴径7.55cm、底径2.9cm、現存高4.3cmを測る。胎土は密で砂粒を多く含む。5は、磁石である。現存長22.4cm、現存幅9.4cm、厚さ6.4cmを測る。6～8は、土玉である。6は、径31mm、高さ29mm、孔径8mmを測る。7は、径33mm、高さ33mm、孔径6mmを測る。8は、径34mm、高さ30mm、孔径8mmを測る。焼成はすべて良好である。



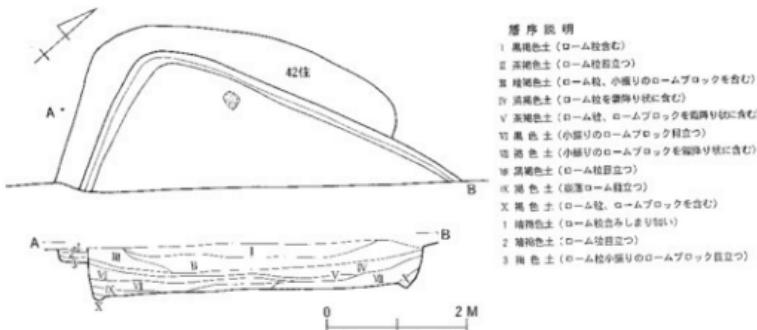
第106図 第34号住居址実測図(2)

第43号住居址（第107図）

本住居址は、調査区の南西端に位置し、住居址の大半を削平されている。本住居址の北西部は、第42号住の大半を切る。住居址の規模等は不明であり、壁面は、垂直に立ち上がり、壁高は77cmを測る。床面は、しっかりした貼床であり、壁溝は、5～18cm幅で全周する。柱穴及び炉址は、検出されなかった。住居址の北壁やや西寄りの床面上に焼土が検出された。

第49号住居址（第108図）

本住居址は、調査区中央部に位置し、住居址南西壁により、第5号土塁を切る。住居址の規模は、北西—南東が577cm、南西—北東が597cmで、長軸方向を南西—北東に持ち、隅丸方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高平均30cmを測る。床面は、一部貼り床で、炉址の周辺は堅固である。南東壁中央部下の床面は、隆起しており、入口部と考えられる。柱穴は、P₁～P₄が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₅・P₆は、梯子穴と考えられる。P₇は、住居址の南側コーナー部に位置し、74×64cm、深さ68cmの隅丸方形プランを呈し、P₈は、住居址の東側コーナー部に位置し、58×54cm、深さ21cmの隅丸方形プランを呈す。

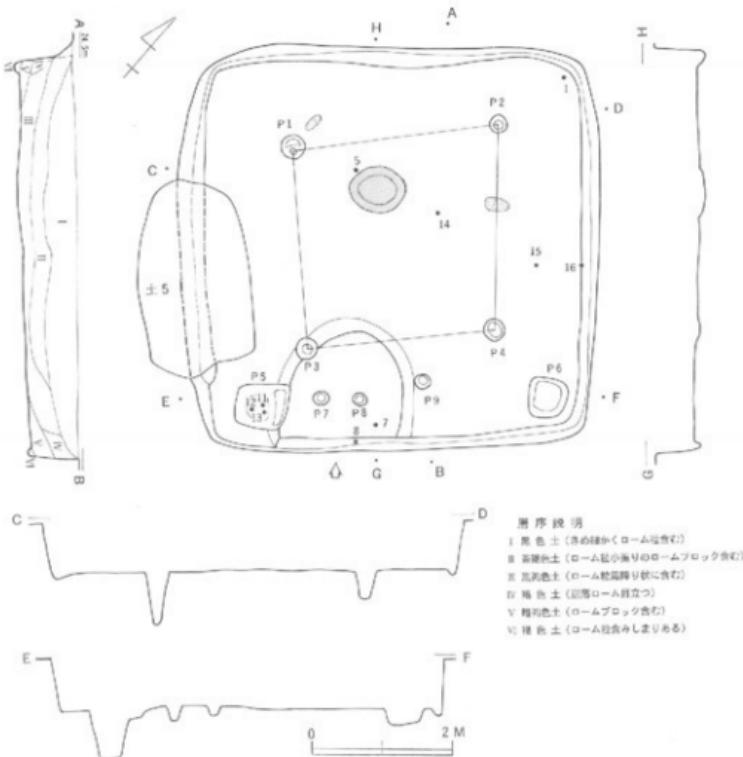


第107図 第43号住居址実測図

呈し、共に位置、形状から、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、南側コーナー部を除き、全周する。炉址は、 P_1 と P_2 の中間よりやや中央寄りに位置し、 $80 \times 60\text{cm}$ の梢円形プランを呈する堅穴炉であり、火床面は、良く焼けている。

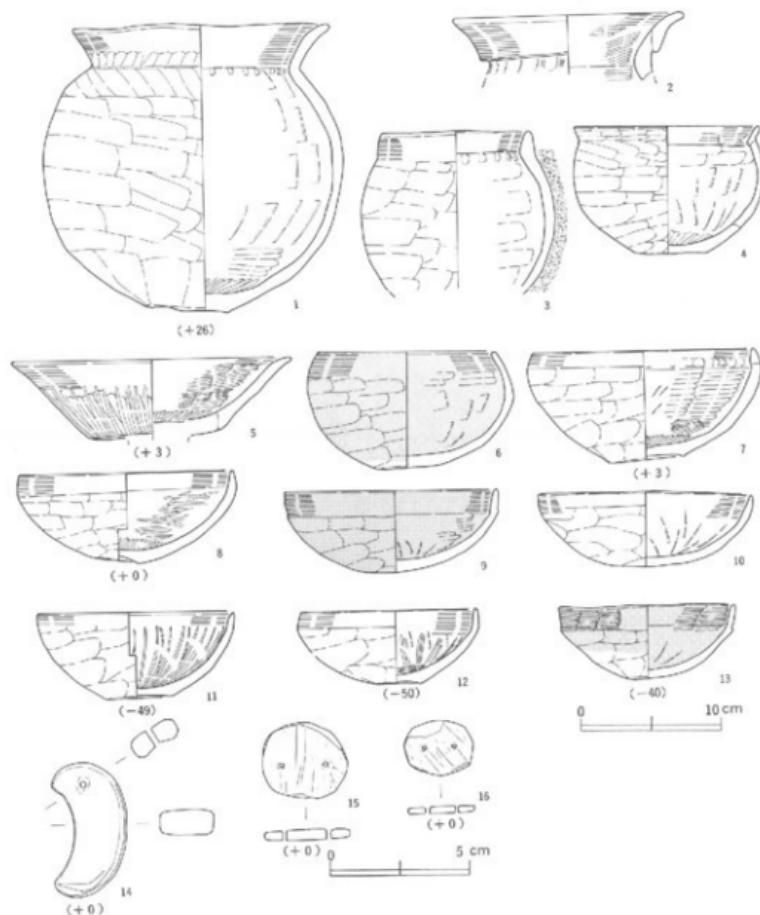
出土遺物（第109図）

1は、壺形土器である。口縁部及び胴部上半を3分の1欠き、口唇部径 8.3cm 、最大胴径 21.4cm 、底径 5.9cm 、器高 20.5cm を測る。胎土は長石・石英細粒・砂が目立ち、焼成は良好である。外面の口縁部から胴部までススが付着している。2は、壺形土器である。口縁部のみの残存で、口唇部径 16.4cm 、現存高 4.2cm を測る。胎土はやや粗く長石・石英細粒を含み、焼成は堅固である。3・4は、鉢形土器である。3は、口縁と胴部の3分の2を残存し、推定口唇部径 10.6cm 、推定最大胴径 13.7cm 、現存高 11.2cm を測る。胎土はやや粗く長石・石英・小礫を含み、焼成は良好である。4は、口縁と胴部の2分の1を残存し、口唇部径 13.5cm 、最大胴径 13.2cm 、底径 4.9cm 、器高 9.1cm を測る。胎土は密で長石・石英微細粒を含み、焼成は良好である。5は、高壺形土器である。口縁部2分の1の残存であり、口唇部径 19.7cm 、現存高 6.75cm を測る。胎土は長石細粒及び細砂が目立ち、焼成は良好である。6～13は、壺形土器である。6は、口縁と胴部の3分の1を欠き、口唇部径 12.8cm 、最大胴径 14.9cm 、底径 4.0cm 、器高 8.3cm を測る。胎土は緻密で長石・石英微細粒を含み、焼成は良好である。内外面共に、焼成後ハケによる赤色塗彩が施されている。7は、口縁部の2分の1を欠き、口唇部径 15.8cm 、最大径 16.7cm 、底径 5.2cm 、器高 8.0cm を測る。胎土はやや細かく長石細粒が目立ち、焼成は堅固である。8は、完形で、口唇部径 15.3cm 、最大径 15.6cm 、器高 6.4cm を測る。胎土はやや粗く長石・石英細粒・小礫が目立ち、焼成は堅固である。9は、口縁部の2分の1を欠き、口唇部径 15.2cm 、最大径 15.0cm 、底径 5.8cm を測る。胎土は長石・石英細粒が目立ち、焼成は堅固である。内外面共に、焼成後赤色塗彩を施している。10は、口縁部の3分の1を欠き、口唇部径



第108図 第49号住居址実測図(1)

15.2cm、器高 5.3cmを測る。胎土はやや粗く長石細粒・細砂目立ち、焼成は堅固である。11は、口縁部2分の1を欠き、口唇部径13.9cm、底径 4.5cm、器高 6.1cmを測る。胎土は緻密で長石微細粒を含み、焼成は堅固である。12は、口縁部を3分の2欠き、口唇部径12.5cm、推定最大径12.9cm、底径 3.1cmを測る。胎土は緻密で長石微細粒が目立ち、焼成は良好である。13は、完形で、口唇部径12.5cm、底径 3.1cm、器高 5.3cmを測る。胎土は長石細粒・細砂が目立ち、焼成は良好である。外面の口縁部から体部及び内面には、焼成後赤色塗彩を施している。14は、粘板岩製の勾玉である。長さ 48mm、幅18.5mm、厚さ 9mm、孔径2.2mmを測る。15・16は、滑石製の有孔円盤である。15は、長さ 27mm、幅 32mm、厚さ 3.8mm、孔径左右共1.6mmを測る。16は、長さ 22mm、幅 24mm、厚さ 2.5mm、孔径左1.5mm、右1.2mmを測る。15・16共、図上方より下方へ向かって穿孔されている。

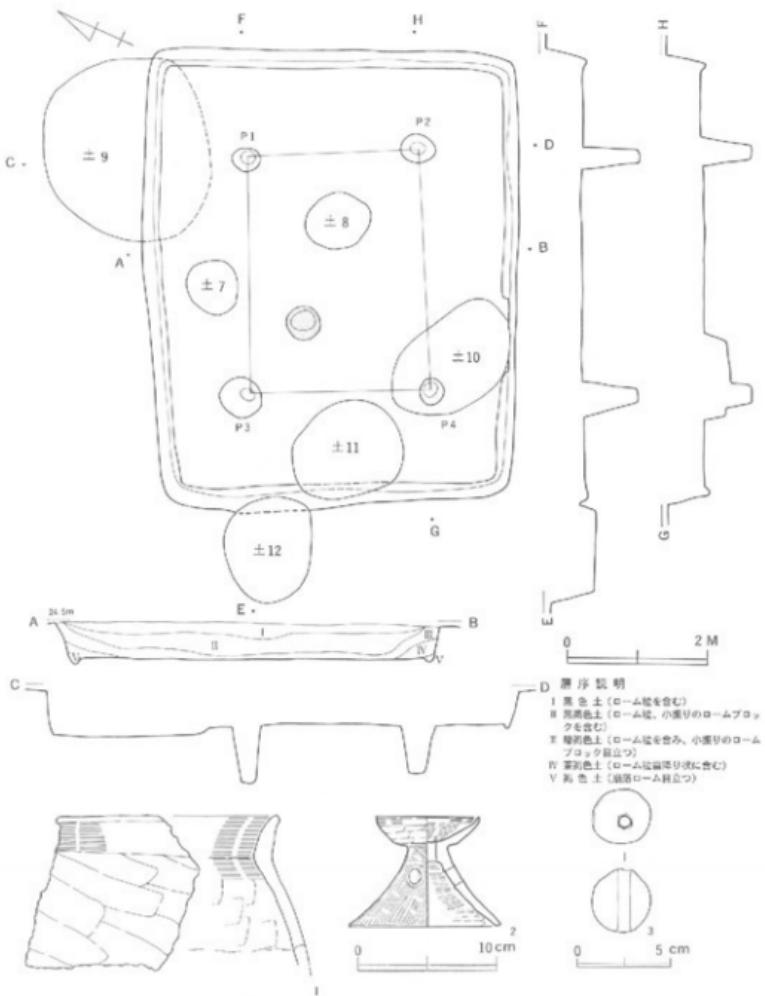


第109図 第49号住居址実測図(2)

第60号住居址（第110図）

本住居址は、調査区のほぼ中央部に位置し、第9号土塙を切り、第7号土塙・第8号土塙・第10号土塙・第11号土塙・第12号土塙に切られる。住居址の規模は、北-南が522cm、西-東が653cmで、長軸方向を西-東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高平均50cmを測る。床面は、貼り床で中央部は堅圓である。柱穴は、P₁～P₄が主柱穴である。壁溝は、南辺の一部を除き、全周する。炉は、ほとんど地床炉に近い竪穴炉である。

出土遺物（第110図）



第110図 第60号住居址実測図

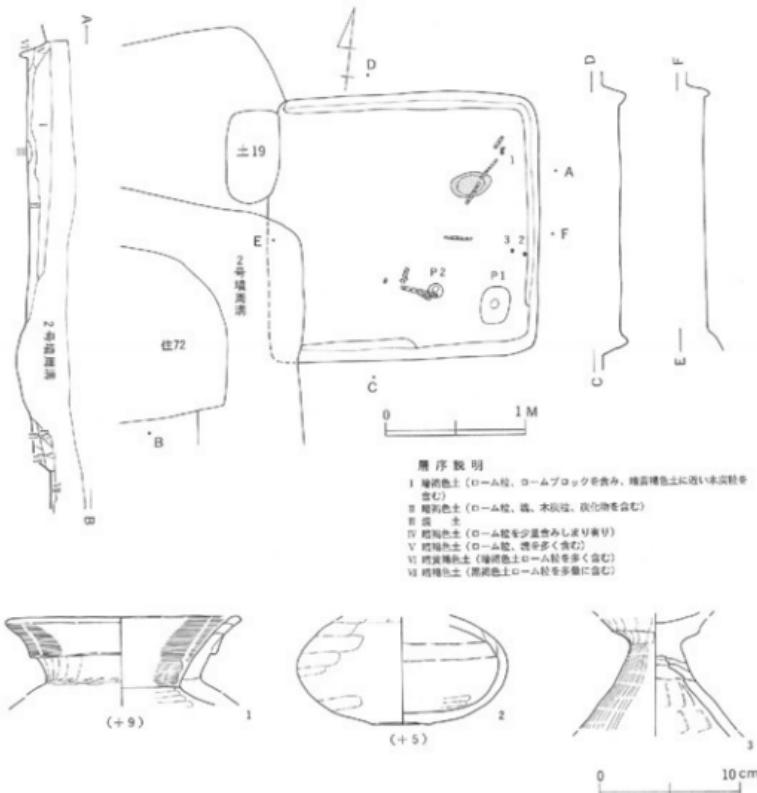
1は、整形土器であり、本住居址に共なう遺物である。2は、器台形土器であり、本住居址に共なう遺物ではない。口縁部の2分の1及び裾部の3分の2の残存で、口唇部径 7.4cm、裾径 9.9cm、器高 7.8cmを測る。3は、土玉であり、径 31mm、高さ 33mm、孔径 7mmを測る。

第63号住居址（第111図）

本住居址は、調査区のほぼ中央部に位置し、第72号住居址を切り、第2号墳周溝及び第19号土塗に切られる。住居址の規模は、北—南が382cm、西—東が推定 392cmで、長軸方向を西—東に持ち、方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高平均28cmを測る。床面は、しっかりした貼床で、壁付近は軟弱である。柱穴は、2本検出された。壁溝は、南東コーナー部以外は全周する。炉址は、住居址の中央やや北東寄りに位置し、60×30cmの楕円形プランを呈している地床炉である。また、火床面は良く焼けている。

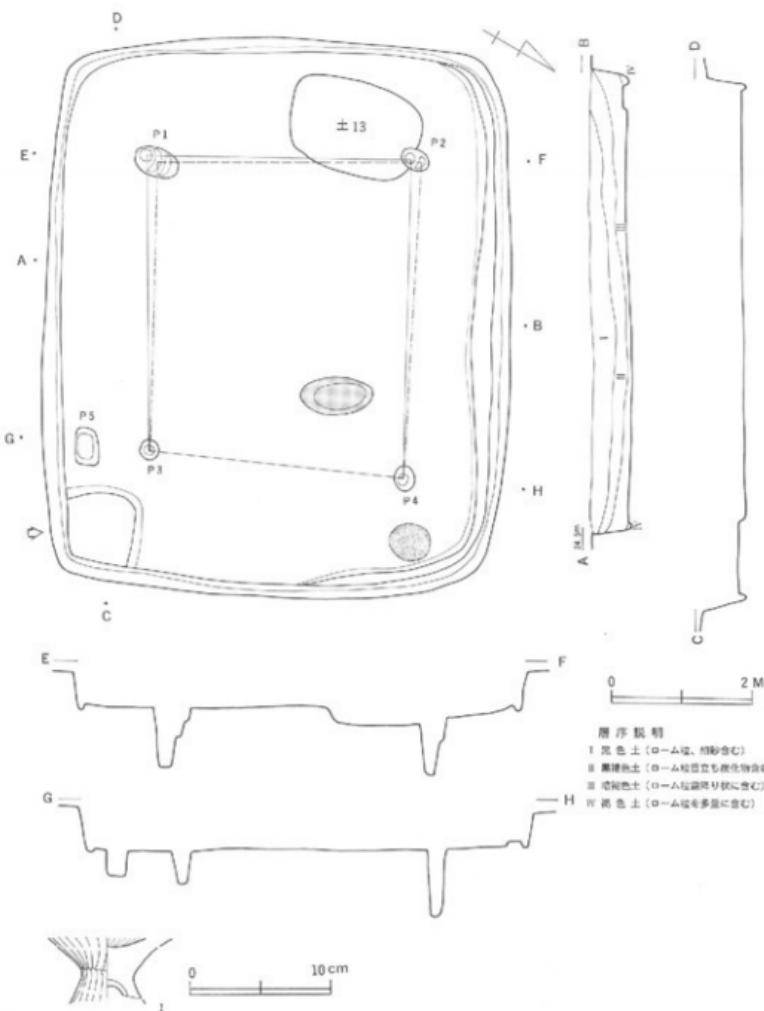
出土遺物（第111図）

1・2は、壺形土器である。1は、口唇部径16.4cm、現存高 6.4cmを測る。胎土は粗く長石・



第111図 第63号住居址実測図

石英粒・砂が目立ち、焼成は良好である。2は、最大胴径14.9cm、底径 4.0cm、現存高 7.7cmを測る。胎土は粗く長石粒・小謫が目立ち、焼成は良好である。3は、高壺形土器であり、脚径 3.7cm、現存高 8.7cmを測る。胎土はやや粗く長石粒・砂が目立つ。



第112図 第64号住居址実測図(1)



第113図 第64号住居址実測図(2)

第64号住居址（第112図）

本住居址は、調査区のほぼ中央部に位置し、住居址北西部を第13号土塗に切られる。住居址の規模は、北一南が 665cm、西一東が 799cm で、長軸方向を西→東に持ち、隅丸方形プランを呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高約60cmを測る。床面は、直床で中央部は堅固である。住居址南東コーナー部に約 9 cm 程の隆起があり、入口部と考えられる。柱穴は、P₁～P₄が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₁・P₂は、建て替えを行っている。また、P₃は、補助柱穴と考えられる。壁溝は、全周し、断面U字形を呈する。炉址は、住居址中央よりやや北寄りに位置し、102×56cmの楕円形を呈し、ほとんど地床炉に近い竪穴炉であり、火床面は良く焼けている。

出土遺物（第112・113図）

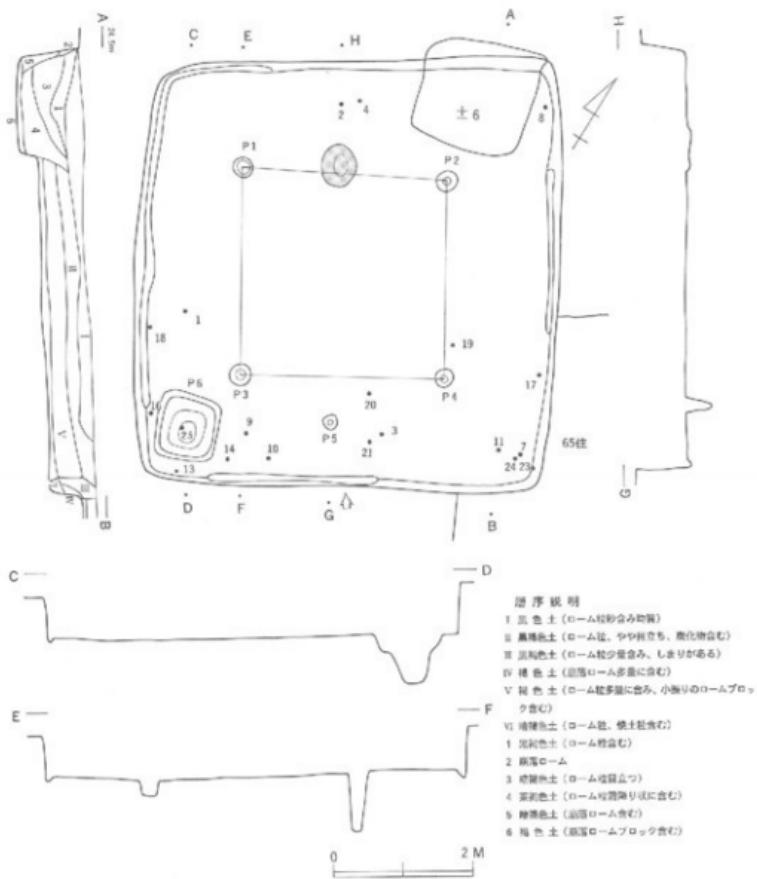
1 は、高環形土器である。脚部付根付近のみの残存で、脚径 3.7cm、現存高 4.3cm を測る。胎土は長石粒・小礫を含み、焼成は堅固である。2 は、形象埴輪であり、厚さ 2.3cm、現存高 5.3cm を測る。胎土は粗く長石・小礫を含み、焼成は良好である。外面には、ハケ目整形後紐帶を貼付けている。3 は、埴輪であり、厚さ 2.5cm、現存高 7.7cm を測る。

第66号住居址（第114図）

本住居址は、調査区の中央部やや北寄りに位置し、第6号土塗に切られる。住居址の規模は、北西一南東が 608cm、南西一北東が 606cm で、長軸方向を北西→南東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高平均60cmを測る。床面は、直床で中央部は堅固、壁際はやや高まっている。P₁は、梯子穴と考えられることにより、南東壁に入口部が存在すると考えられる。柱穴は、P₁～P₄が主柱穴と考えられる。P₅は、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、南西辺のほとんど及び北東辺・南東辺の中央部に巡らす。炉址は、P₁とP₂の中間に位置し、63×48cmの楕円形プランを呈し、火床面は良く焼け、ほとんど地床炉に近い竪穴炉である。

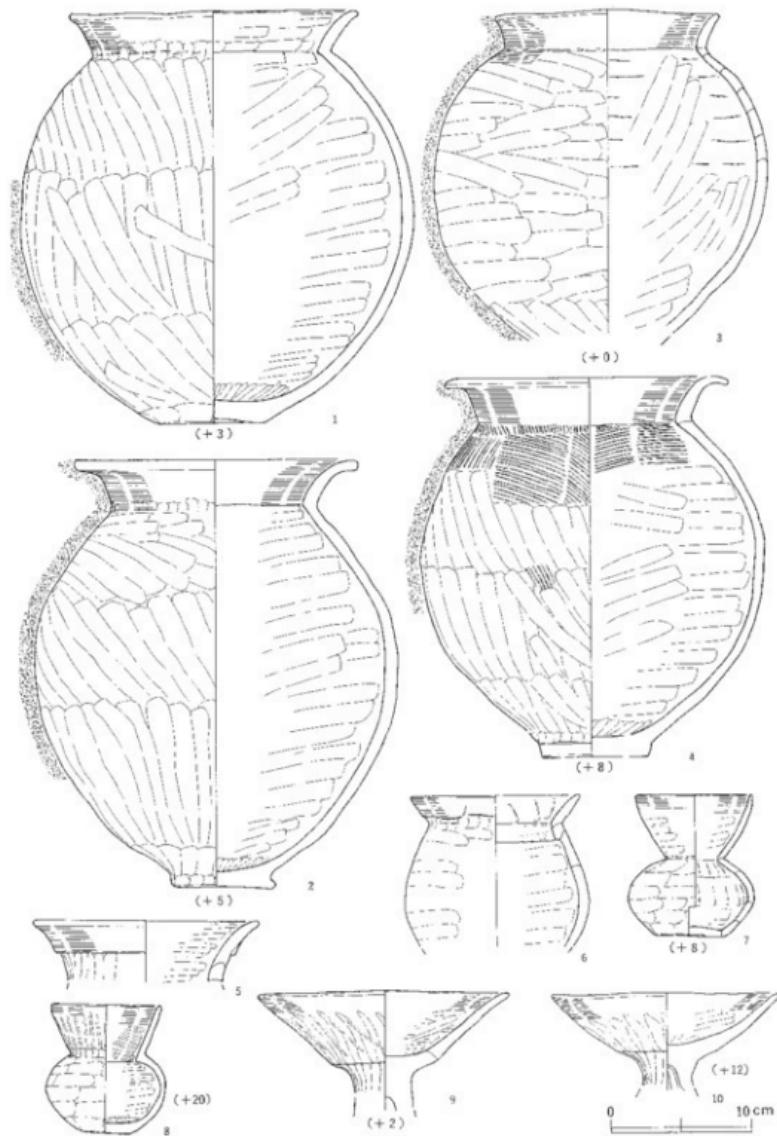
出土遺物（第115・116図）

1～6 は、壺形土器である。1 は、胴部の一部を欠き、口唇部径 20.3cm、最大胴径 27.8cm、底径 7.4cm、器高 29.5cm を測る。胎土は粗く長石粒・石英粒が目立ち、焼成は堅固である。外面の胴部中央にはススが付着している。2 は、口唇端と胴部を僅かに欠き、口唇部径 19.8cm、

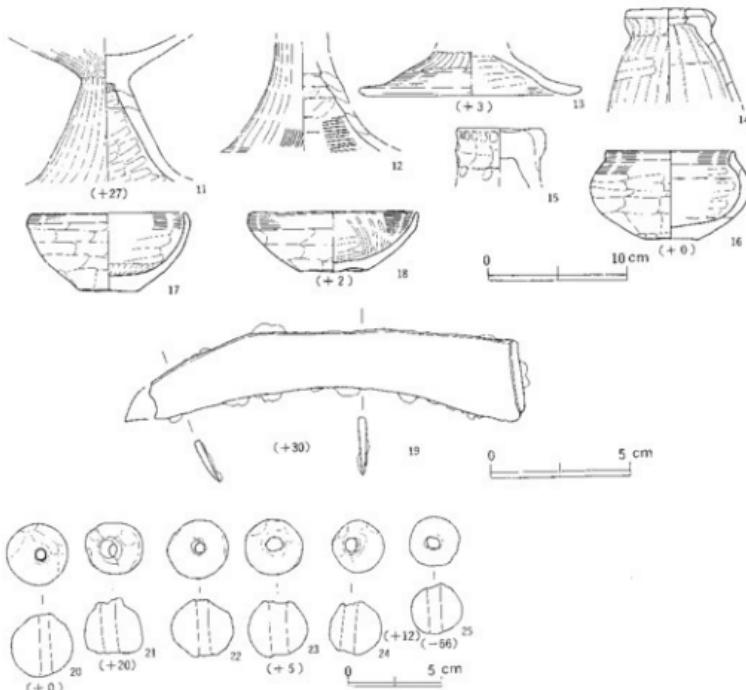


第114図 第66号住居址実測図(1)

最大胴径25.5cm、底径7.0cm、器高30.5cmを測る。胎土はやや粗く長石粒・石英粒・砂を含み、焼成は堅固である。外面口縁部から胴部中央にかけてススが付着している。3は、口縁部を僅かに欠き、また底部を欠き、口唇部径15.8cm、最大胴径23.6cm、現存高23.0cmを測る。胎土は緻密で長石微細粒を含み、焼成は良好である。外面の口縁部から胴部中央にかけてススが付着している。4は、口縁部の約5分の2及び底部の大半を欠き、推定口唇部径19.9cm、最大胴径24.3cm、推定底径7.4cm、器高27.0cmを測る。外面の口縁部から胴部中央にかけてススが付着している。5は、口縁部3分の1の残存で、口唇部径16.2cm、現存高4.3cmを測る。胎土は粗



第115図 第66号住居址実測図(2)



第116図 第66号住居址実測図(3)

く長石粒・石英粒・小砾を含み、焼成は良好である。6は、口縁部8分の1及び胴部2分の1の残存で、推定口唇部径12.0cm、最大胴径13.1cm、現存高15.7cmを測る。胎土は長石・石英細粒を含み、焼成は良好である。7・8は、壺形土器である。7は、口唇端及び胴部の2分の1を欠き、口唇部径8.3cm、最大胴径9.0cm、底径5.1cm、器高10.1cmを測る。胎土は長石・石英細粒を含み、焼成は良好である。8は、口唇端を欠き、口唇部径7.8cm、最大胴径8.6cm、底径3.6cm、器高9.1cmを測る。9～13は、高環形土器である。9は、環部のみの残存であり、口唇部径18.0cm、脚径4.4cm、現存高8.6cmを測る。胎土はやや粗く長石・石英・パミス粒を含み、焼成は堅固である。10は、環部のみの残存で口縁部の5分の3を欠き、推定口唇部径16.2cm、脚径3.6cm、現存高6.6cmを測る。胎土はやや粗く長石・石英細粒を含み、焼成は堅固である。11は、据部と環部の大半を欠き、脚径3.3cm、現存高10.3cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・小砾を含み、焼成は堅固である。12は、环部及び据部を欠き、脚径3.8cm、現存高7.8cmを測る。胎土はやや粗く、長石粒・石英粒を含み、焼成は堅固である。13は、据部の5分

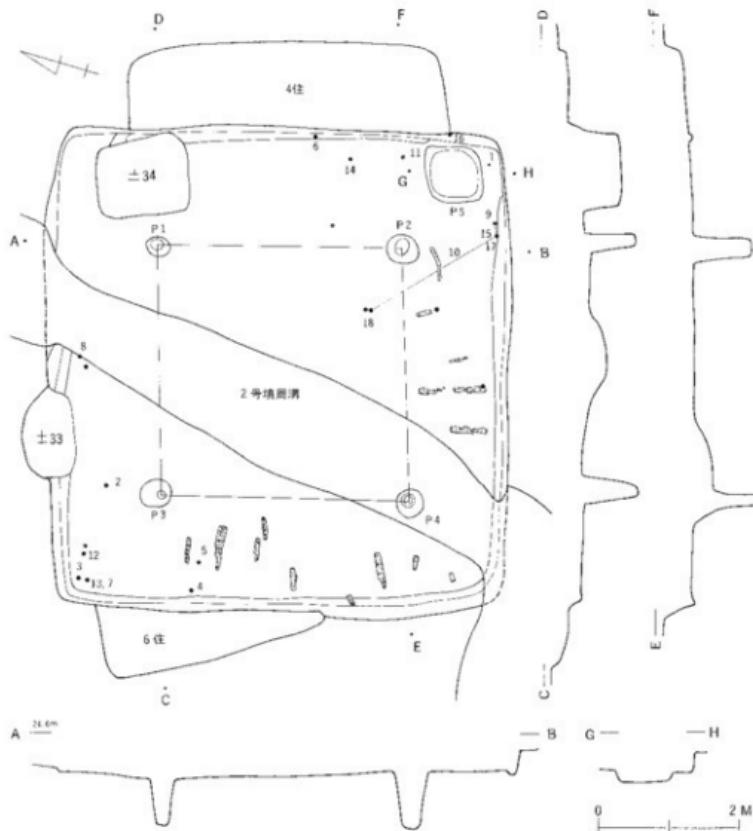
の4の残存であり、捲径15.9cm、現存高3.1cmを測る。胎土は長石粒・石英粒及び赤色粒子を含み、焼成は堅固である。14は、異形器台形土器である。器受部は完存し、脚部の大半を欠き、台部径5.8cm、孔径2.8cm、現存高7.7cmを測る。胎土は長石粒・石英粒が目立ち、焼成は堅固である。15は、台形土器である。台部のみの残存で、台径6.3cm、現存高3.8cmを測る。胎土は粗く長石細粒・砂を含み、焼成は堅固である。16は、鉢形土器である。完形の残存であり、口唇部径9.2cm、最大径11.5cm、底径4.0cm、器高6.3cmを測る。胎土は長石粒・石英粒を含み、焼成は堅固である。17・18は、壺形土器である。17は、口縁部の3分の2を欠き、推定口唇部径11.1cm、推定最大径11.5cm、底径4.2cm、器高5.6cmを測る。胎土は長石・石英細粒及び砂が目立ち、焼成は良好である。18は、口縁部の5分の1を欠き、口唇部径11.9cm、底径4.8cm、器高4.3cmを測る。胎土はきめ細かく長石・石英細粒を含み、焼成は堅固である。19は、鉄製鎌である。先端部を欠き、全長23.3cm、幅2.9cm、厚さ0.25cmを測る。20～25は、土玉である。20は、径33mm、高さ33mm、孔径6mmを測る。胎土は砂・雲母粒を含み、焼成は良好である。21は、径30.5mm、高さ29.5cm、孔径8mmを測る。胎土は砂を含み、焼成は良好である。22は、径32mm、高さ31mm、孔径7mmを測る。胎土は砂・小石・石英粒を含み、焼成はやや不良である。23は、径31mm、高さ30mm、孔径11mmを測る。胎土は砂・小石を含み、焼成は良好である。24は、径27mm、高さ27mm、孔径10mmを測る。胎土は砂・石英粒を含み、焼成は良好である。25は、径27mm、高さ27mm、孔径8mmを測る。胎土は砂・雲母粒を含み、焼成はやや不良である。

第74号住居址（第117図）

本住居址は、調査区の中央やや西寄りに位置し、第4号住居址及び第6号住居址を切る。また、第71号住居址を貼り、第33号土塗、第34号土塗及び第2号埴周溝に切られる。住居址の規模は、北一南が660cm、西一東が692cmで、長軸方向を西一東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高28cmを測る。床面は、貼り床で中央部はあまり堅くなく、周辺部は軟弱である。柱穴は、P₁～P₄が住居址の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。P₁は、南東コーナー部に位置し、83×83cm、深さ18cmの隅丸方形プランを呈し、位置・形状から判断して、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、北東コーナー部及び南東コーナー部を除き全周する。また、南壁・西壁下の床面上から、数多くの木炭が検出された。

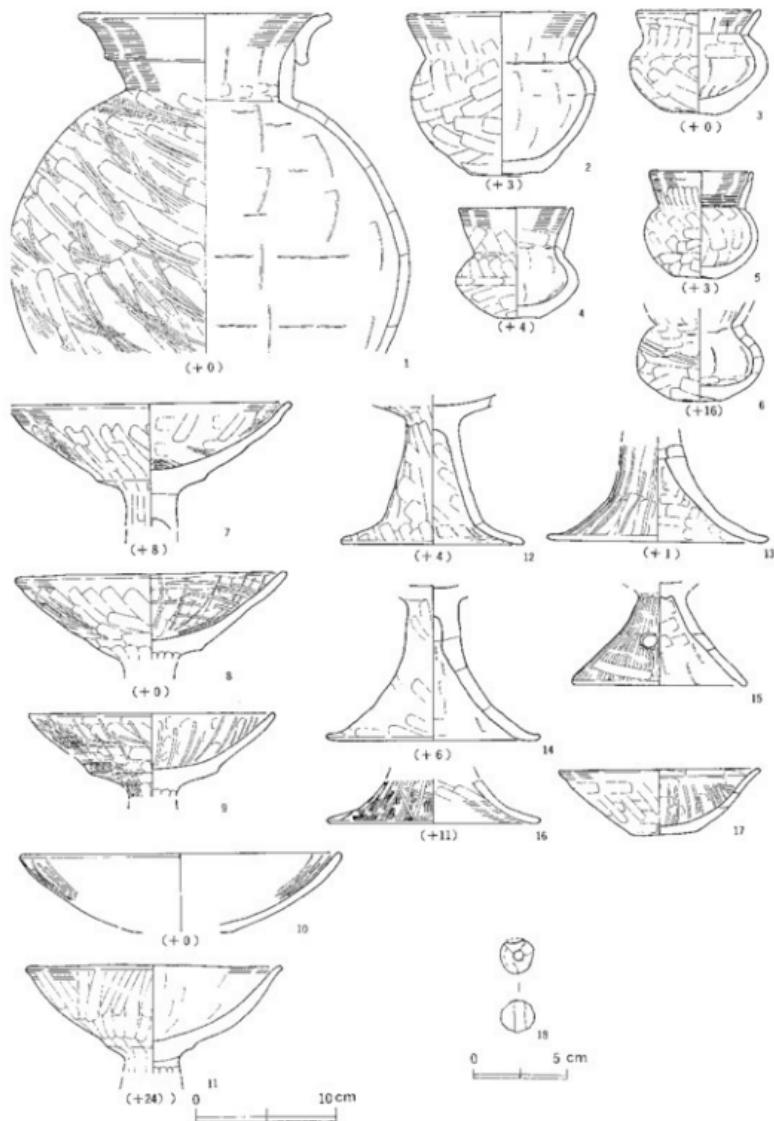
出土遺物（第118図）

1は、壺形土器である。約2分の1の残存で、口唇部径17.4cm、最大胴径28.3cm、現存高24.4cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂を含み、焼成は良好である。整形は、口縁部が内外面共ヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ後ヘラミガキ、胴部内面がヘラナデである。2～6は、壺形土器である。2は、ほぼ完形の残存で、口唇部径13.1cm、最大胴径13.4cm、底径5.2cm、器



第117図 第74号住居址実測図(1)

高11.5cmを測る。胎土は石英粒・砂・小石を含み、焼成は良好である。3は、肩部以下ほぼ完形で口縁部の一部が残存し、推定口唇部径 8.6cm、最大胴径 9.7cm、底径 3.5cm、器高 7.4cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂を含み、焼成は良好である。4は、口縁部を僅かに欠き、口唇部径 7.9cm、最大胴径 8.6cm、底径 2.9cm、器高 7.9cmを測る。胎土は石英粒・砂・小石を含み、焼成は良好である。5は、ほぼ完形の残存で、口唇部径 7.2cm、最大胴径 8.1cm、底径 3.2cm、器高 7.7cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂を含み、焼成は良好である。6は、約4分の3の残存で、最大胴径 8.9cm、底径 3.0cm、現存高 6.7cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂・小石・赤色粒子を含み、焼成は良好である。壺形土器の整形は、3を除き口縁部の



第118図 第74号住居址実測図(2)

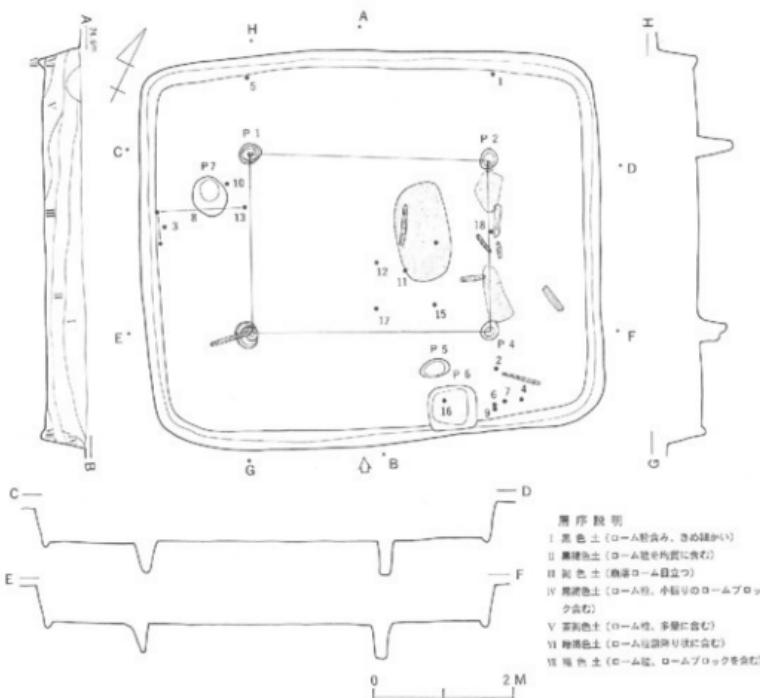
内外面共ヨコナデであり、3は外面ヘラナデである。胴部は外面がヘラケズリ又はヘラナデ、一部にヘラミガキが施され、内面はヘラナデである。7～16は、高环形土器である。7は、坏部の3分の2の残存で、推定口唇部径19.6cm、脚径3.6cm、現存高8.8cmを測る。胎土は石英粒・砂・小石を含み、焼成は良好である。8は、坏部の5分の3の残存で、口唇部径18.8cm、現存高6.1cmを測る。胎土は石英粒・砂を含み、焼成は良好である。9は、坏部の2分の1の残存で、推定口唇部径17.0cm、脚径3.9cm、現存高6.2cmを測る。胎土は砂を含み、焼成は良好である。10は、坏部のみの残存で、口唇部径22.3cm、現存高5.6cmを測る。胎土は砂・粘土粒子を含み、焼成は普通である。11は、坏部の3分の2の残存で、口唇部径17.7cm、脚径3.9cm、現存高7.8cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂・小石を含み、焼成は普通である。12は、坏部及び据部のほとんどを欠き、脚径3.8cm、推定裾径12.8cm、現存高10.5cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂・赤色粒子を含み、焼成は良好である。13は、脚部以下ほぼ完形の残存で、裾径15.6cm、現存高7.0cmを測る。胎土は石英粒・赤色粒子・小石を含み、焼成は良好である。14は、脚部以下5分の4の残存で、脚径3.7cm、推定裾径15.2cm、現存高11.2cmを測る。胎土は長石粒・石英粒・砂・小石・赤色粒子を含み、焼成は普通である。15は、坏部を欠き、脚径3.4cm、裾径12.3cm、現存高7.3cmを測る。体部中位の穿孔は3孔式である。胎土は砂・粘土粒子を含み、焼成は普通である。16は、据部5分の4の残存で裾径15.4cm、現存高14.5cmを測る。胎土は砂・赤色粒子を含み、焼成は良好である。高环形土器の整形は、坏部外面は、7・8・11の口縁部内外面にヨコナデが施され、体部はヘラナデ、7～9はその後にヘラミガキを施している。脚部は、16を除き内外面にヘラナデが施され、13はその後にヘラミガキを施している。15は、ヘラミガキ後ヘラナデを、16は、ハケ目後ヘラミガキを施している。17は、坏形土器である。ほぼ完形の残存で、口唇部径14.0cm、底径4.9cm、器高4.75cmを測る。胎土は砂・赤色粒子を含み、焼成は良好である。整形は、外面ヘラナデ、内面ヘラナデ後ヘラミガキを施している。18は、土玉である。径18mm、高さ17mm、孔径5mmを測る。

第80号住居址（第119図）

本住居址は、調査区の南西端に位置する。住居址の規模は、北一南が567cm、西一東が159cmで、長軸方向を西一東に持ち、隅丸方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、貼床で堅微である。柱穴は、P₁～P₄が主柱穴と考えられ、P₅・P₆は支柱穴と考えられる。P₄は、70×72cm、深さ26cmを測り、貯蔵穴と考えられる。壁溝は全周する。炉址は、住居址の中央部やや東寄りに位置し、71×40cm、深さ7cmを測る地床炉である。また、床面上には炭化材が散在する。

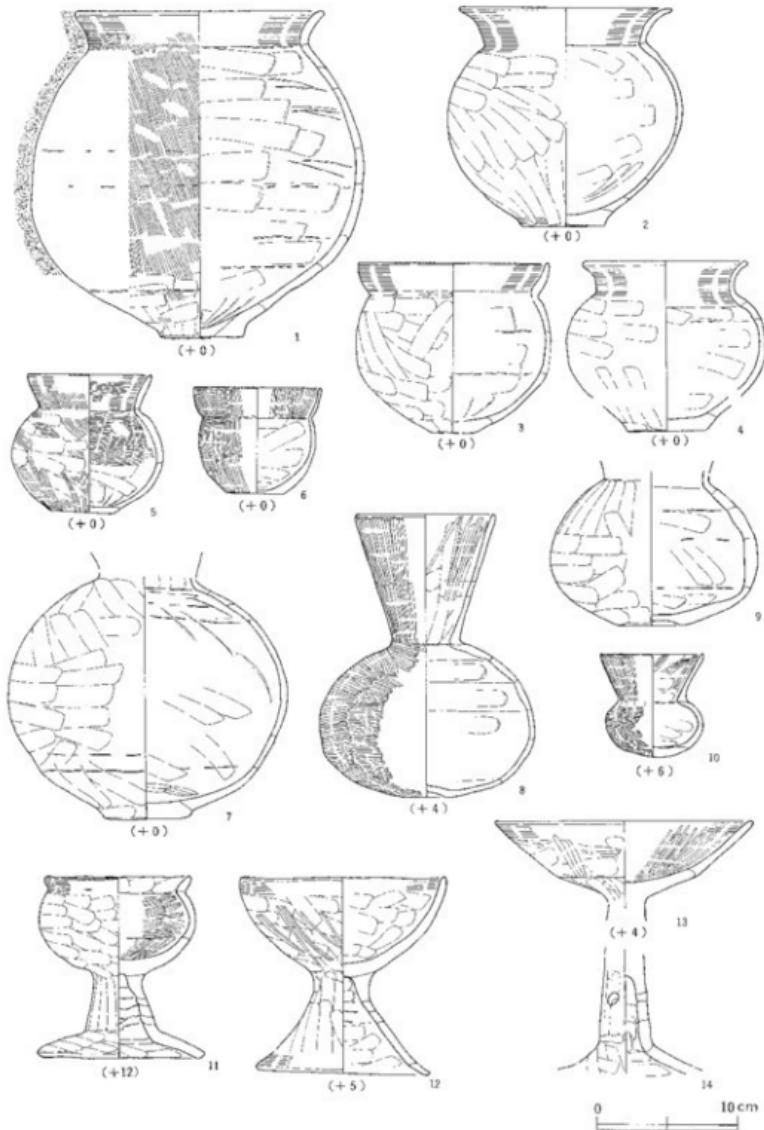
出土遺物（第120・121図）

1～6は、壺形土器である。1は、口縁部・胴部の一部を欠き、口唇部径17.6cm、最大胴径

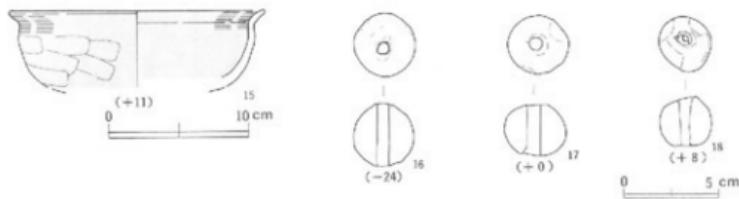


第119図 第80号住居址実測図(1)

23.5cm、底径 6.1cm、器高23.3cmを測る。胎土は密で細砂粒を多量に含む。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。胴部外面には二次焼成によるススが、また胴下端部内面には煮沸によるススが付着している。2は、口唇部径15.1cm、最大胴径16.7cm、底径 5.8cm、器高15.8cmを測る。胎土は密で砂粒及び小礫粒を多量に含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。胴下端部外面には二次焼成による焼土が付着している。3は、約2分の1の残存で、推定口唇部径13.6cm、推定最大胴径13.8cm、推定底径 3.2cm、推定器高12.0cmを測る。胎土は密で微砂粒を多量に含み、石英粒・赤色粒子・小礫粒を含む。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。4は、胴下端部を欠き、口唇部径11.7cm、最大胴径14.0cm、底径 5.4cm、推定器高12.0cmを測る。胎土は密で微砂粒を多く含み、小礫粒を含む。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。外面の約2分の1に僅かにススが付着している。5は、ほぼ完形の残存で、口唇部径 8.8cm、最大胴径10.7cm、底径4.45cm、器高 9.9cmを測る。胎土は密で微砂粒を多量に含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。6は、口縁部から胴部の3分の2までの約2分の1を欠き、

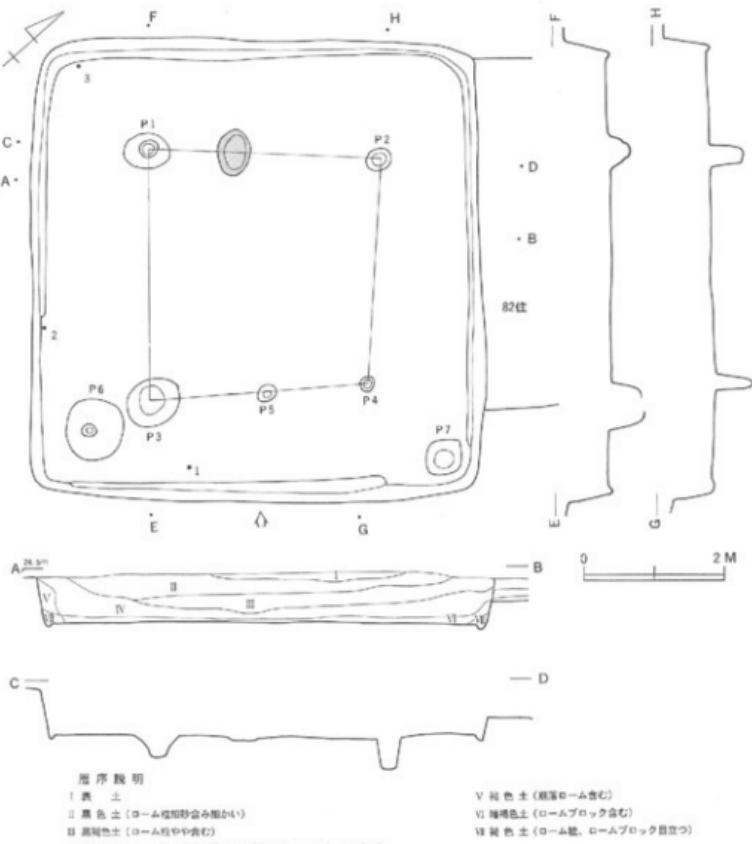


第120図 第80号住居址実測図（2）



第121図 第80号住居址実測図(3)

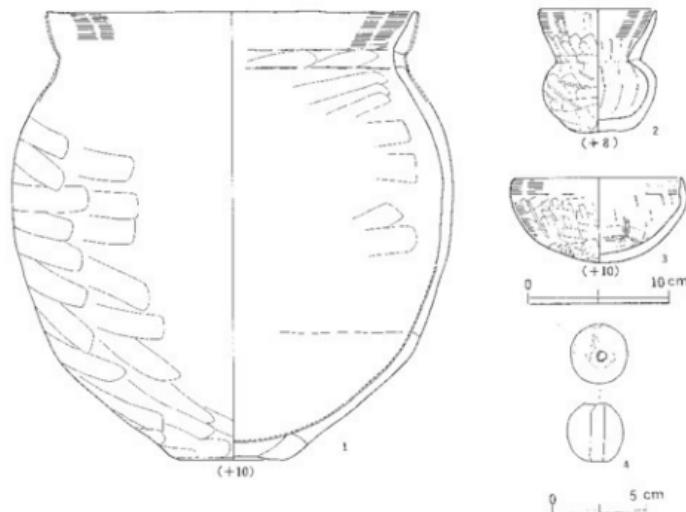
口唇部径9.05cm、底径4.0cm、器高7.6cmを測る。胎土は密で微砂粒を多く含む。色調は外面黒褐色内面橙褐色を呈し、焼成は良好である。7～9は、壺形土器である。7は、口縁部及び頸部の一部を欠き、最大胴径19.8cm、底径6.1cm、現存高17.3cmを測る。胎土は密で砂粒、小礫粒を多量に含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。8は、口縁部の約4分の3、胴部の4分の1及び胴部中央の4分の3を欠き、口唇部径9.9cm、最大胴径15.2cm、底径3.1cm、器高20.35cmを測る。胎土は密で微砂粒・小礫粒・褐色粒子を含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。9は、口縁部を欠き、最大胴径14.7cm、底径5.0cm、現存高11.0cmを測る。胎土は密で砂粒を多量に含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。10は、壺形土器である。完形の残存で、口唇部径7.3cm、最大胴径6.9cm、器高7.45cmを測る。胎土は密で微砂粒を多量に含み、小礫粒を少量含む。色調は橙褐色を呈し、焼成は堅固である。11は、台付壺形土器である。完形の残存で、口唇部径10.4cm、底径12.0～11.1cm、器高12.95cmを測る。胎土は密で微砂粒を多量に含み、長石・石英を含む。色調は外面黒褐色内面褐色を呈し、焼成は良好である。12～14は、高環形土器である。12は、坏部の一部及び縁部の3分の1を欠き、口唇部径14.6cm、底径12.3cm、器高14.0cmを測る。胎土は密で微砂粒を多量に含み、石英・小礫粒を含む。色調は外面淡褐色内面褐色を呈し、焼成は良好である。13は、坏部のみの残存で、口唇部径18.25cm、現存高6.2cmを測る。胎土は密で微砂粒を多量に含み、小礫粒・石英・褐色粒子を含む。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。14は、脚部のみの残存で、脚径2.8～3.6cm、現存高8.7cmを測る。胎土は密で細砂粒を多量に含み、石英粒を含む。色調は外面暗褐色内面黒褐色を呈し、焼成は良好である。15は、环形土器である。上部の約3分の1の残存であり、口唇部径18.0cm、現存高5.3cmを測る。胎土は密で微砂粒を多く含む。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。内外面共に焼成後に赤色塗彩を施している。16～18は、土器である。16は、径32mm、高さ33.5mm、孔径6mmを測る。胎土は砂粒を含み、色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。17は、径32.5mm、高さ27.5mm、孔径7mmを測る。胎土は砂粒を含み、色調は褐色を呈し、焼成は良好である。18は、径27mm、高さ26mm、孔径7mmを測る。胎土は砂・小石を含み、色調は褐色を呈し、焼成は普通である。



第122図 第81号住居址実測図(1)

第81号住居址（第122図）

本住居址は、調査区の南西部に位置し、82号住を切る。住居址の規模は、北西—南東が660cm、南西—北東が637cmを測り、長軸方向を北西—南東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高平均60cmを測る。床面は、中央部がしっかりした貼床で、周辺部は軟弱である。P₁～P₄は、梯子穴と考えられることから、南東部に入口を持つと考えられる。P₅～P₇は、主柱穴と考えられる。P₈は、90×82cm、深さ60cmの楕円形を呈し、また、P₉は、51×50cm、深さ35cmの隅丸方形プランを呈し、共に位置・形状より判断して貯蔵穴と考えられる。

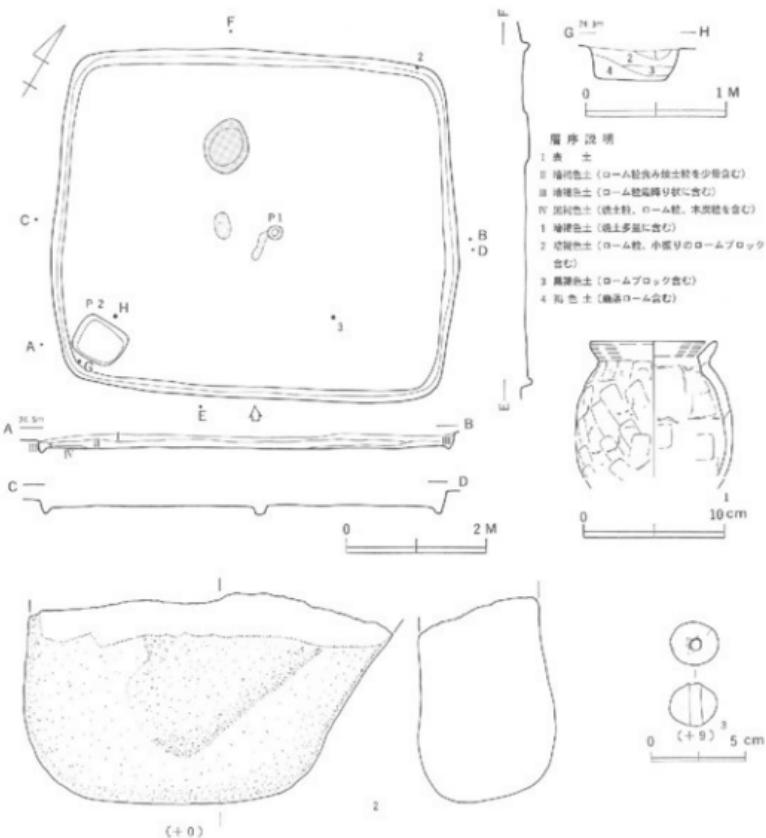


第123図 第81号住居址実測図(2)

塙溝は、東側コーナー部及び南側コーナー部を除き全周している。炉址は、 $66 \times 48\text{cm}$ 、深さ 5cm の楕円形プランを呈する地床炉であり、火床面は良く焼けている。

出土遺物（第123図）

1は、壺形土器である。胴部中央を大半欠き、推定口唇部径 23.4cm 、最大胴径 31.2cm 、底径 8.0cm 、推定器高 31.8cm を測る。胎土は密で小礫粒を含み、微砂粒を多量に含む。焼成は良好である。整形は、器面剥落が著しいことにより、はっきりしないが、口縁部は内外面共にヨコナデ、胴部は内外面共にヘラナデを施している。外面の胴部中位より胴下端部にかけてススが付着し、また、胴下端部は二次焼成により、赤変している。2は、壺形土器である。完形の残存で、口唇部径 8.2cm 、底径 3.6cm 、器高 8.8cm を測る。胎土は、砂粒・長石粒・石英粒・赤色粒子を含み、焼成は良好である。整形は、口縁部上半の内外面は共にヨコナデで、外面は一部にヨコナデが施されている。口縁部下半の外面はヘラケズリ後ヘラナデ、頸部にはヘラによるおさえ、胴部にはヘラケズリ後ヘラナデ、一部にヘラミガキを施している。内面にはヘラナデを施している。3は、壺形土器である。約4分の1の残存で、口唇部径 11.7cm 、最大径 12.4cm 、器高 6.0cm を測る。胎土は砂を含み、石英粒・雲母粒を僅かに含む。焼成は良好である。整形は、口縁部内外面共ヨコナデ、体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、その後ヘラミガキを施し、体部内面はヘラナデ後一部ヘラミガキを施している。4は、土玉である。径 30mm 、高さ 31mm 、孔径 7mm を測る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。



第124図 第86号住居址実測図

第86号住居址（第124図）

本住居址は、調査区の南側に位置する。住居址の規模は、西一東が 577cm、北一南が 497cm で、長軸方向を西一東に持ち、方形プランを呈している。壁面はなだらかに立ち上がり、壁高平均13cmを測る。床面は、しっかりした貼床であり、柱穴はない。P₁は、南側コーナー部に位置し、74×63cm、深さ22cmの方形プランを呈し、貯蔵穴と考えられる。壁溝は、全周する。炉址は、80×67cm、深さ4cmの楕円形プランを呈する地床炉であり、火床面は良く焼けている。

出土遺物（第124図）

1 は、壺形土器である。約4分の1の残存で、口唇部径 8.7cm、最大胴径11.1cm、現存高9.7

cmを測る。胎土は砂を含み、石英を少量含む。色調は外面暗黄褐色で、一部に黒斑があり、内面は褐色であり、焼成は普通である。整形は、口縁部内外面共ヨコナデ、胴部外面はヘラケズリで内面はヘラナデを施している。2は、現存長264cm、残存幅148cm、高さ9.9cmを測る。色調は淡灰色を呈し、石質は凝灰岩である。3は、土玉である。径25mm、高さ23mm、孔径6mmを測る。胎土は砂粒を含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

b. 土塗

本土塗は、調査区のほぼ中央部に位置し、第46号住居址の中央部を切る。土塗の規模は、北東—南西が221cm、北西—南東が168cmで、深さ20cmを測り、長軸方向を北東—南西に持ち、隅丸長方形プランを呈している。壁面は、なだらかに立ち上がり、底面は、やや凹凸を有する。

第5号土塗（第125図）

本土塗は、調査区のほぼ中央部に位置し、第49号住居址の南西側壁面を切る。土塗の規模は、北西—南東が285cm、南西—北東が158cmで、深さ99cmを測り、長軸方向を北西—南東に持ち、隅丸長方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、やや凹凸を有する。

第6号土塗（第125図）

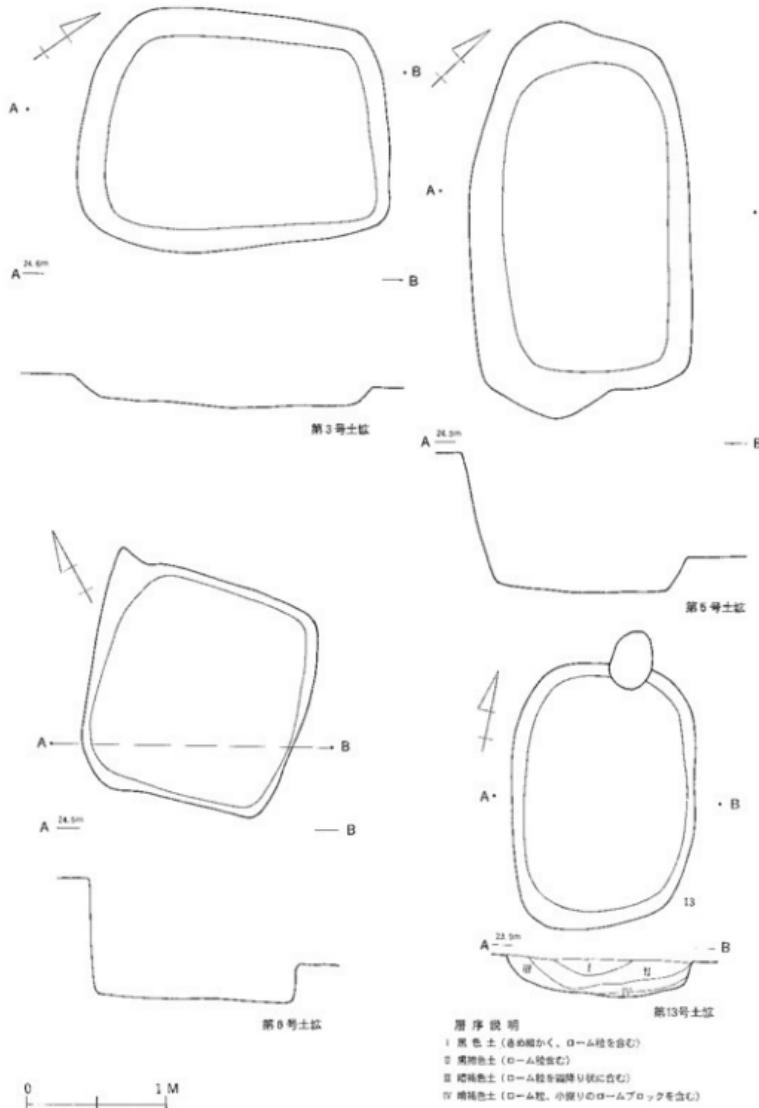
本土塗は、調査区のほぼ中央部に位置し、第66号住居址の北側コーナー部を切る。土塗の規模は、西—東が160cm、北—南が153cmで、深さ87cmを測り、長軸方向を西—東に持ち、隅丸長方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、やや凹凸に富む。

第13号土塗（第125図）

本土塗は、調査区のほぼ中央部に位置し、第64号住居址を切る。土塗の規模は、北—南が183cm、西—東が132cmで、深さ24cmを測り、長軸方向を北—南に持ち、隅丸長方形プランを呈している。壁面は、なだらかに立ち上がり、底面は、やや凹凸に富む。

第16号土塗（第126図）

本土塗は、調査区のほぼ中央部に位置し、第77号住居址を切る。土塗の規模は、北—南が225cm、西—東が55cmで、深さ39cmを測り、長軸方向を北—南に持ち、長方形プランを呈している。壁面は、垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。



第125図 各土塙実測図(1)

第33号土塙（第126図）

本土塙は、調査区の中央部やや西寄りに位置し、第74号住居址の北側壁面を切る。土塙の規模は、西一東が130cm、北一南が76cmで、深さ48cmを測り、長軸方向を西一東に持ち、隅丸長方形プランを呈している。壁面は、なだらかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

第34号土塙（第126図）

本土塙は、調査区の中央部やや西寄りに位置し、第4号住居址、第71号住居址及び第74号住居址を切る。土塙の規模は、北一南が130cm、西一東が108cmで、深さ55cmを測り、長軸方向を北一南に持ち、隅丸長方形プランを呈している。壁面は、垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

第38号土塙（第126図）

本土塙は、調査区の東側に位置し、第26号住居址の南西部を切る。土塙の規模は、北西一南東が188cm、北東一南西が176cmで、深さ33cmを測り、長軸方向を北西一南東に持ち、方形プランを呈している。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

第50号土塙（第127図）

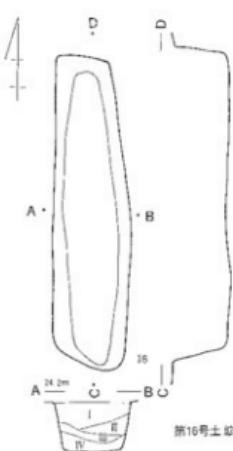
本土塙は、調査区の東側に位置し、第14号住居址を切る。土塙の規模は、南西一北東が106cm、北西一南東が96cmで、深さ52cmを測り、長軸方向を南西一北東に持ち、略隅丸方形プランを呈している。壁面は、なだらかに立ち上がり、底面は、ナベ底状を呈する。

第53号土塙（第127図）

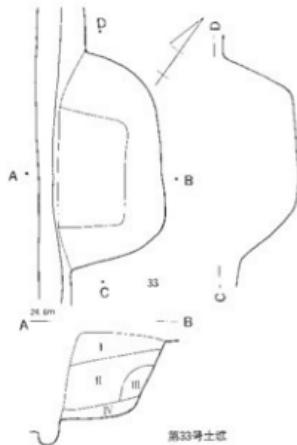
本土塙は、調査区の北東部に位置し、第16号住居址及び第17号住居址のほぼ中央部を切る。土塙の規模は、南西一北東が256cm、北西一南東が166cmで、深さ44cmを測り、長軸方向を南西一北東に持ち、長方形プランを呈している。壁面は、垂直に立ち上がり、底面は、平坦である。

第56号土塙（第127図）

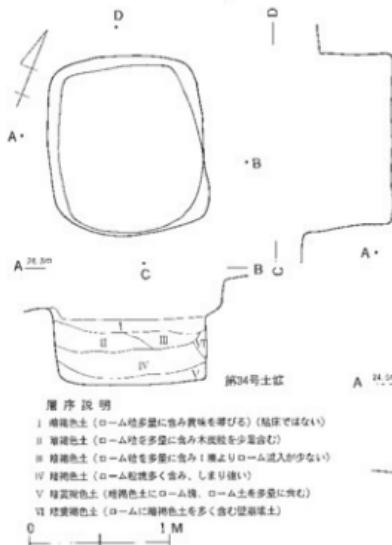
本土塙は、調査区のやや北側に位置する。土塙の規模は、上段は、北一南が104cm、西一東が81cmで、深さ48cmを測り、下段は、西一東が67cm、北一南が34cmを測り、共に隅丸長方形プランを呈している。長軸方向は、上段が北一南で、下段が西一東である。壁面は、北側のみほぼ垂直に立ち上がり、他はなだらかに立ち上がる。底面は、上段、下段共に凹凸に富む。



層序説明
 I 黒褐色土（ローム含み、古め細かい）
 II 暗褐色土（ローム性、小面積のロームブロックを含む）
 III 暗褐色土（ローム粒子混在、粘性がある）
 IV 黑色土（ロームブロック目立ち、粘性に富む）



層序説明
 I 黒褐色土（ローム含む）
 II 暗褐色土（ローム粒目立つ）
 III 黑色土（強烈ローム目立つ）
 IV 黑褐色土（ロームブロック含む）



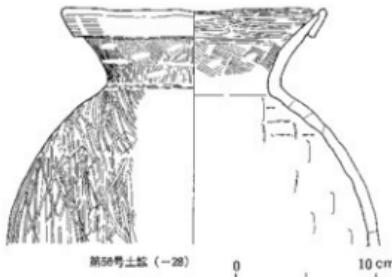
層序説明
 I 塔褐色土（ロームを多量に含み質地を導びく）（粘床ではない）
 II 暗褐色土（ローム塊を多量に含み木炭粒を少量含む）
 III 暗褐色土（ローム塊を多量に含み、塵よりローム流入が少ない）
 IV 暗褐色土（ローム塊が多く含み、しまり達い）
 V 黑褐色土（暗褐色土にローム後、ローム土を多量に含む）
 VI 暗褐色土（ロームに暗褐色土を多く含む泥炭堆土）



第126図 各土塚実測図(2)



第127図 各土坑実測図(3)



第128図 各土塙出土遺物

第57号土塙（第127図）

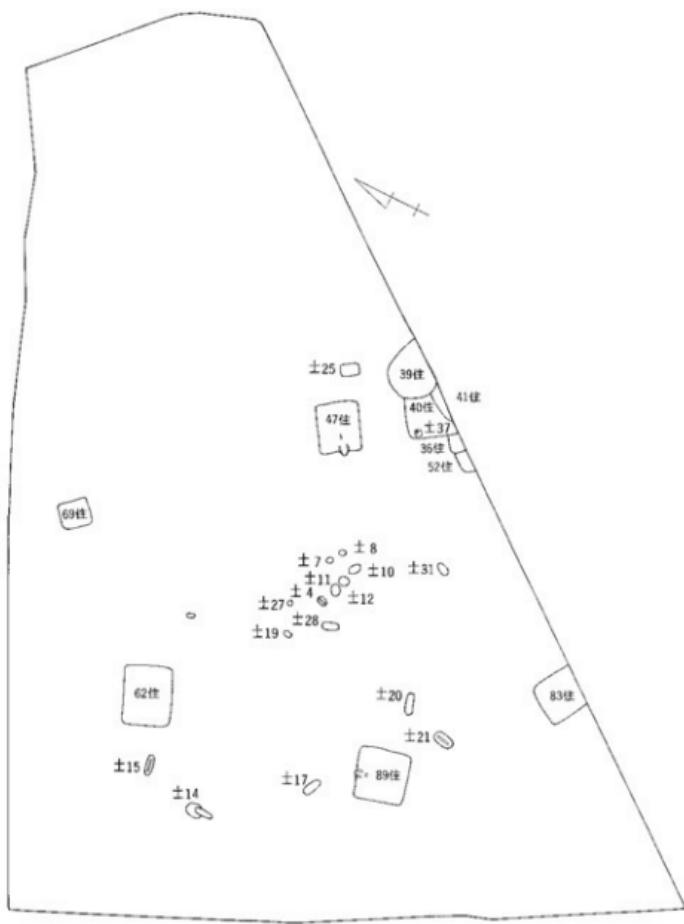
本土塙は、調査区のやや北側に位置する。土塙の規模は、北一南が95cm、西一東が81cmで、深さ41cmを測り、長軸方向を北一南に持ち、不整円形プランを呈している。壁面は、東側を除き、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、極めて凹凸に富む。

出土遺物（第128図）

1は、第56号土塙より出土した壺形土器である。胴部中位より下を欠き、推定口唇部径18.2cm、推定最大胴径26.2cm、現存高16.9cmを測る。最大径を胴部中位に有し、頸部はくびれで口縁は外反して立ち上がり、口縁は貼り付による複合口縁を呈する。胎土は石英・砂・小石を含み、色調は外面とも暗褐色を呈し、焼成は良好である。調整は口縁外面がヨコナデ、頸部は綫方向を基調としたハケナデを施し、くびれ部はややていねいに横方向のヘラミガキ、肩部は綫方向のハケナデ後ヘラミガキを施し、胴部は斜方向のヘラケズリ後、ややランダムな綫方向のヘラミガキを施している。口縁内面は横方向の密なヘラミガキ、頸部はハケナデを残し、胴部は剥落が著しいが、ヘラナデを施している。これはIV層上部より、口縁を下にした状態で出土し、残存状況その他から、廃棄と考えられる。

（處）

5. 古墳時代後期



第129図 古墳時代後期遺構配置図

古墳時代後期の概要

本時期に属する遺構は住居址10軒（36号・39号・40号・41号・47号・52号・62号・69号・83号・89号）であり、調査区南側の工場付近では重複が著しいが、他は間隔をとりながら略環状の分布を示す。土塙は18基検出され、住居址群の環の内側に11基が集中しており、他は住居址群の東辺に2基、西辺に5基といった3群にグルーピングされる。

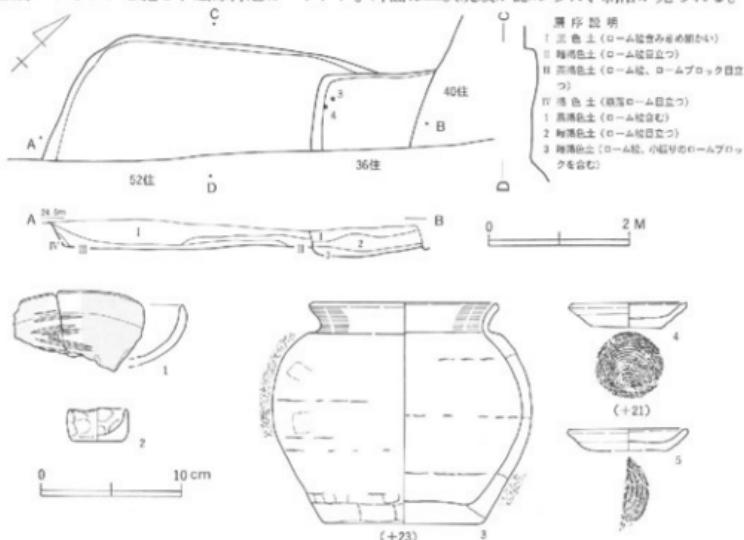
a. 住居址

第36号住居址（第130図）

本住居址は調査区南側に位置し、大半が工場建設により削平されている。第52号住居址を切り、第40号住居址に切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高22cmを測る。床面は貼床で凹凸を有し、軟弱である。残存部からは炉址・柱穴は検出されず、壁溝は巡らせていない。

出土遺物（第130図）

1は転用砥石である。内外面とも赤彩された环形土器の体部に9条の溝を刻む。使用された部分は赤彩が消えている。2は手捏ね土器で、約1/2が残存する。口径4.0cm、底径3.3cm、器高2.3cmを測る。体部内外面とも指頭によるオサエを施し、外面は一部ヘラナデ調整。1、2は本住居址に伴うものである。3は变形土器で口縁部の大半を欠く他は完存。推定口径13.3cm最大径18.4cm、底径11.2cm、器高15.8cmを測る。口縁内外ともヨコナデ、胴部はヘラナデ後回転台によるナデを施し、底部付近はヘラナデ。外面は二次焼成が認められ、剥落が見られる。



第130図 第36号・52号住居址実測図

4, 5は壺形土器である。4は口縁部の一部を欠く他は完存。口径 8.3cm、底径 4.8cm、器高 1.8cmを測る。ロクロ成形後回転糸切りを行なう。5は約 $\frac{1}{2}$ 残存し、口径 8.6cm、底径 5.8cm器高 1.6cmを測る。ロクロ成形後回転糸切りを行なう。

第52号住居址（第130図）

本住居址は調査区南側に位置し、大半が工場建設により削平されている。第36号・40号住居址に切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高14cmを測る。床面は貼床でやや凹凸を有し、軟弱である。残存部からは炉址・柱穴は検出されず、壁溝は退らせていなかった。遺物は破片のみで復原しうるものではなく、量的にも少量であった。

第39号住居址（第131図）

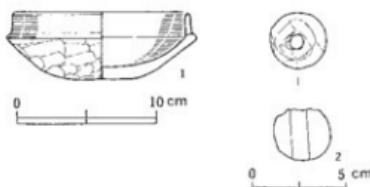
本住居址は調査区南側に位置し、約1/2が工場建設により削平されている。第40号住居址を切る。規模は長径 702cm を測り、不整な円形プランを呈する。床面は直床で中央に向って皿状に凹み、軟弱である。柱穴は24本検出され、いずれも20~40cmの深さを有する。炉は検出されなかった。本例は一応住居址としたが、住居址ではない可能性もある。

出土遺物（第132図）

1は环形土器で、口縁部は一部のみで体部は完存。口径12.4cm、最大径13.5cm、器高4.7cmを測る。体部と口縁部の境に外縫を有し、口縁は短く内傾気味に立ち上がる。外面口縁部はヨ



第131図 第39号住居址実測図(1)



第132図 第39号住居址実測図(2)

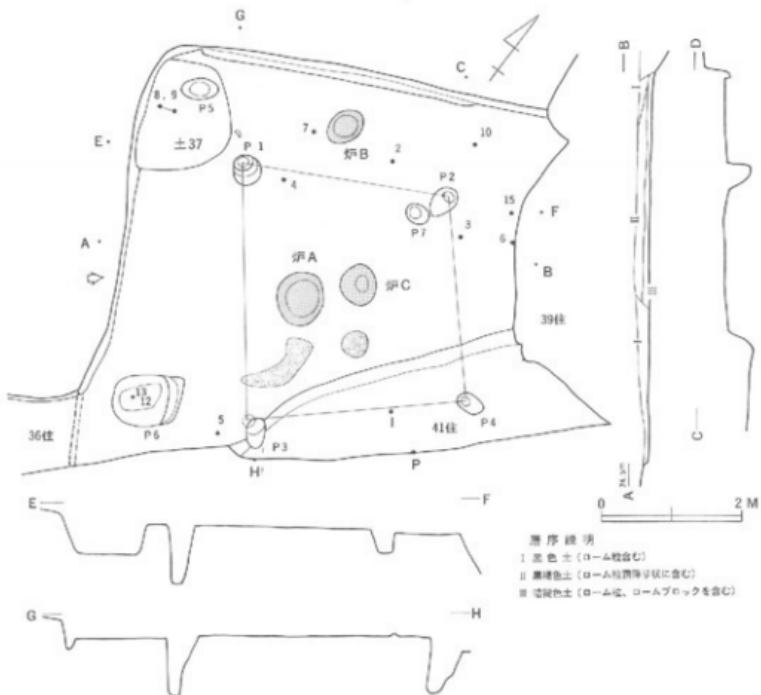
コナデ、体部はヘラケズリ後ヘラナデを施す。内面は回転台を用いたナデ調整。胎土は細砂を含む極めて精選されたもので、淡褐色に焼き上げられている。2は土玉である。径30mm、高さ27mm、孔径9mmを測る。整形・調整の粗雑なもので、完存品である。

第40号住居址（第133図）

本住居址は調査区南側に位置し、一部が工場建設により削平されている。第36号住居址を切り、第39号・41号住居址・第37号土塁に切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高34cmを測る。床面は貼床で全体に軟弱である。柱穴は6本検出され、規模や位置からP₁～P₆の4本が主柱穴と思われ、P₁・P₆は補助柱穴である。P₁は南西辺に位置し、深さ51cmを測り一辺に段を有するもので、貯蔵穴である。壁溝は残存部では北辺の一部に廻らすのみ。炉址は3基検出され、炉Aが廃屋時まで使用していたものである。各々の規模は、炉A78×66cm、炉B57×43cm、炉C60×54cmを測り、いずれも地床炉に近い堅穴炉で梢円形を呈し、炉底は良く焼けている。なお、炉址と貯蔵穴の位置関係から、南西に入口を有すると考えられる。

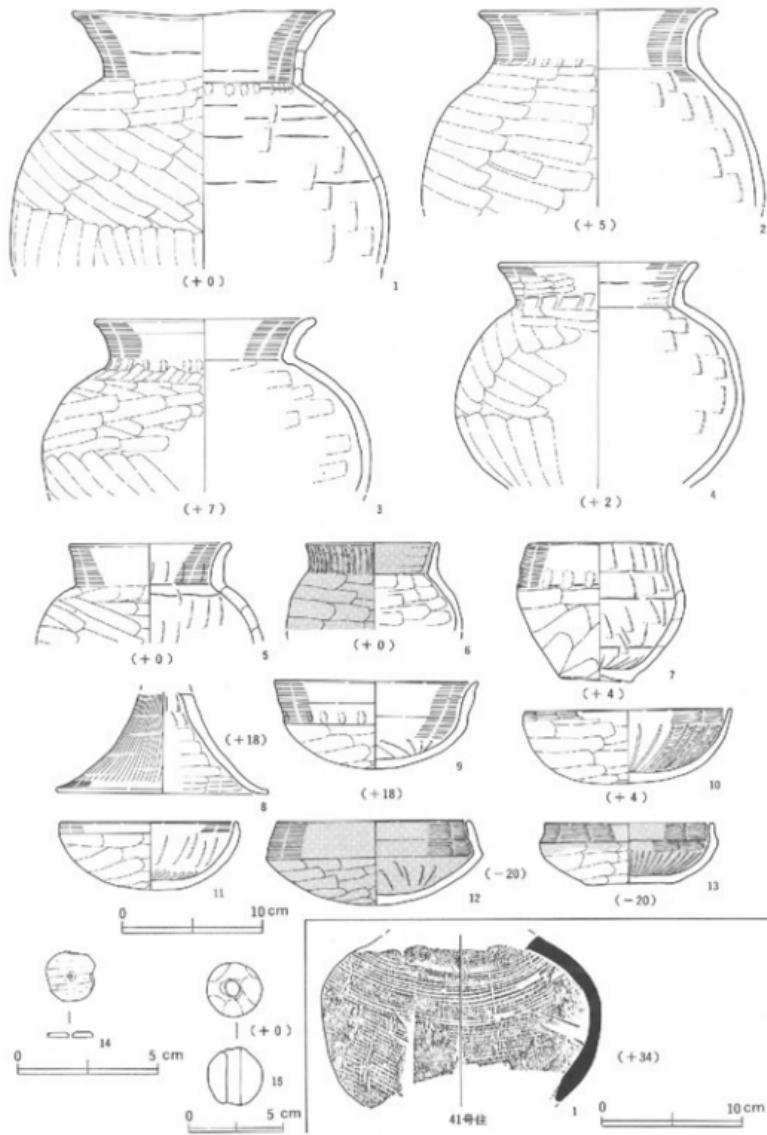
出土遺物（第134図）

1～6は変形土器で、1は口唇端と胴下半を欠く他は完存。口径18.4cm、最大径25.7cm、現存高18.1cmを測る。胴部に最大径を有し、頸部は大きくくびれて口縁は外反して立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデを施す。整形時の輪積痕を隨所に残している。2は胴下半を欠くのみで、口径17.0cm、最大径24.5cm、現存高14.0cmを測る。胴部に最大径を有し、頸部は大きくくびれて口縁は外反して立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は内外面ともヘラナデを施し、器内面の剥落が目立つ。3は胴下半を欠くのみで、口径15.4cm、最大径22.9cm、現存高13.4cmを測る。胴部は球状に膨み最大径を胴中位に有し、頸部は大きくくびれて口縁は外反して立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部に指痕を残し、肩部はヘラナデ、胴部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデを施し、器内面の剥落目立つ。4は胴下半と胴上半の1/2周を欠く。口径14.0cm、最大径20.1cm、現存高15.1cmを測る。胴部は球状に膨み最大径を胴中位に有し、頸部は大きくくびれて口縁は外反して立ち上がる。口縁上半は内外面ともヨコナデ、以下は内外面ともヘラケズリ後ヘラナデを施し、器内面の剥落目立つ。5は胴下半を欠き、口径11.7cm、現存高7.0cmを測る。胴部は球状に膨み、頸部は大きくくびれて口縁は直立気味に立ち上がる。外面の口縁部はヨコナデ、肩部はヘラナデ、胴部はヘラケズリを施し、内面の口縁部はヘラナデ後ヨコナデ、以下はヘラナデを施す。6は胴上半の1/2と口縁の大半が残存する。口径15.2cm、現存高6.1cmを測る。胴部は球状に膨み、口縁は直立気味に立ち上がる。口縁外面はヘラケズリ後ヘ



第133図 第40号・41号住居址実測図(1)

ラミガキ、内面はヘラナデ、胴部は外面ともヘラケズリ、器外面と口縁内面に赤彩を施す。7は鉢形土器で完存品。口径10.5cm、最大径12.0cm、底径5.0cm、器高9.9cmを測る。底部は上げ底で口縁は内傾気味に立ち上がる。口縁外面はヨコナデ、体部はヘラケズリ、器内面はヘラナデ。8は高環形土器で、環部と裾部の $\frac{1}{4}$ 周を欠く。裾径15.2cm、現存高7.0cmを測る。9～13は环形土器で、9は $\frac{1}{3}$ のみ残存し推定口径14.4cm、器高6.2cmを測る。外縁を有し、口縁は外反気味に立ち上がる。体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデ。10は口縁を $\frac{1}{4}$ 周欠くのみ。口径14.5cm、器高5.3cmを測り、半球形を呈する。口縁外部はヘラミガキ、体部はヘラナデ、器内面はヘラナデ後ヘラミガキ。11はほぼ完存品。口径12.6cm、器高4.8cmを測り、半球形を呈する。口縁は外面ともヨコナデ、体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデ。12は $\frac{1}{2}$ のみの残存。口径13.8cm、最大径15.5cm、器高6.0cmを測り、外縁を有し口縁は内傾する。器内外面ともに赤彩を施す。13は口縁を $\frac{1}{4}$ 周欠く。口径11.9cm、最大径12.6cm、底径6.0cm、器高4.4cmを測り、外縁を有し口縁は内傾気味。口縁外面と器内面はヘラミガキ、



第134図 第40号・41号住居址実測図

体部はヘラナデ。14は有孔円板で $18 \times 17\text{mm}$ 、厚さ1.9mm、孔径1.0mmを測る。滑石製。15は土玉で
径30mm孔径 0.9 × 0.7mmを測る。やや粗雑なつくりである。

第41号住居址（第133図）

本住居址は調査区南側に位置し、工場建設により大半が削平されている。第40号住居址を切り、第39号住居址に切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高10cmを測る。床面は貼床で軟弱である。残存部からは炉址・柱穴は検出されず、壁溝は廻らせていないかった。

出土遺物（第134図）

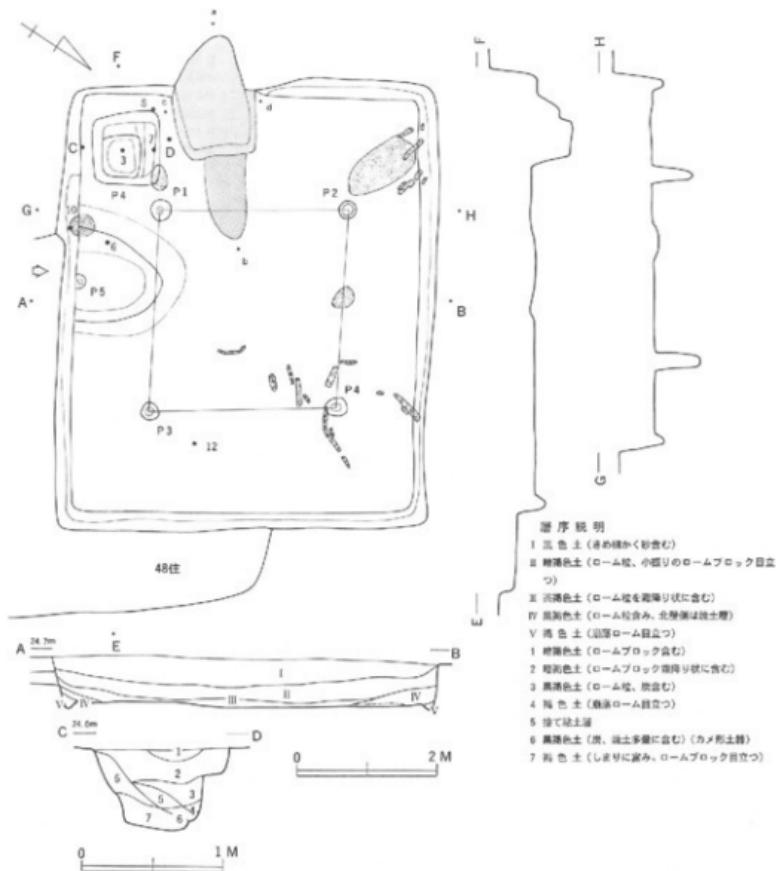
1は須恵器壺で、最大径20.0cm、現存高12.2cm。胴部はタタキ整形で肩部に条線を廻らす。

第47号住居址（第135・136図）

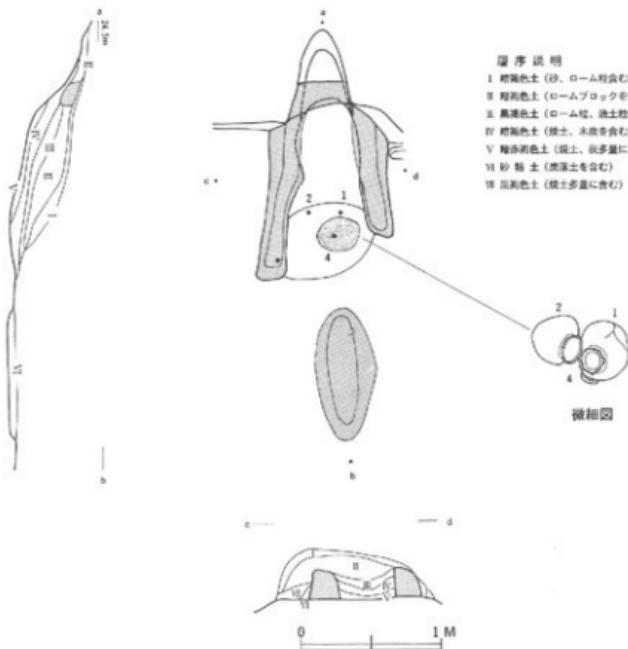
本住居址は調査区南側に位置し、第48号住居址を切る。規模は $643 \times 545\text{cm}$ を測り、長軸方
向を南西—北東に持つ長方形プランを呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、壁高は46cmを測る。
焼失家屋であり、北東コーナーと南東コーナーでは中央部に向って炭化材が分布し、北東部では
焼土が床面に密着してやまとまって出土した。床面は中央部掘り残しの貼床で、入口部及び
中央部からカマドにかけては堅緻である。南辺中央西寄りの床面に高さ3cmの周堤を廻らし、
入口とする（平入り）。柱穴は5本検出され、P₁～P₅が位置的・規模的に見て主柱穴である。
P₁は入口部に掘られており、梯子穴と考えられる。P₄はカマド脇の南西コーナーに位置し、
規模は $107 \times 97\text{cm}$ 、深さ56cmを測り、貯蔵穴である。北辺及び西辺に段を有し、覆土最下層
は使用時の堆積でまりに富み、その上部には焼失時の焼土が流入し、さらに捨て粘土（白色粘土）
が見られる。これは入口部周堤上にも見られ、ともに火熱を受けた形跡ではなく、廃屋後廃棄である。
壁溝は南西コーナーを除き全周する。本址はカマドと炉が併設されたものである。炉址はカマド燃焼部前方25cmに位置し、規模は $94 \times 43\text{cm}$ を測り、地床炉に近い竪穴炉で火
床面は良く焼けている。カマドは西辺中央南寄りに位置し、煙道—焚口 177cm、両袖外幅 100
cm、燃焼部幅66cmを測る。砂粘土を構築材とし、両袖及び天井部が残存する。燃焼部はローム
を若干掘り凹め、焼けている。煙道はゆるやかに傾斜して立ち上がっており、壁外に55cm延び、
袖部基部の内面は赤変化していた。なお、燃焼部より第137図1・2・4に示す土器が出土した。
これは4の壺形土器を倒位にして伏せ、その上に1・2の甕形土器がのっていたもので、
4が古墳時代前期の土器であること、倒位であることから支脚としての転用が考えられる。

出土遺物（第137図）

1・2は甕形土器である。1は口唇と胴部の一部を欠くのみ。口径16.0cm、最大径26.9cm、
底径 7.6cm、器高28.8cmを測る。胴部に最大径を有し、口縁は直立気味に立ち上がる。口縁外
面ヨコナデ、胴部はヘラケズリ→ヘラナデ、口縁内面ヘラナデ→ヨコナデ、器内面ていねいな
ヘラナデを施す。2は底部の大半を欠く他は完存。口径15.0cm、最大径25.9cm、推定底径 9.0
cm、器高26.4cmを測る。胴部は球状に膨み最大径を胴中位に有し、口縁は外反気味に立ち上
が

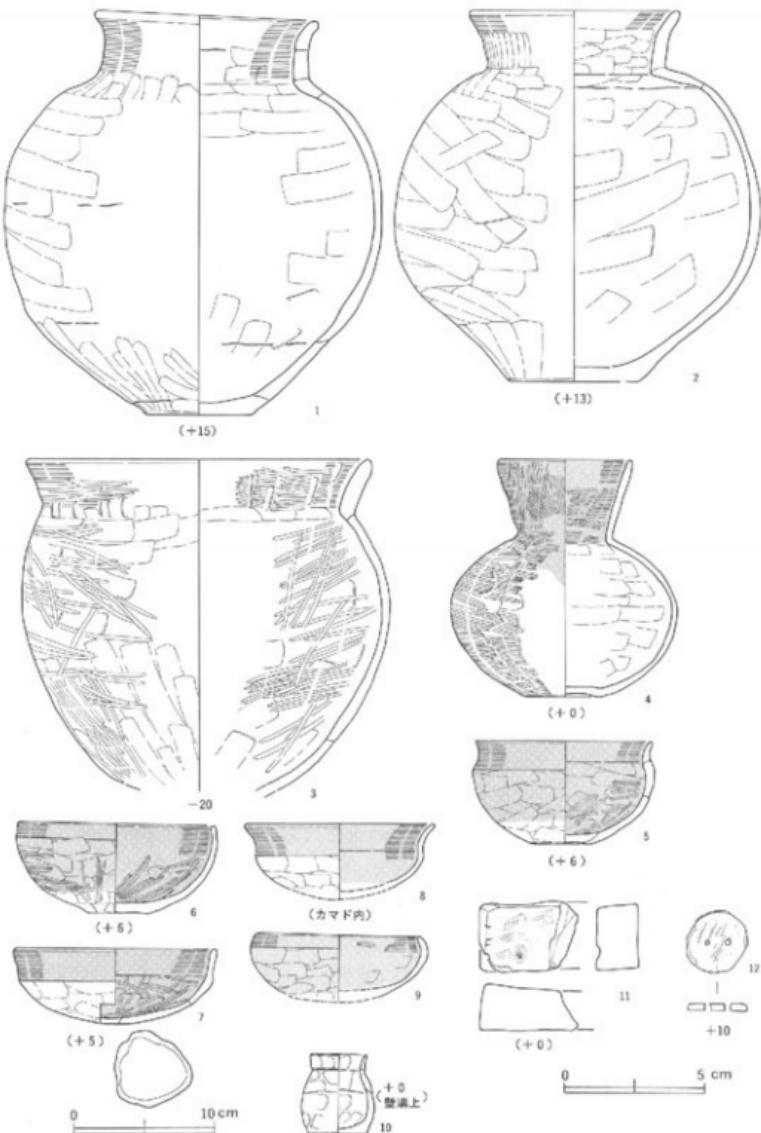


る。口縁上半は内外面ともヨコナデ、口縁下半は内外面ともヘラナデ、胴部外面はヘラケズリ→ヘラナデ、内面はヘラナデを施す。3は壺形土器で、底部を欠く他は完存。口径24.3cm、最大径26.0cm、現存高23.6cmを測る。最大径を胴中位に有し、口縁は外反して立ち上がる。口縁部内外面ともヘラナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ、胴部外面上半はヘラナデ→ヘラミガキ、下半はヘラケズリ→ヘラナデ（一部ミガキ）、内面はヘラナデ→ヘラミガキを施す。P₄内より倒位で出土。4は壺形土器で、胴部の一部を欠く。口径 9.4cm、最大径15.9cm、底径 5.1cm、器高16.8cmを測る。底部は上底で、最大径を胴中位に有し、口縁は外反味に立ち上がる。口縁上



第136図 第47号住居址実測図(2)

半は内外面ともヨコナデ→ヘラミガキ、口縁下外半はハケナデ→ヘラミガキ、胴部はハケナデ→ヘラナデ→ヘラミガキ、器内面はヘラナデを施し、器外面（一部残存）と口縁内面は赤彩（スリップ）される。5は楕形土器で、口唇端を欠くのみ。口径12.5cm、最大径12.9cm、底径4.5cm、器高7.4cmを測る。半球状の体部から頸部に棱を有し、口縁は外反して立ち上がる。内外面とも赤彩を施す。6～9は环形土器である。6は口縁の1/4周を欠く。口径13.9cm、底径4.15cm、器高6.4cmを測る。半球形を呈し、内外面とも赤彩を施す。7は体部穿孔以外は完存。口径14.5cm、器高5.4cmを測る。外縁を有し、口縁は外反気味に立ち上がる。口縁外側と器内面に赤彩を施す。8は上半の1/2のみ残存。口径13.4cm、現存高4.7cmを測る。外縁を有し、口縁は外反して立ち上がる。口縁外側と器内面に赤彩を施す。9は上半の1/2のみ残存。口径11.5cm、最大径12.5cm、現存高4.4cmを測る。半球形を呈し、器内外面に赤彩を施す。10はミニチュア土器で口径4.0cm、最大径5.1cm、底径4.2cm、器高5.7cmを測り、深鉢形を呈する。11は砥石で、表面と一側面のみに使用痕が見られる。泥岩製。12は双孔円板で22×21.5mm、厚さ2.4mm、孔径左1.5mm、右2.0mm。滑石製。



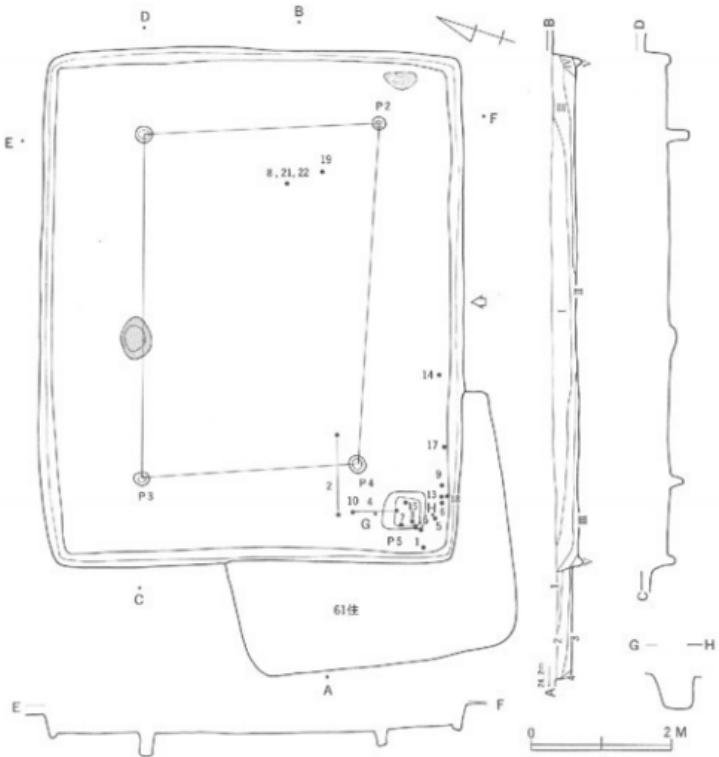
第137図 第47号住居址実測図(3)

第62号住居址（第138図）

本住居址は調査区北西部に位置し、第61号住居址を切る。規模は740×605cmを測り、長軸方向を南西—北東に持つ長方形プランを呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、壁高29cmを測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。柱穴は4本検出され、いずれも径20cm、深さもP₁が48cmを測る他は30cm大で均一的で、主柱穴である。P₁は南西コーナーに位置し、規模は60×54cm深さ43cmを測り、貯蔵穴である。壁溝は全周し、幅・掘り方とも一定している。炉址はP₁とP₂を結んだほぼ中央に位置し、北辺寄りである。規模は63×42cmを測り、地床炉に近い竪穴炉で火床面はあまり焼けていない。遺物は、土器類の大半が貯蔵穴周辺及び貯蔵穴中より出土し、石製品類は東側付近で出土した。これらの多くは床面密着の状態で検出された。

出土遺物（第139・140図）

1は壺形土器で底部を欠く他は完存。口径19.0cm、最大径24.8cm、現存高26.6cmを測る。最大径を胴中位に有し、頸部はくびれ口縁は外反する。2は壺形土器。胴部上半のみで口径17.2cm、現存高24.6cmを測る。頸部は大きくくびれ、複合口縁を有する。3は壺形土器で、口縁を1/2周欠くのみ。口径18.9cm、最大径19.1cm、孔径5.5cm、器高16.5cmを測る。単孔式で最大径を胴中位に有し、口縁は外反気味に立ち上がる。4は壺形土器で、口縁を1/2周欠くのみ。口径10.2cm、最大径15.2cm、底径3.6cm、器高13.9cmを測る。下ぶくれで、口縁は短く外反する。器外面と口縁内面に赤彩を施す。5は椀形土器で、口唇を欠く他は完存。口径10.8cm、最大径12.3cm、底径2.5cm、器高9.0cmを測る。体部は球状に膨み、口縁は短く外反する。体部中央に外側より穿孔される。6～8は鉢形土器で、5は1/2が残存し、推定口径20.5cm、底径9.4cm、器高11.4cmを測る。複合口縁を有し、やや上底気味であり、口径・底径に比して器高が低い。7は口縁の3/4周を欠くのみで、口径16.0cm、底径4.4cm、器高10.4cmを測る。素口縁で底部よりゆるやかに口辺に至る。8は胴下半を欠き、口径14.8cm、最大径14.9cm、現存高8.3cmを測る。頸部はくびれ、口縁は外反する。器内外面に赤彩を施す。9～18は壺形土器である。9は完存品で、口径14.5cm、底径4.8cm、器高6.2cmを測る。底部は平底で口縁は直立気味。器内外面に赤彩を施す。10は口縁の1/4周を欠く。推定口径11.7cm、底径3.0cm、器高5.3cmを測る。底部は上底で口縁は内傾する。11は1/2のみ残存。口径14.2cm、底径4.0cm、器高4.9cmを測る。底部は上底で口縁は直立気味。器内外面に赤彩を施す。12は口唇端を欠くのみで、口径15.4cm、器高8.0cmを測る。口縁内面に稜を有し、体部下端に二次焼成痕を有する。13は口縁をわずかに欠くのみで、口径13.2cm、底径3.9cm、器高6.8cmを測る。口縁内面に稜を有し、器内外面に赤彩を施す。14は口唇端をわずかに欠くのみで、口径12.6cm、最大径12.7cm、底径3.9cm、器高6.5cmを測る。口縁内面に稜を有し、器内外面に赤彩を施す。15は口唇端を欠くのみで、口径14.8cm、底径3.8cm、器高6.4cmを測る。底部は上底で口縁は直立気味。器内外面に赤彩を施す。16は完存品で、口径17.3cm、器高5.8cmを測る。口縁内面に稜を有し、口縁は外反す

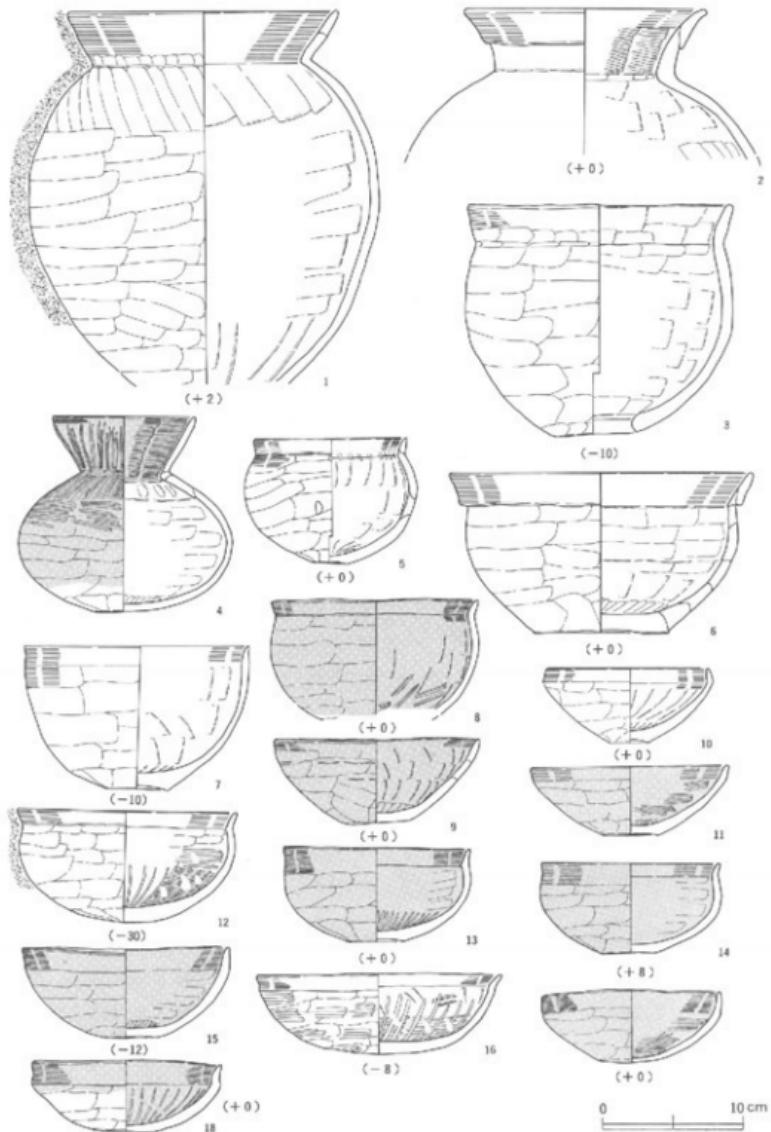


序 説

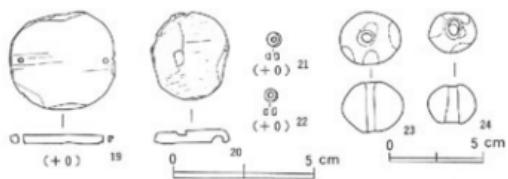
- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒 土 (ローム畳、細め込み、きめ細かい) | 1 黒褐地土 (ローム混込み、しまりがある) |
| 2 白 地色土 (ローム粒、褐色土ブロック含む) | 2 暗褐地土 (ローム混込み、小振りのロームブロック含む) |
| 3 灰 地色土 (ローム粒、細めのロームブロック含む) | 3 黑褐色土 (ローム混込み、粘性がある) |
| 4 雜 褐地土 (黒褐色土混含) | 4 淡 土 (底面ローム含み、しまりなく) |
| 5 淡 土 (ローム細粒、小振りのロームブロック含みしりんに欠く) | |

第138図 第62号住居址実測図(1)

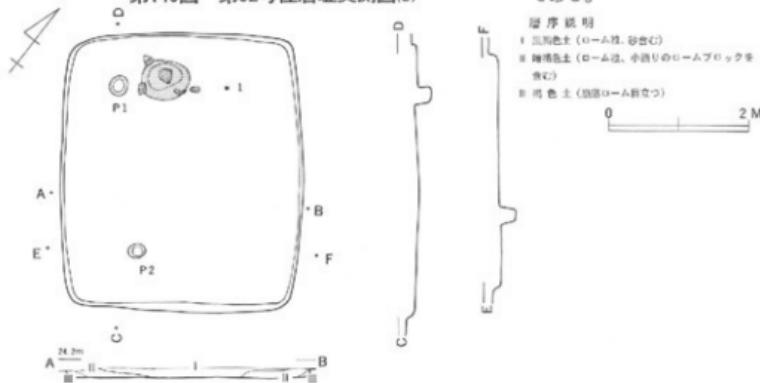
る。17は口縁を1/4周欠き、口径12.7cm、最大径12.8cm、底径 4.4cm、器高 5.2cmを測る。丸底気味の底部で口縁は直立、器内外面に赤彩を施す。18は完存品で、口径13.4cm、最大径13.5cm、器高 5.1cmを測る。口縁外面に綾を有し、口縁は外傾して立ち上がる。口縁外面と器内面に赤彩を施す。19・20は双孔円板である。19は37×35mm、厚さ 3mm、孔径左右とも 2.0mmを測る。20は31×27mm、厚さ 4.3mmを測る未製品である。ともに滑石製。21・22は白玉である。21は径 3.8mm、厚さ 2.5mm、孔径 1.8mmを測る。22は径 4.3mm、厚さ 2.7mm、孔径 1.8mmを測る。と



第139図 第62号住居址実測図(2)



第140図 第62号住居址実測図(3)



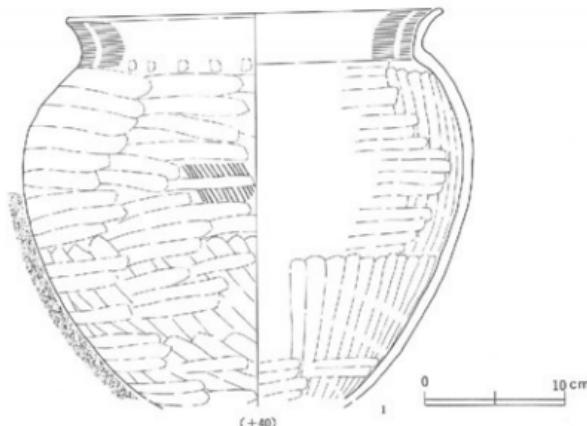
もに完存品で、石材は滑石。
23・24は土玉である。23は径
32×28mm、高さ 27mm、孔径
6×4mmを測る。24は径 25
× 22mm、高さ 21mm、孔径 9
× 6mmを測り、粗雑なつくり

である。

層序説明

- I 黄褐色土 (ローム層、砂含む)
- II 橙褐色土 (ローム層、小ぶりのロームブロックを含む)
- III 緑色土 (粗面ローム層含む)

0 2 M



第141図 第69号住居址実測図

第69号住居址（第141図）

本住居址は調査区中央北側に位置し、他遺構との重複はない。規模は $402 \times 347\text{cm}$ を測り、長軸方向を北々東—南々東に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高7cmを測る。床面は貼床で、壁際を除いて全体に堅緻である。柱穴は2本検出されたがいずれも浅く、主柱穴と判断し難い。壁溝は廻らせていないかった。炉址は中央北辺寄りに位置し、規模は $68 \times 56\text{cm}$ を測り、地床炉に近い竪穴炉と思われるが、炉址周囲に砂粘土のブロックが検出されており、カマド的な構築物の存在した可能性もある。

出土遺物（第141図）

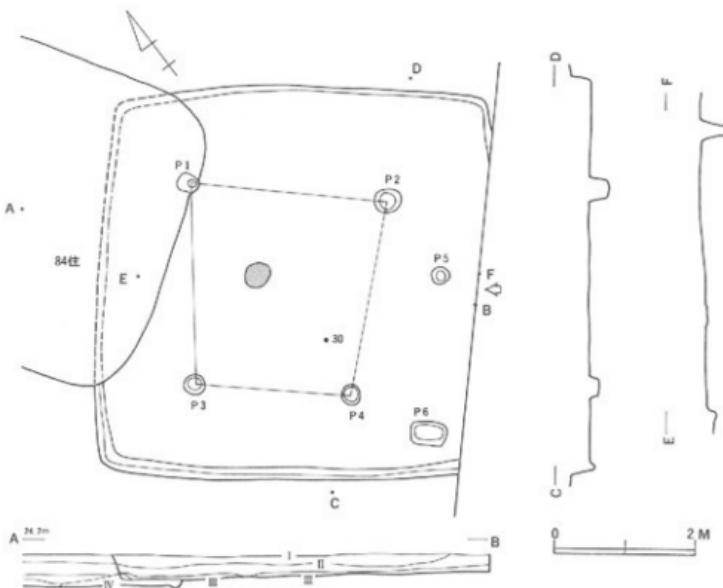
1は鉢形土器である。底部と全体の $\frac{1}{3}$ 周を欠く。口径 26.7cm 、最大径 32.0cm 、現存高 28.2cm を測る。最大径を肩部に有し、頸部はくびれて口縁は外反気味に立ち上がる。口縁は外面ともヨコナデ、胴上半外面はハケナデ→ヘラナデ、下はヘラケズリ→ヘラナデを施している。

第83号住居址（第142図）

本住居址は調査区南側に位置し、一部が工場建設により削平されている。第84号住居址を貼床する。規模は 564cm を測り、長軸方向を北西—南東に持つ隅丸方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高 24cm を測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。柱穴は5本検出され、P₁～P₅が位置的・規模的に見て主柱穴である。P₅は小振りでかつ浅く、南辺付近にあるため、梯子穴と思われる。壁溝は西辺と北辺の一部にのみ廻らせる。炉址は中央やや北寄りに位置し、規模は $40 \times 36\text{cm}$ を測り、地床炉に近い竪穴炉で、火床面はあまり焼けていない。

出土遺物（第143図）

1は壺形土器である。底部を欠き、口縁 $\frac{1}{3}$ と胴部の $\frac{2}{3}$ が残存する。推定口径 15.5cm 、最大径 22.8cm 、現存高 18.7cm を測る。胴部は球形に膨み、最大径を胴中位に有し、頸部はくびれて口縁は外反気味に立ち上がる。2～3は鉢形土器である。2は口縁を $\frac{1}{4}$ 周欠くのみ。口径 24.4cm 、底径 6.1cm 、器高 9.5cm を測る。半球形の体部から外稜を有し、強く屈曲して口縁は外反する。内面は回転台使用を施す。3は口縁と胴部は $\frac{1}{3}$ 、底部は $\frac{2}{3}$ 残存する。推定口径 18.1cm 、最大径 20.0cm 、底径 8.0cm 、器高 8.1cm を測る。口縁下に外稜を有し、口縁は内傾する。蓋受け部は明瞭である。4～29は壺形土器で、成形技法から三群に大別する。1類は半球形の体部から内傾気味に口縁が立ち上がるもので、体部外面はヘラケズリ→ヘラナデ、内面は回転台使用のナデを施す。2類は1類とほぼ同様の器形・調整であるが、輪積痕を残し灰褐色を呈する粗製品。3類は小型で体部外面にヘラケズリのみを施すもの。1類は4～22で、4は口径 12.4cm 、最大径 13.2cm 、器高 4.6cm 、5は口径 12.8cm 、最大径 13.2cm 、器高 4.2cm 、6は口径 13.0cm 、最大径 13.5cm 、器高 4.3cm 、7は口径 12.4cm 、最大径 13.0cm 、器高 4.1cm 、8は口径 12.6cm 、最大径 13.1cm 、現高 4.0cm 、9は口径 31.0cm 、最大径 13.2cm 、器高 4.2cm 、10は口径 12.8cm 、最大径 13.1cm 、器高 4.2cm 、11は口径 13.8cm 、最大径 14.1cm 、器高 3.8cm 、12は口径 13.7cm 、最大

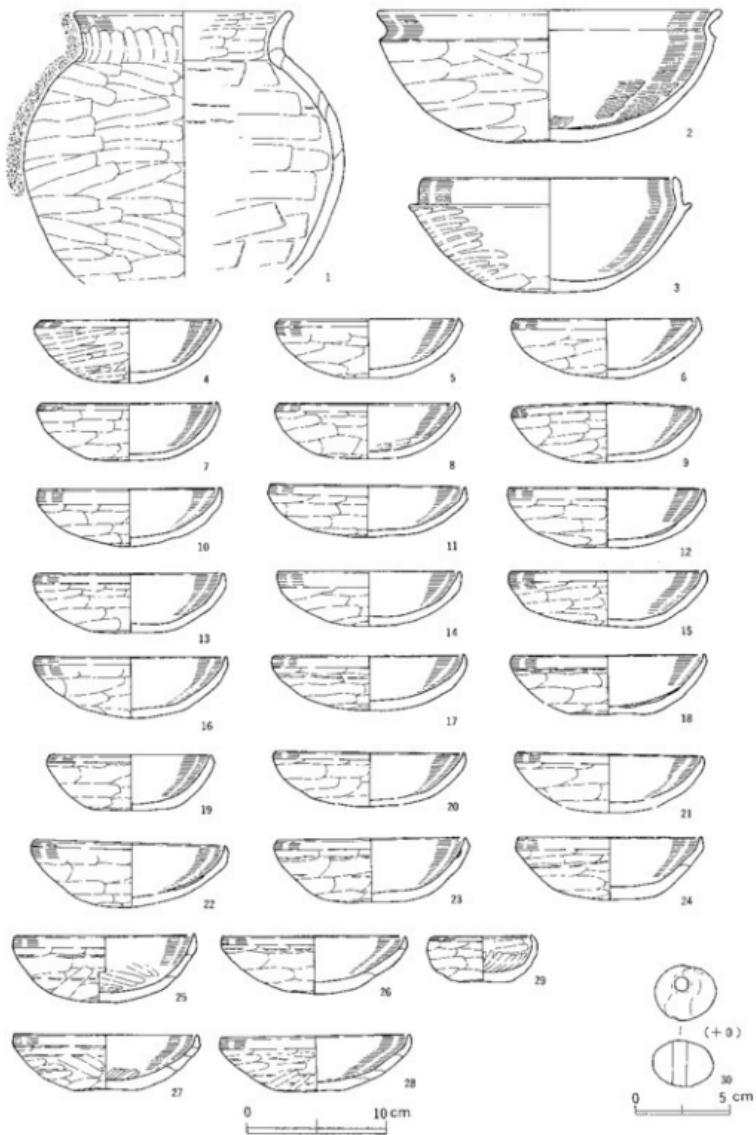


層序 説明

- I 黒色土(少量のローム粒子を含む)
- II 緑褐色土(少量のローム粒子とローム塊を含む)
- III 暗褐色土(II層より明るく多量のローム粒子を含む)
- IV 緑褐色土(II層より明るくII層より暗い、少量のローム塊を含む)

第142図 第83号住居址実測図(1)

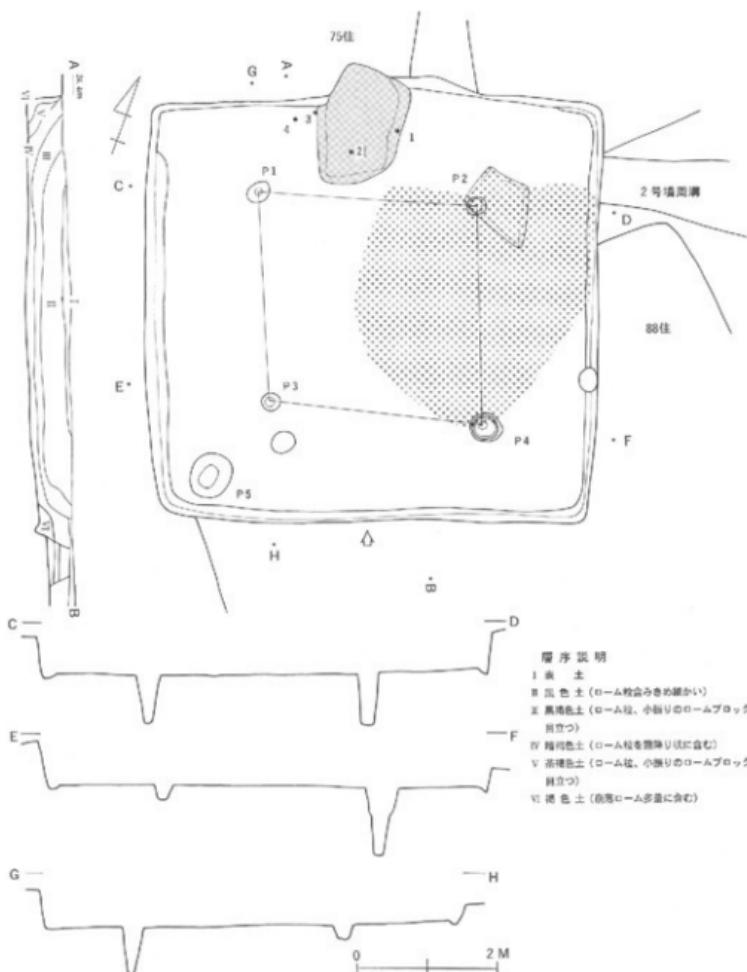
径14.0cm、器高4.1cm、13は口径13.2cm、最大径13.6cm、器高4.2cm、14は口径12.8cm、最大径13.0cm、器高3.8cm、15は口径13.8cm、最大径14.0cm、器高4.1cm、16は口径13.5cm、最大径13.7cm、器高4.4cm、17は口径13.6cm、最大径13.8cm、器高4.0cm、18は口径13.5cm、最大径13.8cm、器高4.2cm、19は口径11.4cm、最大径11.8cm、器高4.0cm、20は口径13.4cm、最大径13.6cm、器高13.7cm、21は口径13.2cm、最大径13.4cm、現高3.7cm、22は口径13.3cm、最大径13.9cm、現高4.5cm。2類は23~28で、23は口径13.4cm、最大径13.8cm、器高4.4cm、24は口径13.0cm、最大径13.3cm、器高4.4cm、25は口径12.7cm、最大径13.0cm、器高4.7cm、26は口径13.0cm、最大径13.2cm、器高4.1cm、27は口径13.1cm、最大径13.2cm、器高3.9cm、底径4.3cm、28は口径13.5cm、最大径13.6cm、器高3.9cm。3類は29のみであり、口径6.9cm、最大径7.9cm、底径3.7cm、器高3.3cmを測る。これら環群は破片となって覆土中に廃棄されていたものである。30は土玉であり、径32mm、高さ25mm、孔径8mmを測る。胎土に砂・石英を含み、成形のていねいな精製品である。これのみが床面密着で出土した。



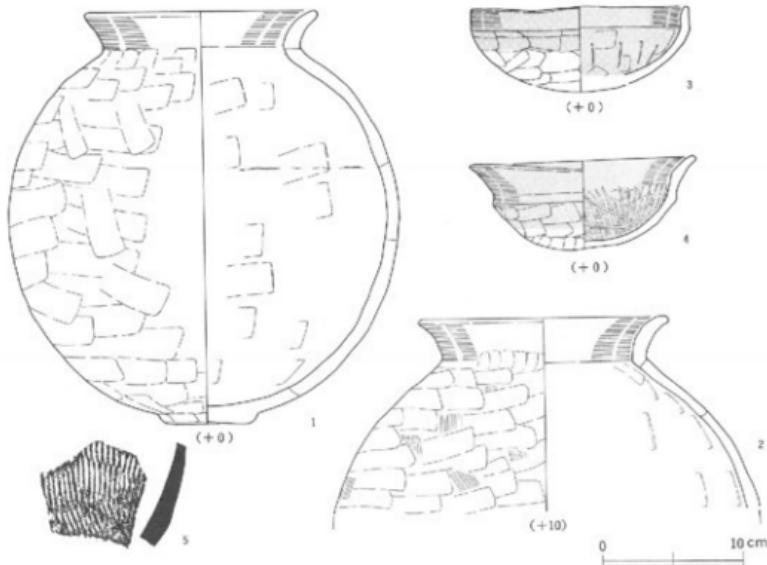
第143図 第83号住居址実測図(2)

第89号住居址（第144図）

本住居址は調査区中央西側に位置し、第87号・88号住居址を切り、第2号墳に北東コーナーが破壊されている。規模は 648 × 610cm を測り、長軸方向を北一南に持つ隅丸方形プランを呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、壁高55cmを測る。床面は貼床で、全体に軟弱である。柱



第144図 第89号住居址実測図(1)



第145図 第89号住居址実測図(2)

穴は4本検出され、位置的・規模的に見てそのいずれもが主柱穴である。P₁は南西コーナーに位置し、規模は65×58cm、深さ55cmを測り、貯藏穴である。壁溝は北辺を除いた他辺に廻らす。本址はカマドと炉が併設されたものである。炉址は壁より73cm離れ、規模は径78cmを測り、地床炉で火床面は焼けている。カマドは北辺中央に位置し、両袖とも焚口部付近にのみ砂粘土を用いているが、他はローム塊を混じた暗褐色土で構築されたため、完全に崩壊し切っていた。火床面は余り焼けていない。本址は自然埋没であるが、第IV層が堆積した頃、第2号墳の石棺材が北東側より投棄された。石棺材のレベルは北東で高く、中央に向って下がっている。

出土遺物（第145図）

1～2は壺形土器である。1は全体の3%残存。口径16.0cm、最大径27.6cm、底径5.0cm、器高29.2cmを測る。最大径を胴中位に有し、頸部はくびれて口縁は外反する。2は口縁は全周し、胴部は1/4周残存。口径17.2cm、現存高13.8cmを測る。頸部はくびれて口縁は外反する。胴外面はハケナデ→ヘラナデを施す。3～4は壺形土器である。3は体部下半を欠く。口径15.1cm、最大径15.5cm、現存高5.5cmを測る。半球状の体部から口縁は直立し、口縁外面と器内面に赤彩を施す。4は1/2周残存。口径15.6cm、器高6.3cmを測る。内面に稜を有し、口縁は屈曲し外反する。口縁外面と器内面に赤彩を施す。5はタタキ整形された須恵器壺である。

b. 土塗

第1号土塗（第146図）

本土塗は調査区中央北寄りに位置し、他遺構との重複はない。規模は $131 \times 56\text{cm}$ 、深さ 29cm を測り、長軸方向を北々西—南々東に持つ楕円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がりが、東側は比較的ゆるやかで、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積で3層に分層できる。
III層中より土器小片がごく少量検出されたのみである。

第4号土塗（第146図）

本土塗は調査区中央に位置し、付近に第12号土塗が所在する。他遺構との重複はない。規模は $167 \times 127\text{cm}$ 、深さ 95cm を測り、長軸方向を北—南に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で長軸中央に深さ 12cm を測る溝が掘られている。覆土は自然堆積で最上層は黒色土が堆積し、II層とIII層中より第152図に示した環形土器が出上した。

第7号土塗（第146図）

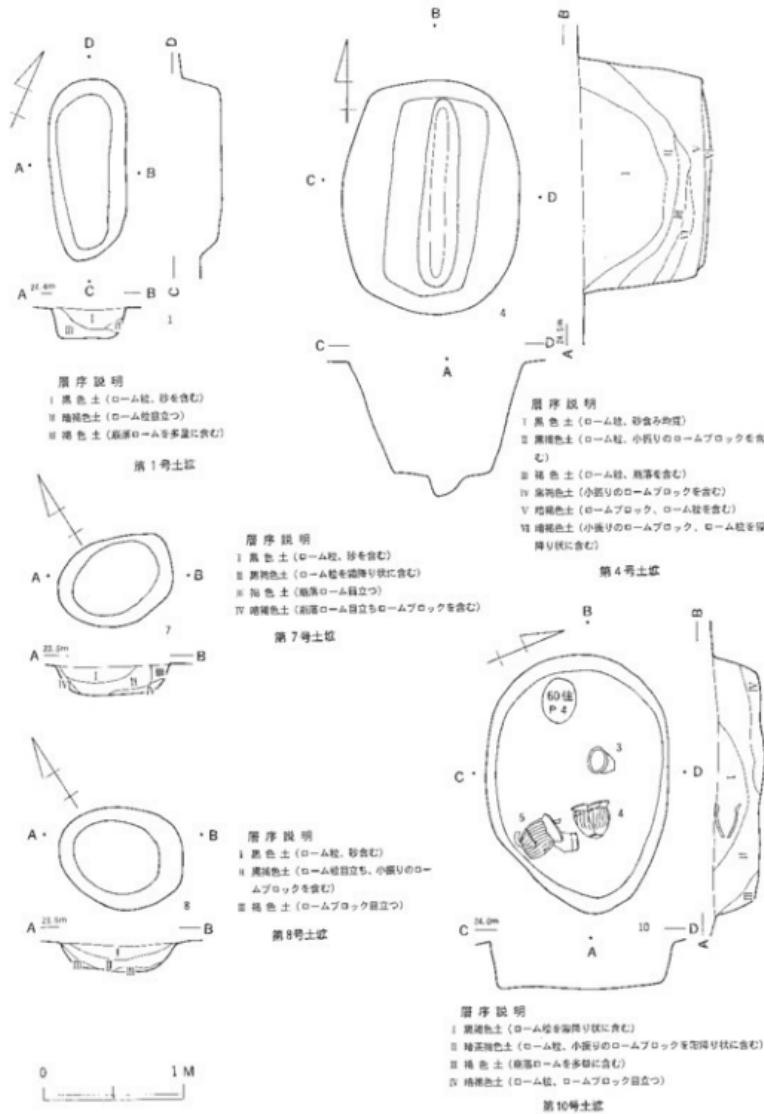
本土塗は調査区中央に位置し、付近に第8号土塗が所在する。第60号住居址を切る。これは第60号住居址の埋没途中におけるもので、確認は同住居址掘り下げ中である。規模は $84 \times 63\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 20cm を測り、楕円形プランを呈する。壁はなだらかに立ち上がり、底面は概ね平坦であるが、やや凹凸を有する。覆土は自然堆積で4層に分層できる。

第8号土塗（第146図）

本土塗は調査区中央に位置し、付近に第7号土塗が所在する。第60号住居址を切る。これは第60号住居址の埋没途中におけるもので、確認は同住居址掘り下げ中である。規模は $91 \times 75\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 19cm を測り、楕円形プランを呈する。壁はなだらかに立ち上がり、底面は概ね平坦で、凹凸は少ない。覆土は自然堆積で3層に分層できる。

第10号土塗（第146図）

本土塗は調査区中央に位置し、付近に第11号土塗が所在する。第60号住居址を切る。これは第60号住居址の埋没終了後におけるもので、地山露呈時においてすでに確認されていた。規模は $186 \times 310\text{cm}$ 、深さは第60号住居址床面より 34cm を測り、楕円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦で、凹凸は少ない。底面下より第60号住居址Pを検出した。覆土は自然堆積で4層に分層でき、I層中より第152図に示したような、環形土器が廃棄された状態で出土し、5はやや欠損部があるものの、これは調査時によるもので、本来は3個体とも完存品であったと思われる。2は壁際より転落した状態でII層中より出土したものである。



第146図 各土塚実測図(1)

第11号土塗（第147図）

本土塗は調査区中央に位置し、付近に第12号土塗が所在する。第60号住居址を切る。これは第60号住居址の埋没途中におけるもので、確認は同住居址掘り下げ中である。規模は 153×13 3cm、深さは遺構確認面より55cmを測り、楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底部施設として径35cm、深さ33cmのピットを1本穿つ。覆土はローム粒、ロームブロックを含む土壤で、埋め戻しである。

第12号土塗（第147図）

本土塗は調査区中央に位置し、付近に第11号土塗が所在する。第60号住居址を切る。これは第60号住居址の埋没終了後におけるもので、地山露呈時においてすでに確認されていた。規模は 118cm、深さは63cmを計り、楕円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。覆土はI層のみ自然堆積で、II層以下は投棄された土壤で、須恵器が出土した。

第14号土塗（第147図）

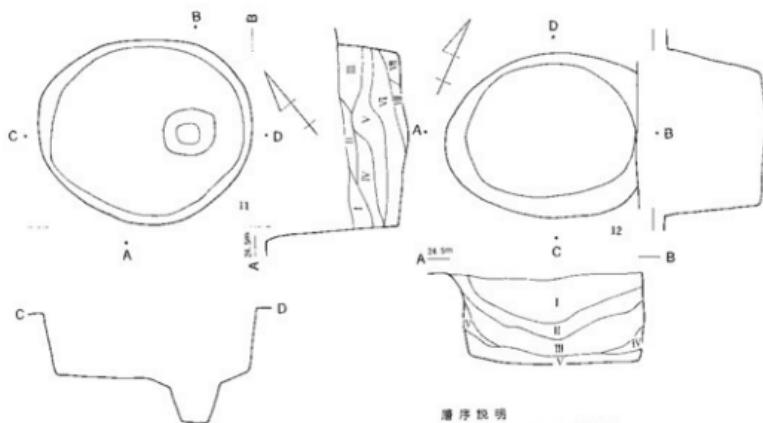
本土塗は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。上段部 216×162 cm、深さ24cmを測り、下段部 247×58 cm、深さ42cmを測る。長軸を北-南に持ち、形態は2基の楕円形土塗が組み合わさった様なものである。覆土の觀察から、これらは2基ではなくに、二段構造を有する1基の土塗と判断された。上段・下段ともに壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。覆土は自然堆積で3層に分層できる。

第15号土塗（第148図）

本土塗は調査区西側に位置し、他遺構との重複はない。規模は 253×103 cm、深さ70cmを測り、長軸方向を東北東-西南西に持つ隅丸長方形プランを呈する。中段以下の壁はほぼ垂直で底面は平坦である。底面の長軸中央に深さ7cmを測る溝を有する。覆土の上部は自然堆積で黒色土が中央に向って凹むように堆積する。下部ではローム質土の混入が目立つ。

第17号土塗（第148図）

本土塗は調査区西側に位置し、第1号墳周溝に上部が破壊されている。規模は 238×102 cm、深さ84cmを測り、長軸方向を西-東に持つ楕円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は7層に分層でき、自然堆積なのはI層のみであり、他はローム粒、ロームブロックの目立つ土壤で、埋め戻しされたものと考えられる。ほぼ長軸上西側で、底面より約40cm浮いて正位の状態で第152図に示した环形土器が出土している。本址は第1号墳周溝の検出面では確認できず、周溝完掘後にはじめて検出されたものである。



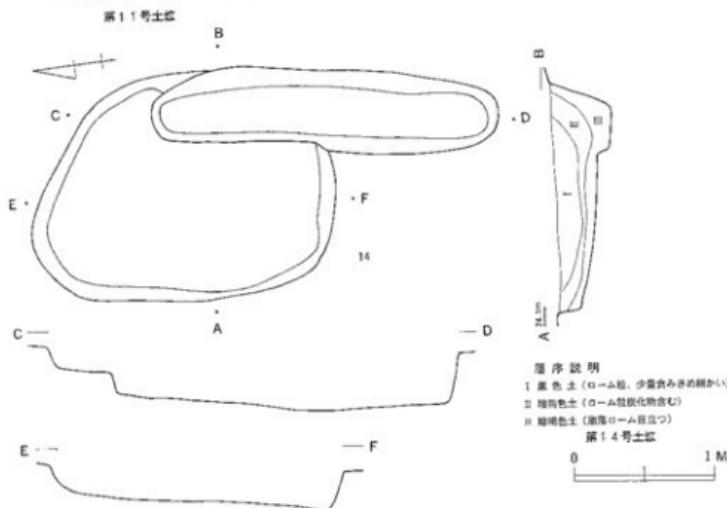
層序説明

- I 黒褐色土 (ローム柱に含む)
- II 黑褐色土 (ローム柱を基立つ)
- III 黒色土 (ローム柱、小塊りのロームブロック基立つ)
- IV 黑褐色土 (ローム柱、小塊りのロームブロック基立つ)
- V 黑色土 (ローム柱)
- VI 黑褐色土 (ローム柱に含む)
- VII 黑色土 (崩落ローム基立つ)
- VIII 黄褐色土 (ローム柱、洗土、砂、粘土、腐泥)

層序説明

- I 黒色土 (ローム柱、少量の砂を含む)
- II 黑褐色土 (ローム柱基立つ)
- III 黑褐色土 (ローム柱、崩落ローム基立つ)
- IV 黑褐色土 (崩落ローム基立つ)
- V 明褐色土 (ローム柱、洗土、砂、粘土、腐泥)

第12号土壠



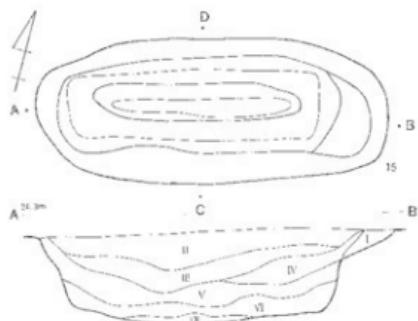
層序説明

- I 黒色土 (ローム柱、少量含み細かい)
- II 黑褐色土 (ローム柱根化物含む)
- III 始褐色土 (崩落ローム基立つ)

第14号土壠

0 1M

第147図 各土壠実測図(2)



層序説明

- I 滅菌粘土 (ローム無し、少々苔も生えずに腐泥)
- II 黒土 (ローム無し、少々苔も生え)
- III 粘土 (ローム無し苔も少しある)
- IV 黒粘土 (ローム無し苔も少しある)
- V 褐色土 (ローム無し苔も少しある)
- VI 黑褐色土 (ロームブロックや苔も生え)

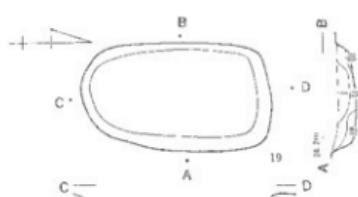
第15号土壠



層序説明

- I 黒土 (ローム無し、苔の無い)
- II 滅菌土 (ロームブロック無し)
- III 粘土 (ローム無し苔も含む)
- IV 褐色土 (ローム無し苔も多めで、小振りのロームブロック無し)
- V 滅菌土 (ローム無し)
- VI 黒色土 (ローム無し苔も含む)
- VII 黑褐色土 (ローム無し苔も含む)

第17号土壠



第19号土壠

0 1 M

第148図 各土壠実測図(3)

第19号土塗（第148図）

本土塗は調査区中央に位置し、第63号・72号住居址を切る。規模は $130 \times 127\text{cm}$ 、深さは第72号住居址床面より 13cm を測り、長軸方向を北・南に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや凹凸を有する。覆土は自然堆積で3層に分層できる。覆土上は下部ではロームブロックが目立つ。覆土中からの出土遺物はない。

第20号土塗（第149図）

本土塗は調査区西側に位置し、他造構との重複はない。規模は $282 \times 118\text{cm}$ 、深さは 24cm を測り、長軸方向を西南西-東北東に持つ橢円形プランを呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、底部は概ね平坦で凹凸は少なく、壁際は丸みを有するように掘り込まれている。覆土は自然堆積で4層に分層できる。最上層は黒色土できめ細かい草原土壤であり、比較的堆積速度が遅かったことを示す。II層目もほぼ同様の内容を示すが、壁崩落土の混入が多い。

第21号土塗（第149図）

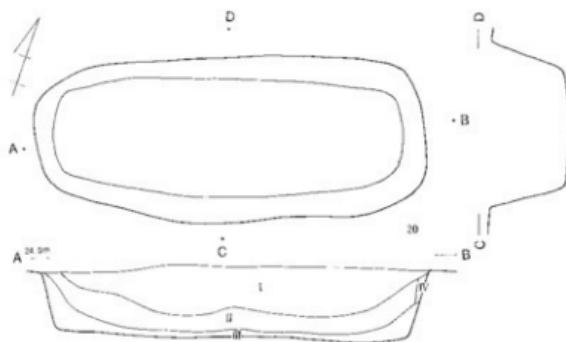
本土塗は調査区西側に位置し、第88号住居址を切る。規模は $265 \times 105\text{cm}$ 、深さは 43cm を測り、長軸方向を北々東-南々西に持つ橢円形プランを呈する。中段以下の壁はほぼ垂直で、底面は概ね平坦である。底面の長軸中央に深さ 7cm を測る溝を有する。覆土は7層に分層でき、I～IV層までは自然堆積で良いと思われる。V層はローム質土を多量に含み、VI層はローム粒に加え、西壁である第88号住居址の覆土が混入し、それに伴って五領式土器片も認められた。VII層はロームブロックが目立ち、本層中で鬼高式土器が出土し、造構確認は地山露呈時である。

第25号土塗（第150図）

本土塗は調査区南側に位置し、付近に第47号住居址が位置する。規模は $246 \times 164\text{cm}$ 、深さ 28cm を測り、長軸方向を北々西-南々東に持つ隅丸長方形プランを呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は7層に分層でき、各層ともしまりに欠ける。ロームブロックの目立つ土壤を主とし、埋め戻しを行なっている。造構確認時においてはロームのしみ程度しか認定できず、プランを明確にしえなかった。

第27号土塗（第150図）

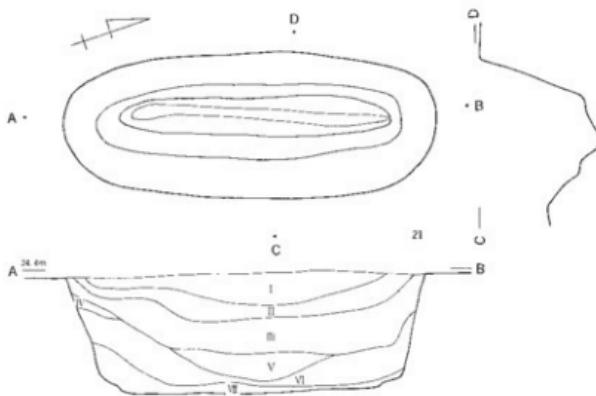
本土塗は調査区中央に位置し、他造構との重複はない。付近に第63号住居址が所在する。規模は $55 \times 49\text{cm}$ 、深さ 21cm を測り、円形プランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はナベ底状に中央がやや凹み、固くしっかりしている。覆土はローム粒を含む暗褐色土のみで、壁の崩落土は含まれていない。



層序説明

- I 淡色土 (ローム粒を少含む)
- II 高粘色土 (ローム粒や砂立つ)
- III 増粘色土 (ローム粒ロームブロック含む)
- IV 淡色土 (崩落ローム含む)

第20号土壌



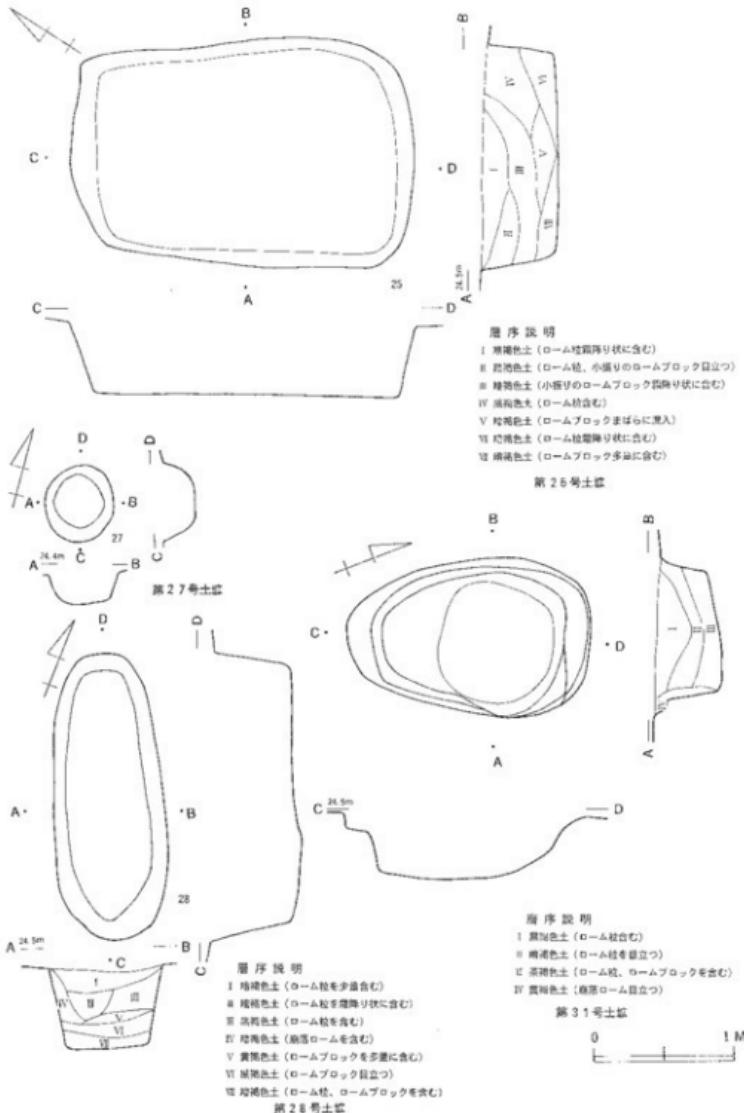
層序説明

- I 淡色土 (ローム粒含み砂細かい)
- II 増粘色土 (砂粗りのロームブロック含む)
- III 黒粘色土 (ローム粒、ロームブロック含む)
- IV 淡色土 (崩落ローム目立つ)
- V 淡色土 (ローム質土多量)
- VI 高粘色土 (ローム粒目立つ) (住居址底土決目立つ)
- VII 黑粘色土 (ロームブロック目立つ)

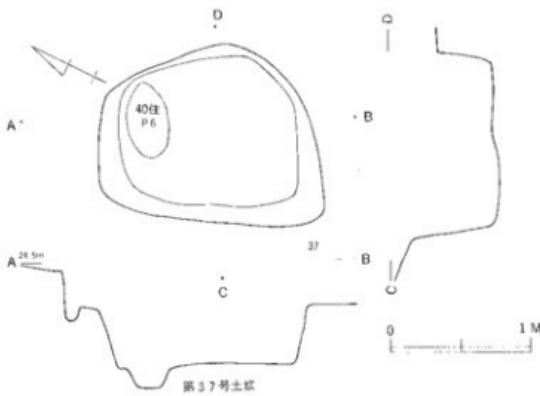
第21号土壌



第149図 各土壌実測図(4)



第150図 各土塚実測図(5)



第151図 各土塚実測図(6)

第28号土塚（第150図）

本土塚は調査区中央に位置し、他遺構との重複はない。規模は $205 \times 80\text{cm}$ 、深さ 61cm を測り、長軸方向を北々西—南々東に持つ梢円形プランを呈する。壁は全体に垂直に立ち上がり、底面概ね半坦である。覆土は7層に分層でき、ローム粒、ロームブロックの目立つ土壤であり、自然堆積ではなくに埋め戻しによるものと考えられる。

第31号土塚（第150図）

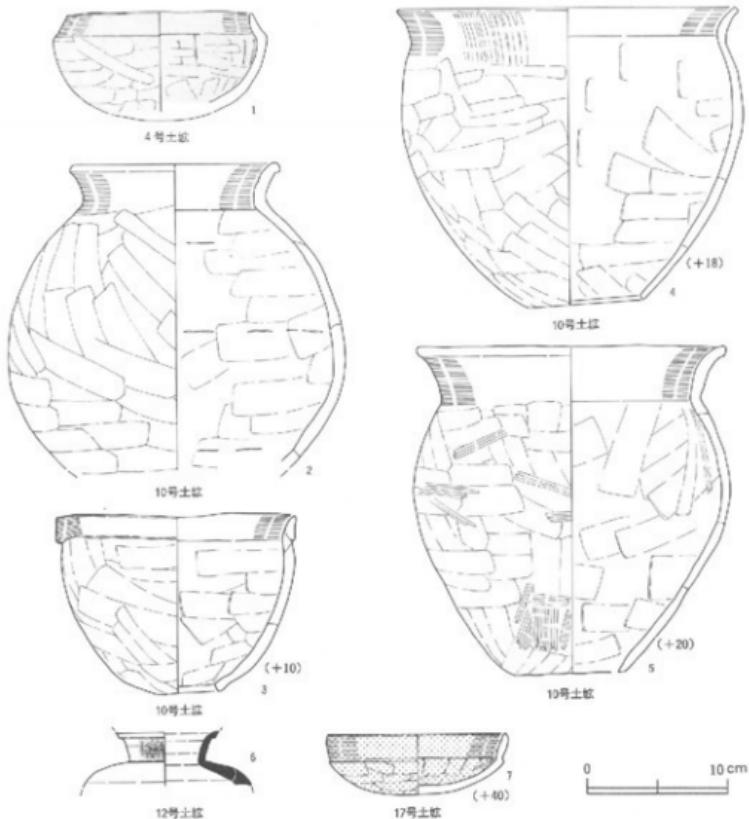
本土塚は調査区南側に位置し、他遺構との重複はない。付近に第54号住居址が存在する。規模は $174 \times 115\text{cm}$ 、深さ 44cm を測り、長軸方向を北々東—南々西に持つ梢円形プランを呈する。壁は崩落による中段を有し、南側はほぼ垂直、北側はゆるやかに立ち上がり、北側底面に円形の凹みを有する。覆土は4層に分層でき、埋め戻しによるものである。

第37号土塚（第151図）

本土塚は調査区南側に位置し、第40号住居址を切る。これは第40号住居址の埋没途中におけるもので、確認は同住居址掘り下げる中である。規模は $162 \times 130\text{cm}$ 、深さは遺構確認面より 60cm を測り、不整な隅丸長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸を有する。

各土塚出土遺物（第152図）

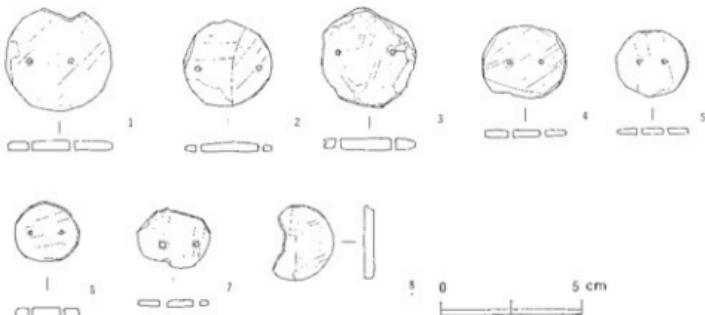
1は第4号土塚出土。環形土器で、底部を欠く他は完存。口径 12.8cm 、最大径 15.1cm 、現存高 7.1cm を測る。口縁下に外縁を有し、口縁は内傾する。器内外面に赤彩を施す。2～5は第



第152図 各土塗出土遺物

10号土塗出土。2は壺形土器で口縁と肩部の $\frac{1}{2}$ が残存。口径14.9cm、最大径23.8cm、現存高は21.5cmを測る。3～5は壺形土器で、3は完存品。口径17.0cm、孔径4.1cm、器高13.0cmを測る。単孔式で鉢形を呈し、口縁は複合口縁で、肩部内外面ともヘラナデ。4も完存品で、口径23.8cm、最大径24.1cm、孔径8.1cm、器高21.6cmを測る。最大径を肩中位に有し、口縁は外反する。肩部内外面ともヘラケズリ→ヘラナデ。5は $\frac{1}{2}$ が残存し、口径22.0cm、最大径22.4cm、孔径7.9cm、器高23.3cmを測る。肩外面は方向を変えた入念なヘラケズリ後、一部ヘラミガキ。6は12号土塗出土。須恵器胎で、頸部 $\frac{1}{3}$ 、肩部 $\frac{1}{3}$ が残存。輪溝波状文を施す。7は17号土塗出土。壺形土器で、完存品。口径12.6cm、最大径12.8cm、器高3.5cmを測り、器内外面とも黒色処理。

(神野)

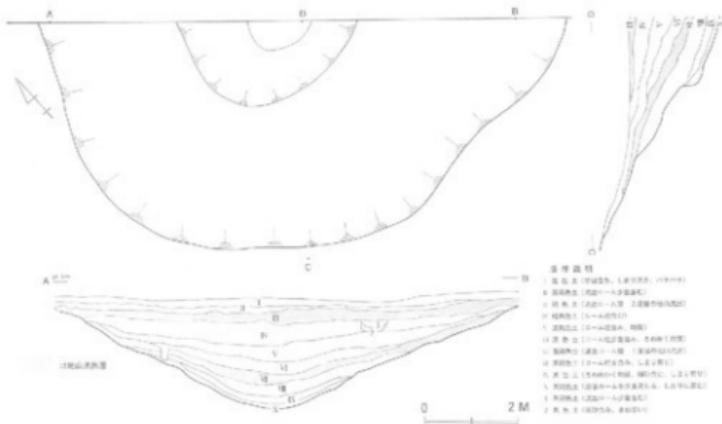


第153図 遺構外出土の石製模造品

V 遺構外出土の石造模造品（第153図）

第153図は、遺構外より出土した石製模造品を一括して図示した。1は、調査区の北東端部埋没谷近くより出土し、2～8は第32号住居址の北側、調査区端よりまとめて出土したもので、すべて双孔円板である。1は、一部を欠き径37mm、厚さ3.2mm、孔径右1.7mm、左1.5mmを測る。2は、径31mm、厚さ2.5～3.5mm、孔径2mmを測る。研磨が雑で厚さが一定でない。3は、端部を僅かに欠き、径36mm、厚さ4mm、孔径1.5mmを測る。4は、径29×25.5mm、厚さ2.8mm、孔径1.5mmで精円ぎみである。5は、径25×24mm、厚さ2mm、孔径右1.7mm、左1.5mm。6は、径23×21mm、厚さ3.2mm、孔径1.2mm。7は、径25.5×21.5mm、厚さ2.2mm、孔径右2.3mm、左2.5mmを測る。研磨・整形が雑でいびつな精円を呈す。8は、勾玉状を停止、径26.2mm、高さ18mm、厚さ3.7mmを測る。抉り部も研磨され、有孔円板製作時の破損によって勾玉製作に切り替えたものと思われるが、穿孔もなく未製品と考えられる。2～8は、1mの範囲内より散乱した状態で出土したが、北側が駐車場によって削平されているため、まだあった可能性は強い。祭祀行為の終了によって一括廻棄されたものと考えられる。本遺跡では、第34号・40号・47号・49号・62号住居址で石製模造品が出土しているが、本遺跡集落変遷のIV期・V期に当り、和泉期後期から鬼高期初頭に位置づけられる。第IV期が石製模造品祭祀のピークで第V期には小型化、粗製の傾向が見られ、次第に消滅したものと思われる。また、全体的にみて、双孔円板の出土量が多いように思われ、祭祀形態を考える上で留意せねばならない点である。本遺跡出土の石製模造品は、製作が雑な感があり、未完成品のものもある。本遺跡内で、石製模造品製作が行われた痕跡はないが、供給源としての生産遺跡は周辺地域に求められるであろう。五領期の玉作工房跡の発見された鳥山遺跡は、本遺跡の東方約1kmに所在し、当地域における玉作集団の存在を実証するもので、石製模造品製作集団の出現も容易に考えられ、関連性は無視できない。

(越川)

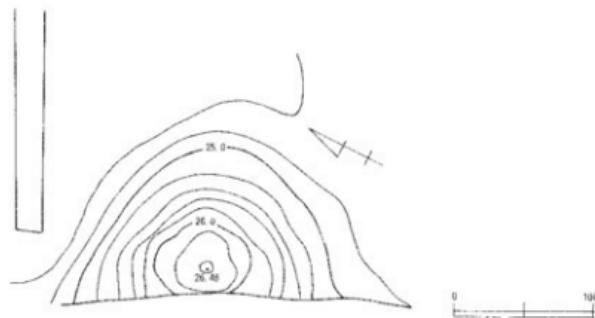


VII. 古墳群の調査

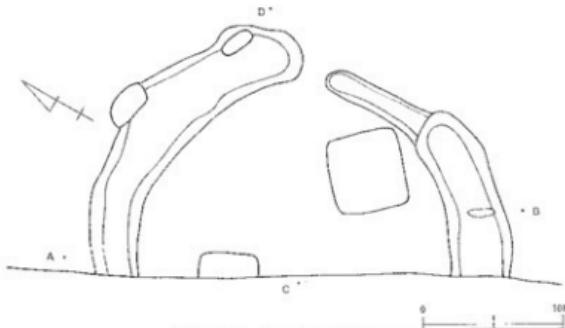
本古墳群は、確認調査時に草刈り作業をした結果新たに発見された古墳群である。向原遺跡調査区の西側に所在し、当初は3基の盛土が確認されたため、古墳3基として調査を行なったものであるが、うち南西端のものは単なる現代の土盛りであった。プリマハム工場の進出以前の本遺跡周辺には約10基程の塚があったと地元の古老より聞いており、正否はわからないが数基以上の古墳群が形成されていたものと思われる。

1. 第1号古墳（第155図）

本古墳は、調査区西端に位置し、研究棟の建設によって西側の約 $\frac{1}{2}$ を破壊され、東側部分のみを残存する。現状は、蘿竹や灌木が密生しており、北東側は原形を良く留めて整っているが、



第155図 第1号古墳墳丘測量図



第156図 第1号古墳実測図



断面図

1. 墓室
2. 墓道土手 (ヨードムツテ、ヨードムツヒ)
3. 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
4. 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
5. 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
6. 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
7. 墓道壁 (ヨードムツハコ、ヨードムツハヒ)
8. 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
9. 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
10. 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
11. 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
12. 墓道土手 (ヨードムツテ、ヨードムツヒ)
13. 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
14. 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
15. 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
16. 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
17. 墓道壁 (ヨードムツハコ、ヨードムツハヒ)
18. 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
19. 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
20. 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
21. 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
22. 墓道土手 (ヨードムツテ、ヨードムツヒ)
23. 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
24. 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
25. 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
26. 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
27. 墓道壁 (ヨードムツハコ、ヨードムツハヒ)
28. 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)

- (1) 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
- (2) ヨードムツヒ
- (3) 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
- (4) 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
- (5) 墓道土手 (ヨードムツテ、ヨードムツヒ)
- (6) 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
- (7) 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
- (8) 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
- (9) 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
- (10) 墓道壁 (ヨードムツハコ、ヨードムツハヒ)
- (11) 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
- (12) 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
- (13) 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
- (14) 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
- (15) 墓道土手 (ヨードムツテ、ヨードムツヒ)
- (16) 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
- (17) 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
- (18) 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
- (19) 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
- (20) 墓道壁 (ヨードムツハコ、ヨードムツハヒ)
- (21) 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)
- (22) 墓道蓋 (ヨードムツカバ、ヨードムツカヒ)
- (23) 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
- (24) 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
- (25) 墓道土手 (ヨードムツテ、ヨードムツヒ)
- (26) 墓道排水 (ヨードムツヘイダク、ヨードムツヒダク)
- (27) 墓道内壁 (ヨードムツナベ、ヨードムツナヒ)
- (28) 墓道底 (ヨードムツシタ、ヨードムツシヒ)

0 2M

第157図 第1号古墳填丘断面図

南東側は裾部が流出している。したがって概観的には、北東側から見るとかなり高く見えるが、南東方向から見るとやや低く感じられる。墳丘の最頂部は標高26.46mで、裾部の24.60mのコンターラインは、北側から東側までは裾部を廻るが、そのまま北東方向に流れている。北東部では24.60mのコンターラインよりやや下で裾端が明確に認められる。南東側では、24.80mのコンターラインが裾部を形成している。墳丘測量による本古墳の高さは、北東側で2.0m、南東側で1.7mを測る。発掘調査は、墳頂部で直行する十字のセクションベルトを設定して平面的に掘り下げ、内部施設及び周溝等の検出にあたった。

盛 土（第157図）

盛土の状況は、ローム層の上部に約25cm程の暗褐色土と、更にその上部に約10cmの黒褐色土がほぼ水平に堆積する旧表土が検出され、その旧表土面より盛土が開始されている。盛土は、かなり分層されるが、ロームと暗褐色土から構成されており、混合の度合によって分層される。基本的には、ロームと暗褐色土を交互に盛り、互層させることで板築状にしたものと解釈される。また、盛土は墳丘端側が高く、墳丘中央に向って傾斜する堆積状態が認められる。マウンドの構築はまず墳丘端側を固めてから内側に盛って行く方法で構築したものと思われる。旧表土面からの高さは墳頂部で1.55mを測る。

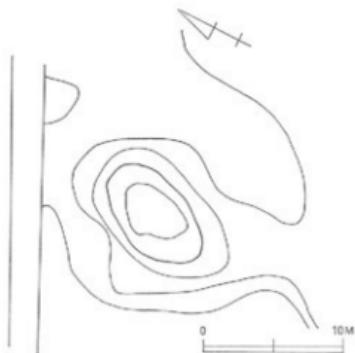
周 溝（第156図）

周溝は、東部で次第に浅く幅も狭まり、一部途切れるがほぼ円形に $\frac{1}{4}$ 円が検出された。周溝内には、マウンドの流入土と思われる黒褐色土が堆積している。ローム面での周溝の幅は、3.5~4.5mで、深さは最深部で平均0.4m程度で、幅広の割には浅い周溝である。東部の狭まった部分では幅が1.8m、深さ0.1~0.2mを測る。したがって、古墳の規模は周溝外縁径30m、内縁径22mを測る。

内部主体は、残存部分においては検出されなかった。おそらく破壊された西側部分に残存したものと思われる。1号墳の西側が研究棟になっているが、研究棟の建設時に1号墳の近くより出土したという石棺が一基ブリマハム工場敷地内の西奥に復元されており、この石棺が1号墳に伴なう可能性は強い。更に、森田工場長等からの話しを聞くと、確實ではないが石棺の出土位置が墳丘中央ではなくて、南側の裾部に近い位置であったようで、変則的古墳の可能性は強い。

出土遺物としては、墳丘中より土師器片が多数出土しているが、盛土に混入した遺物であり、埴輪等本古墳に伴なう遺物の出土はない。本古墳の築造年代を決定できるものはないが、埴輪を持たない終末古墳と考えられ、7世紀後半に比定しておきたい。

2. 第2号古墳（第158図）

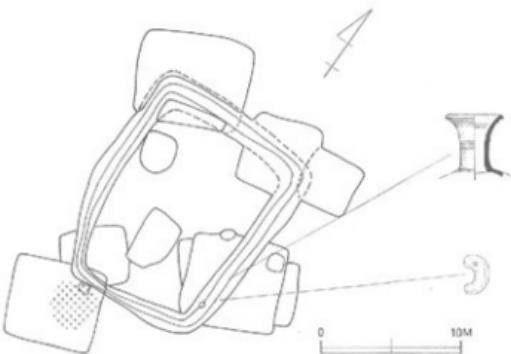


第158図 第2号古墳墳丘測量図

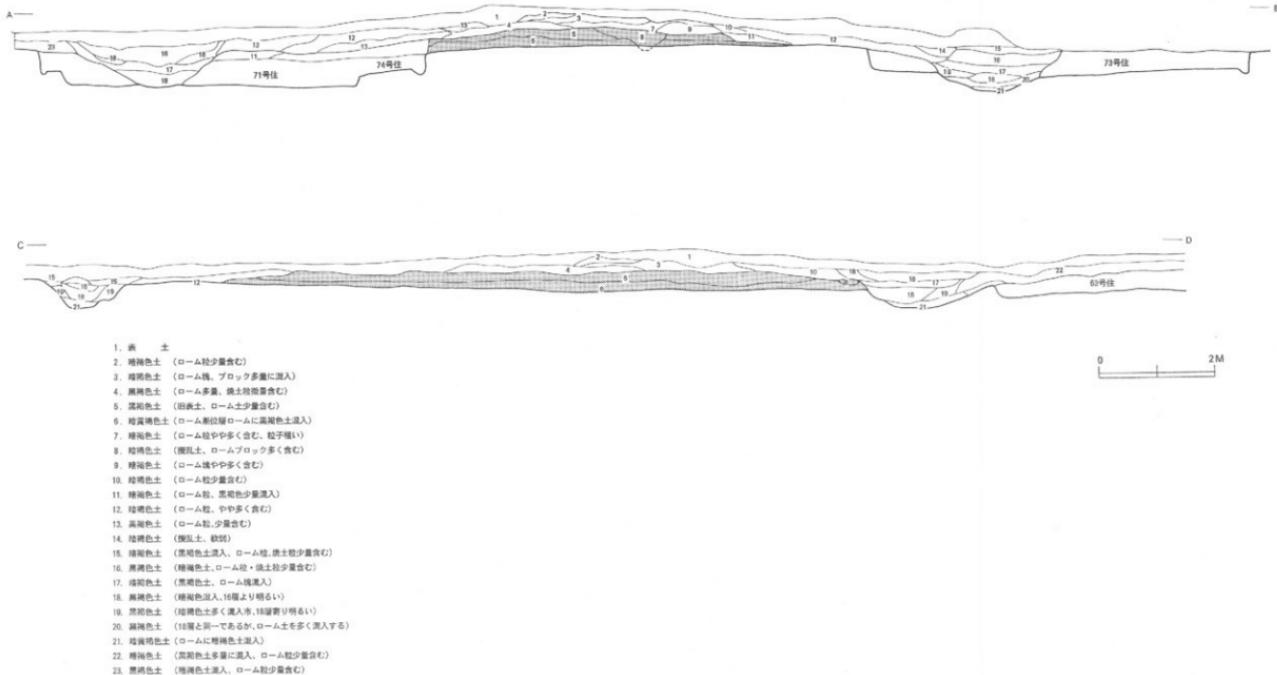
本古墳は、1号墳の東側に隣接した位置に所在する。現状は、灌木が繁茂し、地張れ状の僅かな盛り上がりが認められる程度である。したがって墳丘測量は、10cmコンターで行なった。最頂部での標高は25.16mを測り、24.90mのコンターラインは裾部を廻る。24.80mのコンターラインは裾部を廻る最低センターであるが、南東部で開き、東西方向へと延びてしまっている。墳丘測量による古墳の形状は南北に長軸を有する橢円形を呈している。現状での規模は、明確ではないが東西10m、南北14mを測り、高さ約0.4mである。発掘調査は、墳頂部で直交するセクションベルトを設定して平面的に掘り下げ、内部施設及び周溝等の検出に当った。

盛土（第160図）

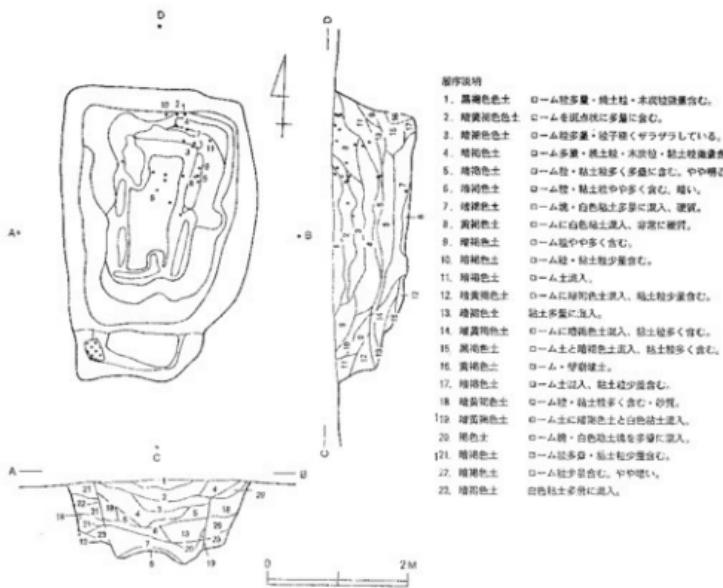
盛土の状況は、表土層下に2～3層認められるのみで、その下部は黒褐色土の旧表土が検出される。盛土は、暗褐色土とローム塊によって構築しており、おそらく第1号古墳同様にそれ等を互層状に盛り上げたものと思われる。旧表土から墳頂部までの高さは0.35mである。マウンドは、かなり崩壊流出しているとは思われるが、盛土の状況や規模等から判断すると築造時



第159図 第2号古墳実測図



第160図 第2号古墳埴丘断面図



第161図 第2号古墳主体部実測図

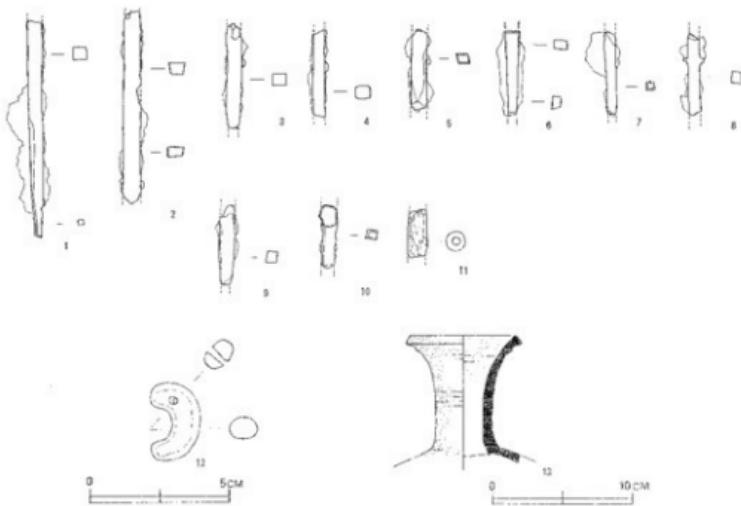
でもさほど高くなかったように思われる。旧表土は、周溝近くでマウンドの傾斜に沿って削られ消失しており、周溝内側1～2m程は緩やかな傾斜を持つテラス風になっていたのではないかと考えられる。

周溝（第159図）

周溝は、ほぼ南北に長軸を有する長方形を呈している。本古墳は、長方形墳として把えられ、古墳の規模は周溝外縁部で南北16m、東西13m、内縁部で南北13.5m、東西9.5mを測る。南側の周溝は、外縁部で9.5mと狭まっている。周溝の幅は、1～1.8mで、深さは0.5～0.8mを測る。南西コーナー部は、幅0.7m、深さ0.2mと狭くて浅くなっている。南東部の周溝の溝底近くより瑪瑙製の勾玉と灰釉輪頭瓶の頸部片が出土した。また、南側及び西側の周溝内からは石棺材が多く出土している。

内部施設（第161図）

墳丘中央よりやや南側の位置に、旧表土面から掘り込んだ墓底が検出された。ほぼ古墳の長軸方向に沿うように墓底も南北に長軸を有するやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は南北3.5m、



第162図 第2号古墳出土遺物

東西2.75m、深さ中央で約1mを測る。墓底内及び周辺の周溝内より石棺材が出土しており、内部主体は石棺と考えられる。石棺材は、南側周溝の西寄りの位置周辺にまとまって出土している。幅約80cmの板石が1枚残存する他は、ほとんどが小片に打ち砕かれており、本古墳の南西隅に重複する89号住居址内にも廃棄されている。89号住居址の埋没途中で廃棄されたもので埋没上の傾斜に順って石棺材が出土し、住居址の中央では床面近くまで出土する。かなり古い時期に盜掘されたことを示すものである。墓底の底には、石棺の板石を埋め込んだと思われる溝状の窪みが長方形状に並ぶように検出された。石棺の内径は、南北が約170cm、東西が約70cm程と思われる。側壁側には、裏込めにしたと思われる白色粘土が多量に検出された。墓底の南側は、攪乱を受けて段状となり盜掘坑と考えられる。墓底内からは、北側の上部を中心に、鐵錫片が21点出土したのみである。

出土遺物（第162図）

墓底内より出土した鐵錫片は、実測しめる11点を図示した。すべて墓部で、8は鹿骨が認められ、11は木質部が残存する。12は、瑪瑙製の勾玉である。鈍色の良質瑪瑙でC字状を呈し、良く研磨されている。長さ2.75cm、中央部での径1.0×0.75cm、孔は片面穿孔で孔径0.25cmを測る。13は、灰釉長頸瓶の頸部で、口唇部径7.5cm、残存高9.0cmを測る。焼成良好で淡い緑色の灰釉が掛っている。

(越川)

VII. 成果と課題

1. 先土器時代の遺構と遺物

先土器時代ではユニットが1ヶ所検出された。これはナイフ形石器・石核・磨石を除けば、他は黒曜石の同一母岩により剥ぎ取られた碎片である。その中には目的的剥片はおろか製品までも含まれておらず、生活址というよりは砂川遺跡でいうパターンに相当する、石器製作址と推定するのがふさわしい。同様にメノウ製の石核もまた、石器製作活動の残滓としての残核と見なすが妥当と思われる。ユニットからは碎片は検出されていないため、製品の製作はこの地点では行なわず、目的的剥片の剥取行為が専らであったわけである。炉址等が検出されなかった点も、より上記の考えを補充するものであるといえよう。

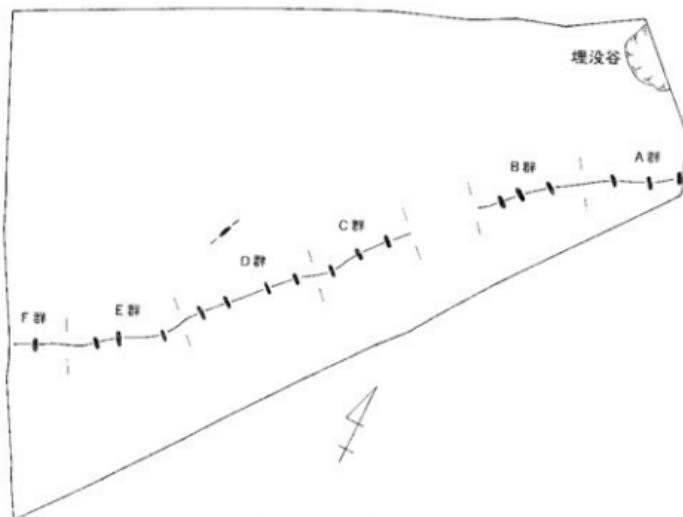
石器はナイフ形石器を除けば使用痕のある剥片が1点のみであり、後者はユニットからの出土でないため、組成的に極めて貧弱である。ナイフ形石器は安山岩製で、片面加工による両側縁調整を施した小形器である。本例は終末期の特徴を示し、文化層の層位からも矛盾しない。

2. 繩文時代の遺構

繩文時代の遺構は住居址1軒と土塙19基である。住居址は半分程度の調査であったが、推定プランは隅丸長方形を呈し、壁柱穴を残らすもので、6本上柱型と思われ、前代の関山式期の遺制が認められる。遺物は貧弱ながら、黒浜式期に比定される土器片が床直で検出された。口縁を残す破片を検討すると、つまり上げ整形の口唇部形態や繩文原体等の点から、比較的古手の様相を示す。これは新井和之氏の第1段階に相当し、茨城県南では未だ僅少な時期であるので貴重な資料であり、今後の類例の增加が望まれる。

土塙のうち18基は相似た特徴を有する。これは底部平面形が長楕円形、横断面形が船底形を呈するもので、底部施設はなく覆土は自然埋没で、最下層に黒褐色土が堆積しているものである。時期的には第28号土塙覆土中より種荷台式土器を検出し、第61号土塙は第1号住に貼床されているため、種荷台式期以降黒浜式期以前に位置づけられるが、第61号土塙覆土から五角形の局部磨製石鏃を検出しており、撫糸文系土器群終末～沈鈍文系土器群の時間枠で捉えたい。

これら土塙群の機能としては陥穴と考えている。まず配置を見ると、調査区中央付近を東北東～西南西の方向でほぼ一直線に並ぶことがわかる。各々の土塙の長軸は土塙群を結んだ線に直交する。これはさらに、3～4基1単位の小群に分かれ、第16号に示しておいた。A～Eの5つの小群は、単に空間的なものだけでなく、埋没状態、ひいては覆土の状態が類似している。従って、17基の陥穴は同時存在と考えるよりはむしろ、各小群が時間差をもって掘られ、順次放棄されていったものと考えたい。また、同一小群の陥穴をつぶさに観察すると、掘り方に「くせ」が認められ、同一の「くせ」が他の小群にも見られることがわかる。このことは、掘り手が複数存在したことの証明であり、小群間の時間差が僅少であることも示している。



第163図 縄文時代陥穴群配置図

第9号土塚は阿玉台I b式期に属し、平面形は円形・断面がタライ形を呈するもので、覆土は埋め戻してある。これはある種の貯蔵施設と考えられ、底面に若干の踏みしまりが見られる。この形態は、阿玉台II式期以降ではフラスコ状土塚の出現により姿を消していくが、底部規模は踏襲されている。この時期ではボビュラーな形態で、貯蔵穴貯蔵法の先駆的な例である。

3. 縄文時代の遺物

縄文式土器は早期前半～後期初頭にかけてのものが出土している。このうち、量的に他を凌ぐのは中期の土器群であるが、遺構に伴なったものは少ない。空間的に見て第1・2号墳とその周囲の遺構覆土中より出土し、未調査区域を含めた西側一帯に活動の主体があったものと考えられる。型式的には中期全般が出土し、竹ノ下式～阿玉台I b式期の資料も目立つ。他では加曾利E III・IV式期に見るべきものがあり、土器片鍾や有孔土器片円盤を製作したものもこの時期である。第18図28は多段竹管の連続刺突を一周させるもので、施文具という点で珍しい。

石器では石鎌が、陥穴群出土も含めて8点と目立っている。中でも第61号土塚出土の局部磨製石鎌は五角形を呈し、花輪台貝塚例と同様である。他にも第19図1のような錐形鎌や、同図2の長脚鎌も含まれ、石鎌の多くは早期前半～中頃に位置づけられる。これは先の陥穴群の時期ともオーバーラップし、狩猟空間として機能していたことを物語るものである。

土器製品では有孔球状土製品が注目される。これは穴を直交して2口穿つもので、形態も球状であり、装飾は単節縄文をランダムに施しており、後期前半あたりに位置づけたい。

4. 古墳時代の集落

向原第Ⅰ期

本期は古墳時代集落の開始期である。居住域は調査区内のほぼ全域に広がり、検出遺構数は各期を通じて最も多い。この背後には大規模な環境開発が予想され、結果として集中豪雨時の地山流出を産み、東側埋没谷をほとんど埋め尽すに至る。集落景観は9m大の大型住居をとり囲むように、3m大の小型住居の小群が數単位分布するものである。大型住居は第30・88号住の2軒で、形態的に見て隅丸長方形気味の第30号住が前代の遺制を引くものとして古期に相当し、方形に近い第88号住を新期とする。本期では廃墟時に廃村の焼却処理が顕著に見られる。

向原第Ⅱa期

本期は集落の居住域としては外縁部を当てたもので、遺構数はⅠ期より少ない。調査区北東側は後背地として入植されず、草地や二次林となっていた。集落のあり方は、大型住居は未検出であるが、6~7m大で隅丸長方形を呈する中型住居の周間に何軒かの小型住居が位置し、このような小群が數単位分布するものと思われる。住居址の切り合いが見られるため、各小群は必ずしも同時存在は示してはいない。

向原第Ⅱb期

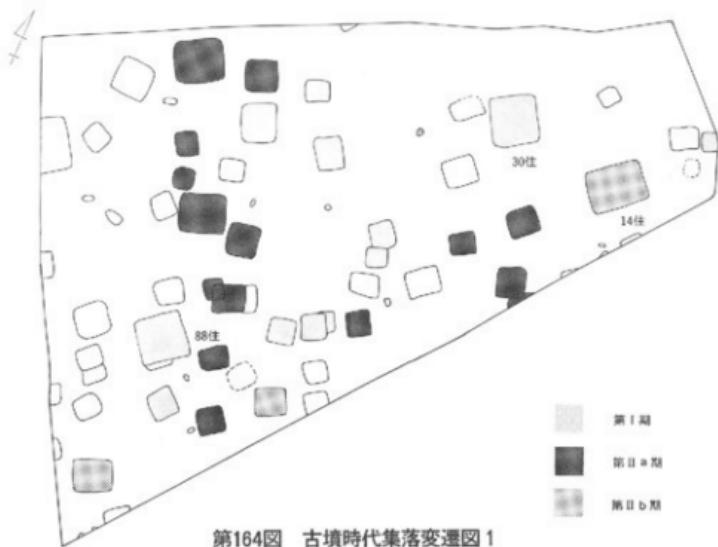
本期は五頭式～和泉式期のターニングポイントである。集落としては居住域の最外縁部に相当し、第56号土塹を除いて、第14号住と第80号住を結ぶラインより北側へは入植は行なわず、二次林が広がっていた可能性がある。大型住居の第14号住は、廃絶後の埋没は時間を要したようであり、草原土壤で覆われている。この付近の空間は、その後も祭祀的な空間として機能したものと思われ、第Ⅲ期に継承されるものである。

向原第Ⅲ期

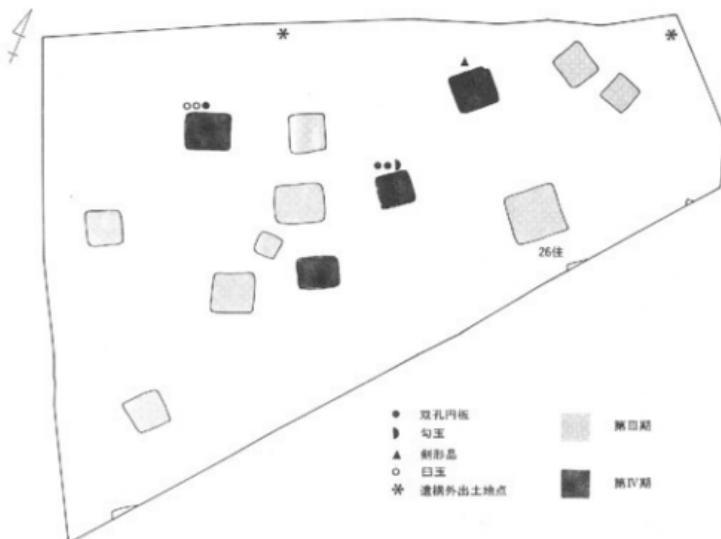
本期で再び北東区域の入植が行なわれ、集落の居住域はほぼ調査区域内全体に展開する。そして、前代の第14号住の付近には大型住居の第26号住が位置し、集落の「要」として機能している。集落自体は南側にも展開していたものと思われ、多くは南辺に出入り口が設けられる。ただ、建築構造的には「妻入り」に混り、第64号住のような「平入り」も存在する。祭祀形態としては、大型住居が残存するが、それも本期をもって終焉をむかえる。

向原第Ⅳ期

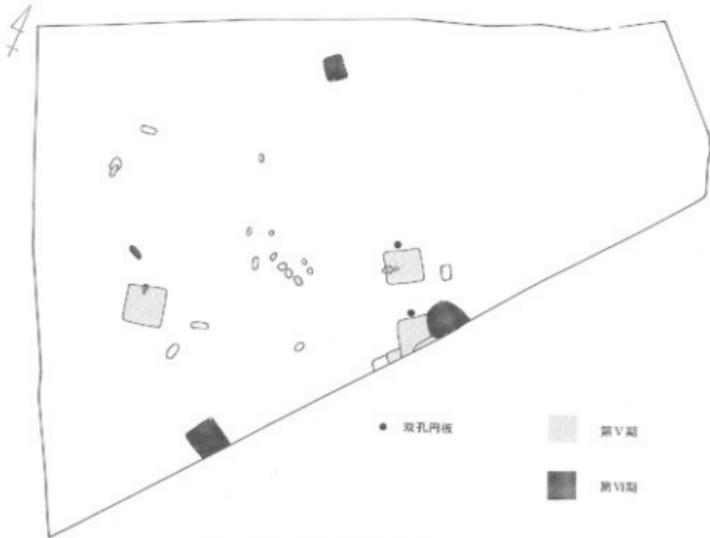
本期は和泉式～鬼高式期のターニングポイントであると同時に、石製模造品を用いた祭祀の出現期である。これは屋内・屋外の二者が存在する。前者は居住域の外縁に見られ、第34・49号住とで劍・玉・鏡が嵌り、第62号住では双孔円板と臼玉で、より後出な要素を持つ。後者のうち、中央北端のものは、7点の双孔円板が一括出土し、東側埋没谷のものは、地山流出層上に堆積する黒色土中の出土である。集落の居住域自体はほぼ第Ⅲ期を継承している。



第164図 古墳時代集落変遷図1



第165図 古墳時代集落変遷図2



第166図 古墳時代集落変遷図 3

向原第V期

本期よりカマドを付設した住居が出現する。第47・89号住が相当し、付設位置は西辺・北辺と一定でない。加えて、地床炉も併用され、定形化したカマド導入時の様相を示すものとして興味深い。同時期の他の住居では未だ地床炉を用いているが、大型瓶の出現も看過できない。集落景観は、調査区中央部付近に土塙墓や木棺を埋めた墓塚が集中し、墓域の形成が認められる。これは後代の古墳群形成にも影響し、西側区域一帯の「靈廟化」が助長されて行く。石製模造品は第40・47号住より検出されたが、双孔円板のみで、小形化が進み、第47号住を最新とする。

向原第VI期

本期をもって調査区域の古墳時代集落は終焉をむかえる。検出遺構が少なく、集落景観は不明と言わざるを得ない。カマド導入後であるが、第69・83号住とも付設されておらず、未だ一般的な傾向ではなかったようである。第39号住は一般住居とは形態的に異なるもので、管見に触れた限りでは類例が少ない。「家」としての機能を有しつつも、一般居住を行なっていない可能性が高い。空間的に第40・47号住の近くに位置し、その機能を示唆するものがある。

向原遺跡自体は、古墳群の形成に見られるように、この後も人の足跡が認められ、平安時代までは集落が営まれた。それから、古墳時代の各期を通じて豊富な量の土玉が出土している。これは生業の一環として、花室川や霞ヶ浦における網漁が盛んであったことを物語っている。

(中野)

5. 古墳時代の土器

向原第Ⅰ期

壺形土器は、口縁部が「くの字状」に外反し、胴部は丸胴ないし球胴形を呈するものが主体的である。また、第55号住居址出土遺物に見られるような東海系の「S字状口縁」のものも若干存在する。器面の調整は、ハケ目捺形のものが多く、ハケは細・中・粗いものの3種が認められる。ハケナデの後にヘラナデ、ヘラミガキを施すものも認められる。小型壺形土器も多く出土しているが、器形・整形とも壺形土器と共通する。台付壺は、完存品ではなく台部分のみであるが存在する。壺形土器は、有段口縁と素口縁の両者が存在する。胴部は球胴形を呈す。若干、古式的な様相を示す、口唇部に刻回を施すものや、頸部から胴上部にかけて梯齒状工具による沈線と刺突、円形貼付文を施すものも出土している。東海方面にその出自を求めることができよう。調整は、ヘラミガキが主体で、ハケナデ、ヘラナデも認められる。口縁部の短い壺形土器も出土している。鉢形土器は、底部からの立ち上がりがストレートに外反するものと一度内窪してから外反するものとが存在する。高环は、身の大きなものが多く、脚部はハの字に開く。後代の様相を窺わせるような、脚部が僅かに中脹みになるものも存在する。器台は、大型で粗雑なものと小型のもの、有透穴器台、異形器台が出土している。小型の器台は、全体的には丁寧な作りで、長目の脚部のものが主体をなす。この他、台形土器、ミニチュア土器も出土している。

向原第Ⅱa期

壺形土器は、器形的には前代からのものを継承する。東海系のものは見られなくなり、整形もヘラナデのものが多くなってくる。小型壺形土器も出土する。台付壺は、口縁部は「くの字」を呈し丸胴で、ハの字に開く台部が存在する。壺形土器は、小型のものが存在し、壺形土器はやや大振りである。高环は、前代同様である。有透穴器台も出土している。器台は、大型の粗雑なものと小型のもの、異形器台が出土している。小形の器台は、脚部の短かいものが多くなってくる。器受部がかなり退化したもので、その名残りを留めているにすぎない。この他、台形土器、ミニチュア土器も出土している。鉢形の甌も出土している。

向原第Ⅱb期

壺形土器は、器形的には前代からほとんど変化が認められない。ハケナデのものはほとんど消失し、ヘラナデの壺が主体的になる。小型壺形土器も多く出土している。壺形土器は、口縁部が折り返し口縁で、ヘラミガキ調整されている。大き目の壺形土器も出土する。高环は、塊風の身を持つものもあり、東北地方の南小泉式土器に見られるような、脚部が細身の高环も存在する。第80号住居址からは、台付壺形土器も出土している。脚部が中脹みで器部が大きく外反し、口縁部はくの字状に外反する。小型の器台も出土しているが、ほぼ消滅する。

向原第Ⅲ期

壺形土器は、口縁部がくの字状を呈するものも存在するが、外反の度合いが緩やかになり、口唇部で大きく外反するようになる。胴部は丸胴である。壺形は、ほとんどがヘラナデであり一部にハケ目を残すものも認められる。壺形土器は、折り返し口縁で頸部は直立ぎみになり球状の胴部を持つものも出土している。壺形土器は、大き目のものも存在するが、小型の壺形土器が盛行する時期で豊富に出土している。高环は、脚部がハの字状で底部が大きく外反するものも出土しているが、中脹らみの脚部をもつものが主体的である。大きく開く裾部には、一段の段を有するものも存在する。異形器台の出土も見られるが、器受け部は退化してこの名残りが認められる程度である。鉢形土器は、塊形を呈し、底部が平底である。塊形土器に加えて、やや深目の塊形に近い壺形土器が出現していく。口縁部は、内弯ぎみのもの、直立のもの、外反するものが存在する。底部は、丸底が主体であるが、平底のものも存在する。鉢形、高环形を呈するミニチュア土器も出土している。

向原第Ⅳ期

壺形土器は、前代とほとんど変化が認められない。ハケ目は完全に認められない。小型壺形土器も出土している。壺は、壺形を呈し、単孔式のものが出現していく。壺形土器は、前代同様折り返し口縁のものが出土している。また、大型・小形の壺形土器も出土している。高环は身部分のみ残存するものが1点出土しているが、中脹らみの脚部を持つものと思われる。鉢形土器は、素口縁と折り返し口縁のものとが存在する。壺形土器は、鉢形のものと塊形のものとが存在する。底部は、平底と丸底の両者があり、壺形は口縁部が横ナデ、体部はヘラナデでヘラミガキを施すものも存在する。塊形土器は、口縁部が内弯するものと外反するもの、底部は平底と丸底が存在する。ミニチュア土器は消滅し、石製模造品が出現する。

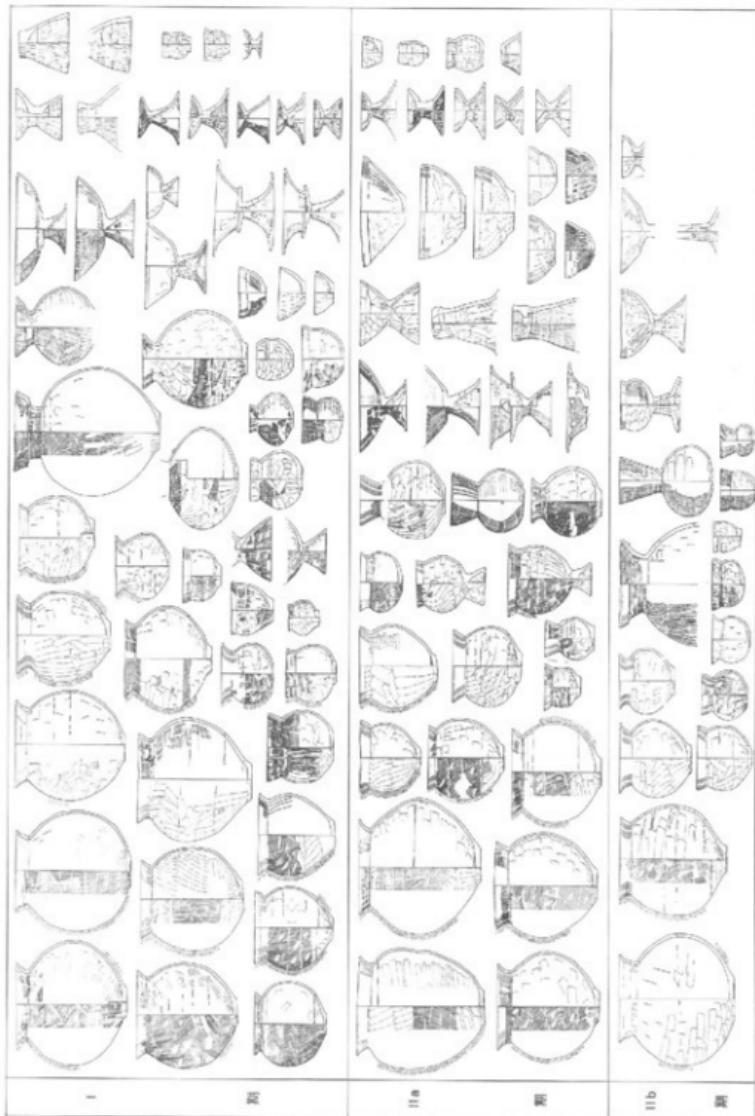
向原第Ⅴ期

壺形土器は、口縁部が直立ぎみの丸胴で、口縁部横ナデ、胴部はヘラケズリないしへラナデである。壺形土器は消滅するが、須恵器の伴出がみられ、須恵器の壺形土器が認められる。壺形土器は、壺形の単孔式である。塊形土器は、口縁部が内弯するものと外反するものが存在し底部は平底と丸底の両者がある。壺形土器は、塊形のものが主体的であるが、口縁下にわずかな稜を持つものも出現していく。壺形の手捏ね土器も見られる。石製模造品は減少する。

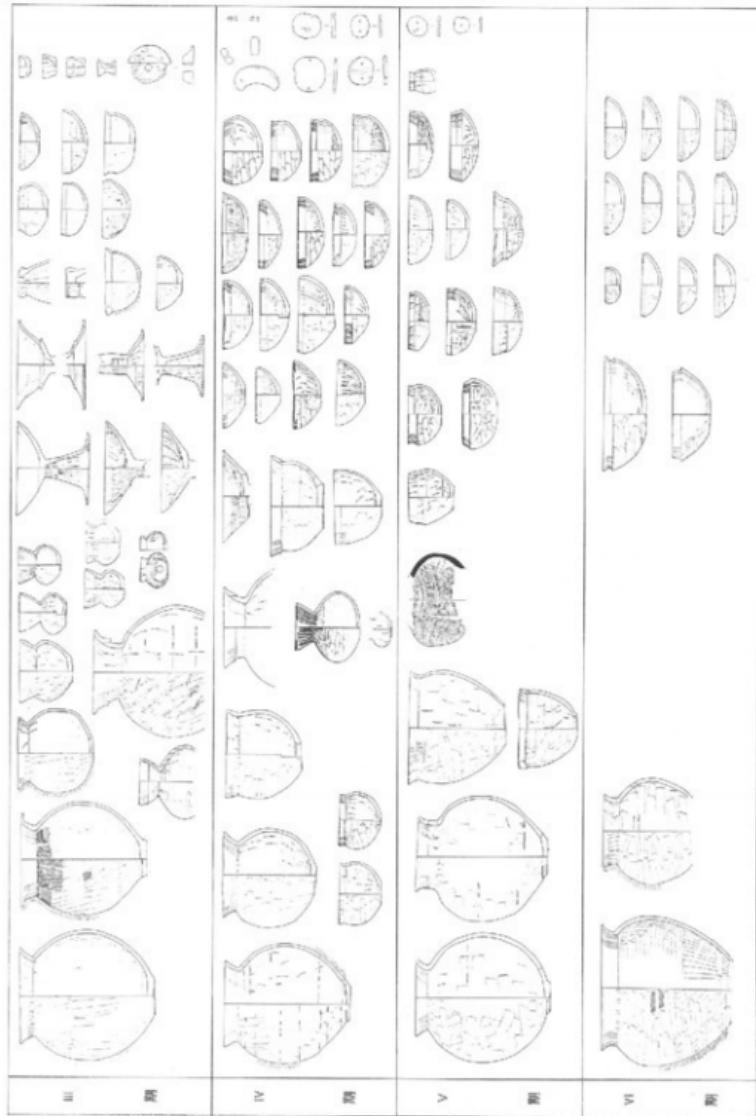
向原第VI期

壺形土器は、前代から変化が見られない。壺形土器は、塊形を呈するがやや器高が浅くなり口縁下に稜を有する須恵器壺身の模倣壺が出現する。須恵器壺身模倣の大型の壺も存在する。以上、各期の概要を述べたが、第Ⅰ期を4世紀中葉、第Ⅱa期を4世紀後半、第Ⅱb期を4世紀末から5世紀初頭、第Ⅲ期を5世紀前半、第Ⅳ期を5世紀後半、第Ⅴ期を5世紀末から6世紀初頭、第VI期を6世紀中葉に位置づけたい。

(越川)



第167図 古墳時代土器編年図（1）



第168図 古墳時代土器編年図（2）

6. 古 墳 群

本古墳群は、確認調査時に草刈り作業を行なった結果新たに発見された古墳で、円墳・方墳各1基の計2基を調査した。ブリマハム工場の建設前の本道跡周辺には、この他にも約10基程の塚が存在していたと地元の人に聞いており、けっこうまとまつた古墳群であったと思われる。

第1号古墳は、調査区西端に位置し、径30m、高さ約2mの円墳である。西側約½を破壊されており、内部主体は判明しないが、研究棟奥に現在復元されている石棺が第1号古墳の南側掘近くより出土したものと聞いており、本古墳の内部主体は石棺で変則的古墳の可能性が強い。

第2号古墳は、14×16mのほぼ南北に長軸を有する長方形墳で、高さは0.4m程の低墳丘である。墳丘中央やや南側に墓塚が検出され、墓塚内や周辺の周溝内、重複する89号住居址内に石棺材が打ち碎かれた状態で多数出土している。内部主体は、石棺と考えられるが、墓塚の南側には盗掘坑と思われる擾乱があり、石棺材を抜き去ってその何枚かの板石を打ち碎いたものと思われる。墓塚内からは、映画片が21点出土したのみである。

調査の結果から若干の所見を述べてみたい。

まず、墳丘の構築状況であるが、第1号古墳で認められた如く、基本的にはロームと暗褐色土を交互に盛って板築状に構築したもので、盛土はマウンドの縁辺部を固めてから中央部に盛つて行く方法をくり返して墳頂部まで盛り上げたと思われる。また、周溝の内側は旧表土が周溝に向って緩やかな傾斜状に削られており、周溝の内側は僅かにテラス風になっていたものと思われる。古墳の構築を段階的に考えてみると、古墳構築の企画→周溝の掘削→マウンドプランの設定→周溝内側テラス部の削平→盛土の順で把えられるのではないだろうか。盛土内からは、縄文土器や土師器片が多数出土しているが、本道跡における集落内より出土する土器と同一個体のものも含み、古墳の構築土の供給地を本道跡及び周辺に求めたものと思われる。第2号古墳は、重複する89号住居址の床面近くまで石棺材が散乱しており、89号住居址の埋没途上で盗掘されている。住居廃絶後1世紀以上の後に古墳が構築されたことを考えるならば、古墳構築後の単期間の内に盗掘されたと考えられよう。盗掘坑も主体部の位置を確實に把えて墓塚の南側をあけており、あたかも盗掘者は主体部の位置を知っていたようにも感じられる。石棺材は、持ち去ったものもあるが、残存するものは1枚の板石を除いて粉碎されている。被葬者に対する怨恨から墓をあばき、棺を粉粹したようにも思われるが想像として一笑に付して良いであろうか。第2号古墳の構築が、7世紀末から8世紀前葉に比定できるならば、中央では平城京遷都前後に当り、氏族的にみれば、蘇我系から藤原氏が政治を掌握した時期で氏族間の盛衰もあり、中央の動搖が地方にも及んだ結果とも考えられなくはないであろう。64号住居址からは、埴輪片が出土しているが、本古墳群中に埴輪を持つ時期の古墳が存在したことは確実で、集落が消滅した6世紀後半以後は墓域化していったものと思われる。

(越川)

写 真 図 版



遺跡遠景（東側より）



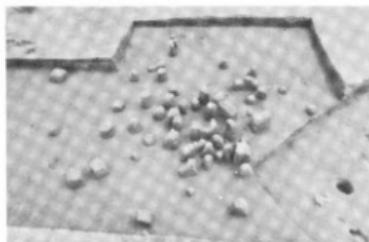
遺跡現状（調査前）



遺跡近景（調査後）



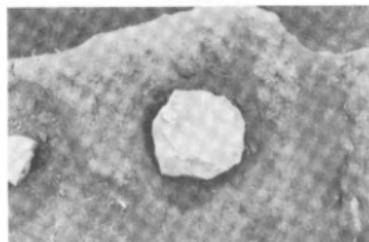
遺跡近景（調査後）



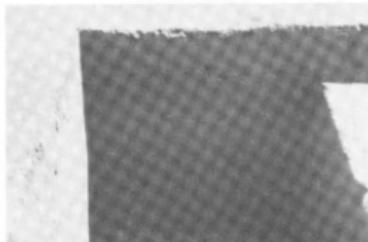
ユニット1



ユニット断面



石核出土状態



基本層序



1



2

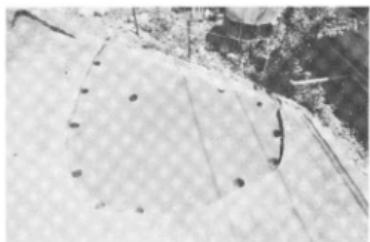


3



4

ユニット1出土遺物（2を除く）



第1号住居址



第24号土塙



第26号土塙



第29号土塙



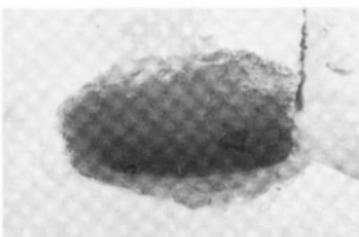
第35号土塙



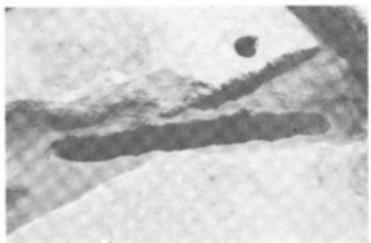
第40号土塙



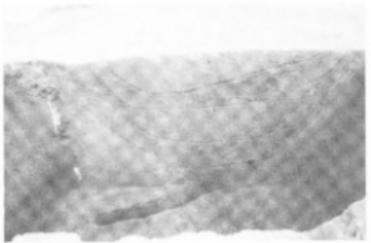
第41号土塙



第43号土塙



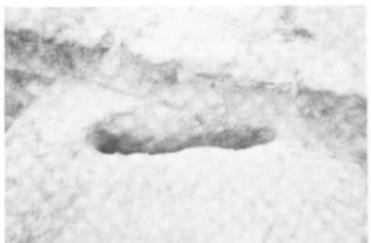
第44号土塚



第46号土塚



第47号土塚



第48号土塚



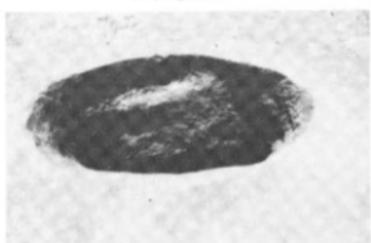
第49号土塚



第51号土塚



第52号土塚



第54号土塚



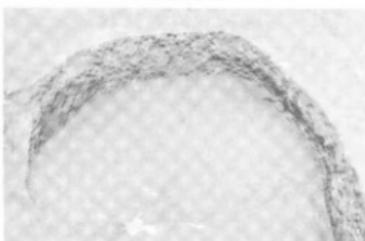
第55号土塙



第60号土塙



第61号土塙



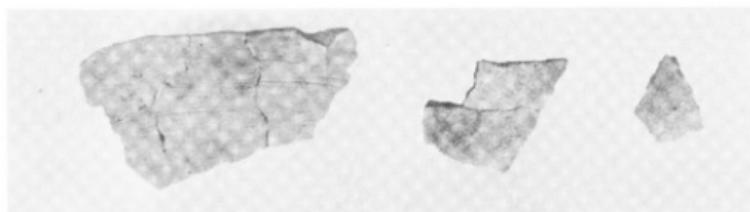
第9号土塙



陥し穴群検出状況



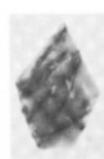
第1号住居址出土遺物



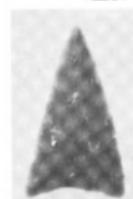
土52

土61

土61

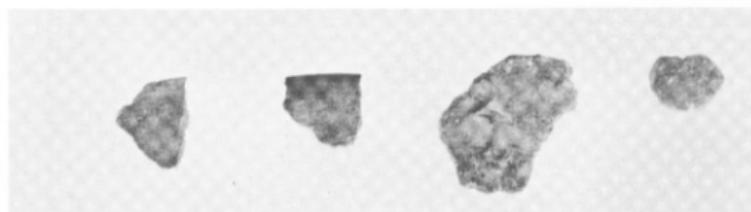


土61

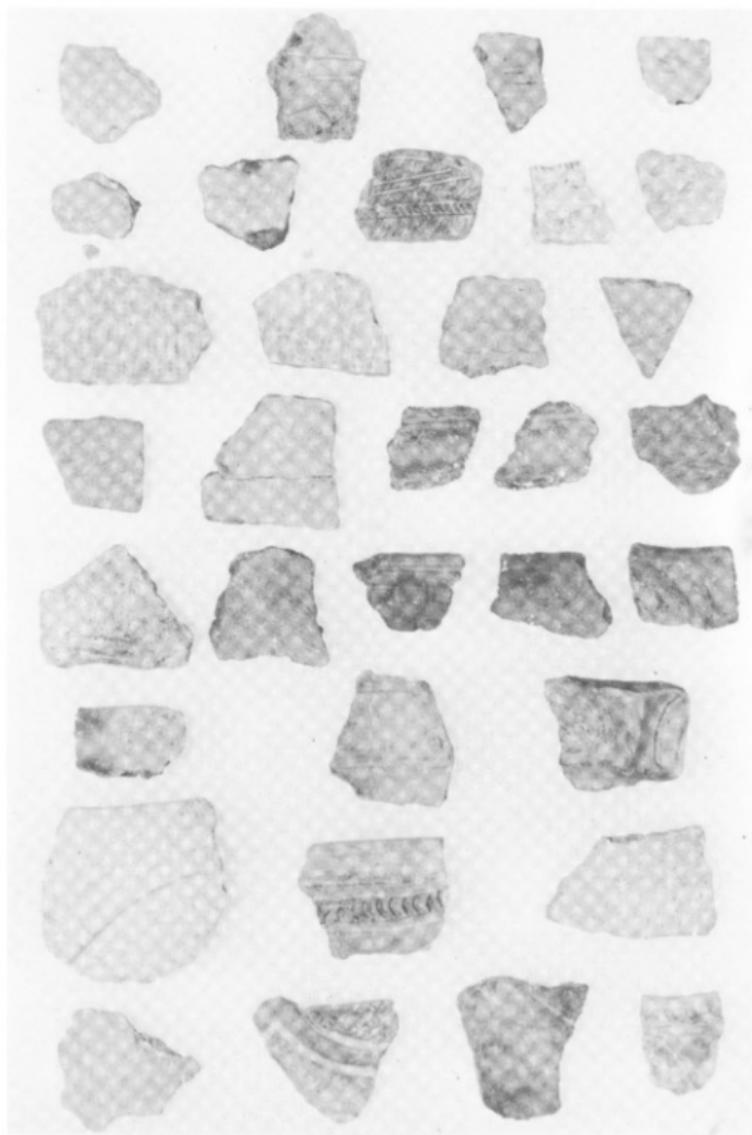


土61

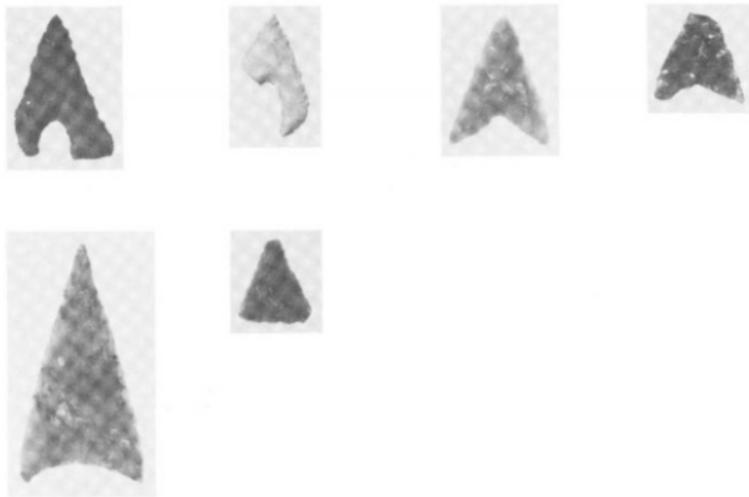
陥し穴出土遺物



第9号土塙出土遺物



調査区出土遺物(1)



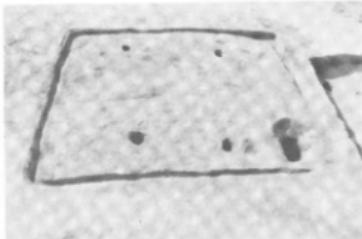
石 器



調査区出土遺物(2)



第3号住居址



第5号住居址



第7号住居址



第18号住居址



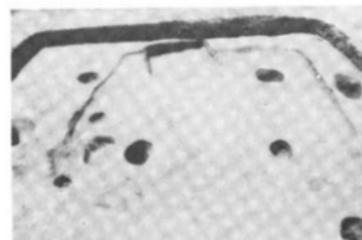
第22号住居址



第23・25号住居址



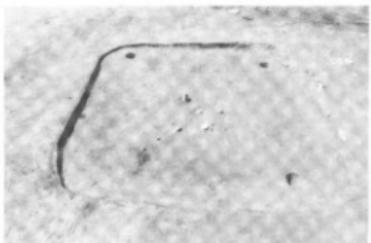
第24号住居址



第27号住居址



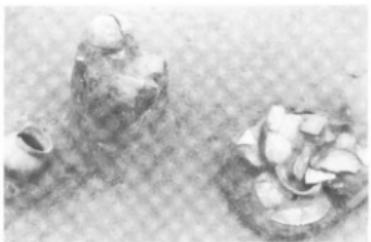
第28号住居址



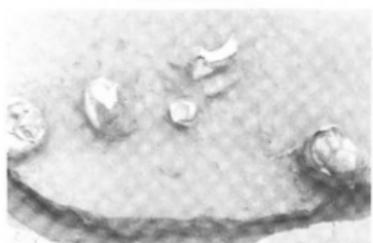
第29号住居址



第30号住居址



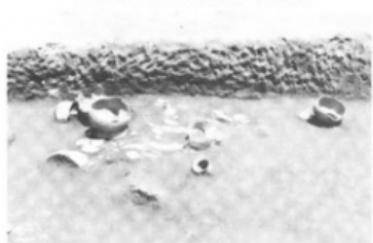
第30号住居址遺物出土状態(1)



第30号住居址遺物出土状態(2)



第31号住居址



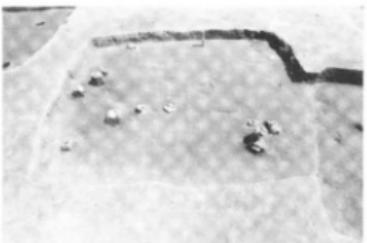
第31号住居址遺物出土状態



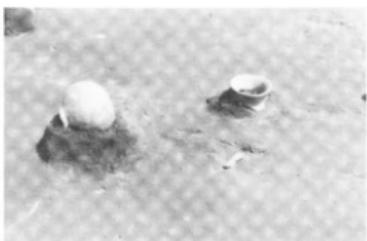
第32号住居址



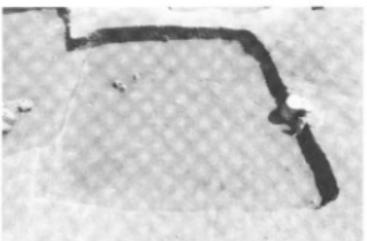
第46号住居址



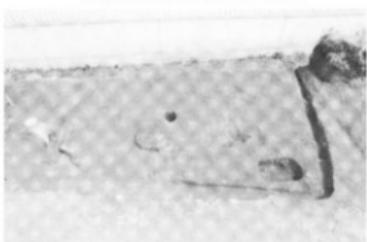
第50号住居址



第50号住居址遺物出土状態



第51号住居址



第53号住居址



第54号住居址



第55号住居址



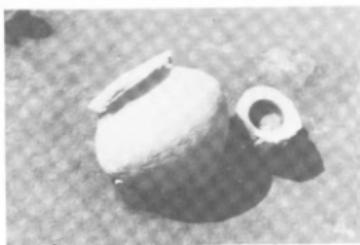
第55号住居址遺物出土状態(1)



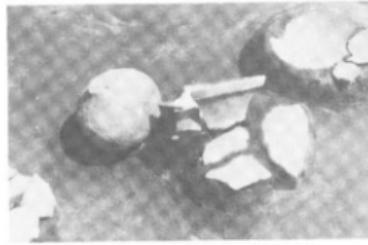
第55号住居址遺物出土状態(2)



第56・57号住居址



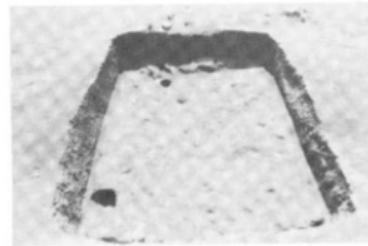
第56号住居址遺物出土状態(1)



第56号住居址遺物出土状態(2)



第58号住居址



第59号住居址



第61号住居址(右)



第65号住居址



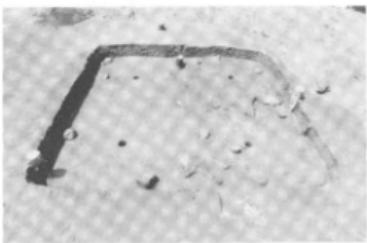
第67号住居址



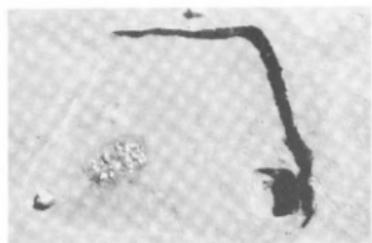
第67号住居址焼失状態



第68号住居址



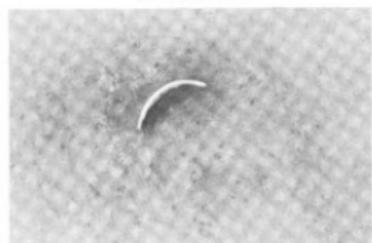
第68号住居址焼失状態



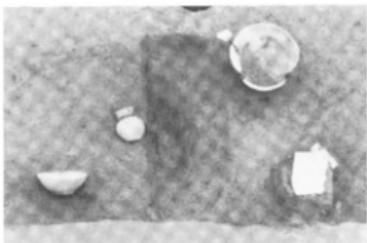
第70号住居址



第71号住居址



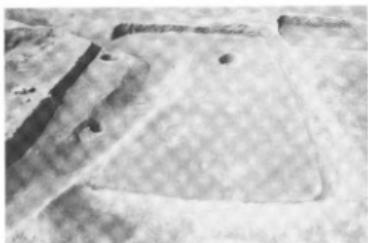
第71号住居址炉址



第71号住居址遺物出土状態



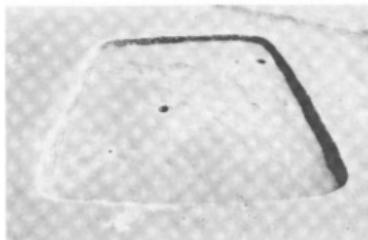
第72号住居址



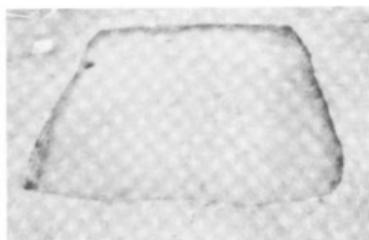
第73号住居址



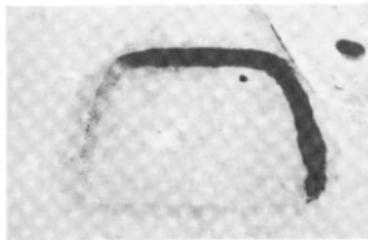
第75号住居址



第76号住居址



第77号住居址



第78号住居址



第78号住居址遺物出土状態(1)



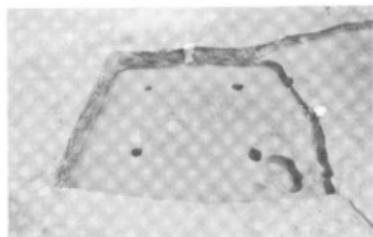
第78号住居址遺物出土状態(2)



第79号住居址



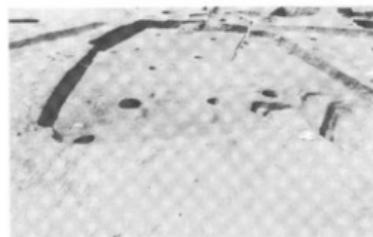
第81号住居址



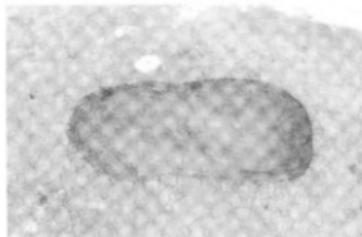
第84号住居址



第85号住居址



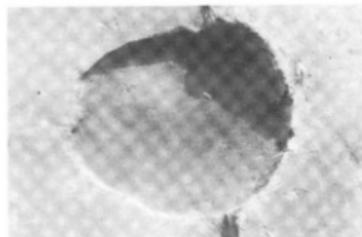
第87・88号住居址



第2号土塚



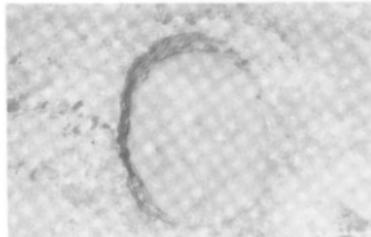
第18号土塚



第22号土塚



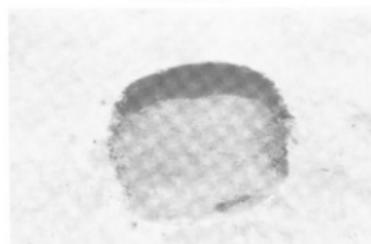
第23号土塚



第30号土塚



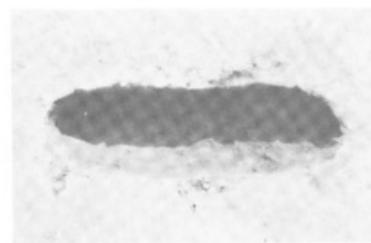
第31号土塚



第39号土塚



第42号土塚



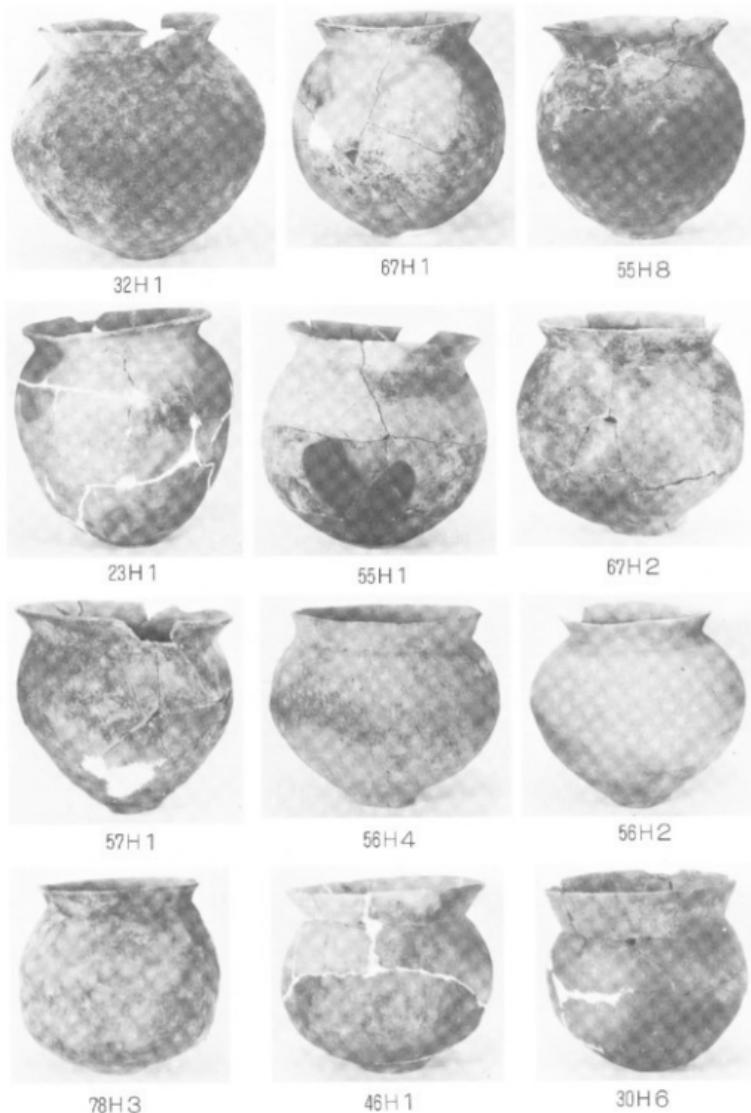
第45号土塚

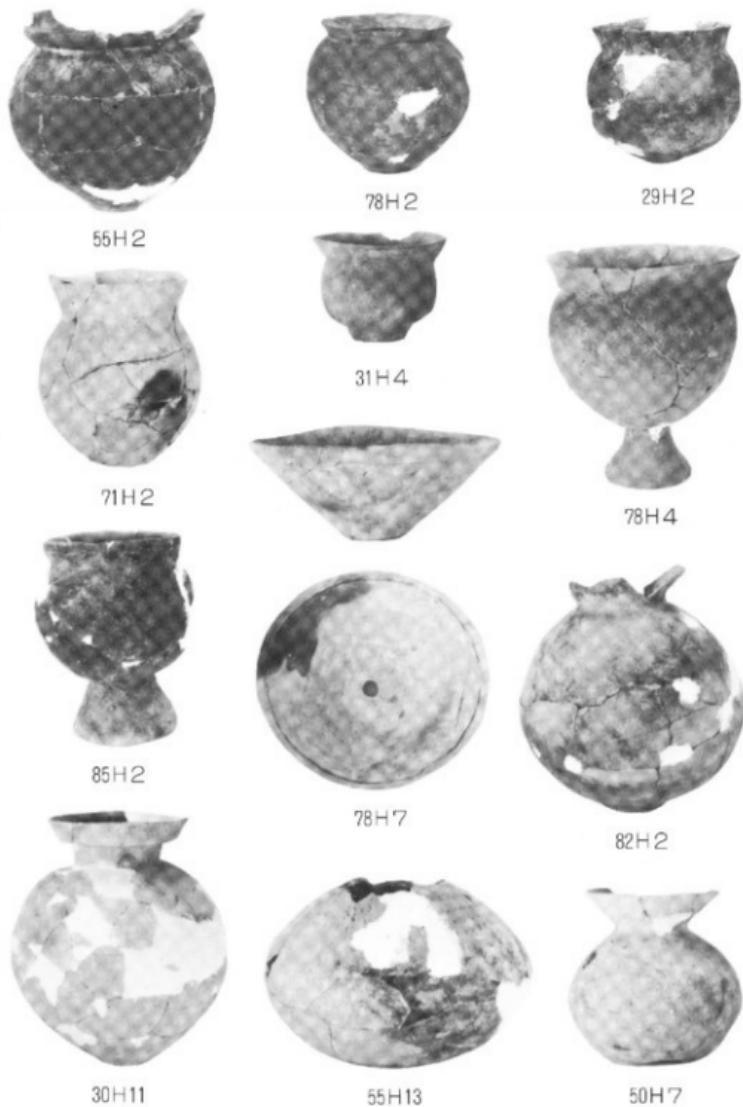


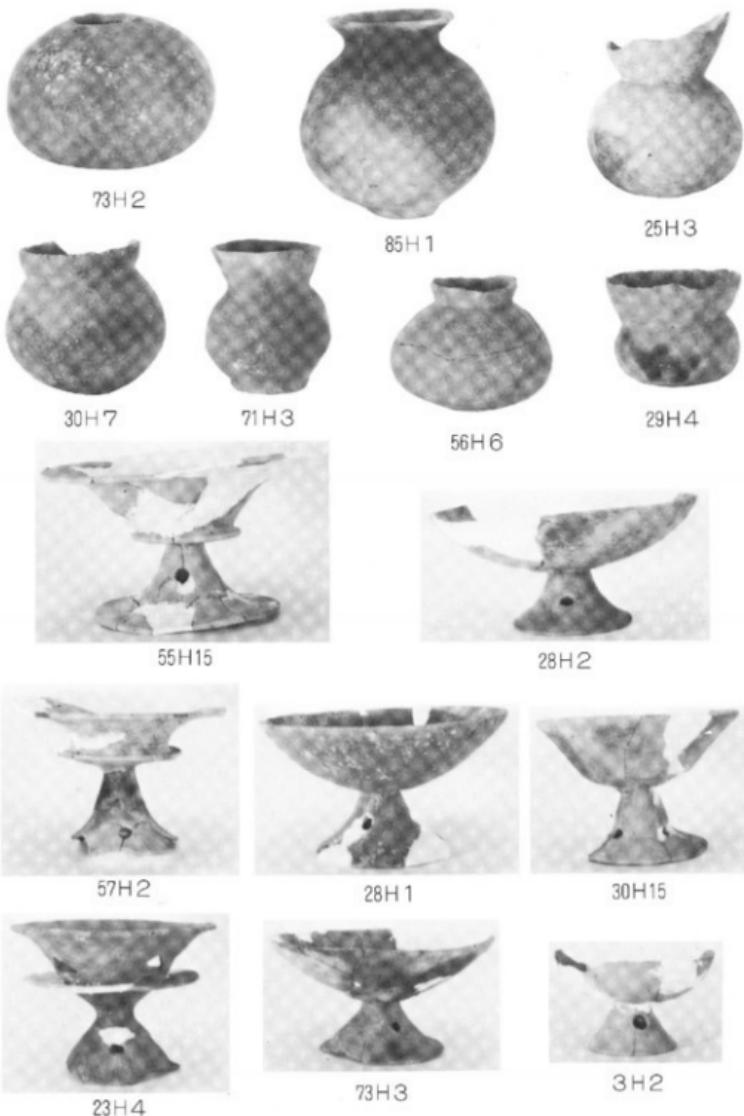
第59号土塚



第62号土塚



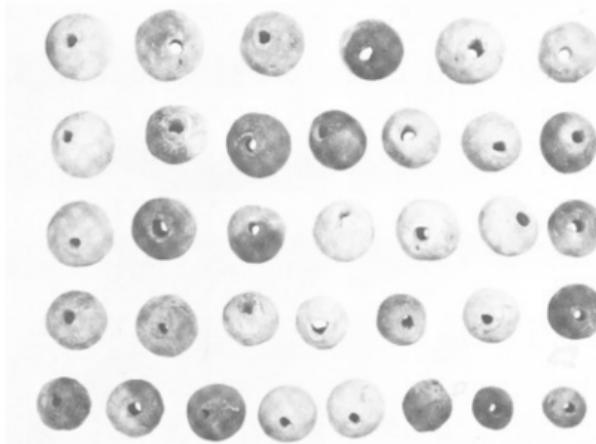
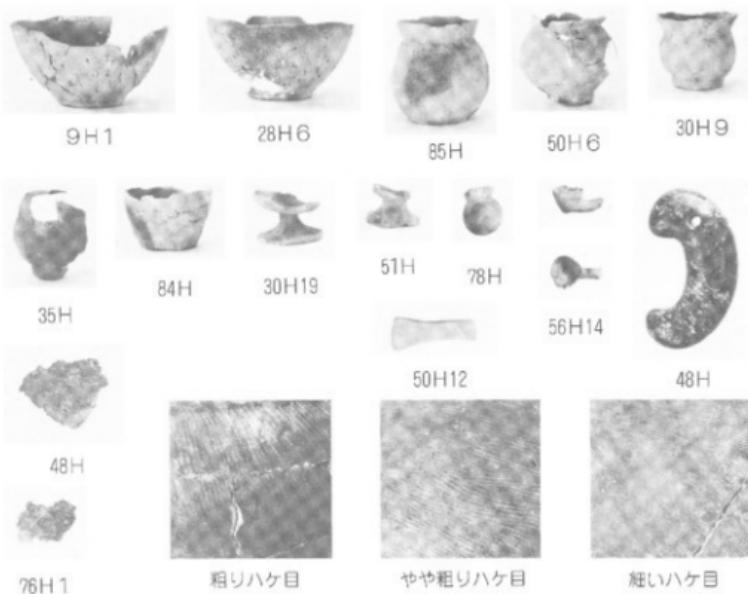




図版21

古墳時代前期
(12) 遺物





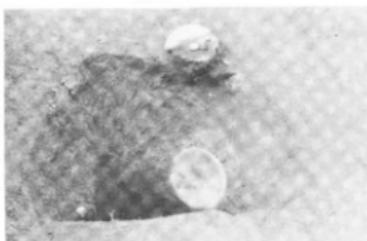
土玉



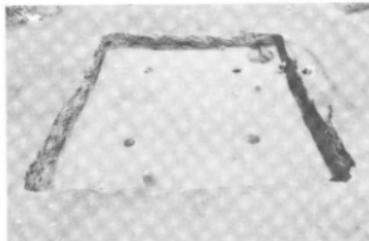
第14号住居址



第16号住居址・第53号土塁



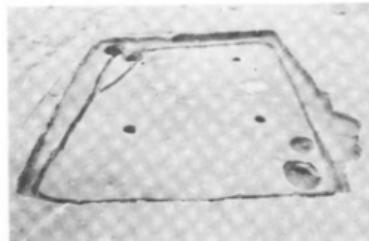
第16号住居址遺物出土状態



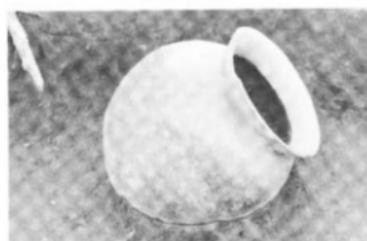
第20号住居址



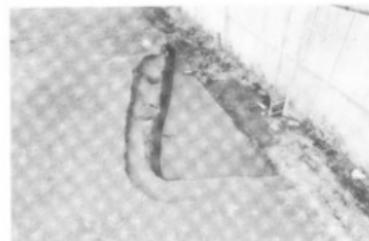
第26号住居址



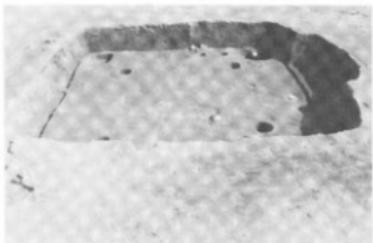
第33・34・35号住居址



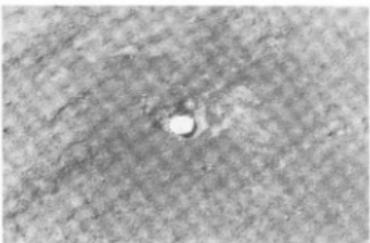
第34号住居址遺物出土状態



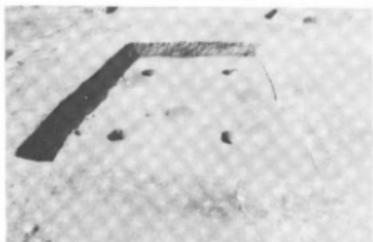
第42・43号住居址



第49号住居址



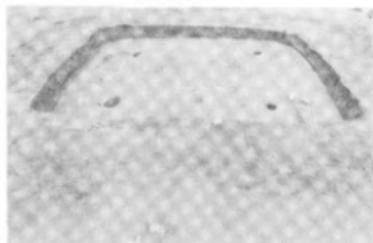
第49号住居址遺物出土状態



第60号住居址



第63号住居址



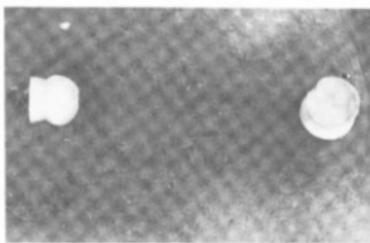
第64号住居址



第66号住居址



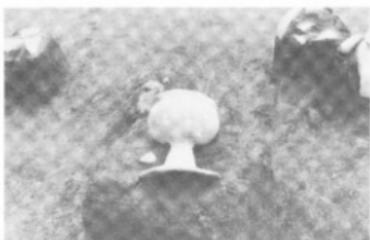
第74号住居址



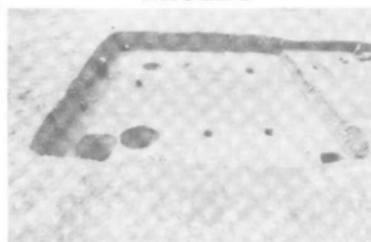
第74号住居址遺物出土状態



第80号住居址



第80号住居址遺物出土状態



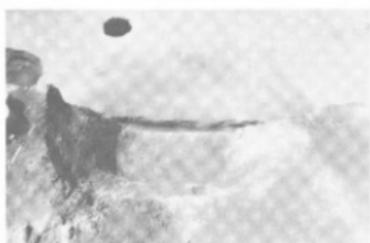
第81号住居址



第86号住居址



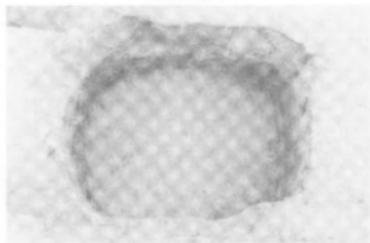
第16号土塚



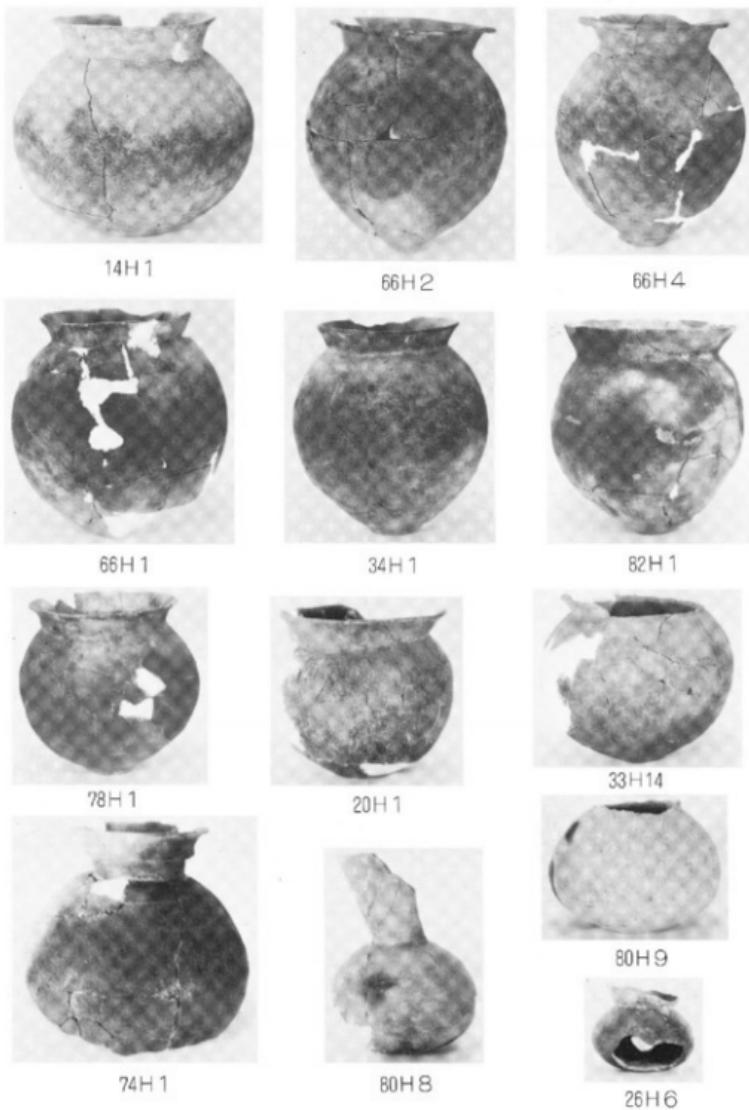
第32号土塚

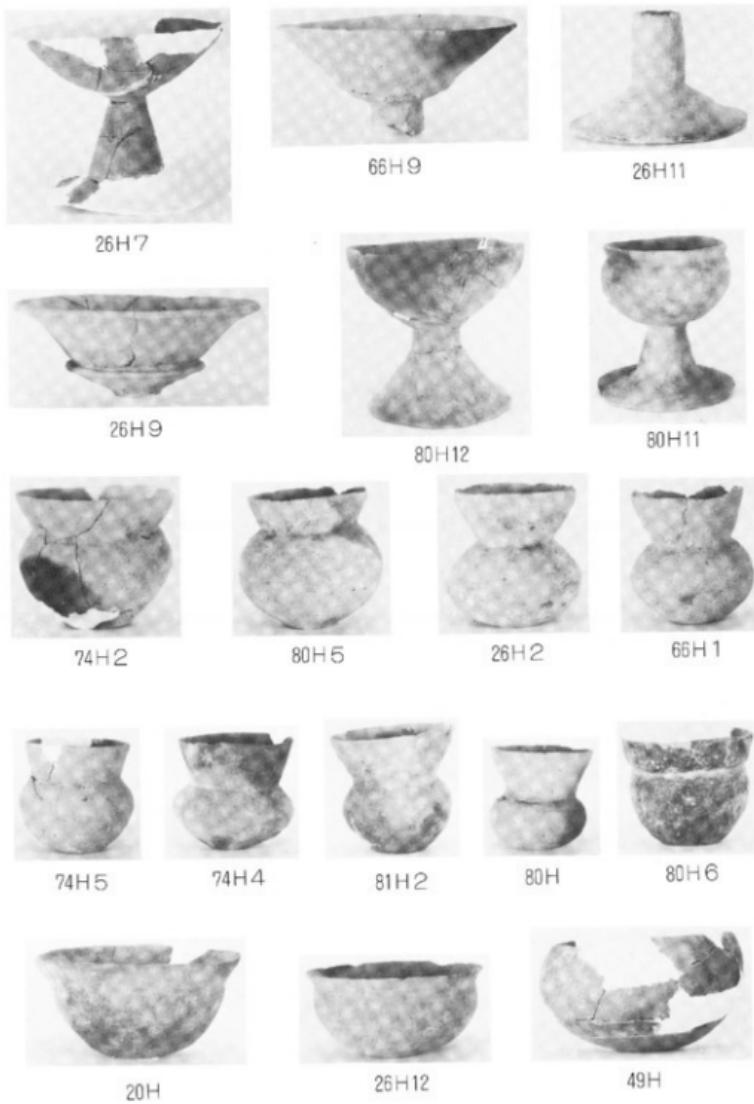


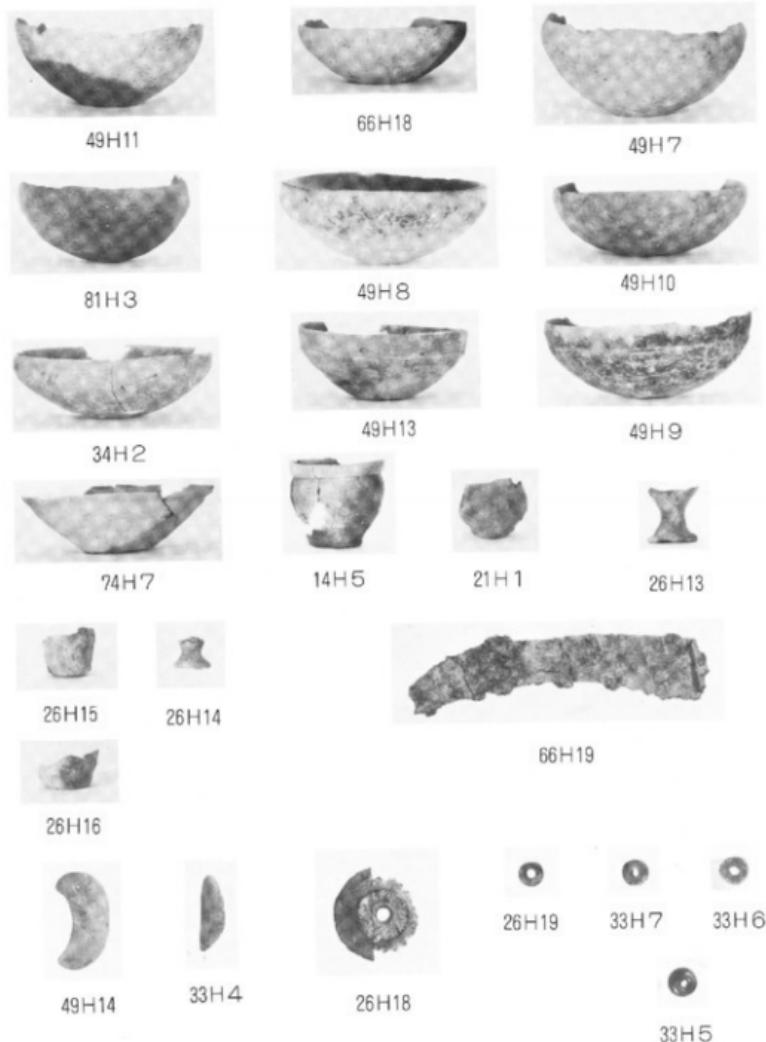
第33号土塚

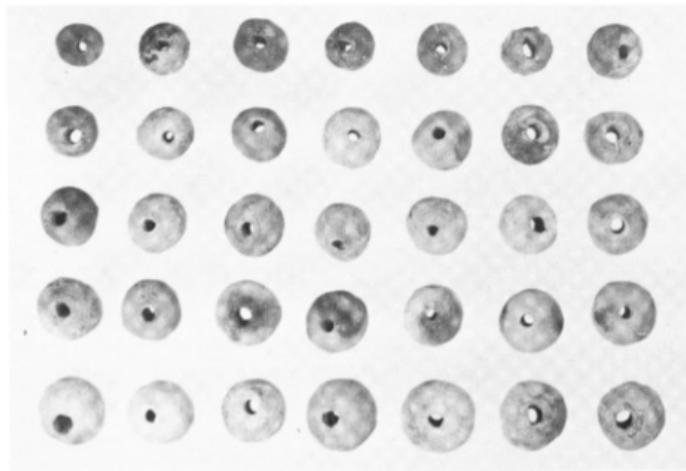
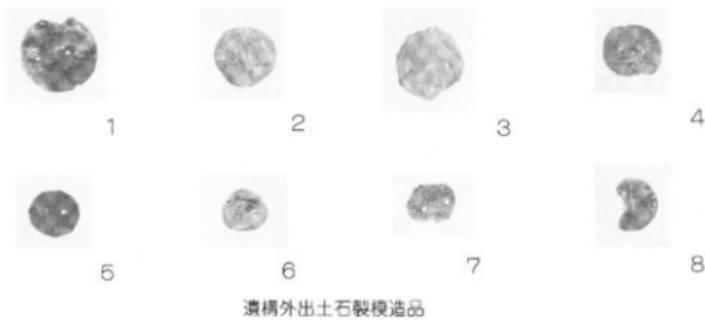


第34号土塚









土玉



第39号住居址



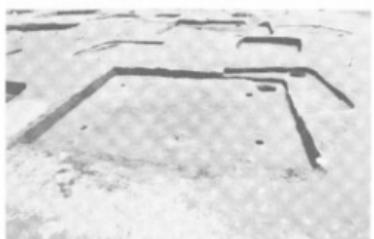
第40・41号住居址



第47・48号住居址



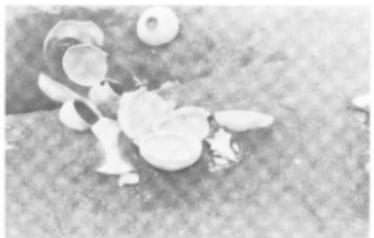
第47号住居址カマド遺物出土状態



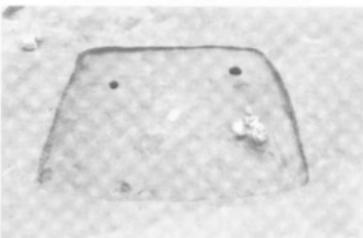
第62号住居址



第62号住居址遺物出土状態(1)



第62号住居址遺物出土状態(2)



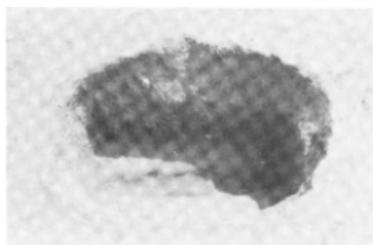
第69号住居址



第83号住居址



第89号住居址



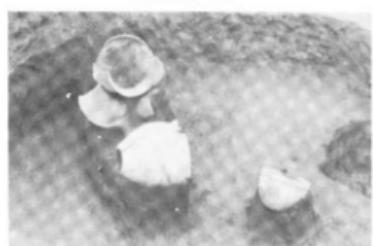
第4号土塚



第7号土塚



第10号土塚



第10号土塚遺物出土状態



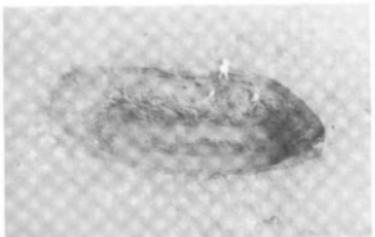
第11号土塚



第12号土塚



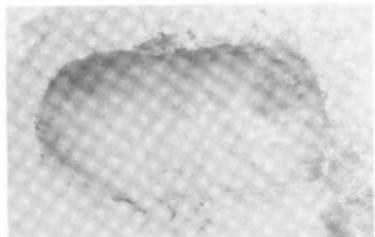
第14号土塚



第15号土塚



第17号土塚



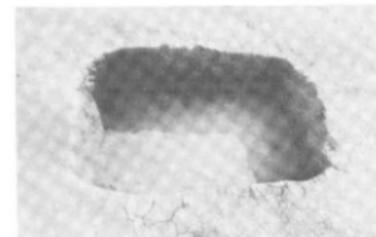
第19号土塚



第20号土塚



第21号土塚



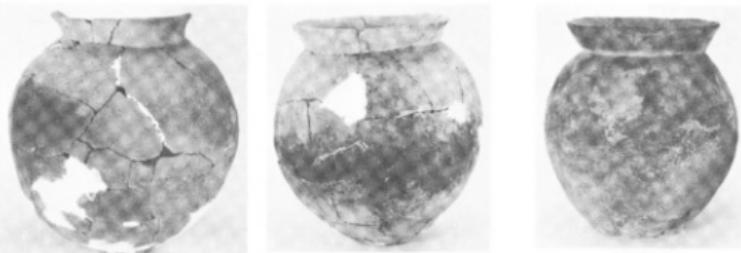
第25号土塚



第28号土塚

國版
33

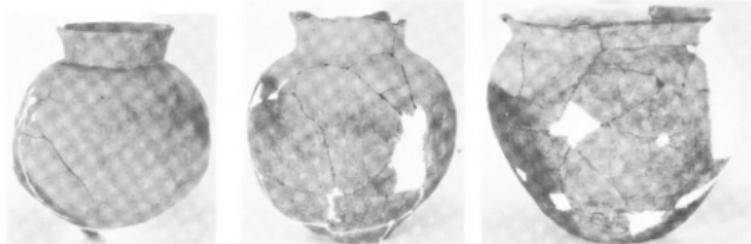
古墳時代後期(4)
遺物



89H 1

66H 5

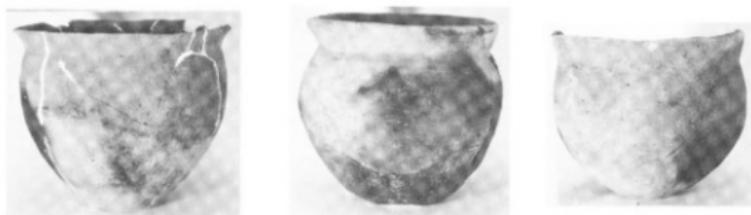
62H 1



47H 2

47H 1

69H 1



土10-4

47H 3

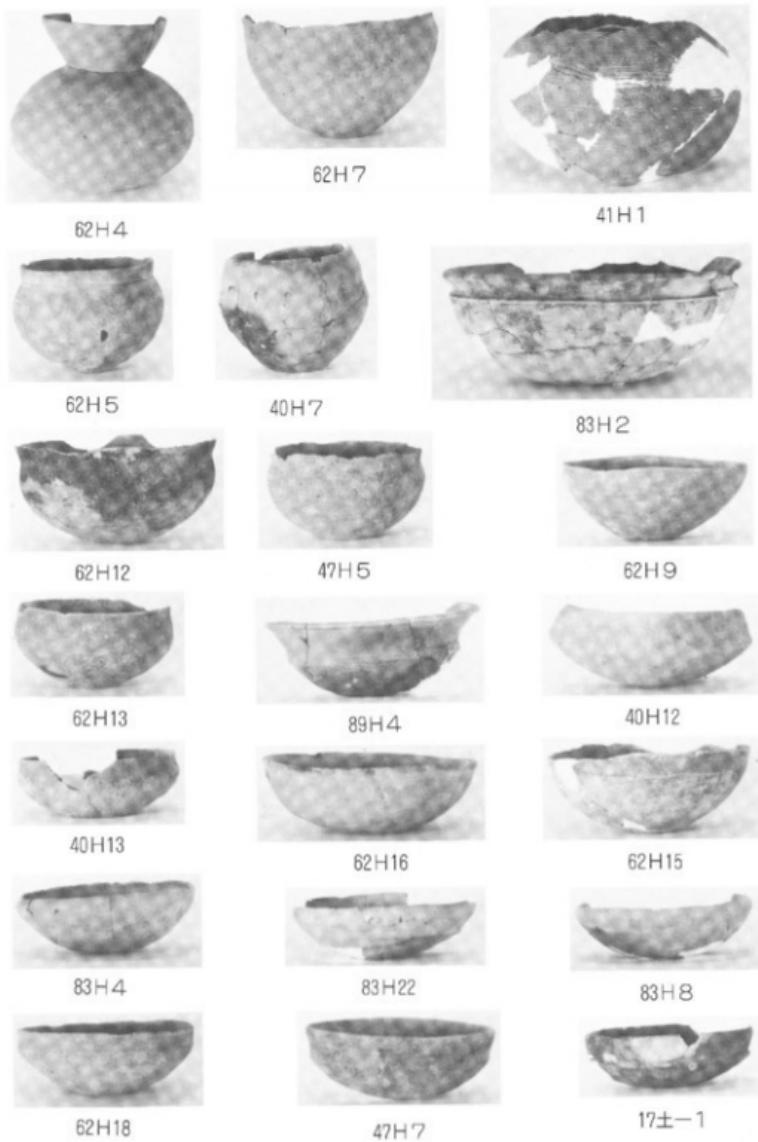
62H 3



土10-3

62H 2

47H 4





発掘調査前
の現状

調査状況(1)



調査状況(2)





南北墳丘断面 (2)



盛土の状態



周溝

図版
37

第1回調査地
(1)



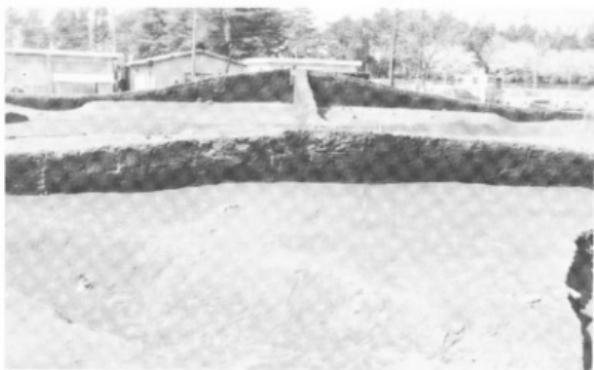
発掘調査前
の現状

調査状況

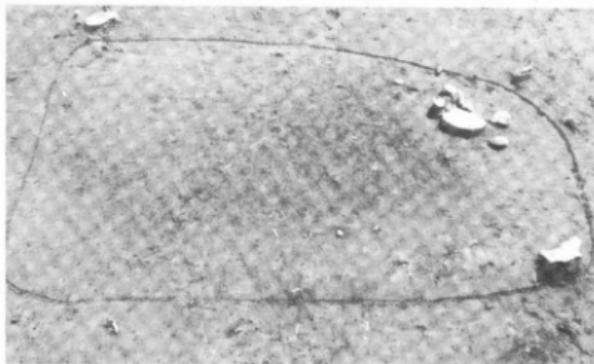


南北墳丘断面

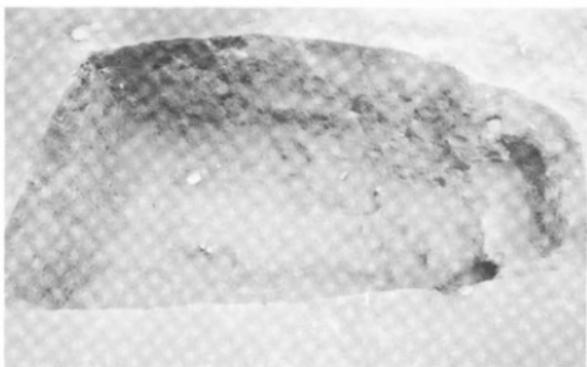




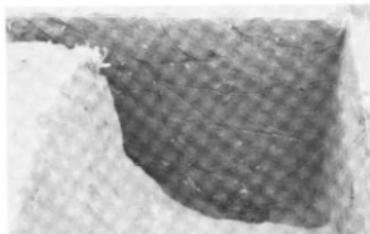
盛土の状態



主体部確認面



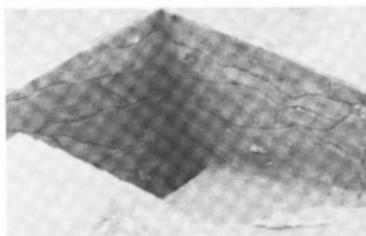
主体部完掘状態



主体部断面（東側）



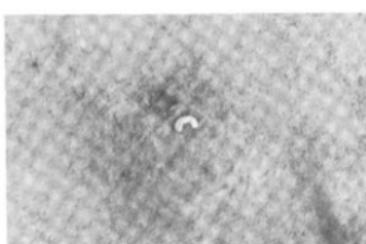
主体部断面（西側）



主体部断面（南西より）



主体部遺物出土状態（鉄剣）



周溝内出土遺物（勾玉）



周溝内出土遺物（灰貝）



周溝内石棺材出土状態



第89号住居址内石棺材出土状態



周溝



主体部出土遺物（銅鐵）



周溝內出土遺物

土浦市向原遺跡発掘調査報告書

発行年月日 昭和62年12月20

発行者 向原遺跡調査会
土浦市教育委員会

印刷所 塚本プロセス